

獲得した言語で書くこと

—— ムールード・フェラウン『貧者の息子』の一読解 ——

石 浜 裕 子

獲得した言語で書くこと

—— ムールード・フェラウン『貧者の息子』の一読解 ——



獲得した言語で書くこと
—— ムールード・フェラウン『貧者の息子』の一読解

【目次】

	はじめに
	…… 1
第Ⅰ章	ポストコロニアル文学としてのフランス語マグリブ文学
	…… 5
第Ⅱ章	ムールード・フェラウンと『貧者の息子』
	…… 29
第Ⅲ章	書かれたカビリア、読まれるカビリア
	…… 59
第Ⅳ章	生きること、とりわけ語ること
	…… 101
第Ⅴ章	物語の外から/へ
	…… 141
	おわりに
	…… 159
	書誌
	…… 161
	付録『貧者の息子』日本語訳

*本論文で使用した

ムールード・フェラウン Mouloud Feraoun 『貧者の息子』 *Le Fils du pauvre* は、*Le Fils du pauvre*, coll. « Points » Éditions du Seuil, 1954 である。本書からの引用等は、煩雑になるのをさけて、該当箇所にFPの略号とページ数で示した。

はじめに

私の母方の祖父中野武晴^{たけはる}は、これから私が読もうとするムールード・フェラウンに似ている。そのことに気がついたのはいつのことだったろう。フェラウンの『貧者の息子』

Le Fils du pauvre の冒頭、「メンラッドは、山地カビリア地方の慎ましい教師である *Menrad, modeste instituteur du bled kabyle*」とは、そのまま祖父のことだと、ある時、気がついた。祖父は 1905 年（明治 38 年）の生まれで 1913 年生まれのフェラウンよりやや年長だが、ほぼ同時代を生きた。中野武晴は、山がちな土地である信州の、慎ましい小学校教師のひとりだった。地主といっても大した土地持ちではない、貧乏地主の一人息子は、残された写真を見ると、フェラウンと違ってなかなかの美男子であるが、フェラウンと同じく師範学校を卒業して尋常小学校の教師になった。日本の当時の師範学校はすべて税金を使って運営され、学資も支給されていた。カビリアの貧しい農民の子であったフェラウンも、給費生として中等学校と師範学校で学んだ。二人が、いずれも山がちな田舎の小学校の教師を務めた年月はかなり重なっている。

私が二歳半の時、祖父は肝臓癌で他界した。五十三歳だった。長い長い痛みがあったという。癌は、青年時代に患った結核の治療薬の副作用の結果であったというのは、私の母

（長子・長女）の証言である。フェラウンの最初の小説作品『貧者の息子』をこれから私は読もうとしているが、この自伝的小説によれば、フェラウン自身は身体の丈夫な人だったようだ。作品に曰く、虚弱なカビリア人は生き延びることができなかった。そこは祖父とは違っている。祖父の人生には、結核と癌という死に至る病が浸潤している。

私が育った家は祖父が生まれて育った古い家で、元禄時代に建築された部分が多く残っており、私が子どもの頃、すでに築三百年近くになっていた。気がつけば祖父はいなかったが、古い箆笥が並べられ、布団や衣類が詰め込まれた奥の暗い部屋から、私は誰にも知られず祖父の痕跡をいくつか掘り出した。ガリ版刷りの同人誌風詩集。そこに掲載された祖父の作品に、病気療養中の自分の妻を詠ったものがあった。感心しなかった。ガリ版そのものと、鉄筆、原紙も残されていた。壊れた本『ビルマの竖琴』。母や叔母の話によると、祖父が定期購読していたという『アララギ』と『思想』はすでに失われていた。立派な美術全集（出版社はわからない。小学生の私にはそこには注目しなかった）。この美術全集から、私はジョルジョーネ（「テンペスタ」）とギュスターヴ・モロー（「オルフェウスとトラキアの娘」）を知ったのだ。そのことを思い出すと、うっとりする。後に、ベネツィアのアカデミア美術館でジョルジョーネに直面したとき、そのタブローがあまりにも小さいことに驚きながら、稲妻が切り裂く空からこちらに向かって放射する光を浴びて、私は額が明るむような感覚を味わった。

祖父は、古い家の、昔風の石組みや灯籠のある坪庭を壊して、バラや水仙、桜草、鉄砲百合、クリスマスローズなどを植えた。西側の、用水路に面した黒い板塀沿いには、ライラックと小手毬とユキヤナギが咲いた。初夏にはスズランが。白木蓮の大木は枝を二階の屋根にまで伸ばして、大きな果実のような白い花を咲かせた。南東の一角には祖父自らセメントを捏ねて半地下に作った温室があり、そこで大量の蘭の花を咲かせていた。祖父が

亡くなった後も長く定期的に届いていたタキイ種苗のカタログも祖父の残したものだった。私は、同じカタログを何度繰ったことだろう。次々とめくるページに、とりどりに咲いた花を飽きもせずただ眺めた。受取人を失ったカタログから、苗木や球根を注文する者は家族の中にもはやいなかった。

祖父の教師としての人生を私はもちろん知らない。後になって、母や叔母から聞いた断片的な話と、祖父の年齢から推測するに、それは順調なものではなかったようだ。そもそも祖父は、幼い子どもが好きで尋常小学校の教員になったのだという。だが、まだ若い頃、ある学校で教頭を務めていたが、その職を辞して代用教員に甘んじることになった。おそらく、それには、昭和初期、長野県に起こった「教員赤化事件」が関係している。この事件では、多くの若い教師が処分されただけでなく、県民に多大なネガティブな影響を及ぼした。政府にいらまれた県は、県民を満蒙開拓移民として差し出すことで、政府からの疑惑の目をそらそうとした。長野県が満蒙開拓に送り出した人の数は全国一であるが、ここにはそんな事情があった。一村まるごとのように移住させられた人たちがいるとも聞いた。

戦争の召集は中野武晴にもかかった。しかし、結核に冒された肺がその務めに能わずと言われ渡された。フェラウンが駆り出されるのではないかと恐れた戦争と、祖父が兵士として能わずと言われた戦争はユーラシア大陸を間に挟んでつながっていた。フェラウンはついに戦場へと送られることはなかったが、「戦争」（『貧者の息子』続編）で、その不安とおのきを、ことば少なではあるが率直に語っている。

戦後、祖父が教壇に立つことができたのはどれほどの期間だったのだろう。1959年（昭和33年）9月15日の死までに、切れ切れの長い闘病生活があったはずだ。私は祖父を、よい教師であったと確信している。私の家は、四つの部落からなる小俣という場所（かつて小字だったのだろうか）にあったが、そこには神社に隣り合わせて小さなお堂があり、地区の墓地はその周囲に集まっていた。「堂の庭」にはわずかな遊具があつて、子どもたちの遊び場であった。小学生のときだ。ある日、その鉄棒にぶら下がっていた私は、突然訊かれた。「中野先生のお墓どこですか?」。私は、すぐその、中野家一族の矩形の墓地のなかの、祖父の墓に三人の *anciennes élèves* を案内した。祖父を埋葬した日、当時はまだ土葬だったその墓に、私も白い花を投げ入れた、その墓だった。三角形の石を二、三個土に突き立ててあり、小さな白い花を咲かせる菊が植えてあつた。花を「植えた」墓はほかには一つもなかった。どうして、彼女たちは私に訊いたのだろう。死の直前、祖父は隣接する村（当時はすでに松本市に編入）の小学校で教えていた。母は、墓参りに訪れた三人は、その小学校の教え子ではないかという。私は、墓の場所を訊かれたことを、ずっと後になるまで誰にも言わなかった。祖父と、私だけの思い出だったから。

記憶というものはまったくあてにならない（と『貧者の息子』は何度も繰り返す）が、そのあてにならない記憶こそが私にとりつき、時折、それにせつつかれて、祖父の生を掘り起こしたくなる。

『貧者の息子』を読もうとするとき、私はミシェル・ド・セルトーと、遅ればせながらブルデューにも助けを求めた。二人ともなかなか教えてはくれない。だが、セルトーは『日常実践のポイエティック』でブルデューの研究手法に言及している。

まずさきにベアルヌがあつて、およそ出身地ならみなそうであるようにことば無きまま

(in-fans)にとどまっていたものを、カビリアの情景に自分の似姿を見だし（ブルデューのカビリア研究によれば、この地は生まれ故郷に極めて近いという）、そうして自分を言い表せるようになったのにちがいない。（『日常実践のポイエティック』p.127）

これには前段があって、自己のいる社会を考えるのに、その社会のディスクールが排除 してしまったものをどこか遠い所（時と空間の隔たり）に見いだすという話である。ブル デューにとって、その一つがカビリアであると。

私は、遠いカビリアの地に生を受けたフェラウンの生涯に、いやそれより前に、その自伝的小説に、今まで「読む」ことのできなかつた祖父の生を見いだそうとするのだろうか。何を知りたいのだろうか。多くの相違点にもかかわらず、彼もまた、貧者の息子である。貧しい者の息子の生を書いたこの小説の本は、その表紙に、作家の偽りの名を記し続ける。しかし、作品の語りが言うように、「名などどうでもいい」のだろう。これは貧者の息子が貧者の息子の生を書いた小説なのだ。フェラウンが望んだように、多くの凡庸な貧者たちの。

この小説を読むこと、詳しく読むこと。それは、作家自身もまた、数ある貧者の物語からこの物語を掘り起こしたことを知るということだ。

第 I 章 ポストコロニアル文学としてのフランス語マグレブ文学

本章の表題に含まれる「ポストコロニアル」は扱いにくい語である。この語は政治的な意味合いを強くもつ。そしてまた、植民地支配を行った側から使われる語である。

ムールード・フェラウン（1913-1962年）は（フランスの）アルジェリア（マグレブ）出身の作家であり、フランス語で作品を書いた。フランス語文学の作家である。植民地支配期から脱植民地期に、現地の人々によって宗主国の言語で書かれた文学はポストコロニアル文学であると考えることができる。日本ではほとんど知られることが少ないフランス語マグレブ文学を、大変おおまかなカテゴリーとしてまずは、そのような文学のひとつとして示しておきたい。

そのうえで、私は本章を、私たち日本人と近代日本の歴史に強く関係するエピソードから始めたい。それは、レイ・チョウが『プリミティヴへの情熱』*Primitive Passions* の第 I 部「視覚、近代、そして原初への情熱」^{プリミティヴ・パッションズ}の冒頭に置いた、「魯迅が、自分が文学と関わったいきさつを説明した話」である。¹本書は、視覚表現とりわけ映画、それもチョウの国である中国の映画を論じたものである。映画という媒体^{メディア}がもつ圧倒的な力とはどのようなものか、それは何をしたのか。技術化された視覚映像（＝映画）を通じて、近代中国に関する文化史と人類学を記述することから始めて、現代中国映画を何作品か精読した後、チョウは、この議論の締めくくりに「翻訳」を考察している。

私が試みているのは、複数の媒体^{メディア}、複数の文化、そして複数の学問分野^{ディシプリン}のあいだの書き換えとして、映画を理論化することである。一方に、民族誌と翻訳に関して現在支配的な考え方があり、他方に映画に関する優勢な思考法がある。映画を媒体、文化、学問分野のあいだの書き換えだと考えると、こうした支配的な考え方をもう一度よく考察する必要があると思う。本書全体を通してあるのは、二重の動きだ。一つめは「歴史」と「文学」から映画への動き、「第一義的」で「起源」^{オリジナル}なものとされる経験から、二義的で派生的、したがって取るに足りないと思われる経験への動きである。二つめは、最初の動きに対応し応答するもの。映画は単なるイメージにすぎないと軽く扱われる場合においてですら、もっとも「歴史的」で「文学的」な空間にいつも存在感をもって実在してきた。……²

チョウが本書で挑戦しようとした、民族誌、翻訳、映画に関する現在の支配的な考え方

*1 レイ・チョウ『プリミティヴへの情熱』p.17～

*2 同書, p.9

であるとか、優勢な思考法の検証はとりあえずおいておこう。それは本論のつとめではない。もっとも、支配的であるとか優勢というのは、ある学問研究のディシプリンとか言語・表現において、という意味のほか、近代以降の植民地主義的な世界では民族学なり文化人類学的な観察と記述を行う側は行われる側より常に優位に立ち、支配的であるということ、その構造があることを含意している。そのことを、本論文を書くに当たって、私は常に忘れることができない。チョウが採用した「翻訳」という鍵になることば・考え方は、上の引用においては「書き換え」と言い換えられ（＝翻訳され）ているが、チョウは「翻訳」の概念を大きく、驚くほどに拡大することを試みる。その拡大された「翻訳」こそが、ポストコロニアルな世界での文化、芸術（当然のことながら、あらゆる大衆芸術を含む）を読み解く上で、極めて有効な概念、方法になるのである。

中国の近代における映画を論じた本書は、イメージへの翻訳＝書き換え（だが、何からの？）の問題を中心に据えていることは確かだが、いっぽうで、技術によって可能となった視覚表現が圧倒的に優勢となりゆく/なった時代の文化がそこからどんな影響を受けたのか、つまり、映画・イメージこそが新たな起^{オリジナル}源となり、そこから始まって、ほかの表現形式の質を大きく変更したのではないか、というところへと論を進めている。³これは重要なことだ。映画というイメージそのものである媒体・表現でなくとも、おそらく映画が発明されるもっと以前から、あらゆる思考と学問の方法の根底に、何に対しても「観察＝（容赦なく）まなざしを向けること」があからさまに居座るようになってから、イメージ的なものは、文化と思考のあらゆる領域に大きな影響を与えてきたはずだからである。当然ながら、チョウの議論はそこへと踏み込んでいる。

チョウの議論を読むことは、たとえばカミュの『異邦人』*L'Étranger*（1942年）が大変視覚的な小説であり、視覚をめぐる物語であることを確認させる。⁴ここでは観察する者の一方的な優位の安定性が崩れている。ムルソーが陽炎の立ち上る砂浜をはさんでアラブ人と対峙するとき、共通の言語を持たない彼らはまなざしを交わすしかない。このシーンは、常にまなざしを向けられ、「見られているわれわれ」の長い経験を身体深くわがものにしてしているアラブ人はむしろしたたかである。こちらを見ることを不意にやめ、緊張に満ちたまなざしの衝突をうやむやにして、いったんは姿を隠す。ピエ・ノワールであるムルソーが銃を発射するのは、太陽の光と暑さで思考が停止され、目に流れ込んだ汗で視界が奪われた瞬間である。純粹で一方的な見る側・見られる側があるはずはなかったのだ。この小説で、アルジェリア、アルジェは一方的な優位を揺るがす土地として現れる。さらに、それは『追放と王国』*L'Exile et le Royaume*（1957年）所収の諸作品で、いっそう危機的に描かれることになる。⁵

*3 チョウ、前掲書、第Ⅲ部「民族誌としての映画、もしくは、ポストコロニアル世界における文化間の翻訳」

*4 筆者は修士論文「サイドのカミュ論におけるポストコロニアル批評の方法と実践」において、『異邦人』が、ピエ・ノワールとアラブ人のまなざしの対決を描いていることを、ムルソーのアラブ人殺害のシーンを読み解くことで指摘した。

*5 「不貞の女」*La Femme adultère*、「背教者あるいは混乱した精神」*Le Renégat ou un esprit confus*、「啞者」*Les Muets*、「客」*L'Hôte*、「ヨナあるいは制作中の芸術家」*Jonas ou l'artiste au travail*、「生い出する石」*La Pierre qui pousse*が収められている。この短編集が出版されたのはアルジェリア独立戦争（1954-1962年）の最中である。

私たちに強く関係するエピソードに戻ろう。それは、上の引用に言う「映画が（は）単なるイメージにすぎないと軽く扱われる場合においてですら、もっとも『歴史的』で『文学的』な空間に……存在感をもって実在」した瞬間なのである。魯迅がみずから語ったのは以下のような話である。少々長いが引用してみたい。^{*6}

今ではどんな最新のやり方で微生物学が教えられているのか私は知らないが、当時はスライドを使って、微生物学が見せられたものだった。もし講義が早く終われば、残りの時間、教師は自然の風景とかニュースのスライドとかを見せたりもした。当時は日露戦争の最中で、戦争に関する映画〔スライド〕がよく上映された。私としても、講堂で拍手喝采し、声援を送る他の学生の輪に加わらざるを得ない。もう長いこと、祖国の人を見ていなかったのだが、そんなある日、見ていたひとつの映画に、数人の中国人が映った。そのうちのひとりには縛られ、その周りに多くの者たちが立っている。みながっしりとした男たちだったが、一様に呆けたさまをしている。ニュースの解説によれば、手を縛られた男はロシア人に内通していたスパイで、見せしめどじて公開で日本軍により斬首されるところだ。そしてわきで見ていた中国人たちは、この見世物を楽しむために集まっていたのである。

その学期が終了する前に、私は仙台を去り東京へ向かった。この映画を見たあとでは、医学など結局それほど大切ではないのではと感じるようになったからだ。弱小後進国の人々は、いくら頑健で健康であっても、役に立つことといえば、あのように無意味に人前にさらされるか、あるいはそれを傍観させられることぐらいではないのか。そして病気で彼らがどれだけ多く死のうと、大した問題ではないのだ。だから、もっとも大事なことは、彼らの精神を改造すること。そしてその時、私は文学こそがこの目的に一番適した手段だと感じた。それゆえ私は文学運動を鼓舞する道を選んだのである。……幸いなことに、気のあう人がいく人見つけた。……自然な成り行きで、私たちは最初の一步として、雑誌を刊行することになった。雑誌の題名は、これが新たな誕生であることを意味するもの。私たちは当時古典を好む傾向があったから、この雑誌を『新生』と名付けた。^{*7}

【参考として、以下、青空文庫「『呐喊』原序」（中国語→日本語）からの引用を示した。】微生物の教授法は現在どれほど進歩したかしらんが、つまりその時は映画を用いて微生物の形状をうつし出し、それに拠って講義をするのであるが、時に一段落を告げ、時間がなおあまりある時には、風景画や時事の写真を挿込んで

*6 これは『呐喊』(戦い開始に当たっての闘いの声の意)の原序あるいは自序と呼ばれるものである。本書初版は1923年8月である。また、チョウは指摘していないが、「微生物と同等にスライド上に現れる中国人」もまた魯迅にとっては衝撃的だったと思われる。

*7 チョウ、前掲書、p.17-19。この引用のなかの傍点を付した部分(日本語訳者による)は、原書 *Primitive Passions* ではイタリック体で示されているが、チョウは「ここで私は標準的な(英語への)訳に手を加えることで、中国語原文の、視覚に関する言い回しを目立たせてみた」としている。

学生に見せた。ちょうど日露戦争の頃でもあるから、自然戦争に関する画面が多かった。わたしは講堂の中で、同窓の学生が拍手喝采するのに引きずられて、いつも喜んでみていた。ところが一度画面の上に久し振りでたくさんの中 国人に出逢った。一人は真中に縛られ、大勢の者が左右に立っていた。いずれもガッチリした体格ではあるが、気の 抜けたような顔をしていた。解説に拠ると、縛られているのは、露西亜のために軍事探偵を働き、日本軍にとらわれ、

ちょうど今、首を切られて示 衆となる^{みせしめ}ところである。囲んでいるのは、その示 衆の盛挙を賞鑑する人達である。

この学年が済まぬうちにわたしはもう東京へ来てしまった。あのことがあってから、医学は決して重要なものでない^{みせしめ}と悟った。およそ愚劣な国民は体格がいかに健全であっても、いかに屈強であっても、全く無意義の見世物の材料になるか、あるいはその観客になるだけのことである。病死の多少は不幸と極まりきったものではない。だからわたしどもの第一要件は、彼等の精神を改変するにあるので、しかもいい方に改変するのだ。わたしはその時当然文芸を推した。そこで文芸運動の提唱を計り、……（この冷やかな空気の中に、）幸い幾人かの同志を捜し出し、……相談の後第一歩として当然雑誌を出すことにした。表題は「新しき生命」という意味を採った。われわれは当時大抵復古の傾向を帯びていたから、これを「新生」といったわけである。^{*8}

この挿話の年代〔魯迅の退学は 1906 年〕は、中国に初めて——リュミエール兄弟の代理店により——映画が持ち込まれたわずか十年後のことで、また中国人によって映画制作が始められたのとはほぼ同時期になるのだが、魯迅のこの話は、ひとりの有名作家が、自らの作家経歴をめぐり書いた自叙伝の一部であるというにとどまらず、ポストコロニアルな「第三世界」で、新しい種類の言説がいかに始まったのかを語る物語でもある。すなわちこれは新奇なテクノロジーによって顕在化された視覚の言説なのだ。……見てのとおり、魯迅のこの説明は、映画〔スライド〕という媒体^{メディア}によって伝えられるスペクタクルの力が、どのように経験されるかを語っている。スライドが鮮明に捉えているのは、自国の人間が外国の侵略者によって処刑されんとする恐ろしい光景だ。しかし厳密に言うと、いったい何がそれほど恐ろしいのだろうか？ 魯迅のテキストにはよくある ことだが、一見連続的と見える出来事の間^{メディア}に裂け目が存在する。そのため、言説上の断片となっているものの間に関連を探することは、読者の精読に委ねられているのである。

この挿話が語るのは、新しく出現しつつあった「近代性」がとりわけ視覚に基づいたものであるということだが、これと似た話は、世界の別のところにも多く見つけることができるだろう。……^{*9}

日本では「幻燈事件」としてよく知られる、仙台医学専門学校（現東北大学医学部）でこの経験が魯迅にとってどのようなものだったのかを想像しようとすることは日本人である私にとって、いたたまれない感情を伴う。しかし、すぐにまた、マグレブは、「これと似た話」を多く見つけることができる場所である、とも思うのである。

私がこれから読もうとする小説『貧者の息子』*Le Fils du pauvre*（1954年）を書いたムールード・フェラウン（1913-1962年）がこの作品を書き始めたのは1939年のことである。

*8 魯迅『『呐喊』原序』井上紅梅訳（青空文庫版）より。底本より表記を改めた箇所がある。

*9 チョウ、前掲書、p. 17-19

フェラウンの評伝を書いたジョゼ・ランジニ José Lenzini はそれより前に、カミュについても広く取材した評伝等を書いている。^{*10}ランジニがこの二人の作家について調べ、評伝を書き上げたのには、(伝記)作家としての必然の成り行きのようなものがあつたのかもしれない。

ランジニは、評伝『ムールード・フェラウン』*MOULOUD FERAOUN*^{*11}において、フェラウンがジャーナリストであったカミュにカビリアで出会ったときのことを書いている。

^{*12}1939年のことだった。当時、フェラウンは出身地であるカビリア地方のタブドゥリストという小村の小学校で教えていた。フェラウンは、休日になると徒歩でティジ・ウズ^{*13}の街に行つては、買い物をしたり友人に会つたりしたが、そこである日「背の高い、気さくな感じの若い新聞記者が何人かの人と話をしている」のを目にする。「その人物はタバコをくわえ、灰色の目に、ハンフリー・ボガードのような風貌」であつた。そして、フェラウンとも二言三言ことばを交わして立ち去つたが、それから何日か後の6月5日、愛読していた『アルジェ・レピュブリカン』*Alger Republicain*紙^{*14}を拵げたフェラウンは、その人物が「われわれカビリア人と、われわれの土地カビリア」について書いたルポルタージュを目にすることになる。^{*15}これを読んだフェラウンの衝撃をランジニは次のように書いている。

カミュはカビリア地方の極限的な窮乏ぶりと、それが続くことの危険を告発している。フェラウンはこのルポルタージュに驚いた。そして、連載の終了時には不満な様子だったという。しかし、奇妙ではないか！カミュはその記事で、食糧不足、学校の不足やインフラの欠如、低賃金、健康な成人男性の多くが移民せざるをえない状況について冷徹に語っているのだが、近親者^{*16}によると、ムールード・フェラウンはすぐに、記事に対していらだちのようなものを表明することになる。

カミュは、小手先ばかりで見通しのない解決策は信用に値しないとして、経済および社会の発展プランを提案し、それはコロンではなく、フランス本国によるものでなくてはならないとした。

*10 ジョゼ・ランジニ José Lenzini はフランス人ジャーナリスト。1943年～、アルジェリアのセティフ生まれ。ランジニのカミュに関する著作は以下。

L'Algérie de Camus, Edisud, 1987/ réédition en 1989, 1996, 1999 et 2001 en Algérie

Camus, Milan/Les essentiels, 1996

Camus et l'Algérie, Edisud, 2010

*11 *MOULOUD FERAOUN : Un écrivain engagé*, coll. « Solin » Actes Sud, 2013

*12 *ibid.*, p.111-113

*13 Tizi-Ouzou アルジェリア、カビリア地方のティジ・ウズ県にある町。首都アルジェから 100 kmほど東に位置する。タブドゥリスト Taboudrist はティジ・ウズの南東にある小村。

*14 『アルジェ・レピュブリカン』紙は 1938年に創刊されたリベラルな日刊紙。当時、教員たちが愛読していた。

*15 カミュは『アルジェ・レピュブリカン』紙に 1939年 6月 5日から 15日まで、カビリアの窮乏ぶりを報告するルポルタージュ「カビリアの悲惨」*Misère de la Kabylie*を執筆連載した。

*16 Lenzini, *op. cit.*, p.112. フェラウンの子息である、アリとモクランにランジニが行つたインタビューで得られた証言である。

的確、大胆……。それゆえ、この報告と、提案された処方箋に対するフェラウンの慎重な態度はどうし

てかが問われることになる。 実際、この献身的ではあるが、カビリアの窮乏の歴史的な奥深い理由についての政治的な分析に乏しい弁論からは、カビリアの魂、その誇り、連帯、抵抗する力が消し去られている。カミュは、その前年にはまだアルジェリア共産党員であったし、党ではアラブ人青年に対する宣伝活動に従事していた。そういった人物がなぜそれを語らないのか、なぜそれを閑却していたのだろうか。それをどう説明できるだろう。

フェラウンは失望する。……この取材報告が平教師にすぎないカビリア人の政治的文学的な未来に与えた衝撃を自ら問うてみるべき、その時だったのである。ロブレスは、カビリア人についての本を書くよう勧めてくれたのではなかったか。このルポルタージュはまさにしかるべき時にやって来て、彼に、自ら証言して心からの声を聞かせなくてはなるまいと呼びかけているのではないか。そしてまた、ペレグリの評価も的確に思われる。……「《カビリアの悲惨》について書いたものは基本のテキストである。だが、カミュにおいてはすべてが、知性と感覚の間の、意識と無意識の間の分裂のように起こっている。」

Il dénonce l'extrême misère de la Kabylie et les risques de s'y maintenir. Feraoun est étonné par ce reportage. Pourtant, au terme de la série, il semble insatisfait. Etrange tout de même ! Selon certains de ses proches, Mouloud Feraoun va manifester un certain agacement face à ces articles dans lesquels Camus parle pourtant sans complaisance de la faim, du manque d'écoles, d'infrastructures, des bas salaires et de l'impérieuse nécessité de l'émigration pour la majorité des hommes valides.

Camus, qui se méfie de solutions sans envergures ni lendemains, propose un plan de développement économique et social qui doit venir de la France et non des colons.

C'est pertinent. C'est audacieux...

On peut dès lors s'interroger sur la circonspection de Feraoun face au constat et remède proposé. En fait l'âme kabyle, sa fierté, sa solidarité, sa capacité de résistance sont gommées de ce plaidoyer généreux mais pauvre en analyses politiques sur les causes historiques et profondes de cette misère. Comment expliquer ces silences, ces oublis de la part d'un Camus qui, l'année précédente, était encore membre du Parti communiste algérien. Un parti au sein duquel il était chargé de la propagande auprès des jeunes Arabes...

Feraoun est déçu....Au point qu'il est légitime de s'interroger sur l'impact qu'a pu avoir cette enquête sur l'avenir politico-littéraire du petit instituteur Kabyle...Roblès ne lui avait-il pas conseillé d'écrire un livre sur les Kabyles ? Ce reportage ne venait-il pas à point pour lui rappeler cette nécessité de témoigner lui-même et de le faire de l'intérieur ? Là encore le jugement de Pélégri nous paraît pertinent...“Les textes sur « La misère en Kabylie » (sic) sont des textes fondateurs. Mais tout se passe chez Camus comme s'il y avait divorce entre

intelligence et sensibilité, conscient et inconscient.”^{*17}

カミュのテキストがフェラウンをいらだたせ失望させたのは、まさに上の引用のアンダースラインをつけた強調箇所〔筆者〕で言われている理由によるものであろう。さらにもうひとつ、ミシェル・ド・セルトーからの引用をここに置くのは無駄ではないだろう。

場所、それはパランプセストである。学問的分析はそこに書きこまれたいちばん新しいテキストしか知らない。しかも分析にとってそのテキストは、みずからの認識論的決定、みずからの基準、みずからの目的設定のうんだ結果でしかない。^{*18}

Le lieu, c'est le palimpseste. L'analyse savante n'en connait que le texte dernier ; encore n'est-il pour elle que l'effet de ses décisions épistémologiques, de ses critères et de ses objectifs.

^{*19}

連載「カビリアの悲惨」の第2回は次のように始まる。

カビリアの窮状全体の ^{タブロー}画を描くことに取りかかるまえに、また、これまで時間をかけて取材する機会を与えられた窮乏の現状をたどり直す前に、この窮乏の原因の 経済的な面について少し述べておきたい。……

Avant d'entreprendre un tableau d'ensemble de la misère en Kabylie et avant de reparcourir cet itinéraire de la famine qu'il m'a été donné de faire pendant ces longs jours, je voudrais dire quelques mots sur les raisons économiques de cette misère. ...^{*20}〔強調筆者〕

カミュの紙上における報告は、見たこと聞いたことの正確な「窮乏の ^{タブロー}画」と、その「経済的な」すなわち、ほぼすべてを数字に還元できる原因で構成されている。タブロー tableau のもうひとつの意味である一覧表、これはカビリアの悲惨を表す様々な指標の一覧表でもある。

カミュの筆致は的確で、それゆえ力強い。連載2回目の「Dénuelement 窮乏」には、早朝、ティジ・ウズの町で見かけた、ぼろをまとった子どもたちが野良犬と争ってゴミ缶をあさる姿がそのまま写し取られ、そこに裏付けとして大人のカビリア人の証言（「毎朝のことさ」）が引かれる。その小説と同様、無駄のない散文は読む者に「異議をさしはさむ隙」を与えない。フェラウン自身が言うようにそこには理解しようとする姿勢と熱意がある。^{*21} 偏見はない。そして、揺るがぬ散文が「カビリアの悲惨」を、ピン留めされた昆虫の標本のように ^{タブロー}画に固定している。

*17 Lenzini, *op. cit.*, p.112-113

*18 ミシェル・ド・セルトー『日常実践のポイエティック』p.394

*19 Michel de Certeau, *L'invention du quotidien*, p.295

*20 Le Dénuelement, Misère de la Kabylie, p.905

*21 「私たち共通の不幸の根源（カミュへの手紙）」La Source de nos communs malheurs (lettre à Albert Camus), *L'Annuaire*. 初出は『証拠』誌 *Revue Preuve* (1958年91号)。

しかし、野良犬と争ってゴミをあさる子どもたちを眺める外来者と、その子どもはわが子、自分自身でさえありうるフェラウンの違いは決定的である。（『貧者の息子』という小説のタイトルはなんと挑発的なことだろう。）どうあっても外からやってきたカミュには見ることでできない/知りえない/書くことでできないものがあることを、カピリア人のフェラウンは知っている。

カミュは見たままを書いた。そして、見たものを書くことにおいてカミュの力量は圧倒的である。しかし、己には見ることでできないものについて、カミュが思いを巡らすことはあったのだろうか。この取材でカミュが踏破した *parcourir* カピリアとはどこだろう。都市部はともかく、カピリアという地域は踏破できるような土地柄なのだろうか。^{*22}そしてまた、人間の生の営み全般について、見るだけで書けることとはどれほどのことだろう。その疑問は、観察者であったり取材者、あるいはフィールドワーカーのありようと、そのふるまいの効果と限界を見極めようとするところでもある。密着し丁寧に観察をする。証言を集める。どこへでも赴くことをいとわない。詳細に記録する。こういった、観察者の長所が陥る陥穽を「カピリアの悲惨」もまた示しているのではないだろうか。カミュの的確で力強い筆致が、それをいっそう強化していると言ってもよいだろう。アトリエを出て「東方」を旅し、実際に、そこを見ることができたオリエンタリズムの画家たちが、観察と記録に基づいて彼らのタブローに描き込んだ細部こそがいっそうオリエンタリズム神話の

《真実》を強化したように。外来者には近づきにくい山地地方カピリアであっても、歴史がそこだけ置き去りにすることはありえない。マグレブ一帯の植民地化の影響によって変容を被っていたことは間違いない。そして、マグレブはさらに大きな世界規模の西洋帝国主義的変容のなかに巻き込まれていたのである。実際、『貧者の息子』にはカピリアが閉じられた世界ではないことがそこここに書き込まれている。

チョウはそれを、以下のように述べている。

異文化間「交流」についてのこれらの所見が意味するのは、過去数世紀にわたる西洋帝国主義と植民地支配が生み出した人類学的状況の行き詰まりと呼んでよいものだろう。この行き詰まりは、もっとも基本的な人類学の台本に立ち戻ることで描写できる——西洋人類学者が世界中の「プリミティヴ」な文化を研究するために海外旅行するという プリミティヴ シナリオ。自分の仕事をなしとげるために西洋人類学者は、これらの「原始的」な文脈に自分自身とその社会的実践（たとえば「科学的」観察とか録音など）を割り込ませなければならない。その職業的動機は壮大で救済さえ目的とするものなのだが、それにもかかわらず、西洋人類学者がそこにいるということそれだけで、結果としてそれらの「他者の」文化は変化をこうむり「起源」オリジンから永遠に引き離されねばならないことになる。^{*23}

ここで言われる人類学を、すぐさまジャーナリズムに置き換えることができるだろう。ジャーナリズムの方法は人類学の成果からも多くを学び取っているはずである。

*22 Lenzini, *op.cit.*, p.159 ~

*23 チョウ, 前掲書, p.262

フェラウンがティジ・ウズの町でカミュに出会ったことはカミュには記憶されていなかったようだ。後年、ロブレスを通してカミュと知り合い、『貧者の息子』を贈ったフェラウンは1951年、直接カミュに宛てた手紙で、「カビリアの悲惨」を読んだときの戸惑いが何であったかや、『ペスト』（1947年）の読後感を書き送っている。

私はあなたに1937年に(sic)^{*24}ティジ・ウズで遭っています。あの頃はお互いまだ若かった。あなたはカビリアについて、私たちの新聞である『アルジェ・レピュブリカン』に記事を書いていた。それから、私は『ペスト』を読んで、これまでのあなたのどの本よりもよく理解できたという感想を持ちました。登場人物にひとりも原住民がいないこと、オランがあなたの目にはフランスのどこにでもある町のひとつにすぎないことが惜しまれます。どうかおわかりいただきたい、これは非難ではないのです。私はただ、こう考えたにすぎません。もし私たちの間にこのような溝がなければ、あなたは私たちをもっとよく知ることができるのに。あなたはご自分が、ほかの人たちみなが享受したその寛容さでもって私たちについて語ることができると感じられるであろうのに。さらにまた、私が心から残念に思うのは、あなたが私たちを十分に知らなかったということ、私たちの側には、自ら、私たちを理解してもらい、理解させ、私たちについて知らせることを助けるような人物がいなかったということです。

私は書こうと思いました。私たち同胞について私が見たままに、決して幻想を持たずに語りたかった。きっと、私の視界はほんのすぐそこまで、私の方法はあまりにも限られたものになるでしょう。というのは、良識というのは言われるほどには共有されていないからです。もし私がいつか冷静に自己を表現できるようになるとすれば、それはあなたの本のおかげです。あなたの本は私に私自身を知らせてくれ、ほかの人たちを見いださせ、それから、その人たちが私に似ているという考えをいだかせました。それならば、今度は私が、カビリア人のことを知らせよう、カビリア人がすべての人に似ていることを示そうという、バカげたことをあえてしようというのです。

Je vous ai vu en 1937 à Tizi-Ouzou. Nous étions alors bien jeunes. Vous écriviez des articles sur la Kabylie dans *Alger Républicain* qui était notre journal, puis j'ai lu *la Peste* et j'ai eu l'impression d'avoir compris votre livre comme je n'en avais jamais compris d'autres. J'avais regretté que parmi tous ces personnages il n'y eût aucun indigène et qu'Oran ne fût à vos yeux qu'une banale préfecture française. Oh! ce n'est pas un reproche. J'ai pensé simplement que, s'il n'y avait pas ce fossé entre nous, vous nous auriez mieux connus, vous vous seriez senti capable de parler de nous avec la même générosité dont bénéficient tous les autres. Je regrette toujours, de tout mon cœur, que vous ne nous connaissiez pas suffisamment et que nous n'ayons personne pour nous comprendre, nous faire comprendre et nous aider à nous connaître nous-mêmes.

J'ai l'intention d'écrire, de parler de nos compatriotes tels que je les vois mais je n'ai pas d'illusions. Ma vue sera forcément trop courte et mes moyens trop réduits car il n'est pas vrai

*24 実際には、1939年のことである。

que le bon sens soit si bien partagé qu'on le dit. Si je parvenais un jour à m'exprimer sereinement, je le devrais à votre livre—à vos livres qui m'ont appris à me connaître puis à découvrir les autres, et à constater qu'ils me ressemblent. Ne puis-je donc pas me payer ce ridicule : tenter à mon tour d'expliquer les Kabyles et montrer qu'ils ressemblent à tout le monde? ^{*25}

興味深いのは、エドワード・サイード「カミュとフランス帝国体験」Camus and French Imperial Experience における『ペスト』批判をフェラウンがすでに先取りしていることである。^{*26} 直接本人に宛てた手紙であるゆえにフェラウンの口調はあくまでも丁重であり、サイードの舌鋒鋭いスタイルとは大きく異なるが、ここには、「カビリアの悲惨」以来一貫して、私たちが見られる人（書かれる人）であり、「悲惨」に固定され、そこから抜け出すのに一方的に処方箋を受け取る存在にすぎないことを徹底的に思い知らされた経験が語られている。

カミュが描いたカビリアの ^{タブロー}画 については、第Ⅲ章で改めてより具体的な読解を試み、それがフェラウンのテキスト（成立）とどのような関係にあるのかを考えてみたい。この章ではさらに、ブルデューのカビリアにおける民俗学的調査のテキストとも比較する。この二つのテキストは、外部から、書かれた/まなざしを向けられたカビリアを示す。それらのテキストとの関係を見ることで、『貧者の息子』およびフェラウンのテキストが被ってきた大まかで単純な評価、民族誌的であるとか、リニアで読みやすい、といった評価とは異なる、テキストの性格を浮かび上がらせるのが目的である。その上で、『貧者の息子』においてフェラウンはカビリアとカビリア人をどう書いたのか、とりわけカビリアにおける言語/エクリチュールに焦点を当てて、その記述を読み解くこととしたい。

「アルジェリアの文学」

フェラウンがアルジェリアの文学について 1957年に書いた「アルジェリアの文学」La littérature Algérienne は、フェラウンがみずから、アルジェリアのフランス語文学の作家として小説を書き始めた動機を証言するものである。これはまた、カミュのルポルタージュに対してフェラウンが示した驚きといらだちが何であったのかを知る助けとなる。^{*27} このテキストが書かれたとき、アルジェリアはすでにフランスに対する独立戦争を戦っていた。当時、この長く残酷な闘争はなお途半ばであり、フェラウンはついにその結末を知ることはない。

*25 *Lettres à ses amis*, p. 203-4

*26 E・サイード「カミュとフランス帝国体験」『文化と帝国主義』

*27 「アルジェリアの文学」La littérature Algérienne は 1957年に『フランス』誌 *Revue française* に発表、1972年に『記念日』*L'Anniversaire* に再録された。

「アルジェリアの文学」は『フランス』誌 *Revue française* に発表された。『フランス』誌はパリ発行の雑誌で、「アルジェリアの文学」は本国のフランス人向けに書かれたものであり、「われわれ」がどうして書き始めたのか、その事情を説明する姿勢で書かれている。表題からもわかるように、すでに明白になった政治的対立状況の枠組みのなかでは、フェラウンはわれわれアルジェリア人を代弁する立場で語らざるをえない。^{*28}ここでは、彼はカビリア人ではなく、フランス人に対するところのアルジェリア人である。それはまた、フランス人に対してだけでなく、アルジェリア独立闘争のヘゲモニーを握る者たちへの配慮を示しているとも考えることができる。また、当然ながら、アルジェリアがフランスと独立戦争を戦っている最中であることを考慮し、日々、政治的な暴力闘争によって人々の血が流されているときに、その課題からは離れた（ように見える）「文学」について語ることに留保をつけつつ、「われわれ」が語ることのうちに含まれざるをえない闘争の理由を、やや婉曲的抽象的に記している。しかし、この短文の主張の肝心の部分は「初めて、われわれ（自身）が語り出した」のだということである。

初めてのことだが、ある一つのアルジェリアがその声を聞かせた。偽りのない声、それは心の奥底からやってきた。そして、心をつかむ、ことばであった。

Pour la première fois, une certaine Algérie faisait entendre sa voix, une voix qui ne trompait pas, un langage qui venait du cœur et empoignait les cœurs.^{*29}

さらにまた、この文には、宗主国である共和国フランスへの呼びかけと期待の感情が込められていたのかもしれない。もっとも、この短文に、フェラウンがどれほど強い主張を込めようとしたのかを推し量ることはできない。だが、われわれ（アルジェリア人）が語れるのは、あなたがた（フランス人）が関心をもってくれたからであり、あなたがたがわれわれに対して率直な証言をするよう望んでいると同時に、われわれの側は、いまこそ、自ら証言する緊急の要請にかられている、というのである。

われわれが書く文学をどう読むか。フェラウンの口調はけっして厳しくはないが、真摯な証言をどう読み取るかについて、婉曲的ながらも明白な要求を行っている。アルジェリア人が書いた文学を、すでによく知っているもの、民族誌的なものとしてかたづける *ranger* やり方を戒めている。これは、読みようによっては、フェラウンの作品『貧者の息子』などに向けられた評価に対する批判であるともとれる。書くよりも書かれる、見るよりも見られることが圧倒的に多かった者だからこそ、これを改めて強調したのではないだろうか。

最初にレイ・チョウから引いた魯迅のエピソードに戻ろう。魯迅を不意打ちしたスライド映像、ひとりの同胞が日本人に処刑されようとするのを取り囲んで無気力に眺める同胞たちの画は、「厳密に言うと、いったい何がそれほど恐ろしいのだろうか？」とチョウは問う。この恐ろしさの力はチョウの議論においては、視覚とりわけ新しいテクノロジーが

*28 フェラウンはアルジェリアという語をあまり使わない。

*29 *L'Anniversaire*, p.53

可能にした映像の力、具体的には映画の力であるとされる。ハイデガーやベンヤミン、ヴァッティエモを引きながら証明する、その力の性質「衝撃」である。チョウの主張の力点は視覚の「衝撃」、とりわけ新しいテクノロジーによって可能になった映像の衝撃の何たるかを追求することにある。

ヨーロッパにおけるかつての宗主国の都市の外部では、この〔衝撃による〕方向喪失もまったく異なった意味合いを持つはずだ。ハイデガー、ベンヤミン、そしてヴァッティエモの描く驚きやショック、動揺を、魯迅も感じたことは疑いない。何も予期せず、感覚的に開けっぴろげな状態で、思いもかけぬ映像を見せられたとき。だがこのような方向喪失感、芸術と創造の意味だけに関わるわけでもなければ、近代ヨーロッパの都市についてよく言われるところの、人間存在のいわれのなさといったものに関係するにとどまらない。若い魯迅に衝撃を与え、方向喪失感をもたらしたのは、被害者を襲った破壊、傍観者の無気力と無力さ、そして近代国家としての中国にそれらが持つ意味だった

——というのがたしかに、魯迅自身が示す理屈にあった説明であり、近代中国文学の読者や批評家の多くも、この説明を受け入れてきた。しかしながらこの説明に欠けているのは、ショッキングで方向感覚を失わせたのは、映画媒体自体が可能にした拡大と増幅の過程でもあるということだ。映画による拡大と増幅のプロセスは、いわば見せ物をさらにスペクタクル的に派手に見せ、示威的な行動を奇怪なものとし、そうすることでテクノロジーに支えられた視覚の重要性を裏書きしているのである。魯迅の反応の焦点は、処刑されようとしている犠牲者にも、受動的な傍観者にもとどまらない。より重要なのは、視覚と権力の関係だ。視覚と権力の関係はポストコロニアルな非西洋社会では決定的に重要なものであり、映画という新しいメディアによって提出された不可避な問いだ。魯迅の反応は視覚と権力の関係の指標なのである。

視覚という問題をいったん導入してみると、魯迅が観客かつ観察者の位置にあることがわかるだろう。さらに、この良く知られた挿話が異なる見物人グループ間の複雑な関係を描いたものとして書き換え可能であることもわかるはずだ——すなわち、処刑を「鑑賞する」ためにそこに立ち会っている傍観者、殺人とそれを見物する人々をスクリーン上に見ている魯迅と彼の級友たち、そして映像を見る自分自身や他人を観察している作家としての魯迅その人、との間の関係。^{*30}

チョウが重要であるとする「視覚と権力の関係」は、この議論の文脈では「映画という新しいメディアによって提出された不可避な問い」であるとされているが、それは映画というメディアによってこそ、よりあからさまにラディカルに突きつけられるようになった問いなのであり、もっと大きな歴史的な文脈、あるいはヨーロッパとその他の世界の関係性から考えると、「視覚と権力の関係」はすでに、世界中いたるところを覆い尽くしていたのである。

*30 チョウ、前掲書、p. 20-21

チョウが取り上げた幻燈事件の話を、魯迅は別のいくつかの作品で繰り返している。^{*31} 事件の顛末や細部がこれらの作品の間で異なることから、幻燈事件の事実と真相が追求されてきたし、魯迅が見た、というスライド写真はどれかを同定しようとする試みも多い。^{*32} 幻燈事件とは、作家魯迅が医学を捨てて文学を始めることになったきっかけを語るために構成した出来事なのであろう。^{*33} 「藤野先生」^{*34} においても幻燈事件は反復されるのだが、仙台医学校時代の恩師のことを書いたこの作品を併せ読むとそれがよく分かる。「『呐喊』原序」に比べると事件そのものの記述は短い。しかし、事件の前段の記述は周到であり、この出来事における視覚と権力の関係が、より細かい陰影をもって書き込まれている。解剖学担当の藤野先生は、中国からの留学生である周樹人^{*35}の日本語能力を心配して、彼がとったノートを提出させ、毎回朱筆で訂正を入れて返してくれる。熱心な教師であるが、いっぽうで、中国の纏足についての解剖学者らしい好奇心や、遺体についての中国人の観念に関する思い込みの表出は周樹人を当惑させる。また、医学校の同級生たちのなかには、藤野先生の中国人留学生に対する特別な配慮を、試験の問題をこっそり教えたという虚偽の噂に変えて流す者がいた。それに抗議して周樹人の肩を持ち嫌疑をはらすために行動する者もある。「原序」では、幻燈を見る観客として抽象的集合的に描かれる日本人同級生、集団的な日本の優越のありようも、当然ながらさまざまである。また、藤野先生が解剖学の初回の講義の解剖学史用に持ってきた一抱えもある文献のなかに中国の訳本の翻刻があることを、周樹人は見逃さない。日本の新しい医学というものも、中国に比べてずっと先を行っているとは言いがたい。それに何よりも日本の新しい医学というものは、多くが（西洋からの）「翻訳」なのである。そうであるにも関わらず、幻燈に映し出されたシーンと、それを見た時の状況は、中国を日本に比べて「弱国」とし中国人を「低脳児」とする。「原序」は、周樹人の、教師や同級生、また同胞である中国からの他の留学生との多様な交わりの様子を捨象して、見る見られるの入れ子関係が現出する場の形を巧みに作り上げ、そこに処刑直前の残酷な画イメージを唐突に突きつけることによって、事を単純化しながらイメージ化しているのである。それは、映像そのものに比べればはるかに説明的かもしれないが、

*31 幻燈事件が書かれているのは、『『呐喊』自序』（1922年）、「ロシア語訳『阿Q正伝』序および著者自叙伝略」（1925年）、「藤野先生」（1926年）、「魯迅自伝」（1930年）、「自伝」（1934年）である。

*32 チョウ、前掲書、p.302 註 2 参照。チョウは、レイダの著作にはそれらしい写真が掲載されているが、それが魯迅が説明する処刑のシーンとは異なると述べている。また、日本中国友好協会の宮城県連合会の魯迅研究のサイトでは、「魯迅と仙台留学」のテーマで、幻燈事件に該当しそうな写真を数多く集めて検討を行っている。

<http://park12.wakwak.com/~jcfa-miyagi/luxunf/ryugaku.html>

*33 「このような古い話〔幻燈事件：筆者〕をもう一度語り直そうとしているからと言って、私は別に魯迅の話がでっち上げだと言いたいわけではない。あの話『本当に起こった』ことかどうかは大して重要ではない。」（チョウ、前掲書、p.22）

*34 「藤野先生」は、魯迅が仙台医学校で実際に指導を受けた藤野巖九郎げんくろう（1874 - 1945年）の思い出を書いたものである。この作品も、事実に基づいた創作であると思われる。

*35 魯迅（ペンネーム）の本名。

やはりイメージ的な沈黙と衝撃を含み込んでいる。^{*36}「藤野先生」は、その沈黙のいくつかを読み解くことができる補足的なテキストでもある、と考えることができる。チョウは

「この説明に欠けているのは、ショッキングで方向感覚を失わせたのは、映画媒体自体が可能にした拡大と増幅の過程でもあるということだ」と述べているが、映画媒体（幻燈）のもつ力を、魯迅自身が見抜いていたからこそ、彼の中国と中国人を変えようとする新しい文学の、最初の短編集、勇ましい表題を持つ短編集の始めに、このエンブレムを置いたのではないだろうか。

チョウの議論が常に強調するように、文学や書き物は映像のような衝撃的な力を決して持たえない。新聞に掲載されたルポルタージュは映画ほどのインパクトを持ち得ない。しかし、「視覚と権力の関係」の構造はここでも相似であって、十分すぎるほどに現れている。フェラウンが「われわれの新聞」である『アルジェ・レピュブリカン』の紙面で「見せられた（＝読んだ）^{タブロー}ものは何であったのか。カミュの意図に戻ろう。それは「カピリアの窮状全体の画を描くこと」である。タブロー tableau という語が使われているのは偶然ではない。カミュが正確に伝えようとしたのは、カピリアの窮状の画、イメージなのである。カピリアは明らかに宗主国の都市の外部である。ここでは「見せ物はさらに派手になり、示威的な行動は奇怪となる」。カミュが見たという「犬と争うようにゴミ缶をあさるカピリアの子どもたち」は、紙上で描写されることで奇怪な見せ物と化している。映画館のような場所で多くの観客にさらされるようなことはなく、宗主国からやってきた観光客や民族学者や役人たちのまなざしに応えるようにではあろうが。ここで、ことばによって描き出される画^{タブロー}は、薄暗がりです突然目の前に提示される光、スライド上のイメージに比べれば、衝撃においてそれほど強烈ではないかもしれない。しかし、視覚と権力の恐ろしい関係の具体的な見せ物化であったとは言えよう。それはまた、新聞紙面に告発されることで「自分より下位にある社会に内在している意味を暴露することが、民族学者〔ジャーナリスト/ジャーナリズム〕の権威に他ならない」^{*37} ような状況のあらわれのひとつであったとも言える。

端的に言って、魯迅は近代世界で「中国人であること」の意味を、映画を見ることで発見するのだ。^{*38}

同じように、フェラウンは「カピリア人であること」の意味をルポルタージュを読むことで発見したのだ。その点では、書き物であるルポルタージュであっても、優れた読み手

*36 「視覚映像自体は沈黙して語らない。とすれば、視覚映像が私たちにもたらす変化をどのようにして語ることができるのだろうか。魯迅の物語の『形式』と『内容』を構築しているのは、この解釈されるべき沈黙という肝心の問題である。」（チョウ、前掲書、p.23）。チョウは文学的書き物では結局この沈黙を読み解きつくすことはできないとしている。イメージ、視覚映像が何を意味し、見るものに何をもちたらずかをことばで説明しつくすことはできないが、そのいっぽう、ことばによって生成されたイメージ、結ばれたイメージには、必ずことばの説明をはみ出す（あらたに沈黙を作り出す）部分があることも確かである。

*37 チョウ、前掲書、p.264

*38 同書、p.25

であったフェラウンにとっては十分であっただろう。むしろ、フランス語の優れた読み手であったからこそ、カミュのルポルタージュに、フランスのアルジェリアにおいて「カビリア人であること」の意味を明白に読み取ることができたのである。直前のチョウからの引用は、実際、極めて端的な言い方であって、魯迅の覚醒はこの瞬間に初めて訪れるわけではない。同様に、ムールード・フェラウンもカミュのルポルタージュに接するまでそのことに気づいていなかったはずはない。

視覚が優位となった世界、視覚と権力の関係性についてのチョウの鋭敏な介入が、思いがけずフェラウンの文学の読解を助けてくれることを知ったわけだが、この論考はもうひとつの点でさらにフェラウン文学の読解を助けるための枠組みを提示してくれる。

したがってそのような文化の成員が、自分たちの文化について権威ある見解を見いだそうとする場合、西洋の資料に頼らなくてはならないということがよくある。多くの場合、この人類学と民族誌の方法と実践は、植民地統治を強化するのに役だっただけであり、かくしてこれらの「他者の」文化を組織的に破壊するのに奉仕したのである。……非西洋の人々にとってこの古典的な前提の明白な結果として、言語や哲学、歴史編纂の西洋モデルが「基準となる知識」として、常に変わらず特権化され、非西洋の言語や哲学、歴史編纂がつねに変わらず周辺化される。タラル・アサドが書いているように、古典的人類学および民族誌の状況がそのような根本的不平等を抱えているために、西洋と東洋とのあらゆる文化翻訳の課程は、不均衡な特権の付与という特徴を保持する可能性が高い。

「文化翻訳」の課程は不可避免的に権力状況の網の目に絡め取られている。専門知識という権力、国家権力、国際的な権力状況という網の目に。そして自分より下位にある社会に内在している意味を暴露することが、民族学者の権威に他ならないということは、こうした状況のひとつのあらわれだ。このような状況下で調べてみるべき興味深い疑問とは……言説による実践および非言説的实践の両方を伴う「文化翻訳」の課程にどのようにして権力が入り込むのか、という問いである。^{*39}

人類学のようなブルジョワ的学問分野によって生産された情報や知識は搾取するための最大の能力を持つ者によってもっとも容易に習得され使用されているという事実を、今日私たちはますます無視できなくなっている。^{*40}

三部構成の『プリミティヴへの情熱』の最後に置かれるのが、翻訳を扱った第Ⅲ部「民族誌としての映画、もしくは、ポストコロニアル世界における文化間の翻訳」である。第Ⅱ部では、チョウはいくつかの中国現代映画作品を読み解いて、その特徴のうちでも顕著なものとして「(自)民族誌」の映画としての提示し直しとしている。ここに、文化翻訳という概念が持ち出されるのは、西洋と東洋との間の民族誌の書き換えが、ずっと以前か

*39 チョウ, 前掲書, p.263-264

*40 同書, p.264

らある書き物というメディアから別の新しいメディアである映画へと行われたことによるが、古くからある翻訳という行為そのものと、その起源（オリジナル）つまり、どちらが本物かということを追求するうちに、翻訳の概念は拡張され、翻訳はあらゆる「間」において行われる置き換え、書き換え、継承であるとされる。古典的な翻訳、ある言語で書かれた書物を別の言語へと翻訳するといったことだけではない。異なるメディア間での変換から、さらには、伝統の継承といったことまでもが含まれる。

この点で、私たちがフェラウンを読むときにチョウに拠るのは、民族誌の翻訳という考え方である。ここではメディアの転換は行われていないが、カピリア人について書く人がフランス人ではなくカピリア人に替わったという点で翻訳/書き換えが行われる。そしてまた、いっそう重要なのが、「主観的で主体的な起源」と「見ること/見られること」について、主客が入れ替わったときに生ずる「民族誌的不平等」である。

現在から見て「主観的」起源とされるものは、過去において対象であったことの記憶——見られるという経験——を含んでいるということである。そしてその過去において対象であったことの記憶は、民族誌の主体的実践のなかに、他者として視覚的無意識のように生き延びている。^{*41}

言いかえれば、今まで見られ/書かれていた側が自ら見る/書くことになったときには、それまで向こう側からどう見られ/書かれてきたかが、自らの見方/書き方にすでにつねに影響するということである。むしろ、そこに、新たな起源オリジナルが生まれたと考えることができる。このことはそのまま『貧者の息子』の本編冒頭に書き込まれている。チョウが指摘する「民族誌的不平等」をフェラウンははっきりと意識し、作品中で（主人公の/話者である）カピリア人に明言させているのである。^{*42}

西洋の客体であった者が被ったこのような変容は厳然とあって否定しようがなく、チョウはむしろそこから出発する。ある種の中国映画がエキゾティシズムを売り物にしていると非難され、その作り手が所属する社会の知識人から否定的に捉えられるような場合は、あらかじめ強固な形で存在している「民族誌的不平等」を見逃している。こちらに確かなものが何もない場合は、向こう側がもっているもの/押しつけたものを利用するしかない。フェラウンに対して、しばしば投げかけられた同様の非難、エキゾティシズムやミゼラブルリズム（悲惨主義）を売り物にしている、あるいは同化主義的である^{*43}というものだが、その欠陥は、書き始めるに当たって、作家の手元には何一つなかったということに気がついていないということである。書く人としてのフェラウンにはフランス語の言説によって変えられてしまったものさえなかった。あらかじめ、エクリチュールすなわちフランス語

*41 チョウ, 前掲書, p.268

*42 『貧者の息子』【家族】本編冒頭の四つの段落。ただし、そう語るのが主人公フルル・メンラッドであるかは確定できない。

*43 青柳悦子「ムールード・フェラウン『貧者の息子』にみる間主体性」註 46 参照。また、チョウはチャン・イーモウの映画を論じながら、ことに同国人からチャンの映画に投げかけられた「エキゾティシズムを売り物にしている」という批判に言及している。

があり、フランス語で書かれた民族誌なり旅行ガイドしかなかったのである。チョウのこ とばを借りるならば、「自分たちの文化について〔権威ある〕見解を見いだそうとする場 合、西洋（＝フランス）の資料に〔のみ〕頼らなくてはならなかった」し、それが唯一の 方法だった。それは、アラブの知識人出身の書き手たちとは異なる。^{*44}

チョウの議論があらかじめ超えていくのは西洋と東洋を二分するということ、互いに対立するまったく異なった二項であって、それぞれに「独自の起 源」がある^{オリジナル}と見なす態度である。それは、実際にはありえないことで、この態度は、一方的にまなざしを向けられ てきた地域社会の伝統を不変の価値として固定化してしまうという問題を生じさせる。実 は、それはまなざされた社会のほうでも、自らカウンターとして、その不変の価値という 虚構の伝統を押し立てることになる。伝統はすでに崩壊し失われているのに。さらに、チ ョウは、伝統の継承ということでさえより考えを進めてみれば常に移行・移動する翻訳行 為の連続であり、翻訳には常に忠実とともに、裏切りと背信が含意されていることから、 伝統の継承は常に変化のうちにあると述べる。そして、その変化はほとんど常に、伝統主 義者の意に反するものである。

見られているという状態は、非西洋文化が西洋文化に見られている様式に組み込まれて いるだけではない。もっと重要なのは、見られているという状態が、そのような非西洋 文化が自分自身を表象し民族誌化する、積極的な様式の部分をなしているということだ からである。…… 視覚性を焦点にすえて民族誌をこのように再定義すると、世界は私たちを 彼ら、見る

主体とみられる客体という形式で分割されているという古典的人類学の作業仮説は破壊 される。「私たち」と「彼ら」もはや安全に区別できるものではない。今や「見られる 客体」が、見ている「見る主体」を見ているのだ。^{*45}

そのように考えると、フェラウンの小説、自民族誌ともいえるエクリチュールが、フラ ンス人の書いた民族誌や紀行文、旅行ガイドの記述に似ていることは極めて当然のことだ。そこから始める。その上で、フェラウンが施した様々な物語の仕掛けは何のためか、どん な効果を生んでいるのかを読み取っていくことこそが重要である。

かつて民族誌の対象とされた人たち、そしてポストコロニアル時代にあって、自分たち 自身の文化を民族誌的に記述する積極的な役割を引き受けた人々によって実践されてい る、民族誌の主観的で主体的な起源に私たちの注意を向けることによつてのみ、新しい 人類学は可能になるのだ、と私は信じる。^{*46}

*44 青柳悦子, 前掲論文, p.10 参照。マグレブのアラブの作家/知識人がフランス語を使用する際に問われる、二言語のエクリチュール間で引き裂かれるという問題はフェラウンには生じない。ただし『貧者の息子』には、文字で書く言語と声としての言語の間に生じる裂け目が、正面から問われることはないものの、そこそこで描かれている。

*45 チョウ, 前掲書, p.268

*46 同書, p.267

最初の本の成功に励まされ、私はもっと本を書いてみようと思いました。……このことを付け加えなくてはなりません、つまり、私はカビリア（人）の魂を翻訳することができるのではないかと考えるようになったのです。私はずっとカビリアに住んでいました。カビリア人がほかの人たちと同じであることが知られるようになるのはよいことです。それに、それには、私はまさにうってつけの立場にいると思っていますが、そうではないでしょうか。

Le succès de mon premier ouvrage m'avait encouragé à écrire d'autres livres (...) Il faut ajouter ceci : l'idée m'est venue que je pourrais essayer de traduire l'âme kabyle. J'ai toujours habité la Kabylie. Il est bon que l'on sache que les Kabyles sont des hommes comme les autres. Et je crois, voyez-vous, que je suis bien placé pour le dire. ^{*47}

かつては民族誌の対象にされながら、今度は、自分（たち）自身の文化（生）^{せい}を記述する役割を引き受けたフェラウンが、「翻訳 traduire」という語を使っているのは偶然だろうか。「カビリア（人）の魂」をフランス語で翻訳することの困難をフェラウンはよくわかっていた。また、どれほど閉鎖的に見える社会でも伝統の姿も内実も変わっていくことも。その上で、ある社会とそこに暮らす人々、移ろいゆきながらも一貫する、そのありようをエクリチュールに書き取るという困難な試みに挑んだのではないだろうか。

フランス語表現マグリブ文学/アルジェリア文学とムールード・フェラウン

以下、フランス語マグリブ文学と、その作家ムールード・フェラウンの位置を、ごく限定的文学史的に示しておきたい。

ムールード・フェラウンは、現在のアルジェリア、カビリア地方出身だが、フランス語で文筆活動を行った。アルジェリアも含むマグリブ地域には二十世紀の半ばごろから、宗主国の言語であるフランス語で現地人の創作活動が行われるようになる。植民地期末期ではあるが、いまだ独立は果たされていない時期である。この文学活動はフランス語（表現）マグリブ文学^{*48}と呼ばれ、現在でも多様に変化しつつ、多くの作家を輩出し、活発に作品が発表される、フランス語文学の一大潮流であり続けている。フランス語マグリブ文学といふときのマグリブ地域は現在の国名で言うならば、西からモロッコ、アルジェリア、チュニジアであり、この地域は大部分がフランスの植民地であった。

フェラウンは、このフランス語マグリブ文学の第一世代の作家である。第一世代は1950年代に作品を発表するようになった。フェラウンの『貧者の息子』は1950年に出版され

*47 「アルジェリアの努力」紙 *L'Effort algérien* (週刊)。1953年2月27日付け。同紙の主宰者モーリス・モノワイエ Maurice Monnoyer によるインタビュー。

Extraits d'un entretien avec Mouloud Feraoun (Paru dans 'L'Effort algérien' du 27 février 1953)
dh-toulon.net/le-15-mars-1962-Mouloud-Feraoun.html

*48 littérature maghrébine de langue française ou d'expression française

ている。それから間もなく、カテブ・ヤシン『ネジュマ』*Nedjma* が発表される（1956年）^{*49}。この作品はマグレブのフランス語文学の最高峰との評価を受けており、それはいまもなお変わらないと思われるが、現地人がフランス語で書き始めてそれほど経たない時期に、第一世代の作家がこのような達成を行ったことは重要である。

第二世代の時期は1970～1980年代で、マグレブ地域の国家はいずれも独立を果たしたが、ことにアルジェリアは独立戦争の痛手が大きく、また、新たな国家、社会の建設にはあらゆる困難がつきまといっていた。それが第二世代の作家たちの創作のテーマとなった。この世代には第一世代にはいなかった女性作家が誕生している。アシア・ジェバルである。^{*50} ジェバルがペンネームを使った理由としては、女性が表に出にくいマグレブ社会の事情があったが、^{*51} それでも近代国家建設後は教育や社会進出の面で、女性たちが少しずつ自らの主張を始めたことを示している。第三世代になると、女性作家も多くなる。

1962年、アルジェリアの独立直前に突然世を去ったフェラウンはこの時期のフランス語文学を知ることはない。生き延びていれば、創作活動を続けていたはずである。

第三世代は90年代末期から現在である。アルジェリアの90年代は1991年のイスラム救国戦線FISの非合法化以来の混乱（内戦）のため、ジャーナリズムを始め文筆活動およびその他の文化活動が大きな制限を受けた時代だったが、90年代末期からはやや改善している。フランスに移住した人々の子・孫の世代が、移民に伴う新たな困難をテーマとして書く文学も加わり、フランス語マグレブ文学、アルジェリア文学はよりいっそう豊かな生産の時代に入っていると言えよう。^{*52}

アルジェリアの現地人によるフランス語文学が興る前には、先行する文学活動があることを忘れてはならない。

それはまず、十九世紀末に始まった。^{*53} アルジェリアに入植したフランス人はその地で世帯を重ねて、アルジェリア生まれのフランス人、ヨーロッパ人が本国とは違う「われわれ」をはっきりと意識するようになった時期である。彼らは、自らを「アルジェリア人」であるとした。その「アルジェリア人」たちを描いたのが、アルジェ出身の作家ミュゼットである。^{*54} 『植民者たち』*Les Colons*、『アルジェリアニストたち』*Les Algérianistes* という表題がそのまま作家が代表する人々を表しているのは、ロベール・ランドーの作品であ

*49 Kateb Yacine, *Nedjma*, Éditions du Seuil, 1956

*50 Assia Djebar. 本名ファーティマ=ゾフラ・イマラーイェヌ Fatima-Zohra Imalayen (1936-2015) : デビュー作『乾き』*La Soif*(1957)、代表作『愛、ファンタジア』*L'amour, La Fantasia* (1985) など。2005年からアカデミー・フランス会員（マグレブ出身者初）。ノーベル文学賞候補。

*51 ジェルメーン・ティヨン『イトコたちの共和国』第一章「地中海沿岸の高貴な住民たち」第二章「義兄弟たちの共和国からイトコたちの共和国へ」第三章「身内で生きる」など。

*52 ただし、フランスに移住したマグレブ出身者の書く文学をフランス語マグレブ文学とひとくくりを考えるのには注意が必要である。フランス生まれでフランス国籍を持ちフランスで育った彼らは両親や祖父母とは異なる問題意識やテーマを持つ。当然ながら、言語（フランス語）に対する距離も大きく異なるからである。

*53 1830年からフランス軍のアルジェ遠征以降、アルジェリアの植民地化が始まる。十九世紀末ともなると、アルジェリア生まれの、本国を知らないフランス人、ヨーロッパ人が多くなっていった。

*54 Musette(1862-1930年)。本名はオーギュスト・ロビネ Auguste Robinet、アルジェ生まれ。アルジェリアのフランス人（＝アルジェリア人）カガユー Cagayous を主人公にした、ドタバタ喜劇の小説を連作した。

る。このアルジェリアニズムの文学運動においてはすでに、当然ながら、植民地の多言語、多民族、多文化的な状況が反映されている。^{*55}

アルジェリアニズムに続いて、フェラウンとも直接関わりのある作家たちが現れる。「アルジェ派」*École d'Alger* と言われる人たちで、その文学活動は 1930 年代から活発に行われた。フェラウンの創作全般にわたって関わりの大きかったエマニュエル・ロブレス^{*56}もそのひとりである。また、出版業も行ったエドモン・シャルロは、『貧者の息子』を販売した。^{*57} このアルジェ派の作家たちの最後に、アルベール・カミュを付け加えておこなうてはならない。フェラウンとカミュの文学的関わりについては、第三章で詳しく取り上げる。

現地人/被植民者が書いたフランス語文学であっても、当然ながら、それ以前の植民者による文学活動の歴史と無関係に突然発生するということはあるにない。行政制度が整い、ジャーナリズムや、何より教育によって、現地人の知識人が育たなければ文学が書かれる素地はできない。

フランスがやってくる前のマグレブ、アルジェリアの文化状況についてはなかなか考えにくい、植民地支配以降の文芸は宗主国からもたらされるものであり、圧倒的にフランス語であったことは間違いない。現地人の使用言語である多数派のアラビア語でも、読み書きのできる者はわずかであったこと、ベルベル諸語は少数派でさらに細分化され、そのなかでもカビリア語は書記システムがほとんど用いられることがなかったことなどを考えると、二十世紀の半ばにマグレブで始まった現地人による近現代の文芸がフランス語で書かれたことは、極めて当然のように思われる。

現地人作家に先行する植民者（とその子孫）の作家たちが、長くアルジェリアに暮らすうちに、われわれの/についての文学を書くために、この地この現実を反映する言語を模索したように、後に続く現地人の作家も彼らが「受け取った」フランス語を「われわれが」書きたいことを書くために様々に工夫改変していったことは間違いない。

フランス語マグレブ文学は、まず、詩から始まり、そして特徴づけられるのは自伝的な小説の多さである。アラビア語にしても、ベルベル系の諸語にしても、そこには詠じるという伝統が長くあり、マグレブ人はみな、音韻（＝声）には敏感であった。カビリアにも人々が口ずさむ、漂白の詩人シ・モハンドがいる。^{*58} その鋭敏な感覚そのままに、フランス語でも詩を書いた作家は多い。^{*59} そして、次に、現地人作家たちは私語りを始める。自伝的小説を書き始めるのである。しかし、詩と小説の間には断絶がある。小説は詩、詞と

*55 Robert Randau(1873-1946年)。ランドーは植民地行政官として、長く北アフリカ、西アフリカ各地に滞在した。青柳悦子、前掲論文 p.6 参照。

*56 Emmanuel Roblès(1914-1995年)。アルジェリア、オラン生まれ。作家、編集者。フェラウンとはアルジェの師範学校以来の友人であった。

*57 アルジェ派の作家としては、他にガブリエル・オーディジオ Gabriel Audisio (1900-1978年)、ジュール・ロワ Jules Roy(1907-2000年)等。

*58 フェラウンはシ・モハンドの詩を仏訳し解説をつけた。 *Les poèmes de Si-Mohand, essai*, Paris, Minuit, 1960.

*59 モロッコのムハンマド・ハイル＝エディンヌ Mohammed Khair-Eddine (1941-95年)らは、詩の雑誌「息吹」*souffle* によった。

違って、アラブやベルベルの伝統のなかにはなかった表現形式である。フランス語の教育によって彼らは小説を学んだ。マグレブの知識人にとって、小説を書くということ、それはそのままフランス語の表現であるということだ。では、「物語」はどうか。『貧者の息子』でもとりわけ印象的な場面で、主人公にイマジネールなものへの指向を決定づけた口承文学の魅力的な語り手が描かれる。それは主人公にごく身近な肉親である。昔話はいつとも知れぬ過去から語り継がれてきたに相違なく、文学的なマグレブはずっと存在している。このような環境でマグレブの土着の人々によるフランス語文学は生まれたのである。フェラウンの私語りをカテブの『ネジュマ』に比較してみよう。ある意味で両者は対照的な作品である。『ネジュマ』はカテブの私的経験が反映されている部分もあるが、自伝的小説ではない。北アフリカの壮大な歴史をパースペクティブに収め、そこに来たるべきわれわれのアルジェリアを浮かび上がらせようとする枠組みの大きな小説である。表題のネジュマ（アラビア語で星の意味）という名の女性も、彼女に恋する青年たちも、祖国希求の壮大な文学的試みのなかでまさに形象としてしか現れはしない。この難解で美しい詩的作品は『貧者の息子』のわずか六年後に書かれた。『貧者の息子』は表題からしてすぐに察せられるが、作家の自伝的小説である。貧者の息子、とある通り、貧しい原住民の子どもの生い立ちが記されており、主人公が例外的に知的に優れていたために高等教育まで受けて教師になる、ということを除いては何も特別なことは起こらないのである。マグレブ文学のなかではとりわけよく読まれ、知られている作品だが、それは教科書に採用されたことも大きかったようだ。^{*60} この作品はわかりやすい、と受け取られてきた。そして、カテブのように玄人好みではなく地味に静かに読まれ続けた。しかし、この作品がマグレブ、アルジェリアのフランス語文学の最初期に書かれたこと、作家がこれを完成するのに、相当の年月をかけたことを再度考え直してみる必要がある。^{*61} 少なくとも、アルジェリアニズムにさかのぼれるアルジェリア近代文学の流れが脱植民地期において現地人の文学へとつながりかつ断絶したことを考えておくべきである。「アルジェリアの文学」はこう述べる。

〔ヨーロッパ起源の作家たちが〕われわれの身になって証言することを峻拒したことは、一見、失望を感じさせるものであり、また不当にも思われるのだが、その正当性は思慮に富んだ慎重さよりも名誉ある慎みにある。ともかく、その拒否は自らをして自らのために証言するようわれわれを励まし、それに応じさせたのである。すべてはあたかも、ヨーロッパに起源を持つ作家たちが、彼らの告白をわれわれに聞かせてから、今度はわれわれに包み隠さず告白するよう促したかのように推移した。そして、その率直の猛襲は不滅の博愛精神をはっきりと肯定するものであり、それを忠実に実行するだけでよかったのである。

*60 Christiane Achour, *Mouloud Feraoun : une voix en contrepoint* の第1章「一著作の国有化戦略 Stratégies pour la nationalisation d'une œuvre」には、『貧者の息子』他フェラウンの作品がアルジェリアのフランス語教科書にどう採用されたか、詳しい分析がある。

*61 フェラウンは『貧者の息子』執筆に1939年に取りかかり、1948年までかかっている（CNH版）。さらに、スイエ版は1954年発行である。

Ainsi ce refus délibéré de témoigner en notre faveur, qui peut paraître de prime abord décevant et immérité, trouve sa justification dans une honorable pudeur beaucoup plus que dans une prudente réserve. En tout cas, il a fait naître des vocations en nous encourageant à témoigner à notre tour et pour notre compte. Tout s'est passé comme si les écrivains d'origine européenne nous avaient conviés à une confession sans réticence, après nous avoir fait entendre la leur, afin que cet assaut de franchise fût l'éclatante affirmation d'une fraternité indestructible qu'il suffirait ensuite de traduire loyalement dans les faits. ^{*62}

フェラウンは、その直前にいたヨーロッパ系の作家たちとは直接的な関係もあり、作品もよく読んでいた。^{*63}しかし、われわれの始まりは、彼らが書かない/書けないことを書くことなのだとも明確に述べている。

証言、証言する *témoignage, témoigner* という語を用いてフェラウンが言おうとしているのは、われわれにしか書けないことがあるということである。そして、その証言にはフランス語を使わなければならない、使わざるをえない。フランス語について、カテブはこれを「武器である」と考えていたが、フェラウンにはそういう意識はなかった。どちらかといえば、このことばは証言の言語に使わざるをえない（選択の余地のない）道具のようなもので、もともとわれわれの言語ではないものを能う限りよく使いこなして、よく証言することに腐心したのがフェラウンのエクリチュールだったのではないだろうか。

「アルジェリアの文学」で、フェラウンは「ある一つのアルジェリア *une certaine Algérie*」と言い、「一つの声 *une voix*」「一つのことば *un langage*」と言う。もとより、書き始めたアルジェリアの現地人作家がみな、開花したばかりのアルジェリア文学について、フェラウンに同意するかどうかはわからないからである。そしてまた、自らが、《アルジェリア》において遠い過去から、とりわけざわざわとし続けてきた *troublant* カビリアを出自とする少数者であることを強く意識しているからでもあろう。

しかし、すでに植民地支配によって社会と文化・言語に深刻な変化を被ったことを、自己のものとして引き受けつつ、「われわれについて」の証言を始めようとするムールード・フェラウンのエクリチュールは、上に述べたような連続がありながらも、「カビリアの悲惨」によって顕わになった断絶をはっきり意識した上で始められた。フェラウンが教師として自己形成する過程で受けたフランスの教育や、そこで培った人間関係は当然ながら、全てが視覚と権力の否定的な関係であるはずはない。フェラウンは、カミュに書いた手紙のなかで『アルジェ・レピュブリカン』を「私たちの新聞」と言う。^{*64}この「私たち」には、当然、カミュと、それから師範学校を基点とする教師や知識人のひとりひとりが含まれ、そしてさらに広く彼らが形成する植民地の知識人社会があり、それは本国にもつながっている。それらは、魯迅の「藤野先生」で陰影ある細部をともなつて描かれる、「弱小な国」から「進んだ国」に医学を学びに来た留学生を取り巻く環境とやはり、相似形を成

*62 *L'Anniversaire*, p.55-56

*63 青柳悦子, 前掲論文, p.6

*64 前述。註 25 参照。

している。しかし、他でもない「私たちの新聞」、共有していたはずの言語の場所に「カビリアの悲惨」が現れ、カビリアのタブローをつきつける。その効果は、やはり魯迅の幻燈事件がありありと示してくれる。

その出来事による決定的な覚醒は、何をどう書くかに反映されたはずだ。ここに一つ、フランス語マグレブ文学、アルジェリア文学が始まったことが、はっきりと刻印されたのである。

フランス語で書かれるマグレブ（アルジェリア）文学は、植民地支配のあった地域、国に生まれたポストコロニアル文学のひとつである。アルジェリア、カビリア出身のムールード・フェラウンは宗主国の言語フランス語で小説を書いた。

宗主国の言語の膨大なディスクールの積み重ねと、その延長/切断の上に書かれたポストコロニアル文学は、書き手である被植民者の決定的な意識の覚醒によってこそ、「独自の」文学として存在し始めたのではないだろうか。

第Ⅱ章 ムールード・フェラウンと『貧者の息子』

ムールード・フェラウン Mouloud Feraoun 1913-1962

ムールード・フェラウンというアルジェリア人作家が最初に書いた小説作品『貧者の息子』（1954年）を読むにあたって、まず、フェラウンその人の生涯をごく短く振り返っておきたい。フェラウンはアルジェリアあるいはフランスでは長い間よく名の知れた作家であった。しかし、その生涯には不明なことが多い。2013年になってようやく出版されたジョゼ・ランジニ José Lenzini による『ムールード・フェラウン』*MOULOUD FERAOUN* が初めての本格的な評伝と言いうるが^{*1}、これについても、フェラウンの幼児期や若い頃のことはよくわからないままである。しかし、『貧者の息子』読解にあたって助けとなる最小限の知識、フェラウンが生まれて生きた時代と環境を一通り確認しておきたい。^{*2}

ムールード・フェラウンは1913年、フランスのアルジェリアに生まれた、ベルベル系^{*3}のカピリア人である。カピリアのティジ・ヒベルの村で貧しい農民の一家に生まれた。姉二人妹一人弟一人がいた。^{*4}ティジ・ヒベルは人口二千人余りの村である。後に教員となったフェラウンが赴任する数百人単位の村よりは規模が大きい。自伝的小説『貧者の息子』の記述からは、村が高低差のある三つの地区から成っていたとある。山中の傾斜地にあった集落であることがわかる。1913年は後にフェラウンが知り合うことになるアルベール・カミュが生まれた年でもある。すでに述べたが、『ムールード・フェラウン』^{*5}によれば、二人の出会いはカミュが『アルジェ・レピュブリカン』紙の記者としてカピリアを取材したときだったという。フェラウンとカミュの間にはエマニュエル・ロブレス^{*6}を置くことができる。ロブレスとフェラウンは師範学校以来の知り合いであった。カミュが『アルジェ・レピュブリカン』紙に掲載したルポルターージュのシリーズ「カピリアの悲惨」が

*1 José Lenzini, *MOULOUD FERAOUN : un écrivain engagé*, coll. « Solin », Actes Sud, 2013

*2 フェラウンの出生・幼児時代のことはあまりよく分かっていない。フェラウンの生い立ちおよび職業、作家活動歴については、青柳悦子「ムールード・フェラウン『貧者の息子』にみる間主体性」に詳しく整理報告されている。本論考に負うところが大きい。

*3 ベルベルは自称ではないが、北アフリカの地中海沿岸地域の先住民（アラブ以前）の総称として使われてきた、この呼称を使用することにする。

*4 ロブレス宛ての手紙にある。 *Lettres à ses amis*, p.90. 兄弟のうち三人は早世している。姉妹兄弟については、『貧者の息子』の設定と同じである。

*5 Lenzini, *ibid.*, p.111

*6 第Ⅰ章註 56 参照。『貧者の息子』（スイユ版）の刊行にあたってはロブレスの介在が大きい。フェラウン死後の刊行書籍『日記 1955-1962』*Journal 1955-1962*（1962年）、『友人への手紙』*Lettres à ses amis*（1969年）等もロブレスの編集による。1951年3月27日付けのフェラウンのカミュ宛の手紙（*Lettres à ses amis*, p.203）によれば、カミュとの間を取り持ったのはロブレス（ともう一人の友人）であることがわかる。

フェラウンに与えた影響は大きかったようだ（第三章）。かたや、最年少ノーベル文学賞受賞者（当時）にして二十世紀最大の作家の一人、いっぽうは、生涯のほとんどをカビリア地方で過ごし、一教師として仕事に励みながらわずかに三編の完成された小説を残し、アルジェリアとフランス以外ではあまり知られることなく、地味で目立たぬ生涯を悲劇的に閉じたカビリア人作家である。

フェラウンは1925年に、ティジ・ヒベルの村の小学校で初等教育を終える。1928年からはティジ・ウズの高小学校に通った。1931年修了資格獲得、1932年には師範学校に進学する。この師範学校を1935年に卒業し、故郷の小学校の教員となった。同じ年、従妹のデフビア Dehbia と結婚し、七人の子どもをもうけた。若き日のフェラウンはずっとカビリア各地の小さな小学校で教えた。1952年にフォール・ナシオナルの補習過程長 *directeur du cours complémentaire* を務めたのを最後にカビリアを離れたフェラウンは、再び故郷に戻ることはない。1957年にはアルジェ近郊の学校長となり、1960年にはアルジェの社会教育センターの委員 *inspecteur* となる。フェラウンの教育者としてのキャリアはここで途切れる。このときすでに、アルジェリアは独立戦争のさなかにあった。1962年、フェラウンも出席していた同センターの会議中に、アルジェリアの独立に反対する、非合法の秘密武装組織のメンバーがやってくる。フェラウンは同僚5人とともに中庭に連れ出されて射殺された。3月15日、エヴィアン協定の3日前のことであった。同じ年の7月5日、アルジェリアは独立する。⁷フェラウンの教師としての生涯に作家活動が加わるのは『貧者の息子』を書き始めた

1939年のことである。二作目の小説『大地と血』 *La Terre et le Sang* は1953年にフランス、スイユ社から刊行された。1954年にはエッセイ『カビリアの日々』 *Jours de Kabylie*、57年には『大地と血』の続編『上り坂の道』 *Les chemins qui montent* を発表した。完成出版した小説作品は『貧者の息子』『大地と血』『上り坂の道』の三作のみである。小説としてはさらに一作「記念日」という作品が書き上げられていたが、出版には至らなかった。⁸ほかに、書籍の形になったものは、『シ・モハンドの詩』（1960年）⁹、死後出版の『日記1955-1962年』（1962年）¹⁰、『友人への手紙』（1969年）¹¹がある。さらに、これもまた死後出版であるが『記念日』 *L'Anniversaire* には、「記念日」（小説）の冒頭四章のほか、論考、エッセイ、スイユ版『貧者の息子』では削除された最後の三分の一が収められている。¹²本書に採録されたもの以外にも、『貧者の息子』発表以降、フェラウンはアルジェリア、フランスの種々の雑誌に寄稿することになる。

*7 『日記』にはロブレスによる前書きが添えられており、フェラウン暗殺の状況が説明されている。

*8 死後出版の『記念日』に収録されているのは、同名の小説冒頭の四章であるが、これには記念日という表題はつけられていなかったという証言がある。それ以前に書き上げられていた「記念日」は、フェラウンの息子ラシードが編集し『薔薇の街』 *La Cité des roses* (Alger, Yancconn, 2007) と表題を変えて出版された。巻末「書誌」参照。

*9 *Les poèmes de Si-Mohand, essai*, Paris, Minuit, 1960. カビリアの詩人シ・モハンドの詩をラテン・アルファベット表記で書いたカビリア語に、フランス語の対訳をつけたもの。

*10 *Journal 1955-1962*, Paris, Le Seuil, coll. « Méditerranée », 1962

*11 *Lettres à ses amis*, Paris, Le Seuil, coll. « Méditerranée », 1969

*12 *L'Anniversaire*, Paris, Le Seuil, coll. « Méditerranée », 1972 ; rééd. « Points Roman », 1989

最初の作品『貧者の息子』 *Le Fils du pauvre*

本論文では、ムールード・フェラウン『貧者の息子』 *Le Fils du pauvre* の読解を行う。この作品は、作家が小学校の教師をしながら書いたもので、出版までに十年以上を要した。最初に出版されたのは、1950年、フランス、ル・ピュイの出版社カイエ・デュ・ヌーヴェル・ユマニスム Cahiers du Nouvel Humanisme からであり、商業出版ではなく、費用を作家が負担した自費出版という形であったが、これは同年十二月、アルジェ市文学大賞 Le Grand Prix littéraire de la ville d'Alger を受賞している。^{*13}

その後、エマニュエル・ロブレスはこの作品を高く評価し、フランス本国において出版することを考えた。1954年、スイユ社 Éditions du Seuil という名のある出版社からであった。スイユ社からの出版に当たっては、いくつかの変更が行われた。この変更は、フェラウンと同じく作家であっただけでなく編集者でもあったロブレスの意見を反映したものであると考えられている。一番大きな変更は、物語の最後の部分が三分の一ほど削除されたことである。この作品の物語（ストーリー）と構成については、このあと詳しく見るが、大きくは、作家自身（をモデルとしたカピリア人）が生まれ成長するという時間の流れに沿って話が展開していく。最初の CNH 版では、物語の最後は作品完成と同時期（これは、第二次世界大戦終了後。作品の末尾に 1948 [年] と記されている）だが、スイユ版は、物語を主人公が見送りに来た父と別れて単身、アルジェの師範学校の受験に向かうシーンで止め、師範学校合格から学校生活、青年期の「キタ・セクスアリス」、教師としての初期のキャリア、その頃始まったヨーロッパの戦争から戦争終結直後までの記述を全て削除している。作家自身は削除された部分にその後を書き継いで、自伝的小説の後編を計画していたと言われるが、それは、作家の突然の死によって実現されないままに終わった。削除された部分は、作家の死後出版された『記念日』 *L'Anniversaire* (1972年) に、「フルル・メンラッド」の表題で収められている。^{*14} 今日もっとも流通しているのは、当然ながらスイユ版であり、いまだに増刷を重ねて points の文庫版で容易に入手可能である。

本作品は、以上二つの版の他に、アルジェリアの ENAG^{*15} から出版された複数の版が存在している。1992年、カミュやフランス語マグレブ文学の研究者であるクリスティアーヌ・アシュールの序文がついた版、2002年、作家の子息アリ・フェラウン篇による版である。フランス語圏文学^{*16} の研究者であるマルティーン・マティウ=ジョブによれば、アリ・フェラウンによる版は遺された作家の手稿（創作ノート、下書き）からおこされたもので、三つのパートからなり、それぞれはスイユ版の第一部、第二部および『記念日』中の「フルル・メンラッド」とは必ずしも一致していないという。また、CNH 版にある副

*13 ランジニ前掲書の「ひとつの文学流派の誕生」 *Naissance d'une école littéraire* には、『貧者の息子』執筆出版の経緯が書かれている。成功を収めることになる作品だが、最初は出版社がなかなか決まらず、何度も友人たちに相談するなど苦心したことがわかる。

*14 この部分は、削除の後、手が加えられている。

*15 *Entreprise Nationale des Arts Graphiques* 国立印刷工芸社。

*16 マティウ=ジョブはマグレブ及びインド洋地域のフランス語文学研究が専門である。フランス語で書かれる文学は、他に西インド諸島地域の文学がある。

題「メンラッド、カビリアの教師」は、この版にはつけられていない。マティウ=ジョブは、この 2002 年 ENAG 版こそが、フェラウンの創作意図に最も近いものであるとして、『ムールード・フェラウンの『貧者の息子』』 *Le Fils du pauvre de Mouloud Feraoun* において、スイユ版と比較検討しながらの読解を行っている。^{*17}

最初に出版された CNH 版も、最新版も、アルジェリア等の書籍出版・流通事情等により極めて入手困難である。筆者は CNH 版を長い間、英訳でしか知ることができなかった。^{*18} 四つの版 versions の比較検討は大変重要な課題であるが、^{*19} 以上のような事情から、本論ではもっともよく流通した（＝読まれた）版であるスイユ版『貧者の息子』を用い、『記念日』所収の削除部分も本作品に含められるものとして考える。^{*20} 以下、『貧者の息子』 *Le Fils du pauvre* は、スイユ版である。

書き始める

『貧者の息子』は、1939 年に書き始められた。CNH 版の執筆終了は 1948 年（発行 1950 年）であるが、スイユ版発行までには新たに補筆訂正が行われていることから、その発行年である 1954 年までを含めると、この作品には途中で断絶があるが、十有余年がかけられたことになる。執筆に取りかかったとき、ムールード・フェラウンはすでに教職にあり、故郷であるカビリアの小学校で教えていた。

あるとき、書き始めて作家になる。それを促したものを点として特定することはできない。作家を駆動し続けたものとしてただ一つの動機を見いだすことはできないし、また、どれほど書きたくてもついに書けない者のほうが多い。ここで取り上げる『貧者の息子』という作品が、語り始めた主人公が己の力では完成の及ばぬこととして途中で放棄したという設定なのである。物語は、途絶えたままに忘れられた未完の作品が書かれたノートを発見した者によって継続することが決められ、語り手が代わって続けられるのだが、このように、ひとつの物語に見えてそこには重複した物語があり、語り手が複数いるという状況はマグレブのともカビリア的とも言えるのかもしれない。この物語は、最初から、どこか尋常ならざる様子を見せている。

*17 M. Mathieu-Job, *Le Fils du pauvre de Mouloud Feraoun*, I Un texte ou des textes ?

*18 『貧者の息子』諸版の編集・出版の経緯は、「ムールード・フェラウン『貧者の息子』にみる間主体性」（青柳悦子）に詳しい。筆者は CNH 版（米国イリノイ大学所蔵）のコピーを 2014 年に筑波大学教授青柳悦子先生から提供していただいた。謝して記したい。また、ENAG 両版については、実際には確認ができないままである。本論末の書誌、フェラウン著作リストには ENAG 版は記載していない。

*19 マティウ=ジョブによる検討では、スイユ版（普及版）と最新 ENAG 版の違いは決して小さいものではなく、『貧者の息子』の受容・評価にも影響があるものと思われる。なお、マティウ=ジョブの見方では、『貧者の息子』のオリジナル版は CNH 版ではなく、この ENAG 版である。ただし、CNH 版と ENAG 版の異同はほとんどないという（青柳, p.20）。

*20 スイユ版『貧者の息子』はそれ自体として完成した物語であり、『記念日』所収の「フルル・メンラッド」Fouroulou Menrad をそのまま接続させると、作品の一貫性や完成度には欠ける可能性がある。

書くことに必然などない。この猛然たる読書家はどれほどの小説を読んだことだろう。^{*21} この作家が学校で受けた制度的な教育はフランスのものであり、そこで読んだのは、当然ながら、フランスの古典や《正典》や詩であり、フランス語に翻訳された外国文学であった。しかし、それを必ずしも制度が望む通りに読んだのではない。

仲間がみなエルヴィール^{*22}に夢中になっていた年齢のとき、彼〔フルル〕はよい成績をとるためだけに^{*23}「みずうみ」を暗誦した。しかし、その詩には感じやすく繊細な精神の甘やかな憂愁を持たせるべきであったのに、つけんどんな調子でテキストを詠み、先生は彼を叱り、彼は恨みがましい気持ちでいっぱいになって席につくことになるのだった。

A l'âge où ses camarades s'éprenaient d'Elvire, lui, apprenait « Le lac » seulement pour avoir une bonne note. Mais comme il débitait son texte d'un ton hargneux, au lieu d'y mettre comme il se doit la douceur mélancolique d'un cœur sensible et délicat, le professeur le gourmandait et Fouroulou allait s'asseoir plein de rancune. (FP. p.144)

まだ少年のフルルが、いや少年ゆえにだろうか、フランスの十九世紀的な詩的感性に同意できなかったことがわかる。それを、己のものとして感じることはできなかったのである。作家は、冷静で率直である。同年代の学友たちが、美しく無垢な女性のアイコンのほうに夢中になっているかたわらで、すでに老成した精神が像を結んだような《難しい》象徴詩をあえて選ぶ。だが、前世紀の前半に書かれたこの詩をフランス人が求めるように読むことはできない。この「難しい」詩に取り組んで、フランス語でよい成績を取ろうとしてもうまくいかない。フルルがこの詩に挑んでから半世紀以上が経ったいま、日本で読む「みずうみ」に、感じやすく繊細な精神の甘やかな憂愁の表れを見るにも一定の距離は必要である。

第I章で述べたように、作家は、どう「書き始めた」かを証言しているが、その証言がまず語るのは、作家が自己を優れた読み手たたくべく彫琢し続けたということであり、フランス語での書き物について一定の距離をとることを忘れず、また、彼らがわれわれについて書いているなら、彼らがわれわれに向けるまなざしがいかなるものであるかを見極めようとするまなざしを、こちらから向けるということであろう。『貧者の息子』の冒頭部分、物語は、私（たち）は知っている、とまず、宣言してから始まるのである。

カビリア地方の最奥地にまでも足を踏み入れようとする観光客は、心からそう思っただけか、感興をくれた土地への義理堅い気持ちからかはわからないが、詩情あふれる風景を褒め、そこに暮らす者たちの暮らしぶりに親愛の情を示して惜しまない。

*21 フェラウンは師範学校時代からずっと教師となっても猛然たる読書家だった。Lenzini, *op.cit.*, p.91, 103.

*22 エルヴィールは、ラマルティエヌの恋人ジュリー・シャルルの詩のなかでの名称。

*23 アルフォンス・ド・ラマルティエヌ Alphonse Marie Louis de Prat de Lamartine (1790-1869年)の『瞑想詩集』*Méditations poétiques*(1820)中の作品「みずうみ」*Le Lac*だと思われる。エルヴィールはこの詩集中で与えられた名である。

そういうものだろう。同じような感興、同じような詩情はどこにでも見いだせるのだから、人はその度に親愛の気持ちを示す。だから、どこか別の土地に見いだしたものを、カピリアにも見たとしても何の不思議があらう。

観光客のみなさんには大変申し訳ないが、あなたがたは、単なる観光客として通り過ぎて行くだけだから、感興も詩情も見つけられる。うちに帰ればあなたがたの夢も終わり、敷居には、当たり前^くの日常があなたがたを待っている。

私たちカピリア人は、人々が私たちの郷を褒めるのはもつともだ、と思っている。不作法を見せまいとして、私たちに美辞麗句をくれるのさえも好ましい。いっぽうで、私たちに^くはたやすく想像できる。私たちの村の眺めがもつとも好意的な訪問者にさえ残す、何やら物足りない印象というものを。

Le touriste qui ose pénétrer au cœur de la Kabylie admire par conviction ou par devoir des sites qu'il trouve merveilleux, des paysages qui lui semblent pleins de poésie et éprouve toujours une indulgente sympathie pour les mœurs des habitants.

On peut le croire sans difficultés, du moment qu'il retrouve n'importe où les mêmes merveilles, la même poésie et qu'il éprouve chaque fois la même sympathie. Il n'y a aucune raison pour qu'on ne voie pas en Kabylie ce qu'on voit également un peu partout.

Mille pardons à tous les touristes. C'est parce que vous passez en touristes que vous découvrez ces merveilles et cette poésie. Votre rêve se termine à votre retour chez vous et la banalité vous attend sur le seuil.

Nous, Kabyles, nous comprenons qu'on loue notre pays. Nous aimons même qu'on nous cache sa vulgarité sous des qualificatifs flatteurs. Cependant nous imaginons très bien l'impression insignifiante que laisse sur le visiteur le plus complaisant la vue de nos pauvres villages. (FP, p.12)

物語の始まりでこの四つの段落に出会う読者は、話者が「カピリアの奥深くにある、私たちの村についてあなたがた観光客 *touriste* があなたがたのやり方で知っていることは、私はすでに承知している」が、「それと同じやり方で、私が、私たちについて語るつもりはない」とあらかじめ宣言していることを知る。誰でも生まれ育った土地には格別の詩情を感じるまいと、あなたがただってわかっているはずだ、家に帰ればそこには平々凡々たる日常があり、夢は終わるのだからと。この短い表明が意味するところは、フェラウンが

『日記』に記した「タールで舗装した道の上からこちらを眺める人たち」の姿に通じる。^{*24}

*24 *Journal*, p.46-7. 「タールを塗った道から、(村の人々を) ツーリストはいつも好奇心から面白がって見ているだけで、人間的な温かみはなかった。そこから、彼(ツーリスト)はなかに入ってこようとはしなかった。 *que le touriste a toujours regardée avec une curiosité amusée mais sans chaleur humaine, qu'il a regardée de la route goudronnée et où il n'a pas cherché à entrer.*」。タールを塗った(舗装した)道は村の外にある。英語の *tar* (*goudron*) には汚名を着せる、(名声などを)汚す、の意味があるが、ツーリストが上に立ってこちらを見ている、タールで覆われてしまった土地はそういった意味合いを思わせる。

もう少し先には、『シェルタリング・スカイ』^{*25}の無謀なアメリカ人旅行者がいる。彼らは上陸直後に、すぐに帰る気のない旅行者 *traveller* であって観光客 *touriste* ではない、と自ら主張する。そして問われる。そんなに長く、ここ（北アフリカ）で何をするつもりなのかと。彼らは、サイードが言うように、オリエントで生きようとしたのかもしれない。^{*26}しかし、この夢想家夫婦の旅 *travel* は無残な結果に終わる。どんな奥地に踏み込もうとも、旅は旅のままである。そこで生きることはそれほど容易ではない。

教師/作家が、とにもかくにも作品を書き上げ、何とか出版しようと奔走した様子は、ランジニの評伝に詳しい。作家は、それまでにフランス人によって数多く書かれた民族誌 的な著作物とは違う形でカピリアを示そうとしたが、それがなかなか理解されなかったために出版にいたらず、最終的には自費という形で出版せざるを得なかったのである。

『貧者の息子』——物語と構造

『貧者の息子』は、作家の自伝的小説であり、物語の大きな流れは、作家がモデルであると考えられるカピリア人フルル・メンラッド^{*27}が、カピリア地方の山中の小さな村ティジに生まれて成長し、村の小学校からティジ・ウズ^{*28}の町のコレージュ（中等学校・師範 学校予備学校）を経て、首都アルジェの師範学校受験に向かうところまでを描いている。スイヌ版からは削除され、作家死後に『記念日』に収録された最後の三分の一では、アルジェの師範学校合格・入学、学校生活から教師としてのキャリアが始まり、その後、独仏戦争勃発からヨーロッパでの戦争が終わるまでが書かれ（1944年 10月）、それから時間を おいて書かれた短いエピローグが末尾に置かれている（末尾に 1948年）。

この物語は二部構成である。前半が【家族】、後半が【長男】と題される。前半、後半とも、物語は番号のついた断片を並べるという方法で語られる。断片はトピック別で長さは一定していないが、ほぼ時系列に沿って並べられている。各部は始まりに、物語の話者 とは別の人物が語る「前置き」が置かれる。前置きには表題はついていない。次頁に本書 の全体を表に整理して示した。

以下、読解に先立って、構成と内容を一通り確認しておきたい。

i. **エピグラフ** 前半、【家族】の扉に記されたエピグラフはチェーホフの戯曲『ワーニャ伯 父さん』からの引用である。これは、ソーニャという女性が伯父であるワーニャに語りか ける部分（台詞）で、劇中では最後のシーンである。

前半、後半とも扉に採用されたエピグラフは、それぞれの内容にふさわしい、書かれた ことのエッセンスあるいは要約的な内容をもっている（第 V 章参照）。ただし、後半の扉 のミシュレからの引用は、CNH 版ではルソーが採用されており、勉学に励むフルル自身

*25 Paul Bowles, *The Sheltering Sky*, John Lehman, 1949. 日本語訳は、『シェルタリング・スカイ』（新潮文庫）大久保康雄訳、1991年。

*26 E・サイード『オリエンタリズム』のフランス文学（ことに、フローベール、ネルヴァル）を取り上げた章参照。

*27 カピリア人の名前は通常、姓・名メンラッド・フルルの順である。

*28 ティジ県では、ベジャイア Bejaia に次いで大きな町。

『貧者の息子』 *Le fils du pauvre* 構成

FAMILLE 家族 (一人称)	LE FILS AÎNÉ 長男 (三人称)	<i>Fouroulou Menrad</i> BOUZARÉA ブザレア (三人称)	LA GUERRE 戦争 (三人称)
扉 エビ°グラフ(チェーフ)	扉 エビ°グラフ(ミシュレ)	師範学校時代	1
1 前置き	前置き(番号なし)	教師時代 エビ°グラフ (J・M・ド・ヘレディ ア)	2
2	1		3
3	2		4 (1944 年)
4	3		エビ°ローグ (1948 年) エビ°グラフ(カミュ)
5	4		
6	5		
7	6		
8			
9			
10			
11			

初版との対応：師範学校入学以降も番号をつけた断片としてつながる。ブザレアの師範学校時代がVII（～亡くなった校長先生の思い出）およびVIII。教師時代がIX。「戦争」は第三部の扱いである。また、長男 LE FILS AÎNÉ の扉エビグラフはルソー（『告白』）から採られたものである。慣例では【家族】を第I部、【長男】を第II部、【フルル・メンラッド】を第III部としてきた。

の姿に重ねられる、教育そして学びはかくあるべし、といった内容である。スイユ版でミシュレの『私の青年時代』*Ma jeunesse* からの引用に代えられたことは、ミシュレ自身もまさに「貧者の息子」であったことを示す内容が、苦学する【長男】のエピグラフとしてふさわしいからであろう。さらにこれは、この物語の構成や内容を考える上での手がかりのひとつとなる。

ii. **前書き** 扉を返すとイタリック体で記されたのが、前半【家族】では1と番号の付された前置きであり、後半【長男】では番号のない、前半よりはやや短い前置きである。この二つの前置きは物語のフレームとして、この物語が書かれ世に出ることになった事情を知らせてくれるが、いっぽうでは、物語の話者や主人公、物語の成立について、ついに解かれない謎のようなものを残す。^{*29}

前半の前書きによると、このメンラッド・フルルという人物の自伝的な物語（の前半部分【家族】）は、彼が教師を務めていたカピリアの小さな小学校の教室で、教卓の引き出しに入れたまま忘れられていたノートに書かれていたという。このノートは創作のためだけに使われていたのではなく、日記を兼ねていたようだ（ということが前書きから推測される）。そもそも、メンラッドは教壇に立つようになって以来、「日記に打ち明け話をするように」、それは学徒が使うような罫線のあるノートに書かれていて、創作もまた、そのノートに書かれたのである。学生時代より読書を重ね、いつしか「自分でもこのようなもの（自画像を描く）を書いてみたい」と思い始めた若い教師は、1939年の復活祭の休日中に作業に取りかかる。書くことは困難の連続だった。結局、物語は完成せず、この企ては自分の力を超えたものだとして、メンラッドは書くのを止めてしまう。つまり、前半【家族】を書き終わったところで、この物語は中断され、ノートは教卓の引き出しのなかに入れられたままいつしか忘れられ、物語は日の目をみないままだったのである。

ところが、何者かがこのノートを発見して、そこに小説が書かれていることを知り、これを発表することにする。前書きを書いた者は、ノートと、そこに書かれていた未完成の作品（と日記）の発見者であると考えられる。前書きの内容から推測すると、この発見者はメンラッドを知る者である。それは、後半【長男】の前書きからも明らかである。メンラッドは小説に着手する前、何らかの試験 *examen* 勉強に取り組んでいたようだが、これは放棄される。これを放棄してから、小説を書くことに取り組んだのである。

ノートに書かれていた【家族】の物語が終わり、ここで書き手自身の物語 *sa propre histoire* は中断されることになる。再度、ノートを発見した（と思われる）人物が表れる。そして、この物語を書き継ぐ者が現れたと言い、それはフルル・メンラッドについて何一つ知らぬことのない彼の誠実な友人であるとする。

iii. **語り手** 後半の物語の書き手は、前半の前置きにおけるノートの発見者であり、物語をノートから抽出して発表した本人だと思われる。ところが、後半の前置きの多少とも奇妙な書きぶりは（「この書き物の存在を知って読者にそれを知らせた語り手は、その後、この話を最後まで仕上げようと考えた。Le narrateur qui en a eu connaissance et qui le propose au lecteur prend, de ce fait, l'engagement d'aller jusqu'au bout.」）、ノートの発見者と後半の前

*29 【長男】の前書きは CNH 版ではフレームではなく、番号 1 として 2 以降の断片と同じ扱いである。

書きの書き手、【長男】の語り手は別人物であるかのようにも思わせる。この物語中の語り手は、①【家族】の前書きの語り手（≡ノートの見発者）②【家族】の語り手（＝主人公メンラッド・フルル）、③【長男】の前書きの語り手、④【長男】の語り手であるが、物語の主人公メンラッド・フルル以外は名前はもちろん、誰であるかも明らかにはされていない。こうして、この物語は最後まで、語り手が何人いるのか確定できないままである。フェラウンの評伝/作品論である『ムールード・フェラウン』*Mouloud Feraoun* を書いたジャック・グレイズ Jack Gleyze は、メンラッド・フルルのノートの見発者であり、二つの前書きの書き手であり、【長男】の語り手でもあるのは、作家ムールード・フェラウンその人であるとする。^{*30}また、エルバズ R. Elbaz およびマティウ＝ジョブ M. Mathieu-Job による『ムールード・フェラウン』*Mouloud Feraoun* における『貧者の息子』論は、ノートの見発者が【家族】の本文部分に何の改変も加えずに発表したかどうかは不明のままであるとし、日記に書かれていたことに基づいて改変が行われた可能性を推測し、【長男】についても、物語の構成にあたって語り手は日記の部分に書かれていたことを参照したはずだとしている。^{*31}

iv. 人称 人称の使用の点では、自分自身の話 *sa propre histoire* は当然ながら一人称が使われ、その人物をよく知る人が書いた【長男】は三人称だが、どちらも複数の書き手の手が入っている可能性を排除できないために、物語も人物も始めから重層的になっている。このように、『貧者の息子』には、確定できない多くの語り手が存在するが、前・後半それぞれの扉にあるエピグラフの物語への働きに注目すると、語り手はより多くなるようである。エピグラフについては、最終章で改めて取り上げることとしたい。

v. 時制 回想によって過去の出来事を想起するときには単純過去が使われるが、一度想起して事の顛末を詳しく語るときには、それを目前に呼び出して展開させるように現在時制が使われる。ほかに、民族誌的なことを語る部分ではフィールドノートの記述のような現在形が使われる。

vi. 民族誌的記述 村のたたずまい、村人の日常生活、人物、事件など、スケッチやトピックとしての語りのなかに、カピリアの民俗についての簡潔な説明を巧みに入り込ませている。民族誌的記述は物語の一部となっている。

物語のあらすじ

前半【家族】 前半は、主人公が生まれて育った村へのアプローチから始まる。とりわけ自民族誌的な

内容である。11の断片のうち、最初の3までは共同体の説明に当てられている。主人公の誕生はようやく4になってからである。

*30 Jack Gleyze, *Mouloud Feraoun. 3. La trilogie romanesque—Le Fils du pauvre*, p.35

*31 Elbaz, Mathieu-Job, *Mouloud Feraoun : ou l'émergence d'une littérature*, p.17-8

扉：エピグラフ（全文）

年をとるまでずっと *Nous travaillerons pour les autres* 働きましようね、人のために。そして、
jusqu'à notre vieillesse et quand やがてその時が来たら、素直に死んで行きましようね。 *notre heure*
viendra, nous mourrons あの世へ行ったらどんなに私たちが苦しかったか、 *sans murmure et nous*
dirons dans どんなに涙を流したか、 *l'autre monde que nous avons souffert* どんなにつらく長い年月を送
って来たか、 *fert, que nous avons pleuré, que* それを残らず申し上げましようね。 *nous avons vécu de*
longues années すると神さまは、まあ気の毒に、 *d'amertume, et Dieu aura pitié de*
と思ったださる…… *nous ...*
A・チェーホフ TCHEHOV.

1 前置き 本作品『貧者の息子』が書かれ発表された経緯が書かれている。誰かはわからない人物

が、フルル・メンラッド Fouroulou Menrad という小学校教師のノート *cahier d'écolier* を発見する。このノートはメンラッドが教えていた学校の教室にあった教卓の引き出しに入れられたまま忘れられたらしい。この部分の書き手は、ノートを発見した人物と見られる。ノートに書かれていたのは、メンラッドが新任教師だったところからの日記と、（おそらく 未完成の）小説が書かれていた。それは『貧者の息子』前半【家族】の部分である。

ノートには、主人公が読み、模倣したいと考えた作家として、モンテーニュやルソー、ドーデ、ディケンズの名が上がっていたようだ。こういったことは、前書きの話者がノートから読み取って書いている。また、ロンサールの名もあり、プレイアード派の詩人・詩人についても学んだことが記されている。しかし、メンラッド自身が書こうとしたのは自分自身の物語である。物語は 1939 年の復活祭の休みに着手されるが、語義や言い回しに苦勞し、最終的には「己の力を越えた企み」を放棄した（いつかは不明）。こういった、小説執筆をめぐる事情はノートの「日記」の部分に書かれていたと推測される。

前書きの書き手は、自分がメンラッド・フルルの物語を公にすることを、何者も逆らえぬ神のご意思としている。こういった人間の意志を超えたものの働きや、「運命にゆだねる」態度は、あからさまではないが、物語中にときおり現れる。

最後の文は「フルル・メンラッド、君の話を知ろう」と、メンラッドに話しかける形をとる。

【以下、全文】メンラッドは、山地カピリア地方の慎ましい教師である。彼は《盲目の者たち》にまじって生活している。しかし、

自らを王のごとくに思いはしない。それは、まず民主主義を信じるゆえであり、自分は天才ではないという確信ゆえでもある。

己についてこのように厳しい考えに至るまでには、長い歳月が必要だった。だからといって、彼の能力が減じたわけではない。むしろその逆である。

勉学を終えて後、教壇に立った初めの頃から、彼は日記に打ち明け話をするようになる。ここに一冊がある。「私

自身に戻って、私の置かれている状況を私自身の価値に応じて考えてみると、私は厳しい結論を出さざるを得ない。私は傷ついた。方法を書くことが、何よりも危険の大きい障害だ。しかし、私は結論をそこで終わらせるつもりはない！ 私は、己のうちに強い地の力を感じる。古い本や昔のノートをたずさえていけば、もっと先へと進めそうだ。「もう、決定はなされた。きっと、うまくいくに違いない。論サールやプレイアド派について初めに学んだことを反芻するにつれ、私の意志はより強固になり、これから立ち向かう試験に取り組みやすくなる。」メンラッドは野心に満ちていた。彼は己の野心を嘲笑した。不幸なことに彼にはわかっていたのだ。驚のごとく滑空してやろうと思えば思うほど、鴨のように、泥水の中をもがき進むほかなくなるということが。

そうして、彼は、己が生まれたと同じような村で、教室が一つしかない学校で、兄弟のような農民たちに立ち交じり、彼らとともに生きる苦しみに耐え、決して動じぬ魂をもち、彼らと同じく断固たる運命論、すなわち揺るがぬ確信をもって、彼が言うところのムハンマドの天国へと迎え入れられる日を待ちながら、一介の教師に甘んじて生きることにしたのである。

この態度はあらゆる点で賞賛に価するもので、懐疑論的な態度とは違う。哀れなメンラッドに哲学する力はない。この態度は、自分は弱者であるという、きわめて明確な認識の結果だった。試験を断念してから、彼は書き始めた。自分には書く力があると信じた。だがそれは、詩でもなく、哲学的論考でもなく、もちろん冒険小説でもなかった。彼には想像力というものがなかったのだから。しかし、彼はモンテーニュとルソーを読んでいて、ドーデも、ディケンズも（翻訳で）読んだ。彼はこの偉大な作家たちのように、己自身の物語を語ることを、ただ単純に願った。私は、あなたがたに、彼は慎ましいと言った。このような天才たちに自らを比するような考えかたとは遠く、彼は自画像をえがく、というばかげた考えだけを、彼らから借りようとしていたのである。筋が通っており、欠けるところがなく、読みうるものが書ければ、満足だと考えた。己の人生を、子どもたちと孫たちには知ってもらってもよいと思った。だめならば、印刷できなくても仕方がない。彼は原稿をそのままにしておいた。

1939年の4月、復活祭の休みの間に、メンラッドは作業に取りかかった。幸福なる時！ 適切でない語や不確かな表現、意味のよくつかめない形容詞の前に立ち足はだかる、数え切れない障害が、言い回し一つ一つに、段落ごとにあつた。彼は、分厚い学生ノートを埋め尽くす前に、おのが力を超えた企てをあきらめる。後悔や憤りの気持ちはなかった。

教室に、真っ黒になった小さな机がある。二つある引き出しの一方に、今日まで、その傑作は入れられたままであった。勤務日程表や下調べ用のカードの間に、親鳥にも兄弟鳥たちにも見捨てられ忘れられた、スズロムシクイの五個目の卵のように。

だが、神よ、何人も己の運命を支配することなどできませんまい！ もし天上で、メンラッド・フルルの物語は人々に知られる、と定められているなら、あなたのお決めになったことに、何者が背けましょう？

左の引き出しから、学生ノートを取り出して開いてみよう。フルル・メンラッドよ、私たちは、お前の話を聞こう。

Menrad, modeste instituteur du bled kabyle, vit « au milieu des aveugles ». Mais il ne veut pas se considérer comme roi.

D'abord, il est pour la Démocratie ; ensuite, il a la ferme conviction qu'il n'est pas un génie.

Pour aboutir à une opinion aussi désastreuse de lui-même, il lui a fallu plusieurs années. Cela ne diminue pas son mérite. Au contraire.

Dès ses premiers mois dans l'enseignement, après ses études, il confie à son journal -- car il en a un : « Lorsque je rentre en moi-même et que je considère ma situation en fonction de ma valeur, je conclus amèrement : je suis lésé, le manque de moyens est un obstacle bien perfide. Ma conclusion ne s'arrête pas là pourtant ! Puisque je me sens une intelligence si vive, avec les vieux livres et les vieux cahiers, rien ne dit que je n'irai pas loin... » « C'est fait, la décision est prise, la réussite est certaine. A mesure que je savoure une étude élémentaire sur Ronsard et la pléiade, ma décision s'affermir, l'examen à

affronter devient plus accessible. »

Menrad est ambitieux. Il se moquait de son ambition. Il comprenait, le malheureux, que s'il cherchait trop à planer comme un aigle, il ne ferait que patauger davantage comme un canard.

Il se résigna donc à être simplement instituteur, dans un village comme celui qui l'avait vu naître, dans une école à une classe, au milieu de tous les paysans ses frères, supportant avec eux les tourments de l'existence, l'âme parfaitement calme et attendant, comme eux, avec un fatalisme indifférent et une certitude absolue – il le dit – le jour où il entrera au paradis de Mahomet.

Cette attitude, en tout point digne d'éloges, n'est pas celle d'un sceptique. Le pauvre Menrad est incapable de philosopher. Elle résulte du sentiment très net qu'il a de sa faiblesse. Après avoir renoncé aux examens, il a voulu écrire. Il a cru pouvoir écrire. Oh ! ce n'est ni de la poésie, ni une étude psychologique, ni même un roman d'aventures puisqu'il n'a pas d'imagination. Mais il a lu Montaigne et Rousseau, il a lu Daudet et Dickens (dans une traduction). Il voulait tout simplement, comme ces grands hommes, raconter sa propre histoire. Je vous disais qu'il était modeste ! Loin de sa pensée de se comparer à ses génies ; il comptait seulement leur emprunter l'idée, « la sottise idée » de se peindre. Il considérait que s'il réussissait à faire quelque chose de cohérent, de complet, de lisible, il serait satisfait. Il croyait que sa vie valait la peine d'être connue, tout au moins de ses enfants et de ses petits-enfants. A la rigueur, il n'avait pas besoin de se faire imprimer. Il laisserait un manuscrit.

Il s'est mis au travail en 1939, au mois d'avril, pendant les vacances de Pâques. Heureux temps !

Devant les innombrables obstacles qui se dressent à chaque tournant de phrase, à chaque fin de paragraphe, devant les mots impropres, les tournures douteuses et les adjectifs insaisissables, il abandonne une entreprise au-dessus de ses forces, après avoir rempli un gros cahier d'écolier. Il abandonne sans esprit de retour, sans colère.

Dans sa classe, il y a un modeste bureau tout noir. Dans l'un des deux tiroirs, le chef-d'œuvre avorté gît aujourd'hui, oublié, entre un cahier de roulement et des fiches de préparation comme cinquième œuf de la fauvette que l'oiseau et ses petits laissent dédaigneusement dans le nid inutile.

Nul n'est maître de sa destinée, ô Dieu clément ! S'il est décidé là-haut que l'histoire de Menrad Fouroulou sera connue de tous, qui peut enfreindre ta loi ?

Tirons du tiroir de gauche le cahier d'écolier. Ouvrons-le. Fouroulou Menrad, nous t'écoutons. (FP, p.9-11)

2 ティジの村について

2 および 3 は、村>大家族共同体>道>公共の場所（重要性の高い順に広場、モスク、村はずれのモール・カフェ）>村の来歴と村民の暮らしぶり>住居、についての解説的、登場人物紹介的な記述である。

先に示したように、冒頭の四つの段落で、語り手が観光客（カビリアの外からやってきた人たち）のまなざしを見返すことをやや皮肉っぽく宣言する。態度表明を明確にしてから語りを始めるのである。主人公メンラッド・フルルが生まれ育った、ティジの村の紹介は外から人を村に導き入れるように始まる。話者（一人称、主人公のフルル・メンラッド）は、わが故郷はどこにでもあるような山村であって特別な場所ではないとする。

集落を貫く道（道の両側に集落が形成されている）は、樹木の幹と、そのいくつかの枝のイメージで示される。村人の家は相互に寄りかかるようにして道を取り囲んで建っている。尾根に沿う大通りが樹幹であり、そこから枝のように小路が分かれて生じている。村内に舗装道路はない。道が交わる場所には、曲がり角というものはなく、道幅が広がっ

ていて、そこが村人にとって最も重要な公的空間である広場である。広場は男たちにとっては大人も子どもも、労働以外の時間を過ごす場所である。

3 メンラッド家の人々 主人公フルルの家族メンラッド家（メズズ一族のムッサという親族のなかの一家）を

三代にわたって紹介する（次頁の家系図を参照）。両親とその兄弟姉妹、祖父母の肖像・人となりを述べながら、カビリアの大家族一般における人間関係、婚姻のあり方、男女それぞれの役割、価値観などが了解されていく記述である。

メンラッドの家は下の地区の北の端にあった。メンラッドの名は通称であると述べられる（第Ⅲ章参照）。メンラッド家は、夫シャバンヌに先立たれた主人公の祖母タサディットが事実上の家長であるが、これは例外的である。

フルルの母ファトマは三姉妹の長女で、この家族もムッサー族である。姉妹は未婚のまま両親を失う。母（とその姉妹）が父アフメドから財産相続にあたってどのような扱いを受けたかが詳しく語られ、カビリアの女性は家政においても（実際に、家内の労働を担うのは女性であるが）、財産相続および結婚に関しても男性に従属的な位置しか与えられていないことがわかる。すでにやもめであったアフメドは、実の娘たち（女）により多くの財産をムッサー族の男たちに残した。アフメドが恐れる不名誉とは、財産を受け継いだ娘たちが別の一族と結婚してその財産を渡してしまうことだった。フルルは、祖父の娘たちに対する態度に批判的である。カビリアにおける名誉と、理にかなわないだけでなく粗暴さを称揚さえる男らしさの考え方について、また、男たちの女に対する後見・庇護が内実を伴わない冷淡なものであることについて、主人公はネガティブな感情を持ち続ける。

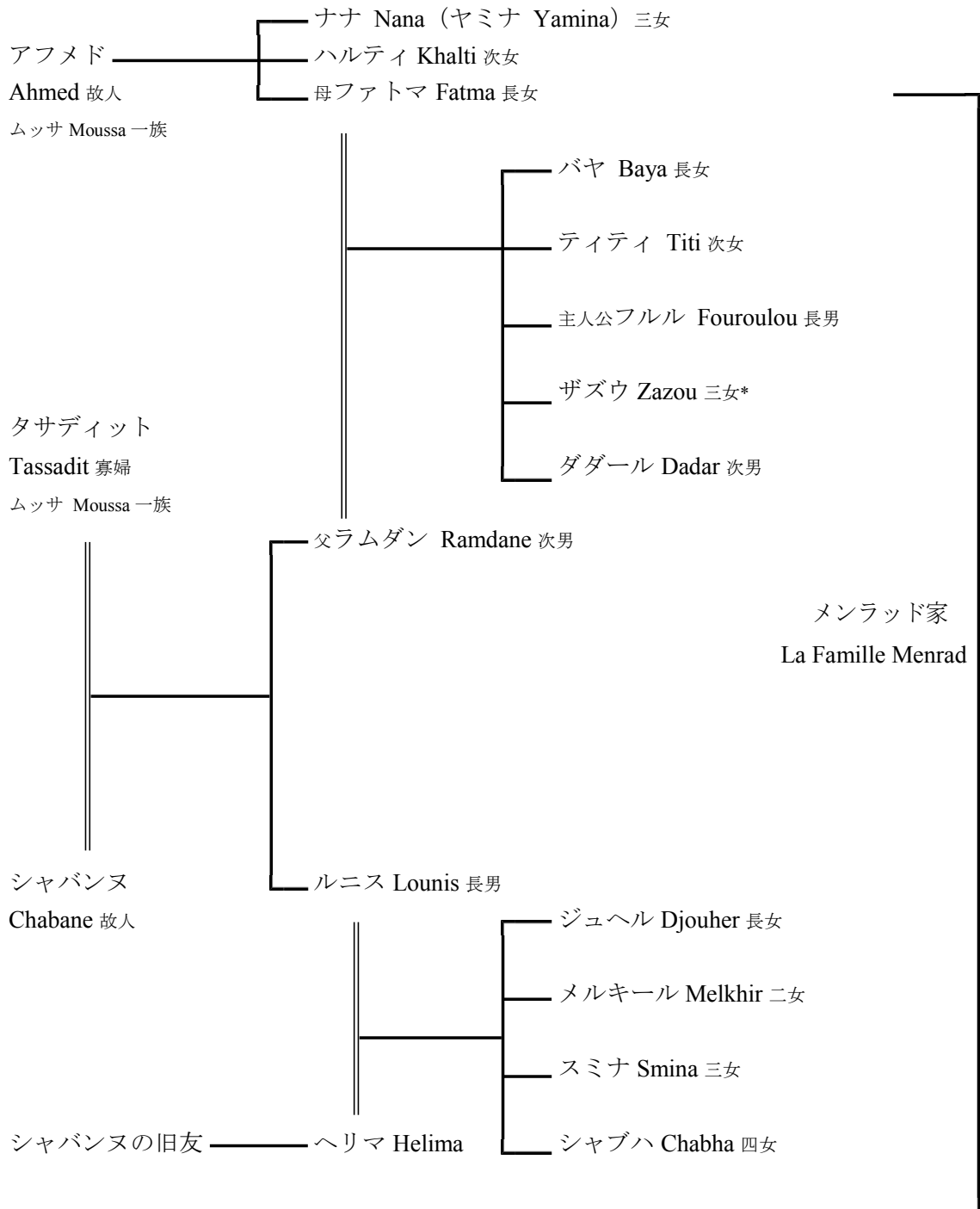
4 フルル・メンラッドの誕生

私（メンラッド・フルル）が誕生する（1912年）。一家の中で、初めて無事に誕生した男の子である。フルルが生まれたときルニスには50歳を超えていて、父ラムダンも40歳代であった。一家にとってフルルがいかに待ち望まれた男子であったかがわかる。祖母が強く主張して、フルル Fouroulou という、やや変わった名がつけられる。その意味は隠す *cache* であり、「[子どもが] 自分の二本の脚でわが家の敷居をまたぐことができるまでは、善意の目であれ悪意の目であれ、何者もその姿を見ることができない *Ce qui signifie que personne au monde ne pourra me voir, de son œil bon ou mauvais, jusqu'au jour où je franchirai moi-même, sur mes deux pieds, de notre maison.*」（FP, p.27）という意味が込められた。フルルという名づけは、【家族】の語り手も結局隠れている（誰であるかわからない）ことを意味している。

ここでは、三歳のときと思われる最初の記憶も語られる。家の中庭で、従姉のシャブハを前にして、伏せた瓶の上に座しているところである。フードつきのガンドゥラを着たフルルは歩くのはおぼつかないのに、口は達者であったと自ら回想している。

記憶についての話者の考え方は、他所でもときどき表明される。記憶は当てにならない、と言い、回想では事の起こった時が常に不明瞭だが、これは【家族】で顕著である。【長

【主人公メンラッド・フルルの家族】



*ザズウについての記述はごくわずかだが、そこから推して、女の子で、フルルの後に生まれたと思われる。

(Jack Gleyze, *Mouloud Feraoun*, p.42-43 の家系図を翻訳引用。一部、訂正)

男】では主人公の成長は学校教育でより高い段階に進むことなので、出来事の時期は記憶に頼らなくてもはっきりしているからである。

5 親族（カビリア）の男たち カビリアの暮らしと言語 の、男たちの領分が描かれる。

フルル・メンラッドの幼い頃に起こった暴力事件のエピソードが語られる。これは断片 4 に関連するもので、カビリアの男の価値が力であり、それを無分別に行使することが引き起こした事件として、批判的に書き留められる。とりわけフルルの伯父ルニスの、激しやすく思慮に欠け、マッチョを至上の価値とする人となり（カビリアの男の典型の一つ）が際立つ。

エピソードの展開に絡めて、カビリアの民俗が詳細に示される書きぶりである。事件の成り行きや、伝統・慣習が語られる部分は現在時制が使用される。事件の成り行きは、記憶をたどって想起し、語り手（フルル・メンラッド）は事件が起きたときの年齢に戻って、いま目前に展開していることを語っているかのようなようである。この部分は第IV章で詳しく読み解く。

6 親族（カビリア）の女たち カビリアの暮らしと言語 の、女たちの領分が描かれる。

幼い頃の主人公の、最大の愛着の対象であり、また主人公をこの上なく慈しんだ女性たち、母（長女）の二人の妹、ハルティ（次女）とナナ（三女）について語られる。5 同様、物語に織り込まれるようにして、カビリアの女性たちが行う手仕事の手順が詳しく示され、同時に、カビリアの日々の暮らしに想像力に富んだ豊かな口承文学が生きていることがわかる語りである。男たち（5）と女たち（6）の領分の違いが鮮やかである。ここで描かれる女たちの生業とことばについては、第IV章で詳しく読み解く。

ハルティ khalti とナナ nana は『アルジェリアにおけるフランス語』辞典 *Le français en Algérie* によれば、いずれもアラビア語由来である。いっぽう『ベルベル文化ガイド』*Le Guide de la culture berbère* では³³（ここではハルティ xalt i およびナンナ nanna と表記）、アラビア語由来であるのはハルティのみである。ハルティは親族関係のなかでは母方の伯母・叔母を意味する語・呼称であり、また、親しい間柄で年上の女性を呼ぶのにも使用される。日本語で言えば「おばちゃん」「おばさん」である。ナナは、やはり年長の女性に対する呼称だが、おばちゃんではなく「ねえちゃん」「おねえちゃん」「ねえさん」の意味合いで使われる。親族間でなくとも、年長の女性を呼ぶときに名前の前につける。物語のなかで、村の若者アマールがフルルの母にナナ・ファトゥマ（ファトゥマ姉さん）と呼びかけている（F P, p.119. 第III章参照）。『貧者の息子』のCNH版巻末には用語解説が付されているが、³⁴その解説によれば、未婚の女性はナナと呼びかけられるのを喜ばないとある。しかし、物語のなかでフルルがナナ（ねえちゃん）と呼ぶのは、この人も実際はハルティ（おばちゃん）なのだから、姉のように若い人として示されていることになる。ハルティという語を使うのは、一般に、ナナと呼ばれる人よりもっと年上の人に対してである。親族あるいは近しい間柄での年

*32 *Le français en Algérie*, p.379, 439

*33 *Le Guide de la culture berbère*, p.198

*34 *Le fils du pauvre : Menrad, Instituteur Kabyle*, Les Cahiers du Nouvel Humanisme の巻末 note. この解説は、作家自身によるものかは不明。

長の女性に対するこういった呼称の使い方は日本においてもほぼ同様である。物語において、主人公にとって、この二つの呼称はその名よりも大切であり、その呼称で呼ばれる二人の女性もかけがえのない存在であった。ナナの名はヤミナであるが、ヤミナと示されるのは他人が呼ぶ場合と、ナナが亡くなってこの世の存在ではなくなった時である。そのシーンでフルルは「無。それこそが死である。親しき者の死、もはやどこにも、その存在を私たちに結びつけるものはない。亡骸^{なきがら}よりも、いつもの場所に掛けてあるバーヌースのほう³⁵が、それを身につけていた者を思い出させる」と述べ、「善女ヤミナ」の葬列について書く。名は刻まれて死と結びつく。もはや、ナナと呼びかけることはできないのである。ハルティの名は物語のなかで遂に明かされないままである。ハルティの生死は確認できないままに終わり、その存在は死へと刻まれることは永遠にないともとれる。

7 学校へ行く フルルにとって非常に重要な出来事である、学校教育（フランス統治下の学校制度）へ

の入門である。学校入学の日の記憶は鮮明である。気ままな幼年時代の終わりとしての修学は、食欲を失わせるような憂鬱なものと捉えられている。

主人公は最初の学年を翌年も繰り返すことになり、学校教育の初めから知的に秀でていたわけではないことが強調される。フルルの学徒としての将来を決めたのは、留年した年にたまたま父が先生とフルルの学業について話したことが、父からフルルへ非難として伝えられたことにあるとしている。フルルにとって、この非難は先生と父、両者ともが、自分の学業に強い関心をもっている証であると受け止められた、としている。

フルル・メンラッド、ひいてはムールード・フェラウンにとっての原住民教師のイメージ、彼にとっての理想の教師像ともいべき教師は、最初に小学校で出会った二人のカピリア人教師にあることが示される。

先生は二人いた。二人ともカピリア人だった。ひとりのはがっしりとして背が低く、頬ははふっくらとしていた。笑いを含んだ目はいささかも怖いという感じを与えなかった。もうひとり、やせて顔色が悪く、長い鼻と厚い唇のせいでむっつりとした印象を与えたが、最初の人と同じで感じがよかった。この人のほうが若くて、第二学年を受け持っていた。二人とも、フランス人の洋服を着ていたが、その上に薄地の輝くように白いバーヌースを羽織っていた。この服装こそ、私にとって長い間、優雅で贅沢で最高に趣味のよいものだった。教師として、彼らは現在にいたるまで、私にとってあらいがたく二重のイメージを成している。私自身がそのイメージのもとにある。私は常に変わらず原住民教師だ。責任者でもあり同時にその補佐役でもあるのだ。

Nous avons deux maîtres, kabyles tous les deux : l'un gros, court, joufflu, avec de petits yeux rieurs qui n'inspiraient aucune crainte ; l'autre mince, pâle, un peu taciturne avec son nez long et ses grosses lèvres, mais aussi sympathique que le premier. C'était le plus jeune et il s'occupait de la deuxième classe. Ils portaient tous deux des costumes français sous un burnous fin et éclatant de blancheur. Cette tenue m'a paru, pendant longtemps, avoir atteint l'extrême limite du goût, de l'élégance et du luxe. Quant aux maîtres eux-mêmes, ils continuent jusqu'à

*35 第IV章参照。

présent, pour moi, sans que je puisse m'en empêcher, la double image sous laquelle je me représente invariablement l'instituteur indigène, le directeur et son adjoint.」(FP, p.58)

カピリア語は書く言語ではなかったために、ムールード・フェラウンには二つの書記言語間で引き裂かれる痛み、という問題はないとされる。しかし、知識ある人/書く人と、持たざる人(貧者)/書かない人の間に生じる裂け目、溝については十分意識的であった。引用からは自己の内にあるそのような二重化が読み取れるが、またそのような二重化をそのままに受け入れているようでもあり、フランス語で書く原住民作家のありようもまた同様のイメージ化のもとにあるとも読める。

8 祖母タサディットの死と大家族の崩壊 フルルが学校に入学した年、事実上の家長、祖母のタサディットが他界する。大きな家

族をまとめあげる力を持つ者がいなくなり、大家族は崩壊する。大方のカピリアの農民と同じく、シャバンヌの家はもともと財産家ではないので、この分割によって、兄弟はかえって経済的に苦しくなる。持たざる農民たちがどのようにして生活を立てていたかが、父の働きぶりを通して詳しく語られる。同時に、日々の暮らしでカピリア人の食事がいかにつましいものであるかが語られる。

フルルの父ラムダンは大変働き者の農民であった。持たざる者としてのカピリアの農民の例にもれず、農作業のないシーズンには雇われて力仕事に携わった。そういった仕事の一つが紹介される。父が村の他の男たちとともに、学校近くで搾油施設をつくる工事現場で働いていたとき、フルルは友人たちと昼時に工事現場を訪れる。工事現場で出される食事は豪華なものだった。食事をたかるような子どもらのふるまいには父親たちは厳しい叱責でのぞんだが、「私の父」の教育はそうではなかった。その行動がよくないことであるのを態度で知らせながらも、出された料理で持ち帰ることのできるものをできるだけ持ってこようとフルルに約束する……。

この項では、出来事のなかにカピリアの「食」が語られる。カピリアの人々にとって、「食」を確保してなんとか生き延びることの厳しさと、いっぽう、そういった条件下での生き方の矜持が示される。

9 伯父ルニスの家の人たち

財産分割後、ラムダン-フルル一家のライバルとなった伯父ルニス一家の人たちについて述べられている。元々は、同じシャバンヌの大家族であったが、もはやルニスの一家ははっきりと別の家族である。妻のヘリマ、娘たち(ジュヘル、メルキール、スミナ、シャブハ)の人となりや振る舞いは誇張、戯画化されていて、辛辣な描写が続く。いずれも、フルル、ラムダン一家に対して冷淡である以上に敵意をもっている。唯一、末娘で一番醜いシャブハ(母にも姉妹にもまったく愛されていない)だけがフルルに愛情を抱くが、早世する。フルルが語る、自分の最初の記憶にもシャブハが出てくる。

貧しい農民の働き方のひとつとして、土地持ちからオリーブ畑を借りて世話をし、収穫から一定量のオリーブ油を得る方法が詳しく紹介される。

10 ナナが赤ん坊を死産して亡くなる(第IV章参照)

父方の親族に対比して、母方の親族、叔母たちは6で語られたように、フルルにとってかけがえのない存在である。夫オマールが再度渡仏して後、みごもっていたナナは出産す

るが、子は死産でナナも亡くなる。

11 ハルティが発狂し行方不明になる ナナの死の直後から、ハルティは凝然としたまま何事にも反応しなくなる。習わしによ

る、女たちだけの墓地への葬列にも加わらない。葬儀の終わったその夜遅くなって、ハルティは狂気の発作を起こす。素晴らしい語り手であったハルティがことばを一切発しなくなる。ほかに身寄りのないハルティは、姉ファトマの婚家であるフルルの一家に引き取られるが、狂気の人を抱えた一家の苦労は大変なもので、フルル自身も、愛してやまなかった叔母の存在を疎んじるような気持ちを持つ。一家がその生活に倦み疲れ果てた頃、ハルティはある日突然出奔し行方不明になる。その夜、天候が急変。大雨のために氾濫した川に流されたことが心配されるが、ハルティの亡骸はついに見つからず終いとなった。

ハルティの存在をもてあましていた一家は、両親兄弟姉妹のすべてを失って悲しみに暮れる母を除いては、安堵の気持ちを持つ。しかし、フルルを始め姉妹たちも、無条件の優しい愛情を注いでくれた人たちを失い、ここに、大きな家族は完全になくなったことになる。

前半【家族】の二つの最終断片は、主人公の子ども時代の終わりを画す。親族のなかの、両親以外で自分を慈しんでくれる存在を失うという経験が子ども時代の終わりを告げる、というのは、伝記・自伝のひとつの型^{パターン}でもある。^{*36} 二人の叔母の死とともに、物語の自伝的（自民族的）autobiographique 語りは終わる。

6で語られるように、主人公が物語を創作するようになる大きな動機づけは二人の叔母、ことにハルティの存在である。主人公自身による親密な私語りの終了が、ナナの死産と、ハルティの永遠の行方不明に示される。二人の「死」と、自伝的語りの終了は、この物語の大きなポイントである。

後半【長男】

扉：エピグラフ（全文）

今日では、私の両親が矜持をもって *Aujourd'hui cette indigence, fière-
肃々と堪え忍んだこの貧困は, ment, noblement supportée par les 私の誇
りである。しかしあの時、私は miens fait ma gloire. Alors, elle me 恥ずか
しさを感じ、精一杯、semblait une honte et je la cachais その感情を隠そ
うとしていたのだ。de mon mieux. Terrible respect* なんと恐ろしい虚栄
心だろう！ *humain !*

*36 井上靖『しろばんば』、室生犀星『幼年時代』もこの形を踏襲している。いずれにせよ、(大) 家族(制度) が生きていればこそ成立する話である。

番号のない前書き フルル・メンラッドのノートを発見し、【家族】の前書きを書いたとおぼしき人物が再

度現れ、読者に対して、後半【長男】が書かれた事情を説明する。語り手が替わり、語りの人称はこれ以降、三人称になる。ただし、「みなさんにお読みいただけのことと思う。以上が、メンラッド・フルルの罫線付きの分厚いノートにあった断片である。この書き物の存在を知って読者にそれを知らせた語り手は、そうしたのだから、この話を最後まで仕上げようと考えた。Tel est le fragment de confession que chacun peut lire dans le gros cahier rayé de Menrad Fouroulou. Le narrateur qui en a eu connaissance et qui le propose au lecteur prend, de ce fait, l'engagement d'aller jusqu'au bout.」との文からは、ノートの発見者が【長男】の前書きの書き手でもあり得るが、同一人物がフルルの友人であって【長男】の語り手であるともあるという断定はできない。

前書きの後半部分は主人公フルルに向けて語られている。ここから読み取れるのは、後半の物語が主人公の死後に語られたのか、という疑問である。【家族】の前書きを受けるような内容として、後半で展開されるフルルのキャリアを抽象的ではあるが先取りして述べ、実際には極めて特別な原住民エリートであるにも関わらず、多くの凡庸な人生と変わらないと言い、実は教訓というのはそういった人々からもたらされるのであるとしている。

この前書き préface の内容は、むしろ【家族】の後書き postface のような役割を果たしている。後書きであると同時に前書きを兼ねる。物語を区切るとともに繋ぐ役割を果たしている。

【以下、全文】

みなさんにお読み頂けたことと思う。以上が、メンラッド・フルルの罫線付きの分厚いノートにあった断片である。この書き物の存在を知って読者にそれを知らせた語り手は、その後、この話を最後まで仕上げようと考えた。慎重さからか遠慮からか、フルルが沈黙したこと、そして、彼のことなら何一つ知らぬことはなく、好奇心旺盛でおしゃべりな兄弟であり、いささかも悪意はなく、誰もが微笑みを向け、責めるようなことなど決してなく、フルルを裏切ることのない、ひとりの友人にペンを渡したことを、再度繰り返して言う必要があるだろうか。

フルルよ、おまえについて全てが語られるとき、おまえはもう生きることをやめていよう。人生とは、何とも短いものなのだから。おまえの子どもたち、そのまた子どもたちは、おまえの苦しみを知らうか？ そうとも、彼らが知るのはいいことだ。しかしまた、彼らにも彼らの苦しみがあり、愛するものがあり、抗するものがある。彼らに与えるにふさわしいのはどんな教訓だろう。「教訓だって？ 教訓などありはしない」。おまえはつぶやく。どこかあきらめたような、おまえの穏やかな笑顔が目につく。語り手が口をつぐむことを、おまえは望んでいるのだろう。いや、その者のするがままにさせよう。彼は、幻想をたくさん抱いているわけではなく、おまえをとて

*37 【家族】における一人称の語りは、語ることの内容・材料・内容 matière を語り手フルル・メンラッドの記憶に頼っている。語ることは語る者の身体の内にある。それは、ハルティの物語と同じである。【長男】および、その続き「フルル・メンラッド」では語りは記憶ではなく記録（日記、他のテキスト：エピソード・引用、記録一般）に依ることが多い。matière は人間の外側にある。

も愛しているのだよ。そして、おまえの人生、ほかの多くの者たちと同じような人生を語るのだ。それとともに、フルルよ、おまえが野心家であったことや、身を立てることができたゆえに、それができなかった他人を多少とも軽蔑したい気持ちをもっていったこと、そういうお前だけの事情も語るだろう。

フルル、お前は間違っているのではないか。というのは、おまえは、ひとりの人間にすぎず、教訓というものを与えるのはそういった人々なのだから。

Tel est le fragment de confession que chacun peut lire dans le gros cahier rayé de Menrad Fouroulou. Le narrateur qui en a eu connaissance et qui le propose au lecteur prend, de ce fait, l'engagement d'aller jusqu'au bout. Faut-il répéter que Fouroulou se tait par modestie ou par pudeur, qu'il passe la plume à un ami qui ne le trahira pas mais qui n'ingore rien de son histoire, un frère curieux et bavard, sans un brin de méchanceté, à qui l'on pardonne en souriant ?

Lorsque tout sera dit sur ton compte, Fouroulou, tu auras peut-être cessé de vivre car la vie n'est pas longue, décidément. Tes enfants, les enfants de tes enfants, sauront-ils que tu as souffert ? Oui, il serait bon qu'ils le sachent, mais ils auront à souffrir, eux aussi, à aimer, à lutter. Quelle leçon conviendrait-il de leur donner ? « Une leçon ? Il n'y a pas de leçon », murmures-tu. Je vois ton sourire doux et résigné. Tu voudrais que le narrateur se taise. Non, laisse-le faire. Il n'a pas beaucoup d'illusions mais il t'aime bien. Il racontera ta vie qui ressemble à des milliers d'autres vies avec, tout de même, ceci de particulier que tu es ambitieux, Fouroulou, que tu as pu t'élever et que tu serais tenté de mépriser un peu les autres, ceux qui ne l'ont pas pu.

Tu aurais tort, Fouroulou, car tu n'es qu'un cas particulier et la leçon, ce sont ces gens-là qui la donnent. (FP, p.105)

1 弟ダダールの誕生と父の病気（～ 4 については、第Ⅲ章の読解を参照）

【長男】の最初に置かれたこの断片は、主人公は次世代の家長として、それに伴う責任を負うことになったことが示される。父ラムダンの病と、それによって陥った困窮から逃れるためのフランスへの出稼ぎは、主人公にカピリアの若い家長としての自覚を促すが、物語はそれとともに学徒としての学びの成果、初段階のエクリチュール獲得が成されることを語る。

主人公のフランスの学校教育における知的な成長は、病に対する、マラブー頼みの迷信的な解釈と対処法についての批判的な態度にも示される。【家族】の断片 11 でも同様に、狂気に対する昔ながらの迷信的な考えかたを批判的に見る態度が描かれる。しかし、ジン

（魔神）の存在を恐れる感情を否定し去ることはできないことも書かれている。迷信や、この世ならぬ存在に対して、理屈では否定的な態度を取るが、共同体の人々の迷信的な言動に取り巻かれ、ハルティの物語にどっぷり浸かって成長した少年の感情はそう簡単に割り切れるものではない。

2 父の出発とフルルの初等教育修了 父の出稼ぎをきっかけに、フルルはフランス語で手紙を読み・書くことを完璧に身につ

ける。父の出稼ぎの経過と手紙のエクリチュールの獲得は並行して語られる。フルルは試験に合格して、初等教育修了の有資格者となる。フルルが初めて読み書くことの力を学校以外の場で試されることが描かれた、この断片

は重要である。ここでは、手紙の読み書きができる能力と初等教育修了の免状が等価のものとして示され、エクリチュール獲得へのフルルの最初の段階が成功裏に完了したことが高揚感とともに示される。

3 フルルが勉学継続を決め、そのとき、父負傷の報がある

フルルは奨学金をもらって進学するために勉強を続ける。父はいないが送金は順調で、成長した姉たちや母が畑仕事をして家を支える。勉強は順調で試験の出来も上々だが、その折り、フランスで働く父が大怪我をしたという報が入る。

4 父ラムダンが帰国し、フルルはコレッジ進学を決める ラムダンは大怪我をしたが外科治療を受けて命拾いし、労災によって高額の保険金と終身年金、一年の休暇を得て帰国する。帰国した父は、奨学金試験の結果を待つフルルと彼の身の振り方について話し合う。父

は息子に多くのカピリア人同様、農民として生きることを勧めるが、息子は奨学金を得て勉強を続けることに望みをかけている。父にとっては息子の初等教育の成功は、出稼ぎでフランスに行く際には無学な自分よりはるかに容易になった、という理解の範囲である。最終的に奨学金が受けられることになり、もはや父も息子の意思に反対しない。少年はコレッジからさらに師範学校に進学し、教師になろうと考える。

フルルと共同体の間に明白な距離が生じ始める。学校を続けるフルルは他の少年たちと、日々の仕事や、その合間にある楽しみを分かち合うことができない。学業での成果を実感するフルルは進学して教師になるというビジョンを持つ。いっぽう、父は息子の進学に同意するものの、それは奨学金が与えられるからであり、家を離れたほうがよい暮らしができるから、という限りにおいてである。父は、恵まれた環境で一人前になった息子が村に帰って自分と一緒に一家を支えていくことを期待する。

5 進学のためフルルは家を離れティジ・ウズの町に住む コレッジはティジ・ウズにあるため、フルルは初めて家族と離れる。家族はフルルと

の別れを悲しんだが、フルル自身はこれから待ち受ける生活の方に心を奪われている。同郷出身でフルルと同じように貧しい家庭の出身であるアジュールという少年と知り合い、彼の紹介でプロテスタント教会の宿舎に寄宿するという幸運に恵まれる。衣食住すべてにおいて、フルルは初めて都市生活というものを身をもって知ることになる。

6 ランベールの修道院とコレッジでの生活 修道院に寄宿しながら道を隔てたコレッジで勉強を続けた五年間は、勤勉なる持たざ

る者の、小さな楽園のような生活として描かれる。フルルには双子のようによく似たアジュールという友がいつも連れ立っていた。勉強に励んでよい成績を取るようになると、当初学友たちに抱いた劣等感もなくなっていく。

フルルとアジュールは修道院の寄宿生であり、ランベールの率直な人柄には敬意を抱くが、プロテスタントの教えや、ボーイスカウトの活動に対しては尊重する気持ちを持ちながらも冷静に距離を置いた。彼らの関心はコレッジでの勉強にしかなかった。寝る間も惜しんで学び、もっぱらジャガイモを食べて奨学金を節約し父親たちに現金を渡すほどであった。

息子が都市部での生活に慣れるにしたがって、故郷の家族の生活ぶりも少しずつ変化した。現金をたくさん使うようになり、借金をすることにもなり、そういった暮らしぶりに慣れていった。

7 コレッジを修了し、師範学校の入試に臨む フルルは勉強のことだけを考えていたため、故郷の家族の暮らしぶりの変化や両親の苦勞についてはあまり気にかけていなかった。コレッジの二年目に手違いで奨学金が更新

されないという躓きはあったが、それもどうにか回復される。初版では、フルルの二人の姉バヤとティティの結婚生活についての記述がある。それは、メンラッドの家族がいかに経済的に苦しい状態にあったかの説明に含まれる話で、町のコレージュで学んでいたフルルと故郷との乖離ぶりがわかる。

貧しい農民の子であるフルルは、運命の気まぐれに翻弄される。その度、村人は彼とその父をあざ笑った。しかし、コレージュを修了する頃には、両親も郷里の村人たちも勉学の価値を認め、彼を一人前に扱うようになった。しかし、フルルはコレージュの修了証が職業には結びつかないことを知っていた。勉学で身を立てることについては、ティジの村では何者にも助言を仰げず孤独であった。

フルルは、遂に師範学校の入試に向かうことになる。年齢制限の上限に来ていたため、最初で最後のチャンスである。試験に臨むフルルの切実さが強調される。単身アルジェへと下りてゆく息子を父ラムダンが見送る。家族はみな、上で待っている、ということばとともに。スイユ版はここで終わる。この、父が息子を送る、最後のシーンは初版にはないもので、スイユ版の結末のシーンとして付け加えられたものである。父と息子は、車の通る道を並んで語らいながら歩き、父を乗せてくれる車が通るのを待つ。互いに、息子がこれから向かうのは父や家族が理解できる場所ではないことをよくわかっている。同じ方向へと歩きながらも、父は上の方へ、山へ帰り、息子は下の方へ、アルジェへと向かう。中等教育を受けたティジ・ウズの町（ここもカピリアのうち）までは父はときどき訪れた。しかし、アルジェに向かうのはフルルひとりである。このシーンは、物語中繰り返し現れる、価値の高低の逆転を父と子の相反するヴァーティカルな動きで示している。青年の出発は、ひとまずの大きく決定的な亀裂として、しかしながら、家族はみな青年を愛し、何があっても「上で」待っていることが、物語の末尾に記される。

作品が日の目をみること自体が神のご意思である、と最初に示されているが、フルル・メンラッドの人生を決定するのは本人の意志よりも運命ではないか、と思われることが多い。知的に優れ努力を惜しまぬフルルでも、奨学金が得られなかったら、教育を受けることはかなわなかった。出稼ぎ先での父の負傷が別の結果を生んでいたら、唯一の師範学校受験の機会に失敗していたら……。貧者は常に、運命に己の生の道程を委ねざるを得ない。

「フルル・メンラッド」^{*38}

【ブザレア】^{*39}この部分は大変短く、ブザレアの表題のみであり、番号をつけた断片を並べるやり方は

とられていない。フルルの人生のうちで特別な意味合いを持つ幸福な時期とされながらも、詳細はなく、一気に書かれたという印象である。師範学校入学試験の合格発表から師範学校を修了し、故郷のカビリアの小学校に赴任して教師として働くフルルが語られる。

一週間にわたる厳しい選抜試験の結果、フルルは師範学校に合格する。その喜びはそれまで経験したことのないほど大きなものであった。師範学校での生活は、指導する者にもともに学ぶ者にも恵まれた特別な日々であった。フルルは分け隔てない自由の気風と、共和国を支える思想が実現された特別な空間を実感しそれを享受するが、いっぽうでは、フランス人や、都市部出身の敬虔なムスリム・アラブ人の学友との違いは明確な一線としてはっきりと意識され、カビリア人でありカビリアの教師となる身にはカビリア人の暮らしと考えかたを尊重すべきであるということが肝に銘じられている。しかし、フランスの文芸を学んでそこで描かれる理想の女性像や、カビリアの青年男女の関係の結び方とは大いに異なる恋愛のありかたを知ったフルルは妻を愛し尊重する。その態度は、息子にとつていの一歩であろうとする父母との間に齟齬を生じさせることになる。^{*40}働くようになったフルルの肩に、両親はじめ大家族すべての生活がのしかかることになる。

教師になってからの生活の記述が始まる前には、J=M・ヘレディアの詩からの引用が掲げられている。

(ヘレディア全文)

己の限りある運命を受け入れ、そこで、ガリユスは *C'est là que satisfait de son destin borné*, 生き止める。そこは、かつて彼が生まれた場所。 *Gallus finit de vivre où jadis il est né* : そうとも、いまやおまえは知っている。ガリユスは *Va, tu sais maintenant que Gallus est* 賢人なりと。 *un sage*.

J=M・ヘレディア J.M. de Hérédia^{*41}

*38 『記念日』 *L'Anniversaire* 所収 (p.105-141)。この表題が第二の自伝的作品の表題として作家自身が考えたものであるかは不明。おそらく、『記念日』に収録するに当たって、『貧者の息子』の続きであることを示すためにつけられたと思われる(エルバズ、マティウ=ジョブ『ムールード・フェラウン』p.12)。最初の頁にある脚注には、以下のように書かれている。「この3つのテキストは、『貧者の息子』の初版には含まれていたが、ムールード・フェラウンはこれを削除し、のちに二番目の自伝的作品に組み入れることを計画していた。1956年7月17日の手紙(『友人への手紙』p.127)にこの計画のことが書かれている。『『貧者の息子』の続きを完成させたい。人生が長ければ……』。フェラウンは、そのために、ここに掲載したものの一部に手を入れ始めていた。」この手紙の宛先はエマニュエル・ロブレスである。

*39 アルジェの師範学校は、ブザレア Bouzaréa にあった。

*40 ランジニによると、フェラウンは妻デフビアに教育を施し、自分が読んだ本の話などもよくしていたという。

Lenzini, *op.cit.*, p.123.

*41 ヘレディア José-Maria de Hérédia (1842-1905)。作家、詩人。キューバ生まれのスペイン人、1893年フランス人となる。引用は詩集『装飾文様』 *Les Trophées* の「ローマと蛮族」 *Rome et les Barbares* 篇「ウィッラ」 *Villula* より。

【戦争】^{*42}

1 戦争が勃発する 戦争が勃発したとき、フルルはカビリアの住民三百人の小さな村で教えている。その村は 溪谷の奥まったところにある、山肌から突き出た台地の上に位置していた。カビリア人は 戦争が始まったことに誰一人驚かず、むしろ変わり映えのない日々戦争の到来を期待していたような様子さえうかがわれた。戦いと変化への期待が一緒くたになった奇妙な高揚感が人々を包み、おしゃべりが止まない。平和主義者で戦争には断固反対のフルルにもその気分は影響する。こういった状況で、フルルは自分が無意味でわけのわからない存在であると感じる。小さな村で戦地に送られた者もほとんどいないので、開戦からしばらくは暮らしに何の変化もない。フルルは徴用されることを恐れるが、それは免れる。

ここには、フルルの日記からの直接の引用がある。作品の後半を書いた人物がフルル・メンラッドの日記を参照していたことが明白に示される部分である。

2 フランスがドイツに敗北する フランスがドイツに敗北したことから、カビリアの農民たちの間にも、宗主国への不信

や、先行きに対する不安が拡がる。フルル・メンラッドは、教師としての自分の倫理的な責任といった抽象的なことを考えているが、農民たちのフランス評価は現実的で辛辣である。彼らは、出稼ぎ先として自分たちに生活の糧を与えてくれたフランスが終わってしまったと考える。

3 カビリアの過酷な窮乏ぶりが語られる フランスでの仕事を失った人たちがカビリアに帰り、兵士たちも帰国したため、カビリ

アは急に人が多くなる。物資が不足し、人々の生活は窮乏する。カビリアが生き延びるために是非とも必要な大麦も配給制になり、当然ながら配給量はどうも足りないので、あらゆる不正や闇市が横行する。フルル・メンラッドの一家は、家長が毎月俸給を得る職業についているので、なんとか遣り繰りしている。しかし、農民たちは過酷な窮乏に苦しみ、タンクトという土地の話が詳細に語られる。人々はまともな衣服もなく、飢餓に苦しむ。チフスも蔓延する。カビリアの人々は何としても生き延びようとするが、飢餓や伝染病の蔓延に対してどこか超然としている。ヴィシー政府の闇市批判に対して、フルルは強い怒りを感じる。フランス語が読めないという事情もあって、カビリアの人々は本国政府の態度には距離をとり、伝染病対策をせっついたりはしない。当然与えられるべきものが差し出されれば受け取るという態度である。フランス人への過大な期待はなく、何ごとも神の意志まかせである。

4 戦争が終了する 英米軍がアルジェリアにやってくる、メンラッドは解放の熱狂を感じる。しかし、現実

的なカビリアの人々がまず期待したのはクスクスとガンドゥラだった。物資はそうやすや

*42 このあたりから作品は回想ではなく、日々起こることを日記のように書いていくことになる。日付と、執筆の時期が一致している。

すともたらされないが、人々は最悪の時はすでに過ぎ、あとは回復するだけであると考え る。戦争によって被った災禍をどこか遠い場所にいる人々と比較して、それほど酷い目には遭わな かったと思う。農民たちはすでに、また出稼ぎの地に戻ることを考え始める。フ ランスに対す る疑いの気持ちや、自己を振り返る気持ちとは無縁である。

なお、「戦争」の記述の末尾には、1944年十月との日付がある。

【エピローグ】^{*43}

(カミュ全文)

人間の内には、賞賛すべきもののほうが Il y a dans les hommes plus de choses

軽蔑すべきものよりも多くある。à admirer que de choses à mépriser.

A・カミュ A.Camus^{*44}

停戦の調印があり戦争が終わった。エピローグには出来事はそれ以外になく、戦争の時 代を 通して人々の振るまい、生き方を見た上での、フルル・メンラッドの、人間について のやや抽 象的な考察が述べられるのみである。人間は複雑であり、しかし、そう見えて単 純なものだ、 と述べられる。わが身の教師という職業に照らして、わが子のみならず子ど もはみな自分の子 であると述べ、自分に見合ったささやかな善をなして生きていこう、と いう、謙虚な諦念のよ うな決意が述べられる。^{*45}

エピローグの末尾の日付は1948年である。

『貧者の息子』はどう読まれたか——受容と評価^{*46}

『貧者の息子』は、最初の版ですでに、アルジェ市文学大賞の受賞によって小説作品と して の成功を収めたと考えられる。それについては、フェラウンも自認していた。^{*47}

そして、とりわけ本作が新生アルジェリアのフランス語の教科書として採用されたこと が、 多くのアルジェリア人に読まれ、知られることになった。物語の経過には確かに、勤 勉な少年 が学業に励んで成功者になる、という教養小説的な筋道が通っているため、基本

*43 エピローグではあるが、「続く……」という印象の終わりである。

*44 『ペスト』 *La Peste* (1947) からの引用である。

*45 マティウ=ジョブは、こういった記述を「モラリスト的」とする。Mthieu-Job, *Le Fils du pauvre de Mouloud Feraoun*, p.143 ~

*46 『貧者の息子』の受容、読みについては、青柳悦子「ムールード・フェラウン『貧者の息子』にみる間主体性」に詳しい。

*47 『アルジェリアの努力』 *L'Effort algérien* 紙 (週刊)。1953年2月27日付。本紙の主宰者モーリス・モノワイエ Maurice Monnoyer によるインタビュー。

的に抜粋を掲載する学校教科書への採用には、大変都合のよい内容も多いからである。^{*48} 新生アルジェリアの国民の多くがフルル・メンラッドと同じく貧しい持たざる者であったことも、主人公への共感を呼ぶことになったであろう。また、この作品の書きぶり、作家にとっては熟慮と試行錯誤の末に選び取った文の形であっても、結果として、シンプルで明快なフランス語は学童・生徒にとってのテキストとしてふさわしかったと考えられる。また、フェラウン作品の読みやすさ *lisibilité* とは、アルジェリア人にとってはある意味で当然のことである。内容には、アルジェリア（カビリア）のことが書かれているのだから。では、文学作品、小説としての評価はどうか。それは、ごく大雑把に要約すれば、すでに第 I 章でふれたように、マグレブのフランス語文学とりわけ初期のそれについて言われる二つの特徴、「民族誌的」で「（まず）自伝」的な作品であるということに尽きる。^{*49} さらにその意味でネガティブな評価としては、悲惨主義、貧困賛美 *miséabiliste* の作品であるというもの、また、同化主義的であるというものがある。もっとも、こういった評価のほとんどが、書かれたカビリアという土地の言語的特殊性、作品の複雑な構造、人称の交代と語りの複数性、現在と過去を場面に応じて使い分ける動詞の時制の問題、主人公の成長物語に絡めて丹念に織り込まれるエクリチュール獲得の物語の巧みな構成等には注意を払っていない。よく知られたことが書かれているために、こういった重要なことがあまり注目されないままだった。教科書という形で多くの人が子どもの頃から読み親しんだこと、

カビリアの民族誌的記述のわかりやすい表層のみが認識されて、作家が凝らした多くの創作的意図を読み落としたことなどによって、『貧者の息子』の読みは単純化されてしまったようである。

クリスティアーン・アシュール *Christianne Achour* はフェラウンのテキストについて詳細な研究論文を書いた。この論文は三章構成で、第 I 章フェラウンのテキストが独立後のアルジェリアでフランス語の教科書にどう使われたかを実際に使われた教科書に詳細に当たって分析している。アルジェリア人であるアシュール自身も学校でフェラウンを読んだことだろう。第 II 章では、フェラウンに先行する 1930 ~ 40 年代に書かれたフランス語の民族誌、旅行記等（植民者、行政官などによって書かれたもの）を取り上げ、フェラウンのテキストは、そういったテキスト群に「対して」書かれたものであるという見方を提示している。第 III 章は結論でもあって、そこには前二章を踏まえて、フェラウンのテキスト

*48 クリスティアーン・アシュール *C. Achour* は『ムールード・フェラウン —— 対位法に置かれた声 ——』*Mouloud Feraoun : une voix en contrepoint* の第 I 章「作品国有化の戦略」*Stratégies pour la nationalisation d'une œuvre* で、初等、中等教育などにおいてフェラウンの作品が教科書にどう抜粋使用されたか詳しく分析している。『貧者の息子』からは、カビリアの民俗および「勤勉な学徒」としての主人公のあり方を描いた部分が多く採用されている。

*49 *Elbaz, Mathieu-Job, Mouloud Feraoun, Relire Mouloud Feraoun* 参照。

の位置を定めようとする結論が示されている。^{*50} アシュールの記述はあちらとこちらの間に明確な線を引いて区別し、あちらに同化・同調しているか、あるいは対抗しているか（アシュールが使うのは対位法 *contrepoint* という語である。論文の表題にもこの語は使われている。）を断じるという読み方である。こういった、テキスト、言説の位置を定めようとする読み方はほかにもある。^{*51} アルジェリアの教科書等の詳細な分析は、制度的な教育におけるフェラウンの受容のありかたを知るものとして貴重である。先に述べたように、『貧者の息子』には学校教育にふさわしい内容が多く、フェラウンが採用した文の書き方は、学校で習うフランス語、規範的なフランス語であるという指摘は注目に値する。また、先行する時代のテキスト群が示されることによってフェラウンがカビリアをめぐるどのような言説に取り巻かれていたかがわかる。

しかし、本論は、フェラウンのテキストの位置の図示あるいはマッピングを行うことをめざさない。フェラウンは『アルジェリアの努力』紙のインタビューに答えて「私はまさにうってつけの立場にいます」^{*52}と述べている。こうした言い表し方を座標軸上に理解して、フェラウン作品のエクリチュール（/ディスクール）の位置を一定の線分のこちら側かあちら側に定めるといふことの目的化、イメージ化と単純化に行き着いてはならないと考える。フェラウンが行った「翻訳」は常に更新されて変化のなかにある。それとともにチョウの指摘した「民族誌的不平等」は、常に本来の（先立つ）フランス語領分が侵犯的に押し寄せてきて、「あなたはこちらに近づいている。あなたはこちらに同化している。あなたはこちらを模倣している」と主張し、作家はそれを知った上で常にその侵犯に 대응しようとするのである。その応え方は単純な否定でも対抗でもあり得ない。そこに線分を引くこのようなやり方はできない。

いっぽう、アシュールの論考に遅れること15年以上、ロベール・エルバズとマルティエヌ・マティウ＝ジョブとの共著である「創始的複雑さ——『貧者の息子』（『ムールード・フェラウン——ある文学の誕生』）」^{*53}および、マティウ＝ジョブの単著『ムールード・フ

*50 この結論部分では第Ⅱ章に取り上げた出版物に連なる最後の最重要なテキストとしてカミュの「カビリアの悲惨」を取り上げている。結論最終行にはカミュのテキストとフェラウンの関係が以下のように述べられる。——[フェラウンのテキストは]カビリアについての諸テキストとの関係で対位法的である。そこには、カミュが打ち立てた告発の行為と、ほかの懐柔的人種差別的な言説のどちらにも接する最適の位置の可能性を見ることができる。植民地の知識人の世界で自己を認めさせ、頭角を現すための新しい道でもある。《区別する》ことではなく、《近づく》ことを模索することである。 *En contrepoint par rapport aux textes sur la Kabylie : on pourrait y voir dans le meilleur des cas une position mitoyenne entre l'acte d'accusation que dresse Camus et le discours lénifiant et raciste des autres : nouvelle voie pour s'imposer dans le champ intellectuel colonial : chercher « ce qui rapproche » plutôt que « ce qui distingue » ; Achour, op., cit., p.79*

*51 『アフリカにおける自伝と人生譚』 *Autobiographies et récits de vie en Afrique*, p.79-94 では、ナジェット・ハッダ Naget Khadda（「ムールード・フェラウンの『貧者の息子』における自伝と同化的自己の構造化」 *Autobiographie et structuration du sujet acculturé dans Le Fils du pauvre de Mouloud Feraoun*）とモーリス・ル・ルージック Maurice Le Rouzic（「ムールード・フェラウン『貧者の息子』の自伝的次元について」 *A propos de la dimension autobiographique du Fils du pauvre de Mouloud Feraoun*）がやはり二項対立の固定的な見方で『貧者の息子』を論じている。

*52 第Ⅰ章の註45参照。

*53 Robert Elbaz, Martine Mathieu-Job, *Mouloud Feraoun : ou l'émergence d'une littérature*, Karthala, 2001

ェラウンの『貧者の息子』——ある古典の創出』⁵⁴は、新たに（驚くべきことに、作品 発表から半世紀を経て）この作品の「複雑さ」に注目し、それを読み解こうとした研究である。

「複雑さ」は多岐にわたり、作品の具体的な部分を例に挙げて指摘されている。それぞれ前置きのテキストを持つ【家族】と【長男】は語り手が異なり、一人称が三人称に替わる複雑な構成である。一人称は主人公メンラッド・フルルだが三人称の語り手は誰であるのか分からないままである。それだけではない。語り手は二人だが、一人称にしても三人称にしてもテキストはリニアな語りのエクリチュールの形を取らず、民族誌、オラ リテ、エッセイ、日記といった異質なものが紛れ込んでいるために、語り手はもっと多いかのように思われる。また、【家族】本編の冒頭に旅行者のまなざしについての四つのパラグラフを置き、その後、村についての記述を続けるというやりかたで、主人公フルル・メンラッドの誕生はようやく4章になってから、という物語の遅延、そして、主人公が隠れている（主人公の名フルルは「隠す」の意味）ために、また、二つの前書きの語り手、

【長男】の語り手が明かされないために生じる主人公の存在の希薄化。物語のなかの出来事は非時間的であるのに対して、作家がテキストの区切りに置いた日付（作家がその部分を書き終えたときに記したものは現実のある時間を示していること、そしてまた、当然ながら物語は次第に書かれた時間へと追いつき、それによって物語はいつまでも終わらない、という効果を生んでいること、等々の重要な指摘がある。

そういった読み解きから、この二つの論が導き出すのは、『貧者の息子』が西欧の物語（小説）とは異なる形の物語を創出しようとしたのではないか、ということである。この評価には首肯できるが、それ以上に、リニアなテキストという従来からあった見方に反して、どう読んでもぎくしゃくした感じを残す書きぶりがなぜ生じたのかを、作品の成り立ちや内容、異なる形式のテキストの混在を具体的に指摘することによって証明しようとした読みの作業は貴重である。

まとめおよび本論の目的

フランス語圏においては、発表から半世紀以上を経たこの小説には成立事情や受容における特殊な条件からできあがった一定の読み方があり、さらに、ある程度時間が経ってから、それを訂正するものとして、複雑な構成や、語りの複数性、人称の交代、時制、時間の取り扱い方に注目したより丁寧な読みが行われるようになったことになる。それまでは、きわめてわかりやすい原住民エリートの成長物語のみに目を向けて、この作品の評価はあえて低いものに留められていた。本作品に与えられた従来の定型の評価からは、そのような、物語を作り上げる仕掛けを読み解く術を一切受け取ることができない。

*54 Martine Mathieu-Job, *Le fils du pauvre de Mouloud Feraoun*, coll. « Classiques francophones », L'Harmattan, 2007.本書はことに第I章「ひとつのテキストあるいは複数のテキスト？」Un texte ou des textes ?において、複数のテキストの検証と、2002年のENAG版（フェラウンの執筆意図に一番近いとする）とスイコ版との比較を行っている。筆者はENAG版未読のためこの比較検証を再確認することができないが、スイコ版での変更は独立後のアルジェリアの学校教育での作品受容と大きく関係すると思われる。

いっぽう、ムールード・フェラウンはもとより、フランス語マグリブ文学もほとんど知られていない日本において、『貧者の息子』を読むとはどういうことだろうか。

『貧者の息子』および作家ムールード・フェラウンへの、本論筆者のごく私的な関心は、最初、それがエクリチュールがほとんど存在しない世界から生まれたということである。エクリチュールの存在しない世界で、人々と言語の関係はどのようなものであろう。そしてまた、そのような世界からムールード・フェラウンのような作家が現れ、小説を書いたということはどういうことであろうか。その疑問は驚異に等しい。それを、じっと注視する気分のようなものである。そういった曖昧なものを問いの形に翻訳して書き換えようとするときに、エルバズ、マティウ=ジョブの『貧者の息子』論の「複雑さ」を一つ一つ読み解こうとする姿勢には教えられることが多かったが、それは、むしろ彼らが示した新しい形の文学、小説『貧者の息子』という見方にであって、問いを作る方法への具体的な手がかりとしてではない。

『貧者の息子』は、ひとりのカピリア人の成長の物語であり、それがどこにでもあるような物語であってカピリア独特の民族誌でもあり、エクリチュールのない世界における主人公のエクリチュール獲得の物語でもある。この物語は、エクリチュール獲得の成果として書かれた。そして同時に、エクリチュールとは何かが続けられる（いっぽうでは、絶えず声としてのことば、オラルなことばとは何かが続けられる）物語でもあるのだ。学び（まなび/まねび）の努力と成果を、物語中では主人公フルル・メンラッドの教師であり一人前の男の、作品の外側では作家ムールード・フェラウンの誕生として示す。^{*55}

作家はすでに、レイ・チョウが言うオリエンタリズムの陥穽である、視覚と権力の一方的な関係をのりこえ、われわれがまなざされるだけの存在ではないこと、どんなまなざしを受けてきたかを知っていること、われわれも向こうをまなざし、自らをもまなざすのだということを始めにつげ知らせ、そこからわれわれの物語を始める。

エクリチュールのない世界に生まれたフルル・メンラッドは、エクリチュールをどう獲得したのであろうか。また、その獲得したエクリチュールで、エクリチュールのない起源の世界をどう描いたのであろうか。そこでは声としてのことばはどう存在しているのだろうか。語られた出来事の細部にそれらはどう書き込まれているのであろうか。それらを掘り起こして読み解くことが本論の目的である。

*55 CNH版はサブタイトルに「メンラッド、カピリアの教師 Menrad, Institueur Kabyle」とあり、教師としてのキャリアを歩み始めたメンラッドを描いて終わるが、スイコ版は師範学校の入試に向かうところまでで終わる。

第三章 書かれたカビリア、読まれるカビリア

イギリス人のアルジェリア史研究者ジェイムズ・マクドゥガルは、著書『アルジェリアにおけるナショナリズムの歴史と文化』*History and the Culture of Nationalism in Algeria*^{*1}で、アルジェリア（国家）のナショナリズムがどう形成されたかを、20世紀前半に発表されたムスリムの指導者、作家たちの言説から探り出そうとする。この時期は、最終的には1962年の新生アルジェリア国家独立に到達する、脱植民地化の時期であった。しかし、「アルジェリア」とは何か。その現在を変えるために、過去と未来を語る力を手に入れること、正統なるアルジェリアを分節化する者たらんとすることを巡って、アラブ-ムスリムの書き手たちは書く、語る。それは、コロニアリズムに対する真摯な熱い闘いであるが、アルジェリアという「かつてあった国家」を過去の地層から掘り出して修復する作業ではなく、再想像（再創造）reimagineの闘争であった。当然ながら、その再想像には、いつとも知れぬ過去の地層を恣意的に掘り出して、その断片を徹底利用するという面があった。

本書が提示するビジョンは、マグレブの地にアルジェリアを刻むおびただしい言語が書き重ねられるというものである。互いに競い合うエクリチュールが縦横に走った痕跡は、線の数が多くなりすぎて肝心のアルジェリア像が見えなくなるほどである。線を刻む激しさだけはその気配を残しているのに。

そして、この著作は、カビリアの記述に一章を割いている。第5章「アラブとベルベル？」Arabs and Berbers?の最初には、以下のような引用がある。^{*2}

何があろうとも、北アフリカにおいては、あるプロパガンダが行ったような、ベルベルの存在の否定をすることはできない。
ジャック・ベルク

In any event, one cannot deny, as a certain propaganda has done, the existence of Berbers in North Africa.
Jacques Berque^{*3}

アラブのマグレブにベルベル人は存在しない。……というのは、ベルベルは完全にアラブ化されたからである。
ファーディル・アル＝ワルティラーニ

There are no Berbers in the Arab Maghrib...for the Berbers have become completely Arabised.
Fadil al-Wartilani^{*4}

*1 James McDougall, *History and the Culture of Nationalism in Algeria*, Cambridge University Press, 2006

*2 *ibid.*, p.184

*3 ジャック・ベルク Jacques Berque (1910-1995年) アルジェリア生まれの東洋学者（社会学、文化人類学）。コレージュ・ド・フランス教授(1957-81年)。コーランのフランス語全訳者。

*4 1906-1959年。Fodil el-Oartilaniとも表記する。

ファーディル・アル＝ワルティラーニはまさに、完全にアラブ化した *completely arabised* カビリア人のひとりである。この家族は早くからアラブ化していて、富裕なアラブ知識人となっていた。ワルティラーニ自身はアルジェリア・ウレマー協会のメンバーであり、ムスリム同胞団⁵に近かった。反植民地/アルジェリア・ナショナリズムの、アラブ-イスラーム的思想家/闘争家である。マクドゥガルがカビリアに割いた一章は、カビリアとカビリア人に刻まれた言説の集積を示している。カビリアという《厄介》をアルジェリア化するために費やされた言語は膨大である。アルジェリアを再想像する膨大な言語のなかでもとりわけ、カビリアを「何とかしよう」とする言語が際だっていたことをこの章は語っている。アラブ化した知識人ワルティラーニのアルジェリア・ナショナリズムへの強い意志は、自らの身体の上に強いことばを刻んで、カビリアの痕跡を一切消し去ろうとしているかのようである。

いっぽう、カビリア語には書記システムがないに等しい。カビリア人はみずからを刻む言説を己の言語で形成することはできなかった。本書がもたらすヴィジョンのなかに、カビリアはただひたすらエクリチュールを刻まれる場所として現れる。ベルベル、カビリアの起源がいまだにはっきりしないことも、《領土》の取り合いによりいっそうの激しさを加えることになった。あたかもそこをわが物とせんばかりに、アラビア語でもフランス語でもベルベルは書かれないように書かれる。こんなに書かれては、もはや読むこともできないほどに。⁶

『貧者の息子』は、エクリチュールそのものが最小にしか存在していない世界で、貧しい農民の息子がフランス語のエクリチュールを獲得する物語でもある。この物語は自らはどうエクリチュールを始めようとするのだろうか。そして、物語は、エクリチュールの存在をどう伝えようとするのだろうか。カビリア人である自己を語ること（自伝を語ること）は、とりもなおさずカビリアで自民族誌を語ることであり、エクリチュールのない言語の領土で、エクリチュールの存在がいかなるものであるかを語ることだ。

カビリアの悲惨？——カミュ「カビリアの悲惨」

すでに第 I 章において、1939 年、『アルジェ・レピュブリカン』*Alger Républicain* 紙に掲載されたカミュのルポルタージュが、フェラウンが自民族誌/自伝を語るにあたって大きな影響を持つ出来事の一つであったことを述べた。ランジニ *Lenzini* によるフェラウンの評伝が、この取材中にフェラウンとカミュがティジの町でわずかに交差したことを伝え、カミュのルポルタージュがフェラウンに与えた「衝撃」についても語っていることを確認した。しかし、ここでもう一度、チョウにならって問い直してみたい。カビリアについて

*5 イスラム復興をめざす大衆組織の一つ。エジプトで 1928 年に設立、アラブ諸国に広がった。国際的にも大きな影響を与え、20 世紀における復興運動の代表的存在とされる。（『岩波イスラーム辞典』）

*6 青柳悦子「ムールード・フェラウン『貧者の息子』にみる間主体性」p.23

のこのカミュのルポルタージュの、何がそれほどフェラウンを動かしたのだろう。それに 答えるには、第 I 章でチョウから引用した、魯迅文学の出発点、あの映像が与えた衝撃の 内容をも う一度思い出してみなければならない。

魯迅が見た処刑のシーンは視覚と権力の関係が多重化している。まず、見られているのは処刑される中国人で、その人物を取り囲んで見ているのはやはり中国人の見物人である。その見られる/見るをスクリーン上に見るのは、魯迅と彼の級友の日本人、さらに映像を 見る自分自身や他人を観察している作家魯迅その人といった複雑な関係がある。魯迅の受 けた衝撃の大きさは、同一の空間で大勢の人間がいっしょに見る映像が、こういった多重 の複雑な構造と、それが持つ残酷な権力関係を一瞬で知らせてしまうところにある。映像 は直接的で衝撃的だが、その意味はあとから遡って辿り着くものである。それが、テクス トならばどうだろう。「カビリアの悲惨」にも、視覚と権力の多重化した関係が書き込ま れている。困窮するカビリア人を見るカミュ、その困窮ぶりを無力に眺める同じカビリア 人（すでに第 I 章に述べた、犬と争うようにしてゴミをあさる子どもたちのエピソード）、カ ミュが描く、そうしたカビリアを読むフェラウン、その記事は多くの教師たちが読んでい る、ことをフェラウンは知っている。カミュへの手紙に記事が掲載された『アルジェ・レ ピュブリカン』を「私たちの新聞」と書くフェラウンは、医学生たちのなかにまじりなが ら、自分がスライドに映された人たちの側にいるのだと一瞬にして悟らされた魯迅である。インパクトには劣っても、視覚と権力の関係は、映像よりもずっと容易に了解される のではないだろうか。

「カビリアの悲惨」は、当時カビリアが置かれた困窮ぶりを容赦なく暴き伝えている。もっ とも、ジャーナリストカミュにとって、暴くこと自体が目的ではなく、カビリアの困 窮ぶりを 詳しく知らせ、植民地政府を批判するとともに、より具体的で効果的な施策を促 すことが目的 であった。チョウのことばを借りれば、「その職業的動機は壮大で救済さえ 目的とするもの」である。^{*7}ジャーナリストとしてのカミュのこの姿勢をフェラウンは理 解し、後にカミ ュ宛の公開書簡でも述べているように、カミュは十分われわれの側近くに 来たし、そのルポルタージュの伝えることに偏見はないとも述べている。^{*8}

すでに述べたように、カミュの記事がめざしたのはカビリアの悲惨の全容を タブロー画にして 提示することであった。^{*9}このときまだ、後のノーベル賞作家は一篇の小説作品も発表して はいない。^{*10}しかし、すでにこのルポルタージュにおいて、その散文は見事に簡潔で力 強い。人も環境も、その目がみたものは文字通りタブローに構成され、ときに現地で会っ たカビ リアの人々の証言を直接話法で効果的に配した描写は巧みというほかない。

一連のルポルタージュは「カビリアの悲惨」*Misère de la Kabylie* と題されて発表された。

*7 第 I 章参照。

*8 「私たち共通の不幸の根源 (カミュへの手紙)」*La source de nos communs malheurs (lettre à Albert Camus)*, *L'Annuaire*, p.35

*9 第 I 章、III 章参照。

*10 カミュの文字通りの処女作は『裏と表』で、1935 年から 36 年に書かれた 5 編のエッセイを含み、1937 年にごく 少数でシャルロ *Charlot* 書店から刊行されたが、その後長い間絶版になっていた。1958 年に新しい序文を付けて改 めてガリマール *Gallimard* 書店から刊行された。『異邦人』の発表は1942年。

表題において、カビリアはあらかじめ悲惨な/惨めな *misérable* 場所として示されているのである。そして、*misère* という語を頻繁に繰り返しながら、カビリアがこれ以上はない窮乏の極限にあることを伝えるためにこれから報告をしようという。この導入部では、*misère* のほかに、窮乏ぶりを示す語として苦境/困窮/悲惨 *détresse* という語、さらには物乞い/乞食 *mendiant* という語までが使われている。

二回目、三回目の表題は「窮乏」*Dénuement* である。この酷い困窮を表す語は報告中にも、*indigent/indigence* などとともに頻出する。こういった語は、実際、カミュがその目で見、その足で調べたカビリアの現状を文字通り表すものであったとしても、通常、貧困・窮乏を表す *pauvre/pauvreté* よりはるかに強い語であり、カビリアは窮乏困窮しきった惨めな土地であると、読む者は繰り返し説きつけられることになる。そして、飢え *faim/famine*。ここでは、日々の食糧にも事欠くカビリアの暮らしと、生産性の低い土地について、データの裏付けもある「正確な」報告がなされる。山地であるカビリアは広い耕地には恵まれず、穀物生産に向いていない。農業の主力は樹木栽培 *arboricole*（無花果、オリーブ）である。また、例外的に人口密度の高い地域であるが、それはもともとそういう土地柄であったということに加えて、1939年というルポルタージュが取材・発表された時期が密接に関係している。当時、経済恐慌に苦しむフランス本国はカビリアからの移民労働者を受け入れる余地を失い、カビリア人労働者は帰国せざるをえなかった。さらに、ルポルタージュ発表直後のドイツとの開戦と、それから間もない敗北で状況はいっそう過酷になった。

いくつかの下りを取り出してみよう。

ある日、早朝のことだった。私は、ティジ・ウズの町で、ぼろをまとった子どもたちがゴミ缶の中身をカビリア犬たちと奪い合って争っているのを見かけた。ある人が私の質問に答えてくれた。「毎朝のことだよ。」

Par un petit matin, j'ai vu à Tizi-Ouzou des enfants en loques disputer à des chiens kabyles le contenu d'une poubelle. À mes questions, un kabyle a répondu : « C'est tous les matins comme ça. »^{*11}

こういった垂直的な落ち込みがこの地方を 貧窮にいたらしめたのである。買わねばならない小麦は法外な値段で、自分たちの生産物は低い値で取り上げられるのだから、必要な金額はとうてい手に入らない。以前は、息子たちの働きによって買うことができたし、それで助かっていたが、その仕事まで奪われ、飢えに対する防御もないのが現状である。その結果何が起こったかを私は見てきた。それを最小限のことばで示し、このような状況の 悲惨さと理不尽さをはっきりと感じ取ってもらうのが私の目的である。

C'est cette chute verticale qui a conduit le pays à la misère. Le blé qu'il faut acheter au prix fort, le paysan kabyle ne peut l'acquérir avec la production qu'on lui enlève à bas prix. Il l'achetait auparavant, et se sauvait, par le travail de ses fils. On lui a ôté aussi le travail et il

*11 Misère de la Kabylie, in Albert Camus, *Essais*, p.907-908

reste sans défense contre la faim. Le résultat, c'est ce que j'ai vu et que je voudrais décrire avec le minimum de mots pour qu'on sente bien la détresse et l'absurdité d'une pareille situation.*12

[アンダーライン筆者、以下同]

カビリアの家族は通常、少なくとも五、六人であることを考えると、カビリアの農民が いかに言語に絶する困窮にあえいでいるかがわかるだろう。少なくとも 50 パーセント の住民が草や根を食べており、残りは穀物の配給という形での行政による慈善を当てにしているというのが現状であると言ってよいだろう。

Quand on saura que la famille kabyle compte toujours au moins cinq ou six membres, on aura une idée du dénuement indicible où vivent les paysans kabyles. Je crois pouvoir affirmer que 50% au moins de la population se nourrissent d'herbes et de racines et attendent pour le reste la charité administrative sous forme de distribution de grains.*13

例をあげると、ボルジメナイエルでは二万七千人のカビリア人のうち、一万人が その日の食べ物にも事欠くというありさま……

A Bordj-Menaïel, par exemple, sur 27 000 Kabyles que compte la commune, 10 000 vivent dans l'indigence. ...*14

私が会った 困窮者たちは一か月を十キロの穀物でつなざるをえず、ほかには草木の根 や、カビリア人が辛辣な皮肉をこめてロバのアーティチョークと呼ぶ、アザミの茎を食 べている、とのことだった。

ティジ・ウズでは、そんな惨めな生活の糧を配給で受け取るために、女たちが三十キ ロ四十キロの道のりをやってくる。この不幸な女たちのために、一夜を過ごす避難小屋 がその土地の羊飼いの温情で提供された。

On m'a affirmé que les indigents que j'ai vu faisaient durer leurs 10 kilos de grains pendant un mois et pour le reste se nourrissaient de racines et de tige de chardon que les Kabyles, avec une ironie qu'on peut juger amère, appellent artichauts d'âne.

À Tizi-Ouozu, pour des distributions semblables, des femmes font 30 et 40 kilomètres pour venir chercher cette misérable subsistance. Il a fallu la charité d'un pasteur local pour donner un abri nocturne à ces malheureuses.*15

人は少なくとも、ここでは 悲惨は、定式でもなければ瞑想のテーマでもないことを、感 じるだろう。 悲惨はある。それは叫び、絶望している。

On aura senti du moins que la misère ici n'est pas une formule ni un thème de méditation. Elle

*12 Camus, *op.cit.*,p.906

*13 *ibid.*,p.907

*14 *ibid.*,p.907

*15 *ibid.*,p.907

est. Elle crie et elle désespère.^{*16}

連載の「窮乏 Dénuelement」および「窮乏（続き）Dénuelement (suite)」には以上のような記述が散見される。ここは物質的な窮乏、すなわち、命をつなぐ日々の食糧の決定的な不足について報告しているので、その極限的な困窮が伝わるよう選択された語であるとしても、困窮の度合いの強い、先に挙げた語 *dénuelement*、*indigent/indigence* に加えて、*détresse*、*désespérer* といった語、ひどさの度合いを表す語 *indicible* などによって、カビリアの人々が紛れもない飢えの状態にあると訴えている。

こういった、意味合いの強い語を使って窮乏の酷さを訴えるとともに、カミュは「犬と 争うようにしてゴミをあさる子どもたち」など、インパクトのあるシーンをいくつも織り 交ぜて、カビリア人が日々の糧を得るために、すなわち生き延びるためにこそ命を落とさ ねばならないような過酷で残酷なぎりぎりの状況についても報告している。

その日のことである。私はそこで驚嘆すべきものを見せられた。老婆が重さ 25 キロもある荷物を背負って二つ折りになっていたのである。

C'est ce jour-là qu'on me fit voir la merveille de l'endroit : une vieille femme cassée en deux qui pesait 25 kilos.^{*17}

私は確かに、アザミの茎がカビリア人の主要な食べ物のひとつであることを知っていた。それを、あちこちで確認できた。しかし、私は、昨年、アボ地区の子どもが五人、間違っ て毒のある根を食べて死んだことを知らなかった。私は、穀物類の配給がカビリア人が生き延びるには不十分であることを知っていた。しかし、配給が人を死に至らしめるのだとは知らなかった。ミシュレ地区で、遠方の村から大麦をもらうためにやって きた四人の老婆が帰り道、雪のなかで死んでしまったのである。

Je savais en effet que la tige de chardon constituait une des bases de l'alimentation kabyle. Je l'ai ensuite vérifié un peu partout. Mais ce que je ne savais pas c'est que l'an passé, cinq petits Kabyles de la région d'Abbo sont morts à la suite d'absorption de racines vénéneuses. Je savais que les distributions de grains ne suffisaient pas à faire vivre les Kabyles. Mais je ne savais pas qu'elles les faisaient mourir et que cet hivert quatre vieilles femmes venues d'un douar éloigné jusqu'à Michelet pour recevoir de l'orge sont mortes dans la neige sur le chemin du retour.^{*18}

私は、食糧不足の この悲惨なありさまを描くだけで終わりにするつもりはない。これは、人々の 困窮の極限ではないということに是非注意を向けておきたい。これはいかにも異常な事態に思われるとしても、もっと酷い状態になる。夏が終われば必ず、冬がや ってくるからである。

*16 Camus, *op.cit.*, p.909

*17 *ibid.*, p.907

*18 *ibid.*, p.910

Je ne voudrais pas terminer ce tableau de la misère matérielle sans faire remarquer qu'elle ne figure pas la limite extrême de la détresse de ce peuple. Si extraordinaire que cela paraisse, il y a pire puisqu'il y a l'hivert au bout de chaque été.^{*19}

こういった困窮を強調・断定することば遣いと、カミュが採用した、老婆や子どもをめぐるエピソードをフェラウンはどう受け取ったのだろうか。カミュのまなざしはそこで起こっていることをありのままに見て取り、フランス語を話す人々から、それを裏付ける証言も得ている。植民地政府の行政の欠陥を見抜き、統計学的な、有無を言わさぬ数字も参照している。そして、何よりそれらを総合してカビリアの悲惨な現状を描くペンの力は申し分ない。

カビリアについてのカミュのルポルタージュには、1938年12月『アルジェのこだま』*L'Echo d'Alger* 紙の連載「高地カビリアの立体的見取り図のための断片」*Fragments pour un diorama de la Haute Kabylie*^{*20}が先行しているが、直後には、『アルジェリア速報』*La Dépêche Algérienne* 紙の「カビリア 39」*Kabylie39*が続く。後者は、カミュのルポルタージュに対して植民地当局の意を受けた対抗記事であり、言うまでもなく基本は植民地政策礼讃で、カビリアの問題については開明化不十分というような結論に帰着する記述が多かった。^{*21}『アルジェのこだま』紙の記事はその表題にも示されている通り、『アルジェ・レピュブリカン』に先んじて、カビリアの現況における問題をほとんど網羅していたが、問題の観点がフランス側（宗主国側）にのみ立脚したものであったとされている。当時のアルジェリアのフランス語新聞のなかでは、相対的にはカミュのルポルタージュはカビリアの現況をかなりよく伝えていたのである。

同様の窮状にどんな救済方法が講じられたのだろうか？ 私は即座に答える。たったひとつである。それは、慈善である。穀物の配給をする。同時に、穀物配給と現金支給の救済を伴う「慈善」建設工事を起こす。

Quels remèdes a-t-on apportés à une pareille détresse? Je réponds tout de suite : un seul et c'est la charité. D'une part, on distribue des grains et, d'autre part, on crée avec ces grains et avec des secours en espèces des chantiers dits de « charité »^{*22}

それゆえ、私はカビリアの不幸の別の局面へと話を進める前に、カビリア人の《心性》を根拠に現状についての弁解を見つけようとする、アルジェリアでおなじみの議論が誤りであることを示しておきたい。こういった議論に対して私は軽蔑の感情以外何物も感じない。〔カビリアの〕人々はすべてに適応している、と言うのは軽蔑すべきことである。……この人々はわれわれと同じものを必要としていない、と言うのは軽蔑すべきこ

*19 Camus, *op., cit.*, p.913. ルポルタージュが連載されたのは6月である。

*20 『アルジェのこだま』紙の「高地カビリアの立体的見取り図のための断片」には挿画が入っているが、描き手は、後にフェラウンの『カビリアの日々』に挿画を描くシャルル・ブルティである。

*21 榎木栄一「Camusの《Misere de la Kabylie》をめぐって」

*22 Camus, *ibid.*, p. 912

とである。彼らにそれがないならば、あるのは、われわれが彼らのためにそれを作り出す好機であろう。……というのは、既成概念だの偏見は、そういったものをある世界に押しつけてしまっ、寒さのために人が死んだり、子どもたちがそこから毒をかぎ分ける能力を家畜なみにもっているわけではないのに家畜なみの食べ物を食べざるをえないときには忌まわしいものだからである。事實は、われわれが三世紀遅れた暮らしをしている人々と隣り合って生きているということ、そしてわれわれだけがこの驚くべきギャップに無感覚であるということなのだ。

C'est pour cela qu'avant de passer à d'autres aspects de la malheureuse Kabyle, je voudrais faire justice de certains arguments que nous connaissons bien en Algérie et qui s'appuient sur la « mentalité » kabyle pour trouver des excuses à la situation actuelle. Car je ne connais rien de plus méprisable que ces arguments. Il est méprisable de dire que ce peuple s'adapte à tout...Il est méprisable de dire que ce peuple n'a pas les mêmes besoins que nous. S'il n'en avait pas eu, il y a beau temps que nous les lui aurions créés...Car les idées toutes faites et les préjugés deviennent odieux quand on les applique à un monde où les hommes meurent de froid et où les enfants sont réduits à la nourriture des bêtes sans en avoir l'instinct qui les empêcherait de périr. La vérité, c'est que nous côtoyons tous les jours un peuple qui vit avec trois siècles de retard, et nous sommes les seuls à être insensibles à ce prodigieux décalage.^{*23}

カミュは熱い。しかし、ランジニは以下のように書く。第 I 章と重複するが、再度引用してみよう。

この献身的ではあるが、カビリアの窮乏の歴史的で奥の深い理由についての政治的な分析に乏しい弁論からは、カビリアの魂、その誇り、連帯、抵抗する力が消し去られている。その前年もまだアルジェリア共産党の党員であり、アラブ人青年たちに対するプロパガンダを担当していたカミュにして、これらに言及なしという手落ちはどういうことだろう。

En fait l'âme kabyle, sa fierté, sa solidarité, sa capacité de résistance sont gommées de ce plaidoyer généreux mais pauvre en analyse politiques sur les causes historiques et profondes de cette misère. Comment expliquer ces silences, ces oublis de la part d'un Camus qui, l'année précédente, était encore membre du Parti communiste algérien. Un parti au sein duquel il était chargé de la propagande auprès des jeunes Arabes...^{*24}

もっとも、カビリア人の真の連帯や抵抗の力は、ランジニが根拠を求めたところを探しても引き出すことはできないだろう。後に、フェラウンがカミュに送った『ペスト』批評には、かつて読んだルポルタージュにフェラウンがいただいた、どうにも割り切れない感情がどこから生じたものかが明かされている。「あなた（がた）は私たちを理解できるほど

*23 Camus, *op.cit.*, p.913-4

*24 ランジニ Lenzini 『ムールード・フェラウン』 MOULOU FERAOUN, p.114-5

十分には知らない *vous ne nous connaissez pas suffisamment pour nous comprendre*」^{*25}のである。

『貧者の息子』の続編「フルル・メンラッド」の【戦争】3には、カミュのルポルタージュが掲載された翌年、ヴィシー政権ができてからの時期のカビリア窮乏の様子が書かれており、むしろカミュの報告にあるよりも酷いありさまが描写されている。カビリアに暮らすカビリア人ならではの具体的で詳細な描写である。しかし、そこに描かれているのは、悲惨 *misère* に陥らされて押しひしがれ、施しと救済を待っているカビリアでもなければ、「ぼろを纏った貴人」^{*26}でもない。自分と家族が生き延びるために、人々は知恵を絞ってあらゆる手立てを尽くしている。配給や種々の救済がやってくればもちろん受け取り、いっぼう、食糧を手に入れるためなら手段を選ばず不正や不道徳も横行する。その、ありのままの人々のふるまいを記述し、ヴィシー政府の欺瞞に対する憤りを隠そうともしていなが、そのトーンは、むしろカミュより冷静沉着である。カビリア人は食べ物にも事欠く悲惨な状況を生きている、チフスも蔓延している。だが、彼らは/私(たち)はしたたかである。大麦さえあれば。何としても生きるのだ。^{*27}ひいては、民衆というものは、カビリアでなくとも、どこでもそうやって生き延びてきたのだ。

博愛の手を差し延べなくてはならない。それ以外は文学である。

Une main fraternelle qu'il faut tendre. Le reste est littérature.^{*28}

カミュは、ルポルタージュの初回にこう述べている。ところが、その初回こそが、カビリアの苦境を文学に仕立てているのだ。あるいは、結局のところ、カビリアの悲惨を文学のために利用するという結果に陥っている。読者をカビリア *la Kabylie* という土地に誘う初回の表題は「ぼろを纏ったギリシャ」*La Grèce en haillon* である。この部分はシリーズの導入部なので、事実に基づいた現状報告であるよりは、カビリア地方の紹介である。その際にカビリアをギリシャになぞらえ^{*29}、ギリシャといえは肉体の光輝 *gloire du corps* を思い起こすのに、カビリアではほかのどこよりも肉体は粗末にされている、とする。つまり、あまりに過酷な物質的欠如が人の生を徹底的に損なっているということだ。

フェラウン自身は1962年にギリシャを旅している。^{*30} 紀行文のなかで、フェラウンは、

*25 Lenzini, *op., cit.*, p.114

*26 これもまた、オリエンタルの人物像のひとつのクリシェである。

*27 【戦争】*La Guerre* 3(「フルル・メンラッド」*Fouroulou Menrad*, 『記念日』*L'Anniversaire* 所収)

*28 この引用は、ルポルタージュ「カビリアの悲惨」の第1回「ぼろを纏ったギリシャ」*La Grèce en haillon* より。『アルジェ・レピュブリカン』紙の記事検索ページ参照。

http://www.alger-republicain.com/spip.php?page=recherche&recherche=misere+de+la+Kabylie&debut_articles_recherche=20#pagination_articles_recherche

*29 カビリアの共同体の政治は、広場での合議で決められると考えられていたことから、ギリシャの《デモクラシー》に例えられることが多かった。

*30 ギリシャ旅行の紀行文「ギリシャの旅」*Le Voyage en Grèce* が1962年5月の『フランス』*Revue Française* 誌に掲載され、死後出版の『記念日』*L'Anniversaire* に採録されている。

古代遺跡を経巡る旅人がまずその地に見ようとするのは、すでに幾度となく見た写真のな かのイメージであると、さらりと言ってのけ、エピナール版画^{*31} という語を使って、フランス語で得た知識から作られたクリシェに過ぎないギリシャ像 —— カビリアによく似た —— を見出そうとする。なるほど、彼の地もわが土地も似ているが、それは「われわれが一つ海の同じ岸辺の住人だから *parce que nous somme riverains d'une même mer*」とあっさり述べている。とりたてて強く感動した様子はない。むしろ、既存のイメージや言説が作り上げたクリシェを一旦保留する姿勢を常に冷静に保つのである。

しかし、少なくとも「ぼろを纏ったギリシャ」において、カミュは撞着語法的な表題（これこそエドワード・サイードの言うオリエンタリズム表象の型のひとつである）と、古代ギリシャのクリシェを存分に利用して、カビリアの現状がどれほど悲惨であることを強調する。ギリシャに擬せられるような素晴らしいカビリアが酷いことになっていると。その散文は美しい、そして、昂揚感に満ちている。連載二回目の「窮乏」*Le Dénuement* の結語は以下のように書かれている。

ティジ・ウズの《部族》を訪問しての帰り、私はカビリア人の友人と町を見下ろす丘の頂にいたのだった。そこから、私たちは夜が降りるのを見ていた。この素晴らしい土地に山々から宵闇が下ってくるこのときは、いとも頑なな者の心にも和らぎがもたらされることを、私は知っている。いっぽう、その時間、谷の向こう側にいる人々、一家でたった一つの粗末な大麦パンを前にしている人々に平穏がないこともわかっていた。そしてまた、その驚くべき荘厳な宵にはすっかり身をゆだねる心地よさがあることも。しかし、ここにある悲惨の炎は、世界の美しさを禁じるように私たちの目の前で赤々と燃えさかっていたのである。

「降りましょうか」同行者は言った。

Mais je sais qu'au retour d'une visite à la « tribu » de Tizi-Ouzou, j'étais monté avec un ami kabyle sur les hauteurs qui dominant la ville. Là, nous regardions la nuit tomber. Et à cette heure où l'ombre qui descend des montagnes sur cette terre splendide apporte une détente au cœur de l'homme le plus endurci, je savais pourtant qu'il n'y avait pas de paix pour ceux qui, de l'autre côté de la vallée, se réunissaient autour d'une galette de mauvaise orge. Je savais aussi qu'il y aurait eu de la douceur à s'abandonner à ce soir si surprenant et si grandiose, mais que cette misère dont les feux rougeoyaient en face de nous mettait comme un interdit sur la beauté du monde.

« Descendons, voulez-vous ? » me dit mon compagnon.^{*32}

「世界の美しさを禁じるように……燃えさかる」悲惨の炎の美しさはどうだろう。ここ

*31 フランス、ヴォージュ地方の町エピナールで、十七世紀～十九世紀半ばに作成された民衆版画。木版画である。時代を経て技術的にも進歩し、着色版画も製作されるようになる。ナポレオン・シリーズなどが人気で、大量に生産された。後には読本も作られ、訪問販売人がフランス全土を売り歩いた。アニメーション化もされている。

*32 Camus, *op.cit.*, p.909

に示された述懐の数々は、つまり *en effet*、カミュが、カビリアを自分の散文のための美的な材料として扱っていると受け取られうる。谷のこちら側から向こう側の美しいカビリアを眺め、そして悲惨からは遠ざかってより低い所へ、すなわち『貧者の息子』にありありと示されているように、より価値の高い場所へと下りていくのである。

遂に、フェラウンは、躊躇いながら、自ら証言者となることを決心する。「博愛の手を差し延べなくてはならない。それ以外は文学である。」とカミュは書いた。そうだ、その証言はむしろ、文学でなくてはできないだろう。

植民地アルジェリアの首都アルジェの貧民街に生まれ育ったカミュから見れば^{*33}、カビリアのような経済的金銭的に豊かでない土地の暮らしは貧困そのものであったに違いない。しかし、賃労働と消費だけの都市生活と、急峻な山に囲まれた生産性の低い土地に多くの人間がひしめくとはいえ、生産と交換と生活の場であるカビリアでは、豊かさ/貧困の意味は異なる。厳しい条件のなかで、カビリアの人々は懸命の生産労働と、練り上げられた知恵を生活の隅々に行き渡らせて生き延びてきた。それは、フランス人がやってくるはるか以前の蓄積である。その知恵とは、稠密な人間関係の網の中で常に交換し循環させることである。物 *choses* をことば *paroles* を。そしてまた、その動きは必ずしも共同体内のみに関係が閉じ込められていたわけではなく、必要に応じて外の世界とつながり、そこでも交換と循環が行われてきたのである。^{*34}それは、ピエール・ブルデューが『アルジェリアの社会学』のなかで、かすかなユーモアを含みながら述べていることと重なる。この知恵は、当然ながら易々と手に入れたものではない。これは、ミシェル・ド・セルトーが『日常実践のポイエティック』で明かそうとした人々（民衆）の生き延びるための知恵であって、どこにあるとも指し示すことはかなわず、どれほど丹念に観察しようともことばで書き留め尽くすことはできないが、ことばがなければ決して伝えることも獲得することもできぬものである。それは、生きている人の身体に住まい、人と人（共同体）と自然との間にもあって受け継がれ、行使する人と場面によって絶えず変化する。人々は知恵を 生きている。

フェラウンの『貧者の息子』をよく読むと、「カビリアの悲惨」に対するフェラウンからの応答＝反論・訂正のような箇所はいくつも出くわす。そして、「カビリアの悲惨」の *misère* の部分を日々 *jours* に置き換え、*Kabylie* に定冠詞の *la* をつけない『カビリアの日々』 *Jours de Kabylie*^{*35} は、この作品全体が「カビリアの悲惨」への応答であろう。初めての小説作品である『貧者の息子』では、やや肩肘張って。いっぽう、イラスト入り^{*36}のエッセ

*33 カミュの子ども時代の環境については、未完の自伝『最初の人間』 *Le Premier Homme* 参照。

*34 Pierre Bourdieu, *Sociologie de L'Algérie*, Les Kabyles

青柳悦子「ムールード・フェラウン『貧者の息子』にみる間主体性」 p.29

*35 *Jours de Kabylie*, avec illustrations de Charles Brouty, Alger, éd. Baconnier, 1954 ; Paris, Le Seuil, coll. « Méditerranée », 1968 ; rééd. in *Algérie. Un rêve de fraternité*, Paris, Omnibus, 1997.

*36 『カビリアの日々』の挿画は、シャルル・ブルティ Charles Brouty (1897-1984) による。ユダヤ系。フランス植民地時代の有名画家のひとり。キャンバス画だけでなく、ペン画等もよくした。アルジェ、カビリアなどの日常の風景を多く描いた。

イである『カビリアの日々』は、アイロニカルな表現のうちにもユーモアと余裕を持って。(あなたがたフランス人が言う) 悲惨 *misère* とは、われわれカビリア人にとっては、カビリアのいつもの日々/日常 *jours* である、とも言いたげな表題である。カミュの目から見るなら悲惨 *misère* であって、行政による救済や奉仕の対象でなくてはならない状態が、人々の日々の暮らしのありようそのものとして示されている。文字通り、「カビリアの日々」である。

『カビリアの日々』は、読みつつ、ときおり思わず顔がほころぶような楽しい読み物であるが、フェラウンが、カビリアという土地もカビリアの人々も、いささかも誇張したり美化したりしない「書き方のスタイル」を貫きながら、人が懸命に生きる土地の「豊かさ」を写し取っていることに賛嘆の念を覚える。フェラウンが同郷の人々とその暮らしに向けるまなざしは、これまで外からやってきた人々がカビリアとカビリア人に向けたまなざしをよく承知したものであり、そのうえで慎重に題材が選ばれ、書き方もよく練り上げられている。^{*37}これは、外来者のエグゾティズムをなぞったのではなく、「あなたがたが見たもののこちら側からの提示し直し」なのである。これは『貧者の息子』の語り始めの基本姿勢と違わない。このエッセイの最初の「私の村」*Mon Village* の冒頭部分は、『貧者の息子』【家族】本篇始めの四つの段落をなぞりつつ変奏している。『貧者の息子』でまず問題にされるまなざしは、外来者のものだが、『カビリアの日々』では、書き手はすでに何度も村を出ては帰ることを繰り返す村人であり、その繰り返しのうちに村との距離の取り方は、言うなれば安定したものになっている。そこには、極度の感傷もなければ、ことさらの嫌悪のようなものもない。村は擬人化されていて、親である村を出たり入ったりする者は、朝、野良に出かけては夕方家に帰る子どもたちになぞらえられる。それは日々当たり前のことなので、親は子の行動にことさら反応しないが、書き手はそれを心にふれる信頼のしるしとしている。

つまるところ、メンラッド家のちび助、ラムダンの息子でありルニスの甥である、私の子ども時代は、カビリアの多くの子どもたちと同じく、何事もなく平凡に過ぎていった。私はこの年齢からずっと記憶にある限り、いつ思い出しても、魅力も特別な思い入れも感じない、いつでも同じで生彩のない画^{タブロー}を持ち続けた。私は、ちゃんと洗濯のしでない色のさめた古いガンドウラを着ている。縁のほつれた汚らしいシェシュア帽をかぶり、靴はなく、ズボンもはいていない。私の記憶では、常に季節は夏だ。埃で真っ黒な足、垢の詰まった爪、果汁の染みがついた手、顔には乾いた汗の筋が長々についている。目は赤く、まぶたははれぼったい。身体を洗う日には、やっといまのフルルになる。もちろん髭だけはないが。

*37『カビリアの日々』は「私の村」*Mon village* 「アイト・フランヌの広場」*La djémâa des Ait-Flane* 「シェリフの息子」*Le fils du chérif* 「ティムシュレット」*Timechret* 「コミュニストとファシスト」*Communistes et fascistes* 「トレタの市場」*Lemarché du Tléta* 「粗朶束を背負った老婆」*La vieille au figo* 「女羊飼いたち」*Les bergère* 「明るい泉にて」*A la claire fontaine* 「美しい日々」*Les beaux jours* 「山国の教師」*L'instituteur du bled* の 11 の話題から成っている。「明るい泉にて」はフランスの民謡からとった表題であり、「美しい日々」はフランス的な季節感や幸福感を表す定型表現である。カビリアの自然や民俗に対するフランス的な解釈をよく知った上であえてつけた表題であると考えることができる。

En somme, mon enfance de petit Menrad, fils de Ramdane et neveu de Lounis, s'écoule banale et vide comme celle d'un grand nombre d'enfants kabyles. J'ai gardé de cet âge, pour tout souvenir, un tableau qui ne semble uniforme et terne et que j'évoque chaque fois sans y trouver ni charme ni émotion excessive. Je me revois ainsi vêtu d'une vieille gandoura décolorée par les mauvais lavages, coiffé d'une chéchia aux bords effrangés et crasseux, sans chaussures ni pantalon, parce que, dans ma mémoire, c'est toujours l'été. Les pieds sont noirs de poussière, les ongles de crasse, les mains de taches de fruit ; la figure est traversée de longues barres de sueurs séchées ; les yeux sont rouges, les paupières enflées. Si c'est un jour de toilette, eh bien, c'est le Fouroulou actuel, moins la barbe naturellement. (FP, p.81)

こちらの画は地味で色味に欠けている。ゴッホの、ジャガイモを喰う人々のように。メンラッド家(=カビリア人の家族)の日々の食事は極々粗末なものである。野草を食べるのも取り立てて珍しいことではない。

われわれの家では肉はめったに食卓に上らない食べ物だ。それか、全然食べられないか！クスクスはわが家の唯一の人間の栄養源である。おたま一杯のヒヨコ豆かソラ豆を、ほんの少しの食用油と三リットルの水とを一緒に鍋に入れてスープをつくる。一食につき、油は匙一杯と決まっていて、時々、干し無花果をちびちびと嚙りながら食べることもある、というのが正確なところだろう。ほかには、畑で見つけた食べられる野草なら何でも食べて歯茎を緑色に染めるか、山を流れる小川の、きれいな水ならば好きなだけ飲んで腹一杯にもできるし、収穫の始まりが待ちきれずに、まだ青くて固いプラムだのリンゴだのナシにどうにか歯を立てることもできる。われわれは山の民だ、粗野な山の民だと人は言う。それは、おそらく体質の問題だろう。虚弱な体質に生まれついたら、食事療法には耐えられそうもない。さっさと除去されてしまうだろう。強健に生まれれば、耐えて生き延びられる。のちに今度は虚弱に生まれる。適応する。それが肝心だ。

La viande est une denrée très rare dans nos foyers. Ou plutôt non ! le couscous est la seule nourriture des gens de chez nous. On ne peut, en effet, compter ni la louche de pois chiches ou de fèves qu'on met dans la marmite avec un rien de graisse et trois litres d'eau pour faire le bouillon, ni la cuillerée d'huile qu'on ajoute à chaque repas, ni la poignée de figues qu'on grignote de temps en temps dans les intervalles. A part cela, on a la faculté de se verdir les gencives avec toutes les herbes mangeables que l'on rencontre aux champs ; on est libre aussi de se remplir le ventre à tous les ruisseaux limpides qui dégringolent des coteaux et l'on peut, en guise de primeurs, manger toutes les prunes, les pommes ou les poires encore vertes que les dents peuvent supporter. Nous sommes des montagnards, de rudes montagnards, on nous le dit souvent. C'est peut-être une question d'hérédité. C'est sûrement une question de sélection... naturelle. S'il naît un individu chétif, il ne peut pas supporter le régime. Il est vite... éliminé.

S'il naît un individu robuste, il vit, il résiste. Il sera peut-être chétif par la suite. Il s'adapte. C'est l'essentiel. (FP, p.68)

ここでは、「貧困」が常態であり、確かに、それは貧困であろうが、一方的に救済され

たり施しを受けるものではない。何につけてもふんだんにあるわけではなく、人々の命をつなぐ食物もかつかつである。

家族の構成を考えた上で、誰も不満を抱かないように分け与えること、そうした暮らしをつないでいくことが、「家長」の役割である。分け与えるのは食べ物だけではない。生産労働も消費もすべてを家族が分担して行うということだ。メンラッド家ではその役割は寡婦のタサディットが担い、この難しい役割をやりおおせているから、男子であるルニスとラムダンが成人になり、それぞれ所帯をもっても、その上に位置して大家族をまとめているのである。

ブルデュー「アルジェリアの社会学」

ブルデューは、アルジェリア戦争に従軍し、戦後もアルジェリアにとどまってカビリア各地でフィールド調査を行った。もともと哲学徒であった彼が社会学へと転換したのは、アルジェリアの経験があったからだという。ランジニの評伝には、フェラウンとブルデューが二人で写っている写真が掲載されている。^{*38}ブルデューのアルジェリアでの民族学的調査の報告が書かれるのは、当然ながら『貧者の息子』より後のことである。ブルデューの著作の多くは、フェラウンの死後に書かれる。しかし、カミュの「カビリアの悲惨」

(ルポルタージュ)と『貧者の息子』(フィクション)の間に、テキストが書かれた時を逆転させて、ブルデュー(調査報告、ノンフィクション)を差し挟んでみる——これもひとつの翻訳の手続きである——ことで、『貧者の息子』が何をどう書こうとしたかが見えてくるのである。カビリア関連のブルデューの著作(初期の頃のフィールドワーク報告)についてセルトーが下している評価によっても、^{*39}レイ・チョウが民族誌を断じる(「科学」ではない)考え方によっても、^{*40}この方法は必ずしも不当ではないと考える。結局のところ、三者は、それぞれはっきりと性格の異なるジャンルのテキストとは言いがたいからである。

晦渋な長文で知られるブルデューだが、『アルジェリアの社会学』は、むしろ簡潔で平易なアルジェリア社会の報告である。表題は『アルジェリアの社会学』だが、全6章のうち第1章「カビリア人」で始め、第3章までは、シャウイア、ムサビトと、ベルベル系の人々の社会についての報告から成っていて、ランジニが指摘しているような、カミュが書かなかったことを詳しく記載している。人々の相互扶助や、厳密な法則/決まりによる分配で元手が貧弱であることを徹底してカバーしていること、などである。意外にもブルデューは、『貧者の息子』の補足として読むことができる。つまり、実は、『貧者の息子』が多くの点で見かけほどわかりやすい小説ではないということなのである。それはカビリア社会の「わかりにくさ」でもある。「カビリア人」は短いながらカビリア社会についての

*38 Lenzini, *op.cit.*, p.288

*39 ミシェル・ド・セルトー『日常実践のポイエティック』p.125～

*40 レイ・チョウ『プリミティヴへの情熱』p.259～

密度濃い記録である。これに、『貧者の息子』とくに【家族】を併せ読めば、カビリアの社会と、人の暮らしぶりの輪郭と内容がわかってくるとも言える。ブルデューは形態をスケッチし、『貧者の息子』はそこに生き生きとした内実を充填する。

ブルデューは、カビリア社会の基本単位としての大家族のありかたについて網羅的な記述をしているが、そのうちの、たとえば、家長とほかの成員との関係性や、家長の権威についての解説に示された内容は、『貧者の息子』【家族】では、主人公の誕生成長の物語の道筋に現れる親族たちの紹介や、種々の出来事・事件の記述に周到に配されている。

また、ブルデューは、大家族の成員みなぎ協力して当たる野外の仕事のなかに、陶芸をあげている。主人公の母方の叔母たちによる陶芸は『貧者の息子』でも重要なトピックであり、カビリアの生活に、女たちが担う陶芸が欠かせない仕事であったことがわかる。女たちの手仕事としてはもうひとつ織りが語られるが、それに比べて陶芸は、陶土の採取から始まって焼きに至るまで、人手、時間、工程の数と規模が格段に大きい。物語では、早くに両親を失い二人だけで暮らす叔母たちを助けるのは、この二人にとって長姉にあたる、主人公の母の夫ラムダンで、その仕事は、実際に鍋釜や食器を作る女たちの作業がしやすいように環境を整えるものである。二人の叔母の間でも細かい作業の段取りのなかでそれぞれの得意技術を生かした分業が行われており、また、主人公やその姉たちのような子どもまでもが、ささやかな仕事を分担する。ブルデューの調査報告には記載されない、そういった細部に至る民族誌的記述が、出来事や重要な人物の人となりの描写に織り交ぜられて、いまここで行われているように現在時制で語られるのも『貧者の息子』の特徴である。自伝的な物語の形をとった民族誌でもある物語なのである（第IV章参照）。

『アルジェリアの社会学』「第1章 カビリア人」は、最初にカビリアが非常に人口密度の高い地域であること、カビリア人は樹木農業者^{*41}であることを述べた後、^{*42}住居と集落についての記述がある。ブルデューは、カミュのように谷の向こう側から美しいカビリアを眺めただけでなく、カビリア人の家に足を踏み入れたのである。^{*43}

〔カビリア人の〕住まいは集合して村をつくっている。家々は〔村の〕外側に対しては背を向けていて開口部がなく、守るに容易な城壁のような構造になっている。入り口はでこぼこした狭い小路に面している。集落の入り口には脱穀場、まぐさの貯蔵小屋、油を作るための挽き臼と圧搾機がある。そこで、道は二つに分かれ、余所から来て事情に不案内な者は通り過ぎてしまって村に入ることがない。このように、村は始めから、外からはうかがい知れない閉じた親密さを、同時に、外に対しては断固たる一体感をはっきりと示している。村は、狭い谷底に至るまで斜面を覆い尽くす耕作地の上の方に押し上げられるようにしてかたまっており、家々は周りを菜園に囲まれているが、ここは女たちの領分である。その下のほうは狭い畑で、一番下はオリーブ畑になっている。村は

*41 オリーブや無花果のような果樹を栽培する農民。

*42 カミュの「カビリアの悲惨」も、同じように始められている。

*43 ブルデューは『実践感覚』*Le sens pratique*の付論「家または転倒した世界」*La maison ou le monde renversé*でカビリアの家のなかの様子を解説している。

見張りと防護の場所で、カビリア人はそこから難なく畑や果樹園を見守ることができる。Leurs habitations se groupent en villages ; tournant le dos à l'extérieur, elles forment une sorte d'enceinte sans ouverture, aisée à défendre, et ouvrent sur des ruelles étroites et raboteuses. A l'entrée de l'agglomération où se trouvent les aires à battre, le grenier à fourrage, les meules et les presses rustiques destinées à la fabrication de l'huile, les sentiers se dédoublent afin que l'étranger qui n'y a pas affaire puisse passer son chemin sans entrer. Ainsi, dès l'abord, le village affirme son intimité close et secrète, en même temps que son unité résolue à l'égard du dehors. Pressé au-dessus de son terroir, qui couvre les versants jusqu'au fond des vallées étroites, avec, à l'entour des maisons, les potagers, domaine des femmes, au-dessous, les champs exigus, et enfin, en contrebas, les oliveraies, le village est lieu de guet et de protection d'où le Kabyle peut surveiller sans peine ses champs et ses vergers.^{*44}

ここで、私たちは『貧者の息子』の物語本編がどう始まるかを再度、思い出す。第I章でも取り上げた最初の四つの段落では、ツーリスト（外来者）のまなざしを借りて（とい うよりも、よく承知している外来者のまなざしを軽く押し返すような身振りで）、彼らが ティジの村に対していただく、ぼんやりとした印象をややからかい気味に書いている。

ブルデューのカビリアへのこのイントロダクションは、ひとまず、誘いとか導きと考えることもできようが、ツーリストのような事情に通じない者は、ともすれば村に入ることもできないことになる。ブルデューのフィールドワークの記録は、セルトーのブルデュー評になれば、ある社会のありようを記述する論理のメタファーであると読むこともできる。^{*45}この最初の記述は外来者を導いてくれるが、それはカビリア村の入り口までで、そこを通り過ぎずに村に入るにはどうしたらいいのかを教えてくれることはない（教えることはできない）。

「このように、村は始めから、外からはうかがい知れない閉じた親密さを、同時に、外に対しては断固たる一体感をはっきりと示している *Ainsi, dès l'abord, le village affirme son intimité close et secrète, en même temps que son unité résolue à l'égard du dehors.*」。外から見ると、村の成り立ち、たたずまいが、中の様子を見せないようになっている。村の入り口には、村人が共同で使う作業場や貯蔵小屋がある。こういった設備は簡素なものであったには違いないが、これも防護壁の役割を果たしただろう。ここは、村人にとっては入り口だが、外来者に対しては壁のように働く。やって来た一本のベクトルはそこで異なる二方向へと分裂し、辿ってきた者はそらされてしまう。村は、外来者にとっては足を踏み入れることさえできないかもしれない、閉じられた空間なのだ。つまり、はっきりしていること、それは、中のことを知ることは難しいということだけである。では、村の入り口を見過ごさずに壁を突破した者なら、村を知ることのできるのだろうか。メタファーが何ごとかを意味しながらもその何ごとかを覆い隠すという意味で、外から（谷の向こうのカミュよりは近いが）眺めたカビリアの村のたたずまいはカビリアの村

*44 Bourdieu, *op.cit.*, p.9

*45 セルトー, 前掲書, p.126-7.

のメタファーである。では、首尾よく村に入って、村を貫く大路^{*46}を歩いて進み、カピリアの人々にとって極めて重要な、村内の複数の道の結節点である広場、ここはまだ公共の場所だが、そこを通り抜け、さらに、大路から気まぐれに分枝している小路に入り込み、狭い入り口から住宅の中庭に導かれてカピリアの家の内部へと進むことができたとしても、村の空間は、どこまでも入れ子のようにより小さな空間を含んだまま続いているのである。ともすると、村人の家にたどり着いたつもりが、外見はそれと変わらぬモスクの、白いがらんどうの空間に立ち尽くして呆然とするのかもしれない。^{*47}

ブルデューはまた、カピリアの極めて簡素な一般住宅の平面図も解説している。人の居住空間、納戸、家畜のいる場所、炉、機を立てる場所が記される。^{*48}しかし、重要なのは、そこで生きる人が日々、対自然や人間相互に繰り返す働きかけ、生まれて死ぬまでに行う行為の一切である。その日々の行いは、いつとも知れぬ遠い過去から共同体の人々が作り上げてきた実践であり、実践は人々の生活と思考すべて、このうえなく微細なあらゆる部分に及んでいる。『貧者の息子』は、ひとりのカピリア人が生まれて成長する物語のなかで、それを書き込もうとしたのである。

おそらく、『貧者の息子』【家族】本編の最初の四段落は、ブルデューが記述したメタファーが行っていることを言いつくしているのだが——外部の者には閉ざされているが、なかにいる者には外を見るのに適している。そのような作りの空間としてのカピリア——、話者も記述そのものも、そこまでとは気づいていないのかもしれない。しかし、この物語とて、私（たち、彼ら）が語り尽くせるとは思いもよらない。この小説がそれほど野心的でないのは、前半【家族】の前置きに明らかである。

『貧者の息子』は読みやすい小説ではない。最初の四段落を読み損なうと、首尾よくティジの村に入って、フルルにうながされるままに——フランス語の使い手なのに、だから——人々の間に紛れ込むことはできない。人々の生活の場に立ち会うことができない。そういう読みがどれだけ多いことだろう。これは、事情を知らぬ者は、その入口を通過してしまうカピリアの村のような小説なのだ。

カミュは、カピリアの村の入り口までも来ていない。谷の向こう側から眺めただけだ。そうした人々を、カピリア人は常に知らぬまま許してきたのだ。どこか遠い所に行き、そこに何かを見いだしたとしても、私たちは帰らなくてはならない。遠くからカピリアにやってくる、ブルデューが報告したようなカピリアらしさのいくらかを見たとしても、帰宅した途端、夢が終わり、当たり前前の日常が待っているとは、どういうことか。それは、結局、カピリアとカピリア人も、われわれの郷とわれわれ自身にそう変わらぬということだ。

『アルジェリアの社会学』では、ごく短く説明されているだけのティマシュラット

*46 『貧者の息子』におけるティジの村の描写では、村を貫き別の村へと通じている大路は木の幹に例えられている。

*47 やはり『貧者の息子』では、モスクについて以下のように書かれている。「外から見ると、モスクは隣接する家屋と区別がつかない。内部の床はコンクリートで固められ、壁は石灰で白く塗られている。がらんどうで、悲しさを感じるほどに簡素である。Vues du dehors, elles ressemblent aux autres maisons leurs voisins. Au-dedans, le sol est cimenté, les murs sont blanchis à la chaux. C'est vide et désolant de simplicité。」(FP, p.14)

*48 ブルデュー「家または転倒した世界」に挿入されている、カピリアの家の平面図からは、そこが閉じた空間には見えない。

timashrat とは^{*49}カピリアの村では重要な習わし・行事であるとされるが、これについては、ブルデューのエクリチュールでも書き取ることは難しいだろう。カミュのルポルタージュでは、その性格上ふれられることもなかったが、フェラウン自身も『貧者の息子』では、これについては書いていない。『カピリアの日々』には、一章をもうけてティムシュレット timchret がどう行われるかが面白く書かれている。次章でこれを読んでみたい。^{*50}

カピリアとカピリア人がどう書かれたか、フェラウンのテキストが生まれる条件の生成に、最終的にインパクトを持ったカミュのテキストの働きを読み、また、ブルデューの民族誌的記述が、『貧者の息子』の読み解きを遡及的に補足するテキストであることを考えてみた。

『貧者の息子』は、フルル・メンラッドというカピリア人の成長の物語だが、この成長にはエクリチュールの獲得という大変重要な面がある。主人公の学校への入学は前半【家族】のなかの一断片で語られるが、学業の内容については一切ふれられていない。学校は、一足先に通い始めた、幼なじみのアクリに伴われて、さしたる考えもなく、父によって行かされた場所で、登校初日には、滅多に食べられないご馳走の牛乳入りのクスクスが喉を通らなかつたほどだった。しかし、あるきっかけによって、フルルにとって学業の意味が大きく変わり、勉強に精を出すようになる^{*51}（第Ⅱ章参照）。男の子はみな小学校に通ったようだが、初等教育の課程を修了して免状まで得る者は少なく、その先、中等学校にまで進学する者はごくわずかである。少なくとも、初等教育修了の免状がなければ、エクリチュールを獲得したとは言いがたい。物語の後半では、より段階の進んだ教育と、読むこと/書くことの獲得をめぐるいくつもの出来事が語られることになる。

フルルが十一歳、まだ小学生の頃、父ラムダンが突然病に倒れる。一家の大黒柱が働けなくなったとき、カピリアの農民の家族がどれほど困難な状況に投げ込まれることになるのか、そこから脱出するのがどれほど大変かが事細かに描かれる。これは『貧者の息子』の後半【長男】の前置きの直後、断片1から4へと続く挿話であるが、【長男】の断片は7までで終わるので、この挿話は後半の半分以上をかけて語られることになる。^{*52}物語はここから三人称で語られる。この挿話は、カピリアに大変特徴的な民俗である出稼ぎ（＝移民）の事情を説明するとともに、父の出稼ぎという大きなトピックの進展を記述しながら、折々に細部を周到に書き込んで、書記システムに無縁のカピリア語使用者にとって読むこと/書くこと *li-écri-re* とは何であるのか、またそれへのイニシエーションがいかなるもの

*49 フェラウンは同じ祭を『カピリアの日々』では、timcheret と表記している。

*50 Bourdieu, *op. cit.*, p.23

*51 フルルはそれほど勉強熱心な子どもではなく、学校生活二年目も最初の学年にいた。よく勉強するようになるのは、父が「担任の先生とお前のことを話した」と言ってからのことで、自分の学業に対して、父も教師も関心を持っていると知ってからである。しかし、これについても、実際には、父がたまたま先生と会ってそういう話題になっただけで、両者ともことさら自分のことを気にしていたのではなからう、と付け加えている。

*52 初版では、『記念日』所収の【ブザレア】以降も【長男】に含められるので、この比率はやや小さくなる。この挿話が三人称で語られる【長男】の最初に置かれているのは重要である。フランス語の読み書きの獲得が進むとともに、主人公は共同体から遠ざかっていく。

であるかが詳述されている。ここに書き込まれた、大小の具体的な実践である出来事は、植民地支配の権力関係の構造と作用の表れとして読み解くことができる。そして、それらの実践とはもっぱら言語とエクリチュールを巡るものなのである。及ぼされた権力の押しつけがましき、ときには死に至るまでのその凶暴さをカピリア人はどうかいくぐって生き延びたのだろうか。そして、作家は、話者は、一体どのようなエクリチュールの戦略をもって、それを記そうとしたのだろうか。

大家族の長であった祖母タサディットが亡くなった後、ルニスとラムダンは残されたわずかな財産をきっちり二分割して相続する。^{*53} そうなると、それぞれの家族はもともと同じ大きな家族の一員で相互扶助の間柄であったのに、あたかも隣り合うライバルのようになって生活ぶりを競い合うようになった。その後、家族の延長のような存在であった二人の叔母（母の妹たち）を失ったフルルには、両親姉妹以外に無償の愛情を注いでくれる人がいなくなった。うち続く不幸のなかで、唯一の喜びはメンラッド家にフルルの弟ダダールが生まれたことであった。それは喜びではあったが、父ラムダンにとっては家族に対する責任がより過重な労働としてのしかかる。そんなおり、生来頑健で働き者のラムダンに原因不明の病気が襲いかかった。

ちょうど、無花果の収穫期にさしかかった頃であった。いつものように一日の野良仕事を終えて帰宅した父は、すでに高熱があつてすっかり消耗しており、倒れるように寝込んで、そのまま病の床に伏せてしまう。ラムダンは、無花果の収穫期から秋冬、翌春の美しい季節が巡ってくるまで回復しない。その間、唯一の働き手を失った家族は、わずかな持てるものを全て食べ、売り払って命をつなぐが、ついに、村の金貸しに借金せざるをえなくなる。その総額はカピリアの貧しい農民が土地を相手にいくら粉骨砕身して働いても返せるようなものではなく、ラムダンはようやく床から離れとき、莫大な負債を背負っていた。借金を返すためにラムダンはフランスへの出稼ぎを決める。家族内で唯一の一人前の働き手が病に倒れたとき、援助や救済の道は用意されていなかった。メンラッド家、本来の呼び名によればシャバンヌの息子たちが家を二つに分けずにいたら、相互扶助がもう少し発揮された可能性はあった。無論、ラムダンの兄ルニスが手をこまねいていたわけではない。しかし、ルニスにも養うべき家族があった。家族の単位が小さくなると、一家の生計を支える唯一の一人前の働き手の負担と責任はおのずと大きくなる。当時のカピリアの農民にとって、出稼ぎはこういった状況での唯一最後の手段だった。^{*54}

カピリア人の移民・出稼ぎは、フランス統治以前からの古い伝統を持つ民俗である。オスマン帝国時代に遡って、カピリアの人々はマグレブ各地（現アルジェリア、モロッコ、チュニジア）などに赴いて仕事をしている。人々がカピリアを出て行ったのは、物語にも

*53 分割相続の様子は【家族】8に詳しく書かれている。壊して建て直すことができない住まいは中庭の真ん中に線を引いてそれぞれの側にある部屋を兄弟が自分のものにした。その際、納戸や家畜を飼う場所のある有利な部分をラムダンは兄のルニスに譲り、妻のファトマは悔し涙にくれる。土地（農地）については、果樹一本にいたるまで細かく、平等に二分割された。

*54 カピリア人のフランス本国への移民＝出稼ぎについては、カミュ「カピリアの悲惨」、『貧者の息子』続編の【戦争】にも言及がある。

語られているように、カビリアは山岳地域で農地も作物の種類も少なく、生産性も低かったからである。また、カビリアは人口密度が高い。フランスによる植民地化以前は、オリブ油や装身具、日常雑器（陶器）の行商が行われ、これは時に大きな規模になることもあった。家畜の移動売買にも携わっていたようである。フランス植民地になってからは、農業労働者としての平野部への移動があり、さらに、移動が習性になっていたカビリア人が地中海を越えてフランス本国へと渡るのは当然の成り行きだった。^{*55}

長い歴史をもつカビリアの移民がカビリアの人々の暮らしに及ぼした影響は作品中にもその跡を残している。ティジの村の眺めには、フランスから持ってきた金で立てられた白い家の赤瓦や、そびえ立つファサードが目障りである（FP, p.14）。ラムダンの兄ルニスの嫁であるヘリマは、故シャバヌの出稼ぎ仲間であった男の娘で、タサディットは、若い頃あちこちに出て行っては稼いでいたのだから、嫁の実家には金があると見込んでヘリマを長男の嫁に選んだのだった（この目論見はすっかり当てはずれになる。）（FP, p.22）。

一番の働き手が己の土地を離れざるをえない出稼ぎは、唯一の有効な手段とはいえ、過酷で危険の大きい途^{みち}でもあった。カビリアの地を離れることが、共同体からの離脱・逃亡や追放を意味することもある。フルルの母ファトマの末の妹、ナナの夫オマールの場合に当たる（FP, p.82～）。オマールはナナとの結婚後すぐにフランスに渡り、長く帰ってこなかった。その間、オマールがフランスで何をしていたのかはよくわからない。働いて、ナナや老母・家族のために送金していたのではないことは確かだ。ナナは夫に捨てられたも同然で姉のハルティと二人で暮らしていた。ところが、オマールの母親は息子が不在の間に、両親をなくしてこれといった後ろ盾もない、ナナとハルティにおねだりする始末である。^{*56}そのため、一時帰国したオマールは一族から冷淡な扱いを受ける。ナナは、当然ながらいったんオマールの一族の家に暮らしたが、そういった事情で居所のなくなった夫婦は、ハルティ（三姉妹の真ん中）がひとり残った家に転がり込む。結局、ナナとハルティ姉妹が用意した旅費でオマールは単身、再びフランスへと去り、二度と帰ってこなかった。この人物について、まだ子どもであったフルルは大変厳しい見方をしている。ナナと二人で生家から逃げてきたとき、ハルティの家に居合わせた少年（この時、フルルが何歳であったのか、物語から特定することはできないが、十歳にはなっていないかと思われる。）は、オマールが泣くのを見て仰天し、嫌悪と軽蔑の感情を抱く。

*55 *Encyclopédie berbère, Kabylie : L'émigration kabyle*. 作品中では、植民地支配後、フランスへの移民・出稼ぎによってティジの村に起こった「変化」が、村を俯瞰する記述や、家族の人となりや暮らしぶりの紹介のなかに書き込まれている。それに対する、カビリアの伝統的な価値観からの評価も差し挟まれる。冷静で辛辣でありながらも、持てる者に対する羨望嫉妬の情もうかがわれる。話者の抑えめながらも皮肉っぽい語りは、結局、どこでも人は同じ、と思わせる。カビリアについての民族誌的知識があれば、物語中の村の眺めにおける異物の意味をより俯瞰的に読み取ることもできるし、主人公の父を始めとする男たちの出稼ぎの時間的空間的広がりを理解することもできる。しかし、物語自身は、移民・出稼ぎという民俗を決して説明解説はしないのである。

*56 【家族】10. 幼いフルルは、叔母たちの家で会ったオマールの母親の様子を冷静に観察する。老女が帰るときには、ナナがハルティがいつも小さな包みを渡し、老婆はそれをガンドウラの腹のあたりにしまうことを、フルルは見のがさない。

私は、一人前の男が泣くのを見たことがなかった。信じられなかった。男が泣くとは、 どういうことだろう。

Je n'avais jamais vu pleurer un homme. Je croyais la chose impossible. Je ne pouvais pas comprendre qu'un homme pleurât. (FP, p.85)

男としての振る舞いに決定的に欠けるこの人物を描くペンは容赦がない（このまなざしは子どものフルルそのままなのだ）。貧相な身体、その母親の貌とそっくり重ね合わされ恐怖心を抱かせるような容貌、しかも、このバルバロイは耳障りな発音で意味不明なことばを話すのだ。いずれも、カビリアの一人前の農民にはふさわしくない。結局、家族や妻を養うどころか養われ、妻の姉妹を頼ったあげくに、親族も妻も捨ててしまったのだから当然である。

カビリアの人々にとって、フランス本国は共同体の外部に存在する最も遠い場所であっただろう。理由はどうあれ、そこへの《脱出》は帰還を保証するものではない。まず、そこは遠すぎる。カビリア人に到達できるような場所なのだろうか。カビリア人がそこで生きるとはどんなことなのだろうか。確かに、フランスにはカビリア人出稼ぎの小共同体があった。しかし、音信（＝手紙）と送金という故郷との紐帯を確かなものとして維持し続けられないかぎり、本国にいるカビリア人はうやむやな存在へと拡散して消えてしまうだろう。故郷を遠く離れた者たちは、そんな誘惑/恐れに常につきまといわれる。スイユ版では削除されたが、フランスへの出稼ぎについては、フルルの姉バヤの夫がやはりフランスに行き、送金がない、というエピソードが書き留められている。^{*57} 出稼ぎに行った男たちが帰還しない、という話はカビリアにはたくさんあったに違いない。シャバンヌの息子ラムダンも信頼のおける男であることは間違いないが、出稼ぎをめぐる予期せぬ事故の恐れが、残された家族の心にいささかも兆さなかったとは思われない。

二度目にカビリアを去ってから、オマールの音信は完全に途絶える。オマールは決定的にカビリアを去り、共同体の紐帯＝桎梏から解き放たれたのだろうか。オマールが二度目にティジの村から出て行ったとき、ナナのお腹にはオマールの子が宿っていた。この懐胎は順調には進まず、赤子は成長不十分で胎内で死に、母親をも死に至らしめることになる。不幸はそれだけで終わらず、ナナの死に計り知れぬ衝撃を受けたハルティは発狂してしまう。発狂したハルティの奇矯な振る舞いになすすべもない家族が、異様な日々を倦み飽きた頃、ハルティはふいに出奔して、ついに帰ることはなかった。物語は、ハルティの悲劇的な死を示唆する。フルルが大切な人たちの相次ぐ死をオマールに結びつけて、彼に対するネガティブな感情を表明するのは当然である。^{*58} しかし、これは主人公の子ども時代の悲しいエピソードであるにとどまらない。人が生き続ける限り、あるいは死んでしまっても、人と人之间には関係性の循環が途切れることはないのだ、物語が続くように。『貧者の息子』に続く二作目の『大地と血』 *La Terre et Le sang*、それに次ぐ『上り坂の道』 *Les*

*57 『貧者の息子』初版の【長男】VI。フルルの二人の姉の結婚生活にふれた部分。スイユ版では削除されている。

*58 「私は、是非はともかく、彼をよく思っていない。彼は私に最悪の不幸をもたらした。Quant à moi, à tort ou à raison, je ne lui en voudrai toujours. Il a fait mon premier malheur.」 (FP, p.86)

Chemins qui montent は、世代を超え、共同体の内と外とが入れ替わりながら、人々の関係性が反復循環することを描いた物語である。『貧者の息子』の物語の外へ、カピリア人の移動の往復は新たな物語となって続いていくのである。

手紙を読むこと/書くことを獲得する

ラムダンがフランスに渡った頃、フランスにはすでにカピリア人出稼ぎ・移住者のコミュニティが成立しており、彼らは相互扶助を行いつつ、仕事を見つけ、手紙を代筆し、送金の便宜を図っていた。^{*59}父の出発は残された家族にとっても辛いものであり、とりわけ長男フルルにとっては、父不在中の家族の暮らしに対する責任感という強い緊張を強いるものだった。

フランスに渡ったラムダンからの最初の手紙は、出発から数えて二十二日目であったと話者は伝える。三週間という音信不通の日数は家族にとってどんな意味を持ったのだろう。その日は、指折り数えて待たれていたのである。手紙は村のアミン^{*60}が届けてきたが、^{*61}4時になるまでは誰も開封しようとしな。家族のなかで唯一「読むこと」のできるフルルが、その時間にならないと学校から帰らないためである。カピリアのティジの村の小路に面した狭苦しい家のなかのどこであろう、手紙が置かれたのは。家族が集まる炉の脇であったらうか、話者はそこまでは記していない。封筒は白い色だったのだろうか。それも、物語は知らせようとしな。

学校から帰ったフルルは長姉のバヤの手から手紙を受け取ってそれに口づけするが、ためらいがあってすぐに開封することができない。学校では中級のクラスに在籍していたが、「手紙は難しい」。それでわざわざ、小学校を修了して免状をもらった年長者を呼んで来て、手紙を読んでもらう。その物知り *savant* は、ためらいなく手紙を開き、読み、訳す。それを目の当たりにして、フルルは初めて、自分がその物知りとほぼ同等に手紙を読むことができるようになっていくことを知る。知らない表現は一つしかなかった。手紙は、自分の近況が順調であることを知らせ、相手（残された家族）もまたそうであることを望むという型どおりの挨拶で始まり、手紙の本体である、自分の留守中の農地の管理や、家畜の世話についての詳細で的確な指示のあれこれをはさんで、家族・親族への挨拶と、代書人への挨拶で終わる。

こうして、手紙の全文が読まれ、カピリア語へと翻訳、声に出して説明されて *expliquer*

*59 フランスへの旅立ちに当たって、ラムダンはガンドゥラとバーヌースを友人に譲り渡し、以前に出稼ぎに行っていた従兄弟から（フランス人の）上着とズボンを譲り受けて身丈に合うよう直してもらう。出発の日にはそれを着て行った。

*60 村長のこと。県知事が選ぶことになっていたが、実際にはムスリム地方官カイドが、もっとも高額の高額喜捨をした者を任命していた。村長は無報酬で、その役割はカイドや徴税官、憲兵の仕事を手助けすることである（『貧者の息子』CNH版の語義解説より）。

*61 フランスから来た手紙は村長が宛先の家族に届け、こちらからの手紙は一旦学校へ持って行く。通信/エクリチュールは官権に完全に掌握されている。

初めて、家族全員が満足する。ようやく、家族のもとにほんとうに手紙が届いた message ことになる。手紙にはすぐに返事が書かれることになり、物知りの朗読者はすぐに代書人になる。

代読者の手際を目の当たりにして、己の実力を慎重にはかかったフルルは、その姿勢を崩さない。己はまだペンを取らないのだ。手紙にはそれにふさわしい形式・定型の表現があることは知っているが、そのものは知らない。フルルは先輩が己の父親宛の手紙に記すその表現を一つも見逃さない。内心、二度と誰の助けも借りることなく手紙を書くのだと決意しながら。

書き上がった手紙は学校へ持って行き、それから集配人の手に渡ることになっていた。フルルの担任教師は、宛名の筆跡が教え子自身のものでないことに気がつき驚く。彼は、フルルに、「君はもう、自分で手紙を書けるはずだ」と請け合う。実際、カビリアからフランスに宛てられた二通目の手紙は、それから二週間後、フルルの手によって書かれるのである。

物語中では、学校を卒業して修了を証明するための試験に合格するまでに、フルルは全部で三通の手紙を書く。三通目は証書を授与されたことを報告するもので、学校の作文の時間に習った麗々しい表現が使われていた。当時のフルルにとっては、初等教育終了の晴れがましきは、その表現と一分の隙もなく一致していた。

学校で習った定型表現は……それ自体、彼には素晴らしいものに見え、パリで読まれるのにふさわしく思われた。それは現実の翻訳だったから、新たに証書を授与された者のペンから生まれたということが、彼の目には、いっそう晴れがましく尊く映ったのだ。

Cette formule apprise à l'école...lui parut belle en elle-même et digne d'être lue à Paris. Comme elle traduisait la réalité, elle lui parut plus belle encore et digne de sortir de la plume d'un nouveau diplômé. (FP, p.115)

父の出稼ぎに伴う手紙のやり取りは、フルルにとっては、初めて学校の外で自己のフランス語の能力が試される機会であった。この一連の経過の記述は、フルルの勉強が順調に進捗していることをも報告する。読むこと、書くこと、再度、読むこと、書くこと。勤勉な学徒の歩みはたゆみない。

物語の時間における、この証書の授与とは、少なくとも授与された者が手紙を読み書くための十分なフランス語能力を持つことを証明したと読むことが可能である。小学校を修了して試験を受け、証書を授与されたカビリアの少年にとって、フランス語の読み書きを獲得することは、いまだカビリア人としての己の生と深刻な裂け目を生じるような事態とは認識されていない。学校での成功は一点の曇りもなく喜ばしいことなのである。ここでも、「現実の翻訳」と、翻訳という語が使われる。いずれ、そう遠くない時には裂け目が生じ、それは深刻になるだろう。村を離れて獲得してゆくさらなる教育は、家族や村人の役に立つものに止まらなくなる。

証書を得た喜びを、誇らしく麗しく伝える手紙は父に届き、父からは、一時帰国者を通して手紙と金が届けられる。

彼〔フルル〕は、待ちかねた返事を、二百フランとともに受け取った。手紙と金は、フランスから帰る、父と同じ場所に住む(同宿の)友人に託された。この友人が村に到着したときは、その自宅まで話を聞きに行った。友人は、「父に代わって」フルルを抱擁し、母には金を渡した。それから、その人はスーツケースから、靴屋の分厚いカタログと、〈ゴーロワ・コレクション〉の恋愛小説を取り出した。それらは、紐でくくってあった。

「さあてと！ おまえさんは物知りだと見える。さあ、この本がおまえの父さんからおまえに贈る本だよ。とてもよろこんでいたさ」

フルルは、その荷物を受け取った。

Il reçut la réponse attendue avec une somme de deux cents francs. La lettre et l'argent avaient été remis à un ami qui revenait de France et qui avait habité à la même adresse que le père. Lorsque cet ami arriva au village, on alla l'interroger dans sa propre maison. Il embrassa Fouroulou « à la place de son père » et donna l'argent à la mère. Puis il tira de sa valise un grand catalogue d'une maison de chaussures et un roman d'amour : « Collection Gauloise », entourés d'une ficelle :
- Alors ! il paraît que tu es instruit, toi ? Eh bien, voilà des livres que ton père t'envoie. Il est très content, tu sais.

Et Fouroulou prit le paquet. (FP, p.116)

〈ゴーロワ・コレクション〉「Collection Gauloise」*⁶²とは、1924年から35年にかけてフランスで発行されていた通俗的な恋愛小説のシリーズである。この発行年代から考えると、物語中で言及されるのは、実在したシリーズであると考えられる。これは、48頁と極めて薄い冊子のスタイルをとった安価な読み物だった。内容的には、それほど露骨にエロティックなものではなく、ごく普通に売られていたようだが、残っている本の画像から読み取れる表題と表紙イラストからは、荒唐無稽なエロスの冒険への欲望をひととき満足させるような消費的な読み物であったことがうかがわれる。当然、小学校修了者にふさわしい内容をもった本ではない。

さらに、いま『貧者の息子』を読む私たちが当惑させる、靴屋の分厚いカタログ……。靴のカタログが意味しているものは何であろう。そのときフルルはまだ、靴を履いたことがなかったに違いない。ティジの村の子どもはたいていがそんなものだった。(FP, p.81) 靴を注文せよとは、フルルが学校を終えて働き手になり、一人前の男になるための準備なのだろうか。おそらく、学校で使う教科書以外でフルルが手に入れた最初の《本》がこの

*62 〈ゴーロワ・コレクション〉「Collection Gauloise」: 発行はパリにあったプリマ出版 les éditions Prima で、本シリーズでは228作が出版された。現在は同シリーズも発行していた出版社も存在しないが、古書市場に高値で流通しているこれらの本の、表題や表紙イラスト(二色刷)をインターネット上の画像で見ることができる。また、古書販売のための解説によると、この本は月に二回のペースで新作が発行され、一冊一フラン(ワンコイン)で買えた。後の有名作家が別のペンネームを使って書いたりもしていた(ジョルジュ・シムノン等)。

<http://forums.bdfi.net/viewtopic.php?id=2299> 等参照。

二つである。しかし、これらの《本》は本といえるのだろうか。父からの贈り物といっても、ラムダンには「本を選ぶ」ことなどできるはずがない。本の表題は当然読めないが、当時のフランス人あるいは現在の私たちから見ても、いかがわしい感じを漂わせる表紙イラストを「読み解く」ことさえラムダンにはできなかったかもしれない。あるいは、ラムダンは表紙のイラストさえ見なかったのだろうか。人に頼んで手に入れた《本》を同宿者に託しただけかもしれない。それにしても、父は息子の証書授与を喜んでいなかったわけではない。本は、精一杯の、息子への祝いのしるしであり、息子フルルはこの荷物 *paquet* を受け取った、のである。

父（多くのカビリア人）にとっての、エクリチュールというものの不可解さがここには表れている。ラムダンは学校に行ったことがなかった。ラムダンには本というもの、それを読むということさえ理解できなかっただろう。出稼ぎをめぐるエピソードのなかに置かれた、開封されないままの手紙（最初に父から届いたものだ）、そして、紐でひとつにくくられた、薄っぺらい恋愛小説本と靴屋の分厚いカタログ。これが父から贈られた《本 *livre*》だよと言われて、フルルが受け取るのはその《荷物 *paquet*》である。

この二つに加えて、物語中にはほかにも、エクリチュールの不可解な手ざわりがふと顔を出す瞬間がある。喧嘩の仲裁に持ち出される（第IV章参照）、ハンカチに包まれた聖なる本 *le livre saint* である（FP, p.45）。本作において、カビリア（ティジ）の空間に本という存在として言及されるエクリチュールはコーランを除いて他にない。唯一の本であるコーランを話者は決して「コーラン」とは呼ばない。

また、フルルの母たち三姉妹に祖父アフメドが残した財産が記された裁判所の記録（FP, p.23）。孤児になった姉妹にとって限りなく重要と思われる書類——証拠で、アフメドが口述して裁判官が書き取ったものだが、そこですでに誤解が生じた可能性があるとして、書かれていることは「信用がならない」のだが、シェイフが相続人たちに訳して読んで聞かせてからは、その紙は四つ折りにして反故で包んで壺に入れコルクで栓がしてあったと書かれている。これらは、内に何^{エクリチュール}かを容れてある包みとか箱・容器の姿をしてカビリアという空間に存在する。それぞれ大切な意味＝役割を担わされて。だが、それはカビリア人が交わす声としてのことばのように自在に生まれては消え、動くものではない。しかしながら、そこに書かれた不動のことばは、カビリアでは丹念に読まれ理解されるのではない。それらは、できるだけそっとしておかなくてはならない、取り扱い注意の物件なのだ。エクリチュールも本も、カビリア人の日々の実践にとっては、最小限の道具にすぎない。アラブ人が、ムスリムがやってこなかったら、フランス人が乗り込んでこなかったら、それは不要の道具だったのかもしれない。カビリア人はそれらを受け取り、場所を決めて相応の扱いをする。滅多に開かれない本 *le livre*、できる限り開封を遅らせる封筒、壺に籠めた相続書類。エクリチュールは希少な存在で、ときとしてよからぬ（アフメドの遺産文書は娘たちに何も残さない。）ことが書かれていたりする。それは常には閉じ込めておくのが最良の扱いであることを彼らは知っているのだ。

ことば—文字と声

父からの手紙、送金は順調に届いていた。しかし、フルルが小学校を終え、その後も奨学金を得て中等学校へ進学する準備をしているときのことだった。同じ村出身の若い出稼ぎ仲間が帰国して、メンラッドの家族に悲報をもたらす。父ラムダンが仕事中に負傷して、病院に収容されたというものだった。このとき、フルルは奨学生採用の試験を受けた直後だったが、上首尾の手応えに満足していた。そのよい結果を先取りして、「頭のなかは、父に成功を報告するための素晴らしい表現でいっぱいだった。しかし、それは無駄に終わる。Il pensait déjà à la belle phrase pour annoncer son succès à son père. Mais, cette fois, il n'eut pas à l'employer.」(FP, p.119)。

こういった事故も、出稼ぎに伴う大きな危険のひとつだった。フランス語のできないカピリア人が働ける場というのは限定されている。おのずと、工場や工事現場など事故の起こりやすい場所しかない。共同体への帰還をめざして懸命に働くカピリア人が、不慮の事故によって共同体から除かれるという結果になることもある。

帰郷したのはアマールという名の若者である。フルルはパリから帰ったばかりの彼にカフェの近くまで会いに行き父の近況を問うが、若者はすぐにはそれに答えず、とにかく母を呼んでほしいと言う。駆けつけたファトマとフルルに伝えられたのが、ラムダンが事故にあったことだった。

アマールという、パリから帰ったばかりの村の若者が、彼に悪い知らせを持ってきたのだった。彼は、カフェの近くでフルルに会い、少年のほうが、彼の手に口づけをして無事の帰郷を喜ぶと、悲しそうな表情で言った。

「おまえの父さんに会ったかどうか、聞きに来たのか？ 会ったよ、心配ない。お母さんをお呼びできてくれ。言づけがあるんだ」

「父さんからの手紙を預かっているの？ 僕に渡して」

「ポケットのなかにあるよ。ともかく、お母さんに来てもらいたいんだ。急いで」母は大急ぎでやって来た。

「ファトマ姉さん、あんたの子どもらは運に恵まれている。村の廟に寄進されたらよからう。ご主人は死ぬところだった。もう助かったから、何も怖がることはない」

かわいそうな妻とその息子は青くなった。

「あの人に何があったの？ あんたが言ってることは本当なの？ あの人が死んでしまったか危ないんだったら、隠さなくてもいい、私は大丈夫だから。もう二か月も便りが無いの」

「そんな、違います！ ご主人は治ったと言ってるじゃありませんか。彼は、工場で、ダンプカーのせいで怪我をした。病院に入院していたのです。間もなく、また仕事を始められるでしょう。これを納めてください。あなたがたへと預かってきた二百フランだ」

「あの人はまだ病院に？」

「先週、退院したばかりだ」

「それで、お金は？ あの人が持ってる！」

「いえ！ 彼に言われて、私はあなたがたに二百フランお渡しするんです。これです。」

よかったら、もう少し余計に差し上げます。手紙はこれだよ、フルル。彼は、近所の人 とうまくやっていってほしいと言っています。そうです、彼のことは何も心配いりません。彼は怪我をしたが、じき治ります。神は、あんたの子どもたちから父親を取り上げよう、と望んではおられませんよ」

母と子は、悲しい気持ちでうちに帰る。姉妹たちが畑から帰って来て、家族全員が炉のまわりに集まる。どの顔にも不安が読み取れる。ファトマはときおり、腰布の端で目をぬぐった。皆、声を殺して泣いている。この不幸は、近所の人たちには隠しておかねばならないからだ。

Amar, un jeune homme du village, venait d'arriver de Paris et apportait, lui, de mauvaises nouvelles. Il rencontra Fouroulou près du café et, comme le garçon lui embrassait la main pour lui souhaiter la bienvenue, il prit un air triste et dit :

-- Tu viens me demander si j'ai vu ton père ? Oui, ne t'inquiète pas, je l'ai vu. Va me chercher ta mère, j'ai une commission pour vous.

-- Il t'a mis une lettre ? Donne-la-moi !

--Elle est dans ma poche. Que ta mère vienne d'abord, dépêche-toi.

La mère arrive en toute hâte.

--Nana Fatma, dit l'homme, tes enfants ont de la chance. Renouvelle ton offrande à la kouba du village. Ton mari a failli mourir. Maintenant il est sauvé, n'aie aucune crainte.

La pauvre femme et son fils devinrent pâles.

--Que lui est-il arrivé ? Dis-tu la vérité ? S'il est mort ou en danger, inutile de le cacher, je suis courageuse. Il y a deux mois qu'il n'a pas écrit.

--Mais non ! je te dis qu'il est guéri. C'est un tombereau qui l'a blessé à l'usine. Il a été hospitalisé. Bientôt, il reprendra son travail. Tiens, voici deux cents francs qu'il vous envoie.

--Il est encore à l'hôpital ?

--Il était sur le point d'en sortir, la semaine dernière.

--Et l'argent ? Il l'avait sur lui !

--Oh ! Il m'a dit de vous remettre deux cents francs. Les voilà. Je peux vous en donner davantage si vous voulez. Voici la lettre, Fouroulou. Il vous dit de vivre en paix avec tous vos voisins. Oui, ne vous-inquiétez pas pour lui. Il a souffert, mais il guérira. Dieu n'a pas voulu priver tes enfants de leur père.

La mère et l'enfant rentrent tristement chez eux. Lorsque les sœurs arrivent du champ, tout le monde se rassemble autour du kanoun. L'angoisse se lit sur tous les visages. Fatma de temps en temps essuie ses yeux avec un pan de fouta. On pleure silencieusement car il faut cacher ce malheur aux voisins. (FP, p.119-120)

ここでの、アマルとファトマの話はかみ合っていない。夫の突然の事故の知らせにひどく動転していたにしても、アマルのことばはファトマの耳にあまり入っていないようである。あなたたちは幸運だ。ラムダンに事故にあつて怪我をしたが助かった。→死んでしまったのではないかと、本当のことを言ってほしい。二か月便りが無い。→ラムダンは（ダンプカーに挟まれる事故にあつたが、入院治療して）治った。お金もことづかつてい

る。→ラムダンはまだ入院しているのか？→先週、退院した。→お金はラムダンが持っているのか？→頼まれたお金をいま渡すのだ、手紙も。心配はいらない。しかし、手紙に書かれていたのは、二百フランを送るからできるだけ長くもたせることと、しばらくは送金できないということで、お金がなくなったら山羊を売り、またさらに……という簡潔な命令だけだった。

民衆の生活の知恵における会話の技術について、ミシェル・ド・セルトーは以下のように述べている。

日常会話のレトリックというのは、「パロールの状況」を転換させる実践であり、言葉をとおした生産であって、そこでは話し手どうしの位置の交差が、だれの所有するでもないオラルの織り目を織りあげてゆく。だれのものでもない一つのコミュニケーションが創造されるのである。会話というのは、言語能力の集団的かつ一時的なはたらきであって、「決まり文句」をあやつったり、ふりかかってくるいろいろな事件を「しのげるもの」にかえて楽しんだりする術のひとつなのである。^{*63}

les rhétoriques de la conversation ordinaire sont des pratiques transformatrices de « situations de parole », de production verbales où l'entrelacs des positions locutrices instaure un tissu oral sans propriétaires individuels, les création d'une communication qui n'appartient à personne. La conversation est un effet provisoire et collectif de compétences dans l'art de manipuler des « lieux communs » et de jouer avec l'inévitable des événements pour les rendre « habitables ».

^{*64}

アマールとファトゥマのことばのやりとりでは、ことばは一向に交差せず、コミュニケーションが成り立っていない。ファトゥマの動揺を取り除いてアマールの意図するところを伝えるには、その根拠が乏しすぎる。ここでは、アマールの口から出た途端消えてしまう声の証言はメッセージになり得ない。ここでは、通常、男のことばが担う、出来事の秩序化が失敗しているのである（第IV章）。

この後、一家の不幸を人に知られまいと声を殺して泣く、家族の痛ましい用心もむなく、ラムダンがフランスで負傷したという噂は村中に知れ渡る。その噂は噂なので、瞬く間にいくつものヴァリエーションができて、ラムダンは失明したのだ、両足を切断したのだ、死んでしまったのだと、ラムダンの怪我の程度はどんどん悪くなっていく。ラムダンがアマールに託したものはここではすでに消え去り、別のものへと次々と変わっている。

ラムダンが初めてフランスから送った手紙はいくつもの媒介を通して、そのことばは家族に届いた *passer*。しかし、この非常事態において、ラムダンのメッセージは特定できず、家族はそれを受け取ることができない。実際、ラムダンからの手紙はあまりにも短いもの

*63 セルトー,前掲書, p.32

*64 Certeau, *op., cit.*, p. LI

だった。アマールの話と、託された手紙の内容^{*65}からしてラムダンが死んだことはありえないのだが、メンラッドの家族は噂に翻弄される。結局、兄のルニスに着払いで返事を請う電報をラムダンの滞在先宛てに打つ。それに返事が来る。さらに、それには後から同内容の手紙も追加された。ルニスは確かなメッセージを受け取れる方法として外部へと書かれたことばを発せさせてその状況に対処した。そして、それは正しい結果を得られる方法 だったのである。

電報の返事が戻ってきた。続いて、すぐに手紙も来た。フランス人は嘘を書いてはいる まい。ようやくみな、安心したのだった。

Le télégramme revient, une lettre le suivait de près. Un Français ne peut mentir. On finit par se rassurer. (FP, p.121)

アマールの話が本当であったことがようやく証明された。ここで際だっているのは、生まれては消え、生まれた途端に変化する、声としてのことばと、カピリアの人々にとっては、常にすでに刻まれて書きつけられ、確定したことばとの違いである。書きつけられたことばの意味するところは、確かなものであり、もはや変化しない《真実》である。とき として、それはきちんと読んで検証することさえ不要である。フランス人＝フランス語は 嘘ではありえない。*Un Français ne peut mentir.*のである。外部からもたらされた文字のある言語＝フランス語がここではどんな役割を負わされるかをこのエピソードは示す。いっぽうで、私 たちもフルルの一家も、声としてのことばが容易に変化することで、極めて残酷な働きを することをここで改めて思い知らされる。他人の不幸に際して、同情よりは悪意が働くの は、人の心にとってそれほど珍しいことではない。しかし、悪意の空気が声によって醸成 されやすいのは確かであろう。カピリア的な声によることばのコミュニケーションは、小 さな共同体内ではすばやく循環する。この場合、出口がないままに多声化多重化すること ばの不自由さを突破するのは、むしろ不自由に見えるエクリチュールである。外部から（フ ランスから）届くエクリチュールはその確かさ（への信頼）によって、ぐるぐる回っただけの共同体内の声を分節化したり打ち消したりできる。そのとき、共同体の人々はあ る種の解放すなわち自由を手にする可以考虑することができる。

何か —— 気分とか欲望がふとどこかで生じて声に出され、人々の間で醸成され、それが具体的な欲求充足の集団行動の形になっていく様子は『カピリアの日々』のティムシュレット TIMECHR ET によく表されている。しかし、欲望を具体化するに当たっても外部からのことばの流入は必要である。

この習慣はブルデューの報告にも取り上げられているが、ティムシュレットが共同体にとっては 大変重要な《行事》であったと思われるのは、いわゆる村八分にあった成員は、ティムシュレットには参加できなかったからである。ブルデューによれば、これは、肉を食べる《行事》と紹介されている。その内容はよくわからない(第IV章参照)。しかし、『カピリアの日々』では、その訳のわからな

*65 二百フランとともに受け取った短い手紙には、怪我については何も書かれていないが、お金がなくなったときの対処法が具体的に書かれていた。(FP, 121)

さを維持しつつ、人々が少しずつ微熱のような不調を持ち始め、流行病のようにそれが伝播して行き、遂には牛を何頭か「買って潰して分け合ってむさぼり食う」高揚感が描かれている。

そんな大事件が差し挟まれたラムダンの不在が一年半に及んだころであった。放牧した羊を集め、弟を伴って帰宅途中であったフルルは、突然、父がフランスから帰っていることを知らされる。

九月のある日の夕方、フルルが弟といっしょに、放牧の終わった山羊の群れを連れて牧場から戻ってきた時のことだった。村の近くまで来て、子どもたち二人は祖父の従兄弟のアーセヌに会った。彼は、ロバに水を飲ませるために水飲み場に行く途中だった。アーセヌはダダールの上に身をかがめて、彼のほっぺをつまみ、話しかけた。

「急いで家に帰りなさい。兄さんに遅れるな。父さんが帰ってるぞ」兄弟二人が、驚きにぼかんとって道の真ん中に突っ立ったまま、動くことも口をきくこともできないでいると、アーセヌはにこにこしながら静かに行ってしまった。

Un soir de septembre, Fouroulou rentrait des champs avec son jeune frère, conduisant le troupeau de chèvres qu'il venait de faire paître. Près du village, les deux enfants rencontrèrent leur grand cousin Ahcène qui se dirigeait vers l'abreuvoir pour faire boire son âne. Ahcène se pencha sur Dadar, lui pinça la joue et lui dit :

--Cours chez toi, devance ton frère, ton père est arrivé.

Les deux enfants se plantèrent au milieu du sentier, béants de surprise, n'osant ni bouger ni parler, pendant qu'Ahcène s'en allait tranquillement, en souriant. (FP, p.122)

子どもたちにとってたとえようもなく待たれた時の突然の到来を、話者は美しい^{シーン}場面で語る。羊たちを引き連れた子どもがふたり、ロバを引いた老人と行き違う。ティジの村の暮らしの、夕暮れ時の当たり前の眺めである。老人は幼い子のほうに身をかがめて話しかける。つままれた、少年の頬はまだ柔らかかっただろう。老人の優しいいたずらが声となって少年たちの耳を打つ。子どもたちは呆然と立ったままだ。老人はほほえみながらゆっくりと去る。小さな共同体の暮らしのなかで、人の歩みが交差し、まなざしが会い、身体がふれあい、ことばが発せられる。子どもたちの驚きと喜び。彼らは走って行く、父のもとへ。ラムダンが怪我をしたときは、出所のわからない悪意がことばとなって共同体を循環した。それは幼い子どもをも選ばず家族を打ちのめした。しかし、同じ共同体でこのとき、年長者のことばは幼い者に届き驚かせる。老人の声が子らをあたたく包み、その気持ちを養い育てる。

セルトーが言うように、ここで老人と子どもたちは（ことばならぬ身体の）ことばを交わしコミュニケーションが創造され、メンラッド家が置かれた不幸とその気分は完全に転換されたのである。ラムダンは帰還し、家族と再会を果たしたのだった。

流刑地にて——ラムダンはどこから帰還したのか

少年ふたりが家に帰ると、父は家族や親戚、村人たちに囲まれて質問攻めにあっていた。アマールが帰国したときのように、出稼ぎから帰った者は、未だ帰らぬ者の便りを残された者に伝えなくてはならない。ラムダンは、問いすべてに丁寧に答え、託されたものをすべて受け取るべき者に渡して、帰還者に負わされたメッセンジャーとしての仕事を完璧に果たす。

帰還したラムダンは一見、大怪我をした様子などみじんもなく、カピリアにいたときより太って健康そうであった。顔も手も以前より白くなっており、血色はよかった。日々野外で労働するカピリアの農民はみな日焼けしている。一年半に及ぶフランス、パリでの労働・暮らしのせいでラムダンは脱色してしまった。いずれ、コレージュに進学するフルルも、村を離れてティジ・ウズの町に暮らすことになるが、町暮らしをするうちに、彼もいつの間にか脱色する。夏休みを村で過ごしてカピリア人らしい日焼けした肌に戻ったフルルを、今度は町の学校の同級生たちが見間違えることになる（FP, p.144）。

ラムダンが、健康で強壮なカピリア農民という資質を一時にせよ病によって失ったために、結果的に共同体から放擲されてどうにかたどり着き、またそこから帰還した場所とはどんな場所であろうか。それを探るために、私たちはカフカを読みたい。1914年に発表した「流刑地にて」（単行本としての刊行は1919年）である。この作品は、植民地支配における宗主国の言語と、その被植民者に対する暴力を描いたものと読むことができる。細部にわたって、ちょっとしたエピソードに至るまでそれは見事に一致しているので、本国と植民地という舞台設定の相違にもかかわらず、そう長くはないこの小説をまるごと引用したいという欲求にかられるほどである。この作品は、それ自体の設定にもかかわらず、あるいはその設定こそがあらさまに示してみせるように、エクリチュールそのものの暴力と、その制度化自動化についての小説である。この作品には、カフカ自身による朗読会で聴衆が気を失ったというエピソードがあるが、^{*66}「敏感な聴衆の意識には、そのおぞましがびたりと届いてしまったということになる。

この作品では、流刑地というやや抽象的な舞台設定のもと、時も所も不明の、「文明」と「野蛮」のフロンティアでおぞましい悪夢のような出来事が展開する。どこかの国の流刑地植民地（流刑地でしかない場所、純粋な流刑地などあるはずはない）にひとりの旅行者が学術調査でやってくる。この流刑地では、支配・管理する者はフランス語を話しているようだ。そこを任地とする将校と旅行家はフランス語で会話する。^{*67}奇妙なことだが、物語中には、流刑に処せられた者は現れず、将校のほかには、この地に勤務する兵士だけである。兵士はフランス語を解さず、土地のことばをつかっている。彼らは、本国から来たのではなく、もともと流刑地の住人だったのだろうか。それは不明のままである。また、

*66 このエピソードは、『流刑地にて』（u ブックス：カフカ・コレクション）白水社の巻末につけられた訳者解説「『流刑地にて』の読者のために」で、池内紀が明かしている。

*67 流刑地の本国がフランスであるという設定であると断定はできない。フランス語というのは、兵士にはわからない言語として言及されており、旅行者・学術調査者と将校に共通な言語としてフランス語が出てくるのかもしれない。

流刑地はひどく暑い土地であるとされているが、物語には終始、ぞっとするような冷たさ がつきまといっている。この物語にはいくつかのぎくしゃくした不整合があるが、それはそのままにしておくしかない。

ともかく、旅行者はいきなり、「不服従、並びに上官侮辱の罪」に問われた兵士の死刑の執行に立ち会わされることになる。将校が奇妙な処刑機械を見せて、その働きを説明する場面から、この小説は始まる。まず、エクリチュールの自動機械の登場である。この機械は前任の司令官の発明品であり、将校自身もその開発に携わったという。将校がよくできていると自慢するこの処刑機械は三つの部分からできている。処刑される者が横たわる部分である、最下段の《ベッド》、処刑のプロセスが書かれたプログラムと、その内容を伝える歯車がセットされる、上段の《製図屋》、両者の間には、《製図屋》の〔指示〕通りに動いて《ベッド》にくくりつけられた囚人に苦痛を与え（最終的には死に至らしめ）るための《馬鋸》（引用部では《まぐわ》）がぶら下がっている。《馬鋸》の役割はそれだけではない。《製図屋》には囚人が犯した罪に応じた図面と歯車がセットされ、《馬鋸》は、その罪を囚人の身体に書き込むのである。つまり、書くことが、書かれる者にその者の行為の意味を刻み、それが書かれた者を死に至らしめる、ことになる。旅行者は将校に、さも当然のことのように、図面を読むよう促される。

……紙の上には迷路じみたものがあるだけだった。いくえにももつれあった線がびっしりと紙面をうめていて、白い余白をみつけたすのさえひと苦勞というものだった。〔強調筆者〕

「さあ、お読みください」と、将校が言った。

「読めません」と、旅行家が答えました。

「一目瞭然じゃありませんか」

「とても複雑ですね」旅行家は遠慮がちに言った。

「私には判読不可能です」

「そうでしょうとも」満足げに笑いながら将校は書類入れに紙を収めた。

「小学生用の手習い帖ではありませんからね。熟練が必要です。熟練をつんだあかつきには、あなただって読めるようになりますよ。単純な書体であってはならないのです。即座に殺すのではなく、平均十二時間はもたさなくてはなりません。……本来の判決文をとり巻いて、たくさんの飾り文字があるのです。実際の文字はそのほかのからだの部分を受け持っています。いかがです、《まぐわ》、並びにこの機械そのものがいかに精巧にできているか、おわかりになったでしょう……」^{*68}

*68 「流刑地にて」『カフカ短編集』p.66-69

「白い余白……」は注目に値する。書きすぎて余白のないエクリチュールは解読できない。何も書いていない状態へと反転してしまう。マクドゥガルが紹介する、カビリア人アラブ起源説のようなもので、どうしても不整合が残るものを、無理矢理一貫性を作ろうと苦心惨憺して書き重ねているうちに、矛盾だらけで読めないということになってしまう。^{*69}書きすぎたエクリチュールの線が、白い紙を真っ黒に塗りつぶしたらどうなるのだろうか。そのとき紙面は白へと反転する。書かれていることは何一つわからないのだから、何も書かれていないのと同じである。しかし制度化し自動機械化したエクリチュールの動きはもはや誰にも止めることはできない。

……

……《まぐわ》が書きはじめる。囚人の背中に最初の文字を刻み終わると、綿つきの《ベッド》が動いて囚人を横向きにする。すると《まぐわ》が、そこにまた文字をきざむ。では、刻み込まれた傷口はどうなるのか。綿には特殊加工がほどこされておりましてね、ギョッとおさえつけると即座に血がとまるのです。血がとまれば、その上からさらにまた文字を刻み込めるといふものでして、……^{*70}

この処刑機械の優れた特徴であると将校が自慢するのは、処刑が極めて緩慢に（十二時間）行われるよう設計されていることだ。囚人は《まぐわ》に傷つけられながらも、《ベッド》が自動的に滲んだ血液をぬぐってくれ、その《ベッド》に備えつけられた容器から食べ物を摂取することさえできて、延々と死を先延ばしされるのである。それは苦痛に満ちた緩慢な死である。それについて、旅行家に対する将校の説明が続く。

……〔処刑が始まって〕六時間たつと、なんとおとなしくなることでしょう！ どんなに愚鈍な男にも悟性がにじみ出てくるときなのです。まず目のあたりにあらわれます。それから全身にひろがっていくのです。……囚人は判決を読み取ろうとしはじめます。……先ほどおわかりになったでしょうが、判決を目で読み取るのは容易なことではありません。だからして、囚人は、からだの傷口で解読するのです。たやすいことではありませんよ。さらに六時間はかかります。それが終わると《まぐわ》が囚人をグサッと刺し貫いて、穴の中へ放り込みます。……以上でもって裁判は終了したわけでした、自分たち、つまりわたくしは兵士ともども死体を埋めるのであります^{*71}

読むことを知るとともに、悟性が現れるというのだ。そしておとなしくなるのだと。この流刑地では、読むことを獲得することは、知って死ぬことである。

しかし、まさに処刑されようとする兵士は、一体、死刑に値するほどの罪を犯したのだろうか。将校が旅行者にした説明によれば、兵士はある中隊長の従卒だったが、見張り番

*69 Arabs and Berbers ?, in *History and the Culture of Nationalism in Algeria*

*70 カフカ, 前掲書, p.66-69

*71 同書, p.70-71

中に居眠りをして、それを発見して鞭打ちを与えた中隊長に反抗したのだという。それは 死刑に処せられるような罪なのだろうか。旅行家と将校の会話から、囚人は裁判も受けられず、自分の罪が何かさえ知らされないまま処刑されるのだということがわかる。将校が 言うには、そんなことは自明のことであり、刑の執行そのものが裁判であり処刑によって 囚人はその身体に裁判の結果を書き込まれるのである。

この地で行われていることのおぞましさは、裁判/判決と処刑の手続きがほぼ同等の意味を持ち、そのすべてが自動機械化されていて、囚人は必ず死に至るということである。罪は自明のものとして裁判の審理はない。それゆえ、かえって罪は隠されてしまうことになる。処刑機械そのものは、この地の制度（と言ってよければ）の象徴でもある。

自動機械の動き＝処刑の執行ははっきりと、書く行為のメタファーとして描かれており（いや、メタファーでさえなく、処刑＝書くことである）、自動機械は書く人のメタファーであると読み取れる。書くことは暴力である。そして、書くことは制御がきかない自動的な動きになりうる。こういったエクリチュールについての残酷なメタファーを「カフカ にとっての」という限定のもとにだけ読解してはならない。^{*72}カフカの特異性はこのようなメタファーによって、エクリチュールというものが否応なく到達する異様な地点を示して見せたところにある。異様で残酷なディストピアの形象、その象徴でもある処刑機械が 一気に現実の世界、あたりまえのふるまいや現象に取って代わる。流刑地において、囚人 自身はエクリチュールの行為＝読み書きの埒外にありながら否応なく、エクリチュールの 自動機械的に刻みつけられ、血を流し、拭き取られ、生き延びさせられ、また刻まれ、傷だらけになり……。遂には死に至らしめられる。

ラムダンのように、その地のほとんどの住人が自分には理解のできない言語を使っている場所で、終日、休日までも工事現場で働いている人間にとって、そこはカフカが描く流刑地に限りなく近づく。流刑地の兵士同様、その労働はといったい、全体のどの部分であり 何の意味があるのか、当人には理解できないだろう。そのような環境では、周囲にある機械はすべて処刑機械のようであっても不思議はない。その肉体としての存在にとっては、責め苦に囲まれ脱出の無い作業場はディストピアそのものである。

カフカの流刑地では、旅行者の目前で執行されようとした処刑は機械の不具合…？によって中止されて囚人は解放され、なぜか、執行者である将校が自らを壊れた処刑機械にゆだねて絶命する。このとき、壊れた機械は制御された複雑な動きができなくなったため、じっくりと時間をかけて文字を刻むことができず、早々に将校の額にとどめの鉄の針を突き立てたのだった。

父ラムダンは、家族みなに宛てた土産物（衣類、パン）のほかに、フルルには読解しなくてはならない《書き物》を三つ持ち帰っていた。父は、小学校を修了して免状をもらった息子は、読むことを十分に獲得したと信じている。ラムダンにとって、エクリチュール はあまりに未知のものであり、小学校卒業者のリテラシーを推し量ることなどとうていできなかつた。まず、父は財布の中から書類の束を取り出す。それは、怪我をして入院した

*72 斎藤昌人「一カフカ像：『流刑地にて』を巡って」、鈴木克則「罪状なき処刑」参照。

ときの病院の医師が書いた「診断書」であった。おそらく、フルルにとっては初めて見る、フランス人の肉筆の筆跡である。何頁かにわたる診断書のうち、フルルにはっきりと読めたのは、レターヘッドの病院名（印刷されたものだろう）と、紫色のスタンプだけだった。後は皆目わからないのに、「わかったか？」と父に問われて、フルルはわかったふりをする。

次いで、父は、シャツのボタンをはずして、子どもたちに手術の痕を見せる。それは、父の腹を縦に走り、臍を貫いて走る傷跡だった。事故にあったとき、ラムダンは目に見える外傷は負わなかった。しかし、おそらく体内で出血していたのだろう。仕事に復帰したラムダンを痛みが襲い、新たに入院した病院で大きく腹を切る手術を受けなくてはならなかった。体内の血液を排出し、出血を止める処置がされたと推測できる。

最後に、父はスーツケースから長い巻き紙と、ノート状に綴じた紙を取り出す。これらの紙は、「セーヌの民事法廷の判決」を記したもので、太くきれいな筆跡だったのでフルルにも十分読むことができた。この判決は、ラムダンが事故によって受けた損害の賠償に関するもので、最終的にラムダンは保険金と、終身年金をもらえることになったのだった。

ラムダンのフランスにおける労働と生活は、『流刑地にて』の囚人(=兵士)に等しいものである。カピリアを遠く離れた彼の地は流刑地そのものであるだろう。ラムダンは、その土地で使われるフランス語を読むことも書くこともできない。それどころか、故郷ではほとんど耳にしたこともなかったはずだ。借金返済の金を稼ぐために日々切り売りする肉体労働は、同じ休みなない労働であっても、カピリアの自分のオリーブ畑や無花果畑での労働とはまったく違った意味を持つ。それは借金という罪を償うための懲役刑を思わせる。怪我をしたとき、ラムダンは精錬工場で日曜日にも休むことなく働いていた。彼が怪我をしたのは、その日曜日のことで、ダンプカーの移動式荷台と壁の間に挟まれてしまったのだった。会社の診療所に入れられたが、目立った外傷がなかったため、会社も本人も早期の退院を望み、そうして一週間後には工場に戻ったラムダンを激しい痛みが襲う。結局、ラリボワジエール病院に再入院して手術を受けなくてはならなくなったのだった。

カフカがほとんど常にそうであるように、物語が始まると一切の前置きがないまま、われわれはすでにおぞましい反世界的な場を目前にしている。いっぽう、『貧者の息子』は、そこが流刑地であること、そこで起こったことをどう知らせようとするのだろうか。

父ラムダンの身に起こったことは、フルルによってこそ読み解かれなくてはならなかったが、それは容易ではなかった。ラムダンが、家族のなかで唯一文字の読めるフルルに提示した三つの課題のうち、まず最初の診断書でフルルは躓く。印刷された文字であるレターヘッドとスタンプの文字以外はまったく読むことができない（「書いた本人を呼んでくるしかなさそうだった」FP,p.124）。ラムダンが負った怪我の詳細と、それに施された治療が詳しく書かれていたはずだが、医師という専門性の高い職業の人間が手書きで書いたものであってみれば、怪我の状態にせよ、施された治療＝近代的な医療行為にせよ、カピリア人小学生の優等生に読めるようなものではない。診断書というものは、それが形式を踏んで書かれた正しい文書であることを明白に示す部分（ここで言えば、病院名のレターヘッドや紫色のスタンプ。おそらく最後に記されていたであろう、作成者の署名。ただし、署名であることがわかるだけで、おそらく読み取れない。）を除けば、専門外の人間に読

みやすいことを意図して書かれることはあるまい。むしろ、専門家以外には読み取ることのできないものとして書かれることで価値と権威をもつようなものでさえある。父に問われて、読み解けたふりをする息子は、それから何を読み取るべきかさえわからずとまどったままである。だがここは、父の期待を裏切らぬことが肝心だ。そして、フルル以外の家族には読めたか読めないかさえわからないのである。

次に、父が腹の傷跡を見せたとき、怪我とその治療が父の身体に書き込んだものを、子どもたちは目にする。一本の単純な線は長々と父の胴体の中央を貫いて走り、診断書が読めなくとも、父の身に起こったことを衝撃的に伝えるに十分すぎるものであった。むしろ、その効果は診断書などうてい及ぶところではない。父が被った暴力に子どもたちは恐怖する。近代的な医療が施す手術の意味などカピリア人に理解できるはずがなかった。カピリアにおいて、怪我の治療とは、第IV章の「男たちのことば」で読み解いた暴力事件で、発端となったフルルの怪我への対処方等に示されているように、「煙草入れの底を探ってつかんだものを傷口に塗りつけて、ガンドウラを割いて包帯代わりにする」とか「布きれを燃やした灰を傷に塗る」ようなものでしかない。その後の喧嘩で大怪我を負った伯父のルニスや、相手方のブサドにも治療らしきものが施された様子はない。(FP. p.36, p.39)

「流刑地にて」を参照するならば、父が最初に財布から取り出した、読めない診断書は、《製図屋》とか《凶案家》と呼ばれる、複雑な線が交錯する図面、《馬鋏》に処刑を実行させるためのプログラムに擬せられる。将校はいきなり、旅行家にそれを読むことを促しておきながら、旅行家が読めないと言うと、熟練が必要なのだと嘯くのである。しかし、図面や機械の動きがいかに込み入った複雑なものであろうとも、実際の処刑は極めて単純なものである。囚人の身体に傷を負わせること、傷を負わせて死に至らしめることである。だが、人を死に至らしめるためにはそれ相応の理由が必要だ。こうして、ラムダンの腹に真一文字に走る傷跡は、フルルにはもちろんのこと、文字など読めない家族みなに、父の身体には凶行が加えられたことを知らせるに十分だったのである。ラリボワジュール病院の医師がラムダンの腹を割いたのは怪我を治療するためだった。しかし、そのメスは父の身体を締め付けたダンプカーの鉄の荷台と同じく、その身体に新たな怪我を負わせたことに違いはない。恐る恐る傷跡に触れてみる子どもたちにラムダンは請け合う。「切ったけれど縫ったから大丈夫」だと。入院は三か月の長きにわたり、「子どもたちとも故郷とも離れて、尽きない苦しみと不安の日々を過ごした」(FP, p.126)。しかし、父が言うようにすべては過去のことであり、ラムダンは生還し、傷が残っただけだった。

父から差し出された三つ目の書き物は、太くてきれいな筆跡であり、フルルにも読んで十分理解できるものだった。これも、ラムダンには当然読めないものだが、そこに書かれていること、その書き物が己にもたらしたものについて、ラムダンはフルル以上によく理解していた。労災保険金の支払いを拒否したばかりかラムダンを訴えた会社を相手に裁判で闘って勝利し、保険金の支払いを受けることになっただけでなく、要求さえしなかった。終身年金までも手に入れたのである。裁判にあたっては、ラムダンは多くの人に助けられた。

負わされた怪我が大きかったにもかかわらず、強壯なカピリア人は回復した。しかも、多額の現金まで手に入れて。さらに、何が書かれているかわからない診断書が勧告していたのだから。医師たちはラムダンに一年間の休養まで勧めていた。「流刑地にて」の囚人

とは違って、ラムダンが刑を生き延びたのみならず、懐に一万フランを入れて故郷に帰還する。本人も妻のファトマも、結局、怪我をしてよかったと思っていた。「丈夫な皮膚を持った」カビリア人は出稼ぎに行く前よりももっと回復していた。太って血色もよく、白くなっていた。《流刑》の処刑機械が刻んだ傷などもとせず、それは長い一本の線と なって残っただけだ。それは、いまやたくましくしたたかなカビリア農民の証とさえなつた。彼の地の医師は、痛めつけられた身体には一年の休養が必要だと言った。しかし、己の身体を読むことにかけては、フランス人医師たちよりもカビリア人農民のほうがずっと長けていた。「ラムダンは、自分自身ではすこぶるよい状態だとわかっていた。彼の畑が待っていた。友も敵も、ともにそれを狙っていた。行って、みなに、彼が以前と変わりがなく壮健であると示すのだ。彼が休んだのはたった二日だった……。 Ramdane, pour sa part, savait qu'il se portait bien. Son champ l'attendait. Ses amis et ses ennemis le guettaient. Il allait montrer à tous qu'il était toujours aussi fort. Il ne s'accorda que deux jours de repos…」(FP,

p.127) したたかなカビリア農民は、再び己の大地を踏みしめる。今度は彼がその手に鋤を握り、土を耕す番だ。鋤を打ち込めば打ち込んだだけ土は気と混じり、より豊かな実りを約束してくれる。

父が帰還して、三つの書き物を提示する前に、フルルは中等学校に進学するための奨学金の試験を受けていた。試験科目には作文 *écrire* もあった。今度は、書くことである。

作文のテーマは、彼にぴったりのものだった。「あなたのお父さんはフランスで働いていますが、文字の読み書きができません。お父さんは、あなたに、読むことも書くことのできない者が彼の地で遭遇する困難や、教育を受けなかった悔み、教育の有効性について語ります。」彼の父親はまさにこのケースだったから、父が最小限の買い物をするときにも、仕事を探するときにも、また現場監督から指示を受けるときにも大変困ることが、彼には想像できた。父は地下鉄でも街中でも、道に迷うこともあるだろう。それに、父は家族で内々にしておきたいことを人に知られないようにすることもできない。人に頼んで手紙を書いてもらわねばならないのだから。つまり、材料に事欠かないので、彼はよい作文を書くことができたのだ。

Le sujet de la rédaction lui allait bien : 《Votre père, ouvrier en France, est ignorant. Il vous parle des difficultés qu'y rencontrent ceux qui ne savent ni lire ni écrire, de ses regrets de n'être pas instruit, de l'utilité de l'instruction. 》 Son père étant justement dans ce cas, il put imaginer son embarras, quand il faisait son marché, quand il cherchait du travail, quand un conremaître lui donnait un ordre. Il put le supposer s'égarant dans un métro ou une rue. Il lui reconnut l'impossibilité de garder les secrets de famille puisqu'il devait faire écrire ses lettres par d'autres. Bref, les idées ne manquant pas, il fit une bonne rédaction. (FP, p.119)

しかし、怪我から回復した父が帰還の際に携えてきた三つの書き物から、父に起こったこと、フランスに出稼ぎに行った文盲のカビリア農民の身体にどんなエクリチュールが刻まれたかを讀もうと試みた後には、フルルは自分がその試験で「読むことも書くこともできない者が彼の地で遭遇する困難や、教育を受けなかった恨み、教育の有効性について」とうてい十分には書けなかったことを思い知るのである。

もしフルルが奨学金の試験の時にこの物語を思い描くことができたなら、課題の作文に必ず一節を付け加えて、父の苦勞を事細かに語り、おそらく試験管たちを驚かせることになったに違いない。

Si Fouroulou avait pu imaginer cette histoire au concours des bourses, il aurait certainement ajouté un paragraphe à sa rédaction en racontant tous les tracas de son père, ce qui sans doute aurait bein étonné les examinateurs. (FP, p.126)

おそらく、物語は、フルル・メンラッドが奨学生試験の作文の課題で十分に書き切れなかった「読むことも書くこともできない者が彼の地で遭遇する困難や、教育を受けなかった恨み、教育の有効性について」を、父メンラッドの出稼ぎのエピソードとして書ききることによって課題を完成させようとしたのだ。エクリチュールのない言語の使用者の困難について書くということは、外部の人間にはできない、という意味でこのテーマはカビリア人にうってつけであった。しかし、フルル・メンラッドが書こうとしたのは、出題者の想定の外にある形でのフランス語のエクリチュールであった。

エクリチュールは遠ざける —— まとめにかえて

年長者の助けを借りてフルルが手紙を読もうとしをたとき、自分が知らなかった表現は結局、ひとつしかなかったと書かれている。「心配は無用だ。Il ne faut pas vous faire de mauvais sang.」というものである (FP,p.114)。フルルにとって、手紙を読むことまたそれ以上を書くことを躊躇わせ妨げているのは、手紙という形式を自分は十分には心得ていないということだった (FP, p.114)。手紙に形式があることは知っている。しかし、その具体的な表現は知らなかったし、当然ながら使ったこともなかった。実際には、フルルに代わって返信を書く年長者の書きぶりから、フルルはすぐに手紙の定型を覚え、次回からは自分で書く。代筆の手紙を学校に持って行くと、担任の教師は筆跡がフルルのものではないことに驚き、「君は手紙を書く実力をもっているはずだ」と請け合うのだった。それから二週間後、フルルは自分で手紙を書き、先生にお墨付きをもらう。こうして、少年はまず、「手紙を書くこと écrire (à)」を獲得したのである。

書くということの獲得が、書かれるものの形式の獲得として示される。おそらく、書くこととは常にそのように獲得されるものである。そして、手紙 lettre を書くということは、文字 lettre (s)そして字義 lettre (s)をも獲得したということである。

先にみたように、物語は父の病と出稼ぎのエピソードを後半【長男】の最初に置いている。語りはフルル自身による一人称でなく、三人称にかわっている。ここから、物語の空間にはエクリチュールが前景化する。前半の【家族】では、エクリチュールは、たとえば、

「すすけて真っ黒になったアラビア語の古い本 un vieux livre en arabe tout noir de fumée」

(FP, p.44) として最小限に言及される、(物の)手ざわりのようなものでしかない。しかし、【長男】では、エクリチュールの読み/書きの獲得が長男フルルの成長の物語となり、同時にそれは教育がより上の段階へと進むことであり、長男のエクリチュール獲得の困難

な道程は父のフランスへの出稼ぎという往還の道程の困難と縊り合わされるように語られるのだ。

もともとエクリチュールが存在しないカピリアという空間では、エクリチュールというものの介在が人と人との間をより遠ざけ、メッセージの名宛て人への到達が遅延するという事態が生じる。しかし、いっぽうでは、共同体内の人々の介在によって、パサージュ passage がいくつも生じて循環し、手紙が来た、送った、何が書かれていた、といったものが共同体内で共有される。フルルが、作文の課題について思い描いた、フランスでの父の困難のなかには、手紙を代筆してもらうために家族内の秘密を他人に打ち明けなくてはならないというものがあった。この、疎外と親密の同居、親密の意味合いの幾何学化。カピリアにおいて手紙とは何と奇妙なものだろう。そして、「手紙」には、ブルデューが記述するような、外とはつながってはいるが中には入りにくく、内部では親密な循環があるというカピリアの共同体の特徴がそのまま現れている。

フルルと家族は、出稼ぎに行くことで共同体の外側に放擲された父と、エクリチュールを介在させなくては通じることができない。フランスにいる父からの最初の手紙 lettre は、カピリアの家族の元にはなかなか届かない。父はカピリア語で代書人にメッセージを語る。代書人はそれをフランス語に翻訳して、文 lettre として手紙に書く。手紙はカピリアのテ^{アミン}イジの村に届き、村長がメンラッドの家に届けてくる。家族間での手紙の遣り取りがお上の管轄下にあるということである。メンラッドの家では、フルルが学校から帰るまで誰も手紙を開封しない。フルルは手紙を正しく読む自信がないので年長の小学校修了者を呼んで、フランス語の手紙を読みカピリア語に翻訳して口頭で伝えてもらう。そこで家族は初めてメッセージを受け取ることができる。カピリアでフランスにいる父からメッセージを受け取るとことは、気の遠くなるような多くの媒介を経ることになる。エクリチュールは遠ざける、エクリチュールは延期するのだ。父からの手紙に返事を書くときも同様で、カピリア語の声のメッセージはフランス語に翻訳され書かれるのである。返信（封筒）を受け取った父はフランス語が読めてカピリア語が話せる者を介して、ようやく家族からのメッセージを手に入れることができる。声からエクリチュールへの翻訳、カピリア語からフランス語への翻訳。そしてまた、逆の方向への翻訳。この繰り返しのなかにメッセージをつないで到達させようとする。そのパサージュ passage は平坦ではない。だが、このような言語環境は、そこに暮らす者みなで翻訳の技術に長じることになるとも考えうる。父からの最初の手紙が読まれ語られたとき、家族はみな、「紙片を通して父に会う」ことができたのだから。

そしてまた、フランス本国と手紙を遣り取りするとき、カピリアではまた別の二つの媒介が存在していることも忘れてはならない。手紙を届けるのは村長（＝役人）であり、返信を発送するためには書いた手紙を学校に持って行き、そこで集配人に渡されるのである。

みな満足だ。家族全員が二人の学徒の周りにあつまって、紙片を通して父に会っている。すぐに返事を書く。そのために必要なものはすべてそろっていた。修了生は、フルルの注意深い視線に見守られながらうつむく。彼は、まっさらな紙を一枚、古い読本の上に置き、フルルが持つインク壺にペンを浸す。

Tout le monde est content. La famille entière, rassemblée autour des deux écoliers, voit le

père à travers la feuille de papier. On répond sur-le-champs. On a tout ce qu'il faut pour cela. Le diplômé s'accroupit sous l'œil vigilant de Fouroulou. Il pose une feuille vierge sur un vieux livre de lecture et plonge la plume dans l'encrier tenu par Fouroulou. (FP, p.114)

メンラッドの家には、手紙を書くために「必要なものはすべてそろっていた On a tout ce qu'il faut pour cela. 」と述べられるのは、それが希なことだったからである。この下りは、カピリアにおけるエクリチュールのありようを、まっさらな紙、インク壺（わざわざフルルが手に持つ）、インク、ペン、古い読本という列挙のうちに、周囲に際立つその手ざわりを伝える。カピリア人の多くは、たとえ学校教育を受けたとしても、その後はエクリチュールとはほぼ無縁の人生を送る。それも男性に限定されていて、女性たちはエクリチュールに接する機会はほぼ皆無である。暮らしのなかには、読むことも書くこともない。メンラッドの家は、このときすでにカピリアのほかの家とは違っていた。フルル・メンラッドは学校において、読むこと書くことを着実に獲得しつつあった。カピリアにおいて書く人は常に学徒 *écolier* であり、何度でも読むこと *lecture* を繰り返した生徒だけがその積み重ねの上に書くことができるのである。これから新たに手紙のエクリチュールが刻まれるまっさらな紙が古い読本を下敷きとするのはそれを示しているのではないだろうか。

書いた手紙は学校の承認（これはまた、検閲の意味もあったらう）を得て、ようやく本物の手紙となる。手紙は、流刑地の父との唯一の意思疎通の手段であるから、手紙を書くことの獲得は喜ばしいことであった。しかし、未来の作家たるフルル・メンラッドにとって、エクリチュールの獲得はようやく緒に就いたばかりである。小学校修了の祝いに贈られた〈ゴローワ・コレクション〉の恋愛小説と靴屋のカタログをフルルはどう読んだのだろう。物語はそれについてはふれていない (FP, p.116)。

父ラムダン負傷の報があった後、学校で教師から受けた「子ども扱い」に対して、フルルは反発を覚える。父に起こった過酷な事故によって生じた現実を読むことを余儀なくされた少年は、教師が思うより早く大人に近づいていくのである。

翌日学校で、道徳のお話のとき、先生がおおかた以下のような話をした。「子ども時代というのは、幸福な時だ！ 君たち学校へ通う者は、勉強するか遊ぶかで、ほかにしなければならないことはない。安心して眠り、何も考えなくていい。君たちのお父さんはあらゆる心配事に悩まされて、時には一晩眠らずに過ごすこともあるだろう。父親は子どもたちのことを考えたり、借金取りに悩まされたり、空になったイクファン^{*73}が気にかかったりする。君たちは何の心配もなくて、お父さんの悩みなど知らないでいる。」違う！ そんなことはない！ 先生が話をしている間、フルルはそう思っていた。彼は先生に言いたかった。違う！ 子どもたちはそんなに鈍感じゃない。子どもだって、両

*73 イクファン *ikoufan* はアクフィ *akoufi* の複数形。穀物や無花果の保存に使う。アクフィは大型の壺、瓶で四角柱型をしている。保存物を入れるための上部の口は円形。胴の部分に手を入れられるほどの穴が開けてありコルクで栓がしてある。中のものを取り出すときにはこの穴を使う。胴の部分にはカピリア独特の幾何学模様の装飾がある。貧乏人はアクフィを持っていない（『貧者の息子』CNH版の語義解説より）。

親と苦しみをともにしているのだ。

Le lendemain, à l'école, le maître, commentant un résumé de morale, dit à peu près ceci : « L'enfance, c'est l'âge heureux ! Vous, écoliers, vous n'avez d'autres préoccupations que de vous instruire ou de vous amuser. Vous avez le sommeil tranquille, vous ne pensez à rien. Quelquefois votre père passe toute une nuit sans dormir, tourmenté par toutes sortes de difficultés. Il pense à ses enfants, aux créanciers qui le tracassent, aux ikoufan vides. Vous êtes insouciants, vous ne connaissez aucun de ses tourments. » C'est faux ! C'est faux ! pensait Fouroulou pendant que son maître parlait. Il avait envie de le lui dire. Non ! les enfants sont plus sensible que cela. Ils partagent les misères de leurs parents. (FP, p.121)

帰国したラムダンは、学校が休みになって農作業を手伝うようになったフルルと話し合う。奨学金試験の結果待ちの息子は進学してさらに学ぶことを望んでいるが、父にとって は、フランス語を十分に使いこなせるまでに成長した息子は、カビリア農民としてもはや 一人前の働き手であるだけでなく、フランスへ出稼ぎに出ても有利で、自分のような辛い 目には遭わなくてすむと考える。

おまえは体力がついてフランスに働きに行くこともできるだろう。……フランスは美しい。おまえは何でも見られるし、何でもわかるだろう。

tu sera assez fort pour aller travailler en France....C'est très beau, la France, tu verras tout, tu comprends tout. (FP, p.128)

フランスは美しい、ということばが父の口から出るのは、結果的に、彼があり得ないほどの上首尾で帰還を果たすことができたからで、仕事の大怪我という事件の成り行き がディストピアをユートピアへと反転させたからだ。父にとってそれは僥倖だが、教育のある息子ならば始めから、出稼ぎに行っても美しいフランスを楽しむ余裕がある、と父は 考える。ほぼ偶然によって支配された己の経験に照らして、教育の成果/エクリチュールの獲得というものを父はそのように解釈するのである。

大きな家族のなかで甘やかされて育ったフルルは、無条件の愛情を注いでくれた二人の 叔母を彼女らの死によって失う。物語はここで大きな断絶を画す。その後、宗主国への父 の出稼ぎというエピソードは、寡婦で事実上の家長であった祖母タサディットの死後、伯 父と父の分割相続による大家族の分裂後に起こった出来事である。父の怪我という悲劇的 な出来事も、命を失うこともなく多額の現金に置き換わってしまえば、かえってよかった と両親は思う。帰国した父との話し合いのうちに、フルルは父が自分が考えるのとはまっ たく別の道 — こちらのほうがカビリアの農民としてはまっとうなのだが — を考えて いることを知る。いくつもの形象をまとして描かれた親密で一体の家族のうちに、成長/ 教育/エクリチュールの獲得が亀裂を作り、分離し、距離を生んでゆく。

父の負傷をきっかけに、フルルは手紙よりはるかに難しいエクリチュールを読むという 課題を与えられる。エクリチュールの様々な制度、差出人も名宛人も不明のそれが、いまだ小学校を終えたにすぎない少年に押し寄せる。まったく理解できない診断書。父の腹に 刻まれた、臍を貫く無残な傷跡は、エクリチュールがカビリア人の身体にも容赦なく書き

込まれる/書き込むことを見せつける。子どもたちはみな、父がシャツの前を開けてそれを見せたときにたじろぐ。しかし傷はしっかりと縫い合わされてもはや痕跡にすぎず、父は以前にもまして強壮な身体を取り戻したカビリア農民として帰還したのであり、その膚はフルルが手紙を書いたまっさらの紙のように白くなっている。彼の生命力はもはや書き込まれたエクリチュールを無効化したようだ。だが、それとともに、日焼けしたカビリア農民が脱色されてしまったというのだろうか。そして、スーツケースから命をかけた戦いの戦利品の証、己には読むことのかなわぬ裁判の記録を誇らしげに取り出すのである。ラムダンにとって、追放が王国に変わった瞬間の記録であった。

ここで獲得できるエクリチュールの最上限(=フランス語で手紙を読み書く)までを優秀なカビリア少年は確実に身につけた。そして、エクリチュールをなるべく少なく、わずかな手ざわりのようにそっと存在させるカビリアという空間から遠ざかることになる。

さらなる学校教育の価値に懐疑的な父も、保険金や年金を獲得した経験から、奨学金が確かなものであることは認めていた。ティジ・ウズの町のコレージュへ、さらに海に開けた町アルジェの師範学校へ、より高い教育を受けるために低い方へ、さらに低い方へと少年は下って行く。エクリチュールに習熟すればするほど、フルル・メンラッドは故郷から遠ざかる。三人称の語りは、カビリアからますます遠ざかっていくのである。いっぽうでそれは、エクリチュールによるある自由の獲得を意味することになるのだろうか。

その後、フルル・メンラッドはもっと難しいエクリチュールに挑む。自民族誌、それは試験の課題をこえて、自ら選び取った、カビリア人の魂の翻訳だった。

第Ⅳ章 生きること、とりわけ語ること

第Ⅲ章では、カビリアにおいて、主人公のフルル・メンラッドがどうエクリチュールを獲得するかを読んだ。エクリチュールの獲得とは、まず「読む」ことである。

本来、エクリチュールがないに等しいカビリアという空間で、カビリア人は独特のやり方でほかの言語のエクリチュールを最小限に存在させてきた。当然ながら、そのような空間ではエクリチュールは読まれるために存在しているのではない。そこでの、フルル・メンラッドの読むこと/書くことの獲得は困難を極める。

この物語はフルル・メンラッドのエクリチュール獲得の成果の披露でもある。本章では、獲得されたフランス語のエクリチュールでフルル・メンラッド、ひいてはムールード・フェラウンは、どう自-民族誌/-伝 *auto-ethnographie/-biographie* を書いたのか、物語のなかから「男たちのことば」をめぐるエピソード、「女たちのことば」をめぐるエピソード、そして『カビリアの日々』から共同体全体のことばの循環 *circulation* を表す祭のエピソードの三つを取り上げて読み解いてみたい。

歴史家のミシェル・ド・セルトー *Michel de Certeau* は、民衆の日々の暮らしにおける知恵と、実践の技術のあり方を調べ考察した。その成果の助けを借りることによって、『貧者の息子』で詳しく語られる暮らしと仕事を、より細部にわたって読み解くことが可能である。セルトーは『日常実践のポイエティック』 *L'invention du quotidien 1. arts de faire* において、次のように述べている。

そもそも民衆文化というのは、これやら、あれやら、何かをしようとするときの、その「やりかたの技法」として定式化できるもの、すなわち、いろいろなものを組み合わせて利用する消費行為として言い表せるものなのだ。このような実践には「民衆の」知恵 (*ratio*) がはたらいており、行動のしかたのなかにおのずと考えかたがふくまれ、ものを使いこなす術とものを組み合わせる術とがわかちがたく結びつきながら発揮されているのである。^{*1}

elle se formule essentiellement en «arts de faire» ceci ou cela, c'est-à-dire en consommations combinatoires et utilisatrices. Ces pratiques mettent en jeu une *ratio* « populaire », une manière de penser investie dans une manière d'agir, un art de combiner indissociable d'un art d'utiliser.

^{*2}

*1 ミシェル・ド・セルトー『日常実践のポイエティック』p.18-19

*2 Michel de Certeau, *L'invention du quotidien : 1. arts de faire*, P. XLI

日常生活における生産活動（手仕事である織りや陶器作り）や、人間関係の調整（裁判・調停）について、この小説は、それが行われる課程と結果を詳述している。その手順を 読み取るといった読み方に従うならば、この作品の多くの部分は、民族学者のフィールド 調査報告をまとめた民族誌とそう違わないということになる。しかし、この小説は、こう いった場面で、動詞の時制を頻繁に過去から現在へと切り替えながら語り、出来事を回想 から引き戻して、いま、面前で起こっていることのように記述するという方法を繰り返し 用いており、無駄を排した「科学的」書き物である民族誌とは異なる様相をもっている。 本論第Ⅲ章においては、『貧者の息子』とブルデューの民族学的調査の記述との比較、関 係性の検討を行ったが、ここでもこの違いを指摘した。いっぽうではそれゆえ、その語り は単なる過去の回想物語ではない。

セルトーはまた、同書でこのようにも述べている。

……読みかたの^{アール}術をほかのさまざまな術と比較してみると役にたった。たとえば、そのひとつに、会話をする術がある。日常会話のレトリックというのは、「パロールの状況」を転換させる実践であり、言葉をとおした生産であって、そこでは話し手どうしの 位置の交差が、だれの所有するでもないオラルの織り目を織りあげてゆく。だれのもの でもないひとつのコミュニケーションが創造されるのである。会話というのは、言語能 力の集団的かつ一時的なはたらきであって、「決まり文句」をあやつったり、ふりかか ってくるいろいろな事件を「しのげるもの」にかえて楽しんだりする術のひとつなので ある。^{*3}

A cet art de lecteurs, il a été utile d'en comparer d'autres. Par exemple, l'art des causeurs : les rhétoriques de la conversation ordinaire sont des pratiques transformatrices de « situations de parole », de productions verbales où l'entrelacs des positions locutrices instaure un tissu oral sans propriétaires individuels, les création d'une communication qui n'appartient à personne. La conversation est un effet provisoire et collectif de compétences dans l'art de manipuler des « lieux communs » et de jouer avec l'inévitable des événements pour les rendre « habitables ». ^{*4}

カピリアの共同体をきわだって特徴づけるのは、独自のカピリア語が事実上文字をもた ない言語であることである。したがってカピリアにおいては、ことばを使ったあらゆる「生 きる術」のうち、ここに述べられた「会話をする術」は大変大きな役割を果たしている。 読んだり書いたりすることがないので、ここでは、語り・声・会話の術は、共同体が生き 延びる知恵として、丹念に練り上げられ分けもたれてきたはずである。実際、作品中には、カピリアの厳しい自然環境では、村の人々が互いに近すぎるほどに暮らす以外に生きのび る道はないが、それゆえにこそ喧嘩、諍いは頻繁であった、と書かれている (FP, P. 15)。 その度、この術を動員せずには、人々はともに生きてくることはできなかつたであろう。 人の生きる言語-空間として
のカピリアの共同体がどのようなものであったのか、ジョ

*3 セルトー, 前掲書, p.32

*4 Certeau, *op., cit.*, p.L-LI

ゼ・ランジニの書いたフェラウンの評伝に紹介されたエピソードは、書き手の意図をこえて多くを語っていると思われる。

アルジェリア革命の歴史に残る指導者の一人となる、カビリア人のベルカセム・クリムは、PPA^{*5}に加盟したのち、カビリアにある12の部族のなかに秘密の細胞組織を作ることになる。はじめのうち、フランス当局は、トミーガン^{かど}を携え、村から村へ渡り歩いては絵空事を説いて回る、この夢想家に大して注意を払わない。そのうち、当局は国家主権侵害の嫌でこの人物に出頭を命じる。クリムは、シ・ラバーラの偽名でマキ^{*6}にとどまることを決める。フランスの軍が、彼をマキから狩り出そうとするが、果たせない。ムールード・フェラウンも、ほかの多くのカビリア人同様、彼がどの部族のところに行ったとか、また別のところにはいつ行くといったことが話されるのは聞いている。ときおり、憲兵が村にやってきて住民に聞き込みをするのだが、住民たちは常日頃にもまして、フランス語では何も理解できなくなっている。打ち消し——霧にかすむ山々のほうを指し示す、曖昧な身振り。こういう山賊どもについてここではまた別の話があるのだが、それは決して伝説ではない。そして、フェラウンは子どもの頃からそれを聞いていた。

Kabyle Belkacem Krim qui deviendra l'un des chefs historiques de la révolution algérienne. Après avoir adhéré au PPA, il décide d'implanter des cellules clandestines dans douze douars de Kabylie. Au début, les autorités françaises ne prêtent pas une attention excessive à cet illuminé qui s'en va porter la bonne parole de village en village, armé d'une mitraillette Sten. Puis elles le convoquent pour "*atteinte à la souveraineté de l'État*". Il décide de garder le maquis sous le pseudonyme de Si Rabahla. Les militaires français tentent de le débusquer. En vain. Comme tant d'autres Kabyles, Mouloud Feraoun entend parler de son passage dans tel douar, de sa venue prochaine dans tel autre. Parfois les gendarmes passent dans le village et interrogent les habitants qui, plus qu'à l'accoutumée, n'entendent rien au français. Dénégations, gestes vagues en direction des montagnes qui s'estompent sous la brume. Par ici, on raconte, à propos de ces brigands, une autre histoire qui n'a rien d'une légende. Et que Feraoun a entendu dès son plus jeune âge.^{*7}

ランジニは、この伝説ならぬ話として、アルジェリア征服戦争においてカビリアに進軍したユースフ Yousouf 将軍（1808 頃-1866 年）のカビリアでの戦いを紹介している。ところが、この人物の波瀾万丈の生涯はあまりにも伝説的である。ユースフは、流刑になったナポレオンが《君臨》するエルバ島に生を受け、教育を受けるためにイタリアに向かう船

*5 アルジェリア人民党 Parti du Peuple Algerien

*6 maquis アルジェリア（独立）戦争中の、アルジェリア人側の抵抗拠点、抵抗集団。山岳部の森林地帯などにあった。

*7 ジョゼ・ランジニ José Lenzini 『ムールード・フェラウン』 MOULOU D FERAOUN, p.160-161

上で海賊に捕まって、チュニスの奴隷市場で売られた。成長してマムルーク*8となったが、スキヤンダルによって命の危険にさらされたときに、フランス領事の助けを得て、アルジェリアに逃れた。この後、ユースフは 1830 年から死ぬまで、アルジェリア征服と平定の戦いに従事することになる。運命によってジョゼフ Joseph からユースフ (ムスリム) となった少年は、母語のイタリア語を失わず、アラビア語を完璧に操り、フランス語も身につけた。フランスによる植民地化に執拗に抵抗し続ける「カビリアの貧者たち (=山賊たち)」を土地の果ての果てまでも追いつめようとしたユースフ将軍の行軍はかなわなかった。行けども行けども《反抗者》たちはどこにも見つからず、岩山の端に引っ掛かった、ごく小さな村に行っても、女たちしかいないのだった。

オスマン帝国下の北アフリカ (ムスリム-アラブ) と、フランス帝国主義の二つながらを体現する武人は、カビリアという空間では道を見失ったらしい。

『貧者の息子』前半【家族】の 2 (事実上の物語の始まり) は、ティジの村を紹介しているが、その最初に、道について次のような記述がある。

二百メートル長の主要道は、木の幹のようなただの一本の部族の道で、いくつもの村をつないで車の通れる道に出るが、その先は町へと通じている。

この主要道は、片側だけ塀のあるところでは当初の頃の道幅を保っている。少なくとも、優に六クデ⁹はある。あちこちで両側に家を建てるので道は嚙り取られ、石の牢獄に閉じ込められたかのような惨めなありさまになる。ところどころ、右に左に、気まぐれな腕でも抜げることがなければ、道だとして息が詰まるというものだ。両側を取り囲まれた小道は、野原へと逃げていく。

deux cents mètres de long, une rue principale qui n'est qu'un tronçon d'un chemin de tribu reliant plusieurs villages, conduisant à la route carrossable et par conséquent aux villes.

Cette rue principale garde sa largeur d'origine aux endroits où elle n'est murée que d'un côté : six bonnes coudées au moins. Comme, souvent, on a construit des deux côtés, elle a été grignotée et elle fait pitié dans sa prison de pierre. Elle étoufferait si elle ne laissait s'épanouir, de distance en distance, tantôt à droite, tantôt à gauche, des petits bras capricieux, des ruelles encaissées qui s'enfuient vers les champs. (FP, p.12-13)

カビリアでは、フランス人がつくった車の通れる道から村の道に入って上っていくと、さらにその先、道は気まぐれにあちこちへと逃げて行くようだ。

峻厳なる峰々と大小無数の谷だけがユースフ将軍をはばんだわけではない。人と人をつなぐ声としてのことば、姿・形のない一時の気流 air のような捉えがたいものにはばまれたのである。カビリア語を解さぬ、外からやって来る者には、カビリアを知ることは困難

*8 奴隷軍人。

*9 クデ coudée は長さの (旧) 単位。肘から中指先端までの長さで、およそ 50 センチメートル。

を極める。ランジニは、カビリアで話されるユースフ将軍譚を伝説 *légende* ではないと言
うが、ここでは、ことばは声で言い伝えられる、伝言/説である。

カビリア人は、アラブよりも、そして当然ながらフランスより前からアフリカにいてず
つと生をつないできた。しかし、そのことばのつかい方と知恵、そして歴史は、カビリア
がそのような空間であることによって、外来の者が紀行文としてあるいは民族誌的な手法
で書き留めるとすれば、表層的なふるまいを見て取り、口承説話（お伽話）、ことわざ、
儀式、呪文、口上、詩を分離することによってしか捉えることしかできず（カビリア人の
協力が得られればだが）、せいぜい、手続きと結果の *型* ^{パターン} を見ることができるのみである。
その意味は十分には理解しがたく、効果は限定的なものにとどめられる。先のランジニか
らの引用は、次の文に続く。

フェラウンは知っている。この山々を移動して行くには、ここで生き延びていくには、こ
こで生まれなくてはならないことを。

**Feraoun sait qu'il faut être né dans ces montagnes pour pouvoir s'y déplacer, y
survivre.*10**

カビリア語で営まれる日々の暮らしの知恵、言語の豊かさを書き留めることは外来の者
にはできない。その知恵と豊かさのなかに生まれ落ち、しかも外から来た言語を書くこと
のできるフェラウンは、書くことのできる言語の、いわば限界をどう乗り越えたの
だろうか。

再度セルトーに戻ってみよう。セルトーの議論は民衆文化がいかなるものであるかを探
る方法を巡るやや複雑なもので、それを要約することはできないが、これまで行われた、
アールネやプロップによることわざの收拾と分析、レヴィ・ストロースによる神話の收拾
と分析という方法について次のように述べている。

こうした方法のもつ欠点は、それが成功した条件でもあるのだが、文献資料をその歴
史的なコンテクストから抽出し、さまざまな時間や場所や対抗関係からなる特定の情
況下で話し手がおこなったもろもろの操作を排除してしまうということである。科学的実
践がその固有の領域で遂行されるためには、日常的な言語実践が（そしてその戦術の空
間が）消去されねばならないのだ。したがって、しかじかの時点に、しかじかの話し相
手にむかって、あることわざを「うまくさはさむ」^{アール} 無数のやりかたがあるというこ
とは、考察の外におかれてしまう。このような芸は排除されてしまっ
て、その芸の持ち主ともども、研究所から閉めだされてしまうのだ。いかなる科学も対象の限定と単純化を
必要とするという理由からばかりでなく、およそあらゆる分析にさきだっ
て科学の場所が成立するには、研究すべき対象をその場所まで移
転させることができなければならないからである。考察しうるのは、持ち運び可能なもの
だけにかぎられる。根こそぎにできないものは、そもそもからして圏外に放置されて
しまう。だからこそこれらの研究

*10 Lenzini, *op.cit.*, p.161

とらえて記録、はディスクールに特権をさずけるのであり、世にディスクールほど容易に化し、安全な場所まで持ち運んで考察することのできるものはない。ところが、パロール行為は状況からきりはなすことができないものである。^{*11}

L'inconvénient de la méthode, condition de sa réussite, est d'extraire les documents de leur contexte *historique* et d'éliminer les *opérations* des locuteurs en des circonstances particulières de temps, de lieu et de compétition. Il faut que soient effacées les pratiques linguistiques quotidiennes (et l'espace de leurs tactiques), pour que les pratiques scientifiques s'exercent dans leur champ propre. On ne considère donc pas les mille manières de « bien placer » un proverbe, à tel moment et face à tel interlocuteur. Cet art est exclu, et leurs auteurs, rejetés du labo, non seulement parce que toute scientificité exige une délimitation et une simplification de ses objets, mais parce qu'à la constitution d'un lieu scientifique, préalable de toute analyse, correspond la nécessité de pouvoir y *transférer* les objets à étudier. N'est traitable que le transportable. Ce qu'on ne peut déraciner restera hors champ, par définition. D'où le privilège que ces études accordent aux *discours*, chose du monde qu'on peut le plus facilement capter, enregistrer, transporter et traiter en lieux sûrs, alors que l'*acte* de parole n'est pas détachable de la circonstance.^{*12}

フェラウンが書き留めようとしたことは、状況から引き離すことのできないパロール、パロール行為ではないだろうか。もちろん、無数のやり方を数え上げることはできない。しかし、その無数のやり方のなかから、よく知っている、特定の状況下で話し手が行ったもろもろの操作を描写することはできる。彼自身も話し手のひとりでもある。セルトーの言う、(カピリアの) 外の安全な場所へと持ち運びのできないパロール行為、分析を拒み、容易にとらえて記録化することのできない状況をこそ、証言し書こうとしたと考えることができる。作品中から、声の術＝パロール行為が書かれたシーンを二つ取り上げて読み解いてみたい。まず、喧嘩と、その仲裁（裁判）である。

争いごとと、そのおさめ方——男たちのことば

主人公の男の子フルルがまだ幼い頃、村の広場で、オリーブの枝を使って籠を編む男ブサドの仕事ぶり見たさにそばに寄りすぎて、ふとした拍子に、その男が使っていたナイフがフルルの額、瞼の上のあたりに当たって怪我をしてしまう。それが原因で、フルルの一族と、相手の男の一族双方の、男も女も広場に総出の大喧嘩になり、素手での暴力だけでなく、混紡が振りかざされ、大きな石が飛び交い、ナイフで斬り合うという何とも凶暴な事件に発展する。この土地では、個人の間には起こった事は即座に双方が所属する集団・家

*11 セルトー、前掲書、p.75

*12 Certeau, *op.cit.*, p.38

族の問題となる。そこで、女たちが除かれることはない。さすがに石や刃物は使わないが、相手のスカーフを髪の毛の束と一緒にむしとりはするし、何より女たちの武器は口＝ことばである。女たちは罵詈雑言と呪いのことばのありったけを浴びせ合う。この乱闘で、主人公の伯父（父の兄）ルニスに頭に石の一撃を受け、脇腹をナイフで刺されて大怪我をし、籠を編んでいてフルルに怪我をさせた男ブサドは、ルニスに殴られて気を失うという、やはり大怪我を負う。ほかに、歯を折られた者、棍棒で殴られた者など負傷者続出であった。

双方に大勢のけが人を出したこの事件は、フランス統治下の出来事であり、当然ながら宗主国による警察、司法制度はあるにはあるが、カピリアの人々はそこに訴え出ることはせず、様式化された、「伝統」的な段取りに従って事をおさめようとする。

まず、広場で男女（この場合にも、脇役である女たちの闘いは、広場からちょっと引込んだ路地で繰り広げられる。）に分かれての両家の闘いが十分におこなわれたところに、これは、双方に死人が出る前とも考えられるが、村長がマラブー^{*13}を従えてやってくる。マラブーは、「呪い」ということばによって、宗教者のもつ特権的な力を行使し、手に持った黄色い布をひらひらさせて、瞬時に暴力の応酬を止めさせることができる。両家の者は言われるままそれぞれ帰宅し、また、歩くことができないほどの傷を負った者（ルニスとブサド）は運び込まれて、その夜、村長を始めとする村の有力者（長老）たち、マラブーが両家を訪問して事件の調停をはかる。広場という、村人にとってもっとも重要な公的空間で起こった家どうしの揉め事をおさ

めるのは、専ら、男たちの仕事であり、調停者を迎える家内の空間から女たちは閉め出される。ただし、この物語では、主人公の一族の事実上の家長は寡婦である祖母タサディットであり、彼女は、男たちとともに調停の部屋にとどまる。

村長らを招き入れるためには、親戚の男カシ（怪我をした子どもの父親にとっての従兄弟にあたる）が先導する。カシが咳払いと、家の門をきしませる音で調停団の到着を知らせると、村長たちは一列になってやってきて、家の中庭を横切り、怪我をした主人公の父から調停団全員に、バーヌース^{*14}のフードのうえから接吻するという、最高の敬意を示されたあと、紅い絨毯を敷いた部屋に迎え入れられて車座に座る。型どおりの挨拶が交わされ、村長が話を始めようとする、それを丁重に遮るのも形式に則ったやりかたである。そして、食事の提案があり、当然のようにいったん辞退し、再度の提案と、段取りは型どおりに進む。

男たちが調停者を迎える部屋に集まり、先触れの者を出す準備などを整える間、女たちは巨大な鍋に大量のクスクスを調理し、それには家族の口には滅多に入らない肉が添えられ、食後の珈琲も用意される。最高のご馳走が調停の段取りにおいてきわめて重要な役割を果たすのである。

饗応の後、腹一杯になった調停者たちは、おそらく地位と役割にふさわしい、より鷹揚な態度で調停の核心部分を執り行う。まず、此の家の男で、事件の一番の当事者に事の顛

*13 marabout イスラム聖者・修行者。

*14 袖なしフード付きの長い上衣。

末を話させる。この場合は主人公の伯父ルニスである。事件が起きたとき、父は町に行っていて留守であった。伯父は、甥のフルルがブサドに怪我をさせられて泣きながら帰ってきたこと、ブサドに事情を訊くために（とルニスは言うが、実際には、この逆上した伯父は棍棒を持って広場に駆けつけたのである）広場に行ったが、まともな返答がなくナイフで斬り合いになったと手短かに述べる。今度は、それを受けて、十人以上もの長老たちが、順におのおの意見を述べるのだが、それは形の決まったことばたち、つまり口上のようなものでしかない。まず、此方は悪くないと言う。ここで、物語の話者（これは、【家族】にあるエピソードなので、主人公フルルである）は、次は彼方（あちら）に行つて同じことを言うのだと知らせることを忘れない。次の調停者も、その次の調停者……も同じことを言うが、余談、喩え、争い事一般への非難といった多少のヴァリエントが付け加えられる。

最後は、村長がすべて引き取る。それから、マラブーが煤けて真っ黒になった古い「アラビア語の本」をハンカチの包みから取り出す。そうして、「何やら訳のわからないことを読み、われわれの上に幸運があらんことを祈り、お前たちが争いを止めなければ、すぐさま天罰が下る *Il lis quelque chose d'incompréhensible, appelle sur nous la baraka puis, sans transition, les foudres du ciel si nous ne nous apaisons pas.*」（FP, p. 45）と言うのである。そして、その本にふれさせながら、「二度とこの争いをむしかえさぬ」という宣言を、家長である（この場合は）祖母、喧嘩のもととなった子どもの父親、乱闘騒ぎの一方の張本人である伯父にさせて、この段取りは終わりに至る。この後、村長ら調停団は相手方の家を訪問して、食事も含めてまったく同じ段取りを繰り返す（！）のである。

誓いのために手を置く「煤けて真っ黒になった、一冊の古いアラビア語の本 *un livre en arabe tout noir de fumée*」は、*un* 特定されていない、大文字で始まらない語で示されているが、次に、聖なる本 *le livre saint*、そして、古い羊皮紙（に書かれた本、文書）*le vieux parchemin* と言いかえられており、コーランであることは間違いない。ほかにアラビア語の本など、この空間に存在するだろうか。

物語第一部【家族】2、村の公共の場所を記述した箇所において、通常、ムスリムの共同体における重要な祈りの空間であるモスクは、以下のように記述されている。

[村には]モスクが二つある。モスクは広場に比べると、そう大切ではないことははっきりしている。外観は、隣接する家屋と似たようなものだ。内部は、床がコンクリートで固められ、壁は石灰で白く塗ってある。がらんどうで、悲しいほどに簡素である。そこに礼拝にやってくる老人たちは、過ぎ去った時代に属しているような様子をしている。

Il existe aussi deux mosquées. Les mosquées ont manifestement moins d'importance que les djemas. Vue du dehors, elles ressemblent aux autres maisons leur voisines. Au dedans, le sol est cimenté, les murs sont blanchis à la chaux. C'est vide et désolant de simplicité. Les vieux qui vont y prier ont l'air d'appartenir à un siècle révolu. (FP, p.14)

この下りは、村内の広場について詳しく記述したあとに続く。繰り返すが、広場 *djema* は村人（男たち）にとって、もっとも重要な公共空間であり、そこは家族以外の村人と交わる唯一の場所でもある。それに次いで、話者はモスクについては素っ気ない態度でごく

あっさりと言べ、モスクのあとには、村外にモール・カフェがあって、「行きたい者は行く……」といった突き放した調子で書かれる。ここで、村の公的な空間についての記述はひとまず終わる。広場はみなのものであってたいへん重要な場所だが、それにひきかえ、ひとり神と向きあうモスクは、内部は空洞であり、そこでの信仰の身振りは過去へと返され、むしろなおざりにされた *négliger* 場所として示される。

ティジの村人、カビリア人にとって、アラビア語で書かれたコーランは読むものではない。実際、読めない。マラブーでさえ、どこまで読めたのだろうか。調停の場面における

「Il lis quelque chose d'incompréhensible.」この記述からは、聞いている者たちは誰ひとりアラビア語がわからないのだから理解できない、読む者にも正確なアラビア語の知識は要求されない、という環境が皮肉をこめて現れてくる。ムハンマドが神から「読め」と命じられ啓示を受けたというのに。本＝コーランの存在と、モスクは、カビリアの、ここティジの村がムスリムの共同体であることを示している。しかし、この記述からは、村人が信仰篤い、よきムスリムである気配はうかがわれない。喧嘩の仲裁において、コーランは喧嘩が終わった宣言の身振りに必要とされる。祖母は「ふるえながら、その聖なる本 *le livre saint* におそるおそる唇でふれ」、伯父は「その古い羊皮紙 *le vieux parchemin* の上に手を置いて、二度と争いをむしかえさぬように誓わされる」。この一貫して茶番である《裁判・調停》において、コーランが請け負う役割はどうだろう。カビリアには美しい織物があるのに、ハンカチ（フランス人が持ちこんだものだろうか）なんぞに包まれた、煤けて何が書いてあるか分からない本は、誓いのための支点として利用されるにすぎない。周到な意図をもって宇宙のように編まれた啓示の本¹⁵をこのように扱うやり方は、アラブ-イスラムの支配をまつりあげつつ遠ざけ回避するやり方ではないだろうか。

コーランに関する遠回しのエピソードは、伯父の家族、妻や娘たちのことを詳しく記述した【家族】の断片9でもわずかに顔を出す。主人公の家族との違いを際立たせる意図もあるだろうが、伯父の家族はかなり戯画的に描かれている。ことに、伯父の妻であるヘリマという女性の人となりは強烈で、夫の懐からでも盗みを働く、なりふり構わぬ強欲ぶりが詳しく書かれていて驚かされる。ヘリマは、お金を得ることならばとことん冷徹で合理的な計算をしてそれを実行するのだが、そうやって手に入れた金の使い途について、語り手は以下のように書いている。

ガンドウラの袖の下に縫い込んだり、葦の茎の筒に入れて望む家の前に吊しておけば御利益のあるお守りだのといって、マラブーたちはいったいどれほどの金額を、その魔術書に支払わせたことだろう。こんな所へと、伯父のわずかな蓄えは流れていった。そして、何もかも無駄になった。

Et les marabouts avec leurs amulettes mystérieuses qu'il faut coudre dans un coin de la gandoura sous les aisselles ou qu'il faut suspendre dans un tuyau de roseau juste en face de l'habitation désirée, combien ont-ils fait payer leurs grimoires? Voilà où passaient les maigres économies de mon oncle. Et pourtant rien n'y faisait. (FP, p.78-79)

*15 リチャード・ベル『コーラン入門』、ジャック・ベルク『コーランの新しい読み方』など。

話題は、伯父の娘たち（男の子はひとりもない）の結婚と嫁入り先である。母に似て気立てが悪く、容姿にも恵まれない娘たちには嫁ぎ先が見つからない。ヘリマは夫からくすねた金で娘たちに衣服や装身具を買ってやるだけでは飽き足らず、迷信にもつぎ込む。ここでは、コーランはマラブーの魔術書と言いかえられる。グリモワール *grimoire* の語は文法 *grammaire* の変形であるとされる。^{*16}先に挙げたシーンだけでなく、ここでもコーランとは明示されない。強欲で計算高いことこのうえないヘリマのような女性が迷信には惜しみなく金を遣うこのエピソードは、この物語のそこ、ここで表明される、迷信に対する主人公の冷ややかな態度のひとつを表しているが、同時に、カビリアにおけるコーランの取り扱い方も示している。第Ⅲ章で述べたように、カビリアにおけるエクリチュールの存在とその扱いは、書きことばをもたないカビリア人にとって極めて重要で慎重な判断を要するもので、『貧者の息子』はカビリアにおけるわずかなエクリチュールの手ざわりをよく伝えているのだが、コーランはフランス語よりもっと以前から存在していた書物であり、その重力は決してあなどれるものではなかった。カビリアにおいてコーランは読めないままにしておく（≠読んではならない）書物であり、むしろ迷信と結びつけて宗教者マラブーに任せておく物として存在していたことを、この下りもまた示している。当然ながら、コーランはイスラムの信仰を象徴的に示しているので、こういった記述には、カビリア人ムスリムのありようが現れていると読むことができよう。

フランス人（異教徒）の裁判所には村長が事の顛末を報告し、この報告にはお金が伴う。それは、争った両家が半分ずつ負担するのである。これとは別に、やはり両家ともが、マラブー（しかも二人）には現金を渡すことになっていて、こういった暴力沙汰は大変な物入りだった。

結局、事件の詳細を第三者が法律に則って追求説明することはなく、事の起こりから始めて、誰がどんな暴力をふるったとか、そのせいで誰がどれほどの怪我を負ったといった子細は一切問われず、それに対する罰もない。全ては家と家の間のことで、二度と喧嘩を蒸し返さないために、双方がわが家の名誉が守られたと納得することがもっとも大切なこととされる。村長始め、十人以上の村のお偉方がもったいぶった態度でぞろぞろやってくる、迎える側は精一杯のご馳走でもてなす。それから、お偉方はそれぞれ順に決まり切った口上を述べる。たいそう時間がかかったにちがいない。こういった手間のかかる段取りが、名誉を守るにふさわしいやり方として作り上げられてきたのである。

実際には、仲裁にものを言うのは饗応と心づけであり、そんなことは誰もが承知していると、話者ははっきり述べているが、文字通りそれだけでは、当事者たちの感情と自負心がおさまるところを見つけないことができない。みなに参加して、何ごとかを口にし、それぞれの役割にふさわしい振る舞いをするセレモニーが必要で、カビリアの村では、どれほ

*16 グリモワールはヨーロッパで中世後期から19世紀まで流布した魔術の本。魔術に関する儀式、呪文、呪具や護符の作成法などが書かれていた。文法 *grammaire* とはラテン語文法のことで、民衆には理解できないことを意味している。「わけがわからない」「判読不可能な文字」の意味もあり。その点でこの物語におけるコーランとグリモワールは一致している。

どか長い時をかけて、その段取りを作り上げてきたのであろう。事件についての記述は、その起りから終結まで、この事件にしかなかった細部が丁寧

に書き込まれている。怪我をした主人公が泣きながら家に帰ったとき、最初に迎えたのが伯父ルニスだったことや、騒ぎが起こったとき父が留守をしていた、といったことである。誰よりも直情径行にふるまう伯父が、大切な跡継ぎである、一族で唯一の男の子が「殺されそうになった」と思い込むや、相手のいる広場へ棍棒をもってすっ飛んでいったからこそ、流血の騒ぎになった。喧嘩がひとまず収まったあとは、相手方が帰宅途上の父を襲って仕返しをするのではないかの心配があり、それを防ぐ術が親族会議で話し合われて見張りが出され、同時に親戚の男たちが動いて、父の帰宅後に深夜の仲裁が行われるよう根回しがされる等々……。当然ながら、似たような事件が起こっても、それぞれが細部では異なっているが、それぞれ必要に応じて対処されていく。対処の基本的方法は村人すべてが熟知しているので、細部の違いにも集団で臨機応変に対応できるということだ。

父への仕返しが危ぶまれるのは、広場の喧嘩では、われわれムッサ一族が相手のアメール族に勝ったと判断したからである。アメールの者たちは負けたままにはならないだろう。見張りが出されて、父には家に帰り着く前に喧嘩があったことが知らされ、仕返しの待ち伏せはなかったので無事帰宅することができたのだが、喧嘩の勝敗の決着をつける気満々の男たちは、何も起こらなかったことに安堵とともにいまいましさを感じる。その解釈は、相手は相手で「勝ったのはわれわれだ」と考えたのだろう、というものだ。喧嘩は村長やマラブーによって止められ、それぞれが家に引き取ったのだが、双方の喧嘩の心情は未だおさまってはいない。しかし、喧嘩の場になかった、何も知らない父を襲うというやり方で仕返しをし、勝利を得ようとするというのは何というおかしな自負心だろう。これは、卑怯というものではないか。この人々は、喧嘩では、どんな手段を用いても勝とうとする。女たちは、調停団に供するご馳走の内容で張り合う。

事件の最重要人物である伯父ルニス（怪我をしたフルルではない）はとりわけ、カピリアの男の価値は力によって勝ることであることを体現する人物である。この伯父から、一族の後継ぎとして強い男になるよう施された教育について、主人公は件の箇所より前で、以下のように述懐している。

相手が私と同じ年の子だったときには、親に向かって助けを求めることはなかった。対決するか、怖いと思ったら逃げ出した。私は、逃げ出したことや負けたことは慎重に隠しておき、勝ったことしか話さなかった。母を除いては、父も伯父も、家族のほかの者もみな、私を助けに来ることに同意はしなかっただろう。みな、私が逃げ帰ってきたのを知ったら、驚いて嫌な顔をしたことだろうし、それから、相手に立ち向かうことを私に強要したことだろう。そういうことがすでに、とくに伯父にはあった。ときならぬ喧嘩で私が勝利すると、家族みなに褒められた。負けたときには嘲りを受けた。

ああ何と！ こういうときには、甘やかされるどころではなかった。私は、やさしく憂いを帯びた母の顔を除いては、みな顔に浮かぶ軽蔑の情を読み取ったものだった。母はあらゆるものにまして私を愛していただけで、ほかに何一つ求めるものはなかった。

私は、長い間、伯父の峻厳な論理に対して恐怖心を持っていた。彼は頑強だった。それによれば、私の相手が私より小さいか、同い年か、大きいかによって、三つのケース

が考えられるという。より小さい相手との間に揉め事が起こった場合には、殴ったらすぐ、逃げるか隠れる

ことを見込んで、私は相手にお仕置きをしてもよかった。文句が来たら、罰するためと 言って私を捜すが、見つけないようにし、相手の子を慰め、親には私を叱っておくと約束した。

同じ年の子が相手の場合は、私には、相手を怖れる理由はひとつもなかった。伯父は 苛立ちとともに、私のほうに歩があることをはっきりさせようとした。私はいいものを 食べている。だからより力があるというのだ。それか、「そいつの父親は戦ったことが ない」— 卑怯者の息子がメンラッドを後ずさりさせられるはずがなかった。そうでなければ、「やもめ女の息子」か。— 意気地がなくて当たり前だ。または、ライバルの家族 の子どもか。敵の前で引くのは一切認められなかった。

Il ne m'est jamais arrivé de solliciter la protection de mes parents lorsque mon adversaire était de mon âge : ou bien j'acceptais la bataille, ou, si j'avais peur, je me sauvais. Je dissimulais avec soin retraites et défaites. Je ne parlais que de mes victoires. Il est certain que, ma mère mise à part, ni mon père, ni mon oncle, ni aucun de ma famille n'aurait consenti à me porter secours. Ils auraient été d'abord désagréablement surpris de me voir reculer, puis m'auraient obligé à affronter mon adversaire. Ces choses-là m'étaient déjà arrivées, avec mon oncle surtout. Lorsque je remportais la palme dans un de ces combats intempestifs, j'étais félicité par tous. Lorsque j'avais le dessous, ils m'accablaient de leurs railleries.

Oh! dans ces moments-là on était loin de me gâter. Je lisais le mépris sur tous les visages, excepté sur la figure douce et mélancolique de ma mère. Il est vrai que ma mère n'avait d'autres prétentions que de m'aimer par-dessus tout.

J'ai gardé longtemps un respectueux effroi pour la logique inexorable de mon oncle. Il était inflexible. Trois cas, d'après lui, pouvaient se présenter, selon que mon antagoniste était plus petit, du même âge ou plus grand que moi.

Si j'avais affaire à un petit, il me permettait de lui donner la correction pourvu qu'après coup je me sauve ou me cache. Si on venait se plaindre, mon oncle me cherchait pour me punir, se gardait de me trouver, consolait l'enfant, promettait aux parents mon châtement.

S'il s'agissait d'un garçon de mon âge, je n'avais aucune raison de le craindre. Mon oncle faisait ressortir avec colère que l'avantage était de mon côté : j'étais mieux nurri, donc j'avais plus de force, ou bien « son père ne s'était jamais battu » - le fils d'un lâche ne devait pas faire reculer un Menrad ; ou encore « c'était le fils d'une veuve » - peu courageux par définition ; ou, enfin, c'était un garçon d'un çof rival- aucune retraite n'était permise devant un ennemi.

(FP, p.32-33)

フルルにとって、幼なじみのアクリこそが、男らしい強さ viril の体現であった。伯父 ルニス がフルルに押しつけた奇妙な喧嘩の理屈を、アクリはそれを超える強さで実践していた。女の子のような美しい容貌をもったアクリは、フルルに代わって戦い、自ら拳に身をさらしてフルルを守ることさえ厭わなかった。アクリの存在は、子ども時代の主人公にとってわが身の半身として示される。フルルは己の資質と志向が、強圧的な要求に等しい、

伯父の強い願いに応えることができないのを知っていた。アクリはフルルにないものを持った存在であり、そしてそれにもかかわらず、あるいはだからこそ、両者は分かちがたい友であった。(FP, p.31)

先の引用箇所は以下に続く。

反対に、伯父は、私より年長の子が私を殴ったりからかったりするのを許さなかった。つまり、私は伯父に対してささやかな復讐を許されることになった。それに関わることで、私は自分の身に起こったことをこと細かに伯父に報告した。大きい子が私のビー玉を盗ただって？ 私は泣きじゃくりながら家に帰り、ルニスにそう言いつける、彼は立ち上がり、そいつを探しに行き、大声をあげてわめき散らす。ときには、ビンタをくれることもあった。私は伯父の後ろにくっついたまま、ずっと泣いている。勇気ある伯父！ 彼は私よりも子どもだった。私は下らないことで、どれほど彼を走らせたことだろう！ 伯父が私を大目に見たのは、おそらく、夜の大きいなる休息のなかでただだろう。

Par contre, il n'admettait pas qu'un garçon plus grand que moi me frappât ou me taquinât. C'est ce qui me permettait d'avoir ma petite revanche sur mon oncle. Sur ce dernier point, je lui rendais compte scrupuleusement de ce qui m'arrivait. Un grand me volait-il une bille ? Je rentrais à la maison en sanglotant sans arrêt, je le lui dénonçais ; Lounis se levait, courait à sa recherche, criait, tempêtait, souvent donnait des taloches tandis que je ne le quittais pas d'une smelle et que je sanglotais sans discontinuer. Ce brave oncle ! Il était plus enfant que moi. Que de futilité pour lesquelles je le faisais courir ! Il m'a sans doute pardonné dans la nuit de son grand repos. (FP. p.34)

今回のこの騒ぎは子ども同士の喧嘩ではない。しかし、結果的にフルルは伯父ルニスに 対して、ささやかどころではない復讐をしたことになる。怪我をして泣きながら家に帰ったこの子は、誰が怪我を負わせたのかというルニスの性急な問いに対して「ブサド・ンナ メール」が「わざと」「僕を殺そうとした」と答えている。これは、伯父をして棍棒を握って疾駆させるに十分すぎる答えであったが、実際とは違う。ブサドは、ナイフを使って オリーブの若枝を切りながら行うカゴ編みの作業に近づきすぎると危険である、と予め子どもに注意している。そして、広場に居合わせたほかの老人とともに、フルルの傷の応急 処置もしている。

また、広場にはほかにも大勢の人がいて、ブサドにしばらくその場にとどまるように言う。子どもが手当のため家に帰ったところで、親は必ず怪我をさせた者に事情を聞くために広場にやってくるのがわかっていたからである。おとなが過失であれ、子どもに怪我を負わせた場合としては当然のことであろう。しかし、痛みと流れる血にパニックを起こした子どもに対してのが他ならぬ、とりわけ直情径行型の男ルニスでなかったら、いの一 番に棍棒が握られることはなかったにちがいない。喧嘩騒ぎは、これほど大きくなることはなかった。何にも勝る「男らしさ」である直接的な力の行使、暴力的であればあるほど 優れていることになるのだろうか。結局、このときは、たくさんの血が流れてしまったのである。

いっぽう、女たちは男たちより先に家に帰り、此方では事実上の一家の長でもある祖母の指揮の下、早速、饗応の準備が始まっている。フルルは、祖母と母の遣り取りを書き留め（記憶をたどっているのだが、子どものフルルがその場で見ているかのように語られる。）、その牽強付会ぶりに子どもらしい、きわめて合理的で率直な感想を述べている。彼こそが騒動の最初の原因だったが、勝利と名誉を得ることに頭がいっぱいのおとなたちにはそんなことは忘れ去られ、子どもが負った怪我の程度さえだれも気にかけていない。所詮は大した怪我でもなく、おとなたちの剣幕に痛みも忘れた子どもは、おとなにとって は疑問の余地のない価値観にまだ浸染されていない頭で、おとなの振る舞いや物言いの観察者となり、冷静沈着でまっとうな評価を試みせる。

祖母の命令一下、女たちはすぐさま大量のクスクスを作り始めた。祖母は傲慢にも思われる様子で、町に葡萄を運んだカゴから、大きな数珠のように繫いだ肉を取り出した。父が買ってきたものだった。

「あのけちくさい卑怯者どもが、うちみたいにこんないい肉をお偉方にごちそうできる かどうか、見物さ」。敵方のことを言っているのだった。

「せいぜい、ひよこ豆でしょうよ」と、母が言った。

「そうに決まってる！ うちの貧乏だ。でも、神様のおかげで、私の目の黒いうちは、大事な客を迎えるとき、あんたがたの亭主に恥ずかしい思いなんかさせやしない。だから、ちゃんとした家だと認めてもらえるのさ」

そのとおり。だが、たまたま父が肉を買ってこなかったら、そんなリクツは言えなかった。こちらもひよこ豆かそら豆を出さざるを得ないが、祖母もそれを恥とは思うまい。 *Sous la direction de ma grand-mère, les femmes se disposent immédiatement à préparer un grand couscous. La vieille tire non sans orgueil, du chouari qui avait emporté le raisin à la ville, un grand chaplet de viande acheté par mon père.*

–Nous verrons bien si ces lâches avares recevront l’honorable assemblée avec la viande fraîche, comme nous, dit-elle en parlant de nos ennemis.

–Ils leur donneront des poids chichies, dit ma mère.

–Certainement ! nous sommes pauvres, nous, mais, Dieu merci, de toute ma vie vos maris n’ont jamais eu à rougir lorsqu’il s’est agi de recevoir un hôte. C’est à cela qu’on reconnaît les bonnes familles.

Évidemment. Mais si, par hasard, mon père n’avait pas acheté de la viande, ma grand-mère n’aurait pas été à court d’arguments et n’aurait pas cru devoir rougir en offrant, elle aussi, des pois chiches ou des fèves. (FP, p.42)

喧嘩騒ぎのとき父が町へ行っていたのは市場で葡萄を売るため、そこで得た金で肉を買ってきたのである。これは偶然の《僥倖》だった。男たちが、どれほど卑怯なやり方をとろうと、あるいは奇妙な理屈によろうと、力で勝とうとするように、女たちは料理の内容で勝たねばならないと考える。当然ながら、料理はけちくさいのはだめで、「avares けちくさい lâches 卑怯者」というのは最大級の罵倒のようである。肉は滅多に手に入らない贅沢な食材で、ここにあるように、たまたま市場で収穫物を買った金があるときくらい

しか手に入らない。高価な肉を市場で商いする者は、商い人のなかでもとりわけ狡猾な商売上手で、巧みな話術で人々にけなしの金をはたかせる。^{*17}

カピリアの貧しい農民が大金をはたいて、あるいは自らが育てた家畜の肉を食べるには、それ相応の理由づけがある。人々にとって、家畜 *bétail* は本来、ともに生きる存在であって食べるものではないのである。^{*18} 肉というご馳走が特別な位置を占めることは、『カピリアの日々』 *Jours de Kabylie* 所収の「ティムシュレット」 *Timchret* (後述) からもうかがわれる。ここで書かれているように、共同体のあちこちで常ならぬ異変があり、何やら不幸に見舞われているのを祓うために、犠牲が必要であることもあれば、それが家族のうちの誰かに、ジン^{*19} が引き起こした健康上の不調を祓うために行われることもあった。犠牲のための動物は、牛(牡牛)であったり山羊であったりした。いずれにせよ、肉を食べるためには、この世ならぬものが引き起こすよくないことを解消するための犠牲が必要だった。

主人公の父親は相手方に襲われることもなく帰宅したが、家に入るや、兄をはじめ、一族の男たちの血に染まったターバンや、乾いて固まった血の跡を目にして逆上する。棍棒やピストルを取り出し、今にも駆け出さんばかりである。しかし、遅れてきた闘士は手足や肩を一族の女たちに押さえ込まれ、近所の人たちになだめられて、喧嘩がすでに調停のモードに移っていることを受け入れさせられる。そして、先に述べたように、調停の手続きは粛々と踏まれてゆき、最後には、これほどまでに血が流れたので、異教徒の裁判所に村長が、金を添えて事の次第を報告するのである。

広場でのアメール一族とムッサー族のくんずほぐれつの争いから始まった事件は、両家の《和解》にいたる細部が、広場にやってきたマラブーの持つ黄色い布がひらひらするさまや、女たちが相手方に負けじと作るご馳走のクスクスの、立ち上る湯気の温かい拡がり、大勢の調停者たちがつながって線ようになってやってきて、始点も終点もなく上も下もない円を作って(=車座になって)座る紅い絨毯……の上で展開される。

もう一度、セルトーからの引用に戻るならば、この喧嘩の調停の場で生じているのは、まさに「パロールの状況」を転換させる実践 *pratiques transformatrices* であり、ことばを通じた生産である。

ここでのコミュニケーションを考えてみたい。調停する者と調停される者の《口》を介して *oral* 交換されるのはことばだけではない。まず、料理が出される。調停者の舌の上を通過する *passer* のは、被調停者が犠牲を払って用意したご馳走である。ここでは、物語の主人公の一族に幸いした偶然によって、血の犠牲を払った高価な肉、この上ない贅沢である肉をクスクスに添えることができた。それが、十人以上もの調停者の舌を喜ばせ、胃の腑へと吸い込まれて行く。そうなれば今度は彼らが、被調停者たちを納得させ、その自尊心を十分に慰撫することばを舌の上に引き出してやることだろう。それは舌の上をなめ

*17 「トレタの市場」 *Le Marché du Tléta* 『カピリアの日々』 *Jours de Kabylie* 。

*18 「女羊飼いたち」 *Les bergères* (同書)。

*19 イスラム世界で広く知られている超自然的存在、精霊(『イスラーム辞典』)、魔神。

らかに転がり、《口》から oral 声として発して、調停の空間、貧しいメンラッド家の、それでも一番大きい室を満たしたことだろう。

まず、喧嘩の当事者に喧嘩の顛末について証言をさせてから、調停者たちは一人残らず 順に、事を収めるためのことば＝口上を述べる。すでに述べたように、ここでのことばは 形式的なものであって、調停者たちがしているのは、何らかの内容をもった結論を出すための合議とか話し合いといったものではなく、ことばは少しずつ変化しながら次々と受け渡され、また、空中に浮遊してその場にいる者の耳に入り、どこに辿り着くでもなく消えてしまう。しかし、そこにいた者すべてを通過循環して、事件を収束へと変換したのである。そのとき、参加者はみな、何らかのことばを話し jouer、それらがつくるコミュニケーションを享受した/楽しんで jouir 違いない。ここでは、どんなことばが交わされたかは詳しく書かれていない。それはむしろ重要ではないからだろう。重要なのは、マラブー の持つ黄色い布のひらひらする様や、参加者のひとりひとり、調停の部屋の赤い絨毯にいたるまでの、状況全てである。

調停がすんで夜が明けると、両家の者はもはや争わない。しかし、両家の者は「翌朝目 覚めると、互いに公認の敵となって ...nous nous réveillons le lendemain, les uns et les autres, officiellement ennemis.」いる。喧嘩の代償は決して小さくない。その後いつまでだろうか、「両家の者は話をしなくなり、助け合うこともない Désormais nous ne parlons plus, nous nous rendrons plus de services et Boussad ne risque plus, avant longtemps, de me revoir en face de lui, ...」し、ブサドは「面と向かってフルルに会う」ようなことはなくなる。(FP, p.45) 知恵を働かせ礼を尽くした調停を経ても、両家の間に残ったわだかまりはそう簡単に解消されない。これが大事件であったことがわかる。しかし、いずれの家も狭く閉ざされた共同体＝村内の一員であり、これから先もともにこの村で生きていくしかない。そうであるからこそ、こういった場合の会話の技術を総動員し、両家の人たちがこの事件を生き越すことができるようにしなくてはならなかったのである。そのための会話をする術を、カビリア の人々が共同で巧みに繰り出すさまが、この喧嘩と、その調停のエピソードにはみごとに 書き留められている。

セルトーが「ロジック/ゲーム、民話、ものの言いかた」で解説するところによれば、この出来事（事件）は「ある範型の一個別的適用」であると見ることができる。^{*20} こういった事件の対処方は、あるロジックなりゲームのルールのようなものとして範型があるが、上に見たように、話者は範型の適用のひとつの事例としてこの事件を詳細に語り、範型と 個別性をともに伝えることに成功している。

この事件のエピソードは、カビリアで専ら男たちに属することばのありかたをよく伝えるものである。男のことばの領土は公の空間であり、ことばの行使は関係性の調整である。調停のシーンで明らかのように、男たちによるコミュニケーションは儀式的であり演技的 である。力で勝っていることだけでなく、そのような場面での弁舌とふるまいに優れていることが、カビリアの男らしさでもあった。伯父のルニスはその点でもカビリアの男として申し分なかった。伯父の真価は、農具を土に打ち込むことではなく、身仕舞いを美し

*20 セルトー、前掲書、p.79

くして堂々と、広場で弁舌をふるうことにあった。^{*21}カピリアの一人前の男に求められる 資質を欠いた人物として、【家族】10 に描かれる、ナナの夫オマールと対照的である。子どもであった主人公の目から見ても、オマールの身体、容貌、ふるまいのすべてが嫌悪の対象であったが、わけても、せかせかとした話し方で、子音を妙な具合に発音するため聞き取りにくいその言語と、人前で涙を見せたことが強い軽蔑の感情とともに記されている。男たちのことばの世界は、ある意味で欺瞞的でもある。喧嘩の仲裁の核心は、饗応と心づけ（この言い方も欺瞞的だ。贅沢な食事と金）であるのに、それはあからさまに表にだされることがない。それは公、社会においては当然のことなのである。

主人公は、そういった男たちのパロール行為とは異なる、女たちのことばの世界をより 親しい存在として語る。

物語りと手仕事——女たちのことば

物語には、カピリアの女たちの声がとりわけ切実な余韻を残して記されている。行方不明になった妹を案じるフルルの母ファトゥマの切ない懇願は執拗に夫を責め続ける。お腹の子の成長が順調ではないのではと案じるナナに姉のファトゥマがかけることばの優しさをフルルは聞く。遂に、赤子とともにナナが亡くなった時、女たちが上げた叫び声 *cris* はフルルの感情の記憶のうちに消え去ることがない。

「創始的複雑さ：『貧者の息子』」において、エルバズとマティウ=ジョブは以下のように述べている。

もっとも大きな意味をもつのは、二人の叔母の話に当てられた章である。ハルティとナナ、この叔母たちがわれらの主人公に与えた影響は消えずに残り、作家としての未来を決定づけることになることが強調されているからである。実際、話のなかでは全てがこの二人の叔母の紹介のために準備されていて、見るところ、物語の中心を占めている。あるいは、少なくとも、第一部においてはそうである。

les chapitres les plus significatifs sont ceux consacrés à ses deux tantes. Khalti et Nana, car il est fortement souligné que leur influence sur notre protagoniste demeure indélébile et va décider de sa future vocation d'écrivain. En fait, tout nous prépare dans le récit à l'introduction de ces deux tantes qui, à notre sens, occupent le centre du roman, ou du moins de cette première section ——^{*22}

*21 フルルの父ラムダンとその兄のルニスとはあらゆる点で対照的な兄弟である。母親似のルニスは容貌に恵まれ、長身のスマートな男で、身仕舞いにも気を遣う見栄えのする人物だった。直情径行な性格で、どちらかというと地味な農作業は好まず、広場で弁舌を振るうことを好んだ。これは、カピリアの男のひとつの典型である。ラムダンはルニスより 10 歳ほど年下の、早世した父親似のやぶにらみの醜男で、歩く姿は熊のようだった。妻となったファトゥマも最初はなかなか結婚を承諾しなかった。「無礼なほど無口」だったので兄最良の母親からは頭が悪いと思われていたが、実際には愛情こまやかで優しく誠実な人物であり、母と兄を敬愛していた。

*22 Elbaz, Mathieu-Job, *Mouloud Feraoun*, p.40

物語はフランス語で書かれる。それがどう書かれたかより以前に、エクリチュール以前に、フルル・メンラッドの語りへの指向、語る意思を決定づけたのは他でもない、女たちのカピリア語のことばであり、声であった。フルル/フェラウンが実現したエクリチュールは語る女たちの声を物語にどう記したのだろうか。

幼いフルルは、女たちの「ことば」を親しく書き記す。というのも、ほかの回想シーンでもしばしば行われるように、語りは、語られるシーンのその時に戻っているからである。物語が後半【長男】に移ると、女たちの声は次第に小さくなる。【長男】では物語が引き継がれて、父の出稼ぎという家族にとっての大きな出来事が終わると、主人公はティジの村を離れてしまうからである。共同体を離れた男子に、もはや女性と接する場所はない。

物語の前半部分（【家族】）で、男たちの振る舞いとことばについて記された「喧嘩と仲裁」(5)のあとに、女たちの「手仕事と物語」(6)が記される（第Ⅱ章参照）。

男たちのことばの術が発揮されるのは、上に見たように、狭い村であるとはいえ、家の外、公の空間での出来事に対してである。いっぽう、女たちのことばは専ら「内」にある。カピリア（アルジェリア）、また広くマグレブ世界では、女たちは内婚制によって親族内に囲い込まれるようにして暮らしていたからである。もっとも、マグレブがそのような世界であることを、アラブ社会のありようや、イスラムの信仰に原因を求めるのは誤りである。それは、もっと古い時代から地中海世界にあった人間社会のありようのひとつである。^{*23}

内にある女たちの世界は、一族、家族、家の内にあり、そこからもっと内へと深まり、しかし、いずれ反転して大きく広がるだろう。

フルルにとって親しい女性たちとは、母（長女）の二人の妹である叔母たちであった。この二人の女性は物語中で、終始、次女がハルティ khalti（＝おばちゃん）、三女で末娘が ナナ nana（＝ねえちゃん）（第Ⅱ章参照）という、主人公からみた親族関係を示す「カピリア語」の呼称によって呼ばれ、名前は、ナナについての二か所を除いて明かされない。

私は、叔母たちをよく知っていたが、名前は後になるまで知らなかった。父母についてと同じで、名には何の意味もなかった。小さい従姉の口から、その父の名はルニス、私の父はラムダン、母はファトマ、従姉の母の名はヘリマというのを聞いたときの、嬉しい驚きを思い出す。しかし、いっぽうでは、この人たちをそう名指すのは他人であって、私たちには家族のみが持つ、もっとやさしいことばがあるということを、私はすぐに理解した。私にとって、叔母たちは、ハルティ（おばちゃん）とナナ（ねえちゃん）だった。

Je ne sus le nom de chacune de mes tantes qu'après les avoir bien connues elles-mêmes. Le nom ne signifiait rien. C'était comme pour les parents. Je me rappelle avoir appris avec une surprise amusée, de la bouche de ma petite cousine, que son père s'appelle Lounis, le mien Ramdane, ma mère Fatma, la sienne Helima. Je compris tout de suite, cependant, que c'étaient les autres qui les désignaient ainsi et que dans la famille nous avions des mots plus doux qui

*23 ジェルメーヌ・ティヨン『イトコたちの共和国』参照。

n'appartenaient qu'à nous. Pour moi, mes tantes s'appelaient Khalti et Nana. (FP, p.46-7)

ヤミナ Yamina というナナの名が明かされるのは、この女性が家族だけでなく誰にでも愛される女性として「私たちのヤミナ notre Yamina」と呼ばれていたことが知らされる箇所と、物語のなかで、死産の後に自らも命を失い、その葬儀が執り行われるシーンである。ナナの名は、他人がその人と認める場合と、その人が死によって刻印される場合あたかも戒名のように記される。

いっぽう、ハルティの名前はかたくななまでに伏せられている。直接話法で示された、妹であるナナのことばのなかでさえ、ハルティはハルティ＝おばちゃんのみである。同じことばのなかでフルルの母（長姉）はファトマと呼ばれているのに(FP, p.48)。また、ファトマがハルティに話しかけるシーンでも、ハルティの名は一度も呼ばれることがない。

個人の名ではなく家族の名については、以下のように述べられている。

私の両親は、村の下のほう地区の、北の一番端に家を構えていた。わが家はメズーズ一族の出で、ムッサという家族である。メンラッドというのは通称だ。

伯父と父は、それぞれルニスとラムダンという名だが、地元では、「シャバンヌの息子たち」と呼び慣わされていた。なぜだか、私はよくは知らない。まだ、とても幼いときに父親を亡くしてしまって、父は祖父のことをまったく覚えていない。だから、祖母の名であるタサディットの息子たちと呼ばれるのが本当のところだ。だがおそらく、彼らの伯父たちや従兄たちはシャバンヌの名をずっと残しておくほうを望んだのだろう。それは、父を亡くした子どもたちが誰の血を引いているのか、二人が事実としても法のうえでも、その、もはやこの世にいない者の後を継ぐ者であるということ、人々に対してはっきりと示しておくためだった。初めはこういう考え方でよかった。しかし、子どもはそのうちに一人前の男になった。こうして二人一緒に考えることは、彼らを多少ともおとしめるようなことになった。みな、いつも、二人を一人の人間のようにしか話さなかったから。にもかかわらず、二人は全然似ていなかった。

Mes parents avaient leur habitation à l'extrême nord du village, dans le quartier d'en bas. Nous sommes de la karouba des Aï Mezouz, de la famille des Aï Moussa. Menrad est notre surnom.

Mon oncle et mon père se nomment l'un Ramedan, l'autre Lounis mais dans le quartier on a pris l'habitude de les appeler « les fils de Chabane », je ne sais pas trop pourquoi. Ils furent orphelins de si bonne heure que mon père ne connut jamais mon grand-père. On aurait dû les appeler les fils de Tassadit, ma grand-mère. Leurs oncles ou leurs cousins préférèrent, sans doute, perpétuer le nom de Chabane pour bien montrer aux gens que les orphelins avaient de qui tenir et qu'à deux ils remplaçaient en fait et en droit celui qui n'était plus. Cette façon de voir était louable au début. Mais par la suite, les enfants devinrent des hommes. Ce collectif les diminuait un peu car on ne parlait jamais d'eux que comme d'une seule personne. Pourtant, ils ne se ressemblaient guère. (FP, p.20)

カビリアの名/名付けについての事情は、ランジニの著作からもうかがわれる。フェラ

ウンの評伝の冒頭は、作家が生まれて役所に名を届けるシーンから始まっている。生まれ ときではなく、名が届けられるときから始めるというのは、フランスの植民地支配下に あったカビリアにおいて極めて象徴的である。1913 年の、フランスのアルジェリアに生 まれたカビリア人の生は正しくはあるいは記録上は、ここからしか始まらない。その限り では、私たちにはフェラウンについて知らないことが多すぎるし、彼の残した作品に読み 解くことのできない埋もれた層のようなものが切れ切れに残っているのはそのためであ ろう、と想像できる。

本書によれば、ムールードが生まれたとき、父ラムダンはフランスに出稼ぎに行ってい て留守であり、父に代わって伯父のアレッキが届けを出したことになっている。^{*24}その場 面はいきなり会話から始まるが、ここでのやりとりはランジニの想像による再構成であ る。しかし、ここから始まる二ページの記述で、われわれは当時のカビリアにおける植民 地政府の「(原住民の) 名の取り扱い」がいかなるものであるかを知るのである。

1871 年のムクラニーの反乱^{*25} がきっかけであった。アラブ局 *bureaux arabes* はカビリア人の戸籍をより扱いやすいものに改めた。村々にフランス語アルファベットを順に与えて (最初の村には A から D、次の村には F から H、……)、住人の姓をその文字から始まるものに改めさせたのである。アラブ局の役人には、アラビア語はわかってもカビリア語 はわからない。よって、フランス語のアルファベットを与えてカビリア人が持っていた名 のほうを変えさせるという極めて倒錯的暴力的な手段がとられた。

アレッキは戸籍台帳を前に、役人と押し問答する。生まれた男の子の名は、ムールード Mouloud、マフムード Mahmoud 氏のシャバンヌ Chabane 家のムールードであると。その名はもうないし、そのことはよくわかっているはずだと言り返す役人に、アレッキはさらに、われわれの本当の名は……と言いかけ、役人はいらだつ。名をめぐる小さな反乱 *petite insurrection* はここでも空しく終わる。ランジニはこの箇所の記述に、刊行された書簡集には収録されていない、フェラウンのカミュへの手紙の下書きを引用している。^{*26}

つまり、村人たちにとっては、私はフェラウンではないのです。私の家はシャバンヌ 家で、シャバンヌという祖先がいたということです。いっぽうで、学校へ行った世代は フランス語の名前を受け入れて、現在では私の生まれた村でも、ムールード・フェラウ ンはムールード・アイト=シャバンヌに他ならないということのみなよく分かっています

*24 小説中では、父の名ラムダン Ramdane はフェラウンの父の名をそのまま用いている。

*25 カビリア地方で起こった、フランスの植民地支配に対する武装反乱。ムハンマド・ムクラニーは、カビリア地方、メジャーナのパシャガ(大郡長)だった。これに、ラフマーニー教団が連合し、一時は 15 万人のカビリア人が蜂起して、反乱は広域にわたった。ムクラニーの戦死、フランス軍の反攻、ラフマーニー教団の脱落で反乱は 1872 年に終結した。

*26 Lenzini, *op. cit.*, p.19-20. ランジニは、このカミュ宛の手紙の下書きをフェラウンの息子のアリから提供された。実際にカミュに出された手紙(1951年3月27日付)には書かれなかった部分がある。この下書きにある「[誕生日について] この日付は公式のものにすぎません。Cette date est simplement officielle.」「私の名前も誕生日と同じで公式のもです。Mon nom est aussi officiel que ma date de naissance.」からは、押しつけられた名に対するフェラウンの態度がうかがわれる。公式・正式 *officiel* という語も、本来の逆の意味(偽・仮)で使われている。

す。女性たちは学校に行かないので、カビリア語の名前をずっと使っていて、大方は、フランス語の名前は自分の家の名しか知らないということは言うておかねばならないでしょう。

C'est vous dire que pour les gens du village je ne suis pas Feraoun. Notre famille est Aït-Chabane parce que nous eûmes un Chabane pour ancêtre. Cependant les générations qui ont été à l'école ont adopté le nom français et à présent on sait très bien dans mon village natal que Mouloud Feraoun n'est que Mouloud Aït-Chabane. Il faut dire aussi que les femmes n'allant pas à l'école sont gardiennes du nom kabyle et ignorent généralement le nom français des familles autres que la leur.*27

(家族の)名というものについて、フェラウンが生きた時代のカビリア人がどういう態度をとっていたか、察するに十分であろう。

そして、ムールードの誕生日は、出生とフランス語の名を届けたその日として「記載された inscrit」。いや、それはすでに数日前のことで、というアレツキの抗議は取り合われな。生まれたばかりの子の父はラムダンというがフランスにいて来られないことや、自分はアレツキという者で、子どもの伯父に当たることなどを口にするアレツキを遮って役人は言い放つ。肝心なのは《本当の名前》と、生まれた日だと。*28 どちらも虚偽だが、いったん記載されれば、それは結局、本当になる。役人は、綴りをつぶやきながら、大きな本 *le grand livre* に名前と誕生日を丁寧に書き込み、己のカリグラフィーをためつすがめつして眺める。それは、太いところは黒々と細い所はシャープに刻まれ、美しくなくてはならないだろう。またしても、大きな本。白い紙。仕上げに、役人はアレツキの手を捉えてその人差し指をインクパッドに押しつける。そして、名前が記載された欄の下に指の腹をローリングさせる。またしても、紫色のスタンプ(第Ⅲ章参照)。大きな本の白い欄にペンで書き込まれた名と誕生日は刻まれた確かなもの、これこそが本物である、《彼ら》にとってはおそらく、アレツキは納得していない。いや、むしろ、そんなことは大事なことはないと思っている。村に帰れば、ムールード・フェラウン Mouloud Feraoun と役人が書いた名、アレツキには読めない名など思い出もしない。己は、シャバンヌの息子で、弟のところに生まれたシャバンヌ家唯一の跡取りもまた、シャバンヌの家の男の子なのだから。

互いに何一つ知らぬことのない村での暮らしに、役所にある、紙に刻まれた名など何の意味があるのだろう。そんなものはどこにもないに等しい。村で刻まれたものといえば、広場に敷かれたの石の上の碁盤目、小石で遊ぶための格子模様である。

村は三つの地区からなり、したがって広場も三つある。どの広場にも石の長いすがあり、敷石は光っている。敷石はあちこちに碁盤が刻みつけてあって、小石を使って遊ぶ。

*27 Lenzini, *op. cit.*, p.19-20. フランス語で表記された名前ではあるが、アラブ風の名前である。

*28 物語のなかでは、主人公フルル・メンラッドの誕生日は、ムールード・フェラウンの戸籍上の誕生日とは食い違っている。

Le village a trois quartiers et par conséquent trois djemas. Chaque djemas a ses bancs de pierre et ses dalles luisantes. On retrouve partout, creusés dans les dalles, les mêmes damiers immuables où l'on joue avec des cailloux. (FP, p.14)

石板に刻まれた格子をすり抜けて、プレイヤーの手が小石を自在に動かしていく。それでも遊びにはルールがあるが、カビリアの人々と、その暮らしはアラブ局（ベルベル局でもなくカビリア局でもない）のどこかに保管されている大きな本に、担当者が細心の注意を払って刻みつけた文字のうねりや、罫線や格子の合間を無頓着にすり抜けてしまうだろう。colonisateursは台帳にペンで彼らを留めつけたつもりかもしれない、偽物の名、不明な誕生の日として書き込んで。しかし、それは誰であろう。フランスのアルジェリアの原住民。カビリア人はどこにいたのだろうか。役所に甥の誕生を届けて帰宅したアレッキも例外ではなく、カビリア人（≒農民）は貧しく日々の労働に追われている。その肌は、太陽に灼かれて陰の色となっている。カビリア人は己の身体に刻まれた読めない文字など意に介しない。頑丈な農民に成長するはずの男の子が無事生まれたことこそが何より重要なのだ。わたしたちが通常、戸籍に求める確かさや、起源の感覚はここには存在しない。カビリアの人々は生まれたときすでに、強制的に変更された名を押しつけられる。チョウの論に従うならば、彼らの生は等し並みに翻訳された起源から始まらざるを得ないのである。

もう一度、フルルのことばを聞いてみよう。

「わが家はメズズ一族の出で、ムッサという家族である。メンラッドというのは通称だ。」
「伯父と父は、それぞれルニスとラムダンという名だが、地元では《シャバンヌの息子たち》と呼び慣わされていた。その理由に、私はそれほど通じていない。……彼らの伯父たちや従兄弟たちがシャバンヌの名を残しておくことを望んだのだろう。それは、父を亡くした子どもたちが誰の血を引いているのか、二人が事実としても法の上でも、その、もはやこの世にいない者の後を継ぐ者であるということ、人々に対してははっきりと示しておくためだった。」
「私は、叔母たちをよく知っていたが、名前は後になるまで知らなかった。父母と同じで、名には何の意味もなかった。」

戸籍上の名、記載された名というものは、カビリア人にとっては「偽物の名」であることは常に意識されたいだろう。女たちはなおさら戸籍上の名前になじみがない。いっぽう、共同体のうちでは、大きな家族の名前はあっても、常日頃人に呼ぶときに口にされることはない。いちばん知られていたのは父の名前で、誰々の^{せがれ}倅と言われる。^{*29} いっぽうではそれは、女の名などはさらにまともに扱われない世界でもあるということだ。そして、主人公が言うように、家族内のごく親しい間柄には名前はあまり意味をなさない。また、カビリアのようなほとんどの住民が等しく貧者であるような世界では「名のある」者などいないのであって、みな「貧者の（息）子」なのである。

この物語は、主人公にフルル fouroulou すなわち隠す cacher の意味を名として与える。物語に潜む語り手は始めから隠されている。そして、誰一人として何者かわからないままである。

*29 フルルも「ラムダンの息子、倅」と呼ばれる。

フルルの母の姉妹は、ごく若い頃に母を、そしてすでに父を亡くしていた。ハルティと ナナは二人きりで小さな家に住んでいる。幼いフルルは、わが家よりずっと居心地のよい 叔母たちの家に向かう。そこには、彼を引きつけて止まないものがあった。

私の母方の叔母二人は、私の両親と同じ通りに住んでいた。祖父のアフメドは二人に、屋根裏の納戸もない平屋の小さな家を残していた。その狭い家は、一隅に置かれた胴の太い 瓶^{アクフィ}がいやに目についたが、叔母たちはこれをいっぱいにしたためしかなかった。^{*30} 屋根は低くて門は片開き、狭苦しい中庭の幅は男の背丈を超えないほどで、奥行きも正面入口の幅と同じくらい。キクイタダキのまるくて薄暗い巢のなかのように狭ぜまと している。しかしそこにいると、慎ましく穏やかな愛情の、やさしいぬくもりが感じられる。動けばふれる壁は抱擁してくれ、薄暗がりに置かれた物たちはほほえみかけてくる。そうだった、陰気くさいことなどなかった。私の子ども時代の親しみ深い牢獄、そこで過ごしたのはあまりに短い時だったように思われる。

Mes deux tantes maternelles habitent la même rue que mes parents. Mon grand-père Ahmed les avait laissées dans une petite maison sans étable et sans soupenle. Dans un coin de la maisonnette trône un akoufi ventru que mes tantes n'ont jamais réussi à remplir. La toiture est basse, la porte n'a qu'un seul battant, la largeur de la courette ne dépasse pas la taille d'un homme et sa longueur est celle de la façade. On s'y trouve à l'étroit ainsi que des roitelets dans leur nid rond et obscur. Mais on y sent une douce chaleur d'intimité discrète et tranquille. Les murs qui vous frôlent à chacun de vos mouvements semblent vous caresser et les objets vous sourient dans la pénombre. Non, elle n'avait rien de triste, la chère prison de mon enfance, les moments que j'y passais me paraissent trop courts. (FP, p.46)

最初に叔母たちのところに私を連れて行ったのは、姉のバヤだった。私が二つか三つの頃、母が家事に忙しいときに、私を遊ばせるため姉は私を背負って連れて行った。それから、歩けるようになるとまず、私の歩みは本能的に叔母たちの小さな住まいに向かった。そこは私にとって、自分の家以外の唯一の、確かな隠れ家だった。バヤのほうも 早いうちから、叔母たちといっしょに過ごすのが習慣になっていた。私たちは、大家族の端っこで、親密で手前勝手なサークルのような小さな家族をつくることになった。私 たちだけの秘密、私たちの子どもっぽい夢があった。そこでは口論も穏やかな空気のなかへとすぐに解けて消えてしまうのだった。

Ce fut ma sœur Baya qui m'introduisit chez mes tantes. D'abord elle m'y portait sur son dos, lorsque j'avais deux ou trois ans, pour me distraire, pendant que ma mère s'occupait du ménage. Ensuite, quand je pus marcher, mes premiers pas me conduisaient d'instinct au petit logis de mes tantes comme au seul havre sûr qui existât pour moi hors de notre maison. Baya, de son

*30 大麦（主食）などの保存容器だが、姉妹のつましい稼ぎでは食糧もそれほど大量には蓄えることはできなかった。それでも、姉妹だけだったので何とか食べていけたのである。

côté, prit de bonne heure l'habitude de vivre avec ses tantes. Nous formâmes bientôt une petite famille en marge de la grande, un cercle intime et égoïste, avec nos petits secrets, nos rêves naïfs, nos jeux puérils, nos querelles vite dissipées dans une atmosphère de tendresse. (FP, p.49-50)

キクイタダキ roitelet は、背がくすんだ緑色、腹は灰色で、頭に小さな黄色い菊の花に見える冠を頂いた小鳥で日本にも生息するが、国内で最小の鳥とされ、体長は 9~10 センチ。この事情はカビリアでもそう変わらないだろう。その巣は「サルオガセ^{*31} などを使ったお椀形の巣で、産座^{さんざ}に羽毛、樹皮などを敷」き、営巣場所は、「山地の林の樹の枝先（ぶら下げる）」であり、大きさは、「外径約 9 × 9cm、厚さ約 10cm、内径（産座）約 4 × 4cm、深さ約 4.5cm」である。^{*32}確かに、いかにも小さい。巣がかけられる場所を知るとき、作中で後に、家族が樹の姿に喩えられ、両親を失った、自分を長姉とする三姉妹を一番末端の分枝になぞらえるファトマのことばは、このような狭くしかし羽毛に守られた空間のイメージを温かい感触とともに再度想起させる。家族の幹から分かれた枝の更にまた小さく分かれた枝の先で密かに営まれていた、女性と子どもだけの小家族はいかにもキクイタダキの巣のようである。山の民であったカビリアの人々にとって、山地の針葉樹林に生きるキクイタダキは親しみ深い小鳥だったに違いない。先に参照したランジニの記述によれば、この女と子どもの世界は、ユースフ将軍をも寄せつけなかったカビリア地方の縮図であるとも考えられる。女しかない、岩山の端に引っかかった村こそが征服者の暴力が及ばない場所であり、枝先に揺れるキクイタダキの巣は男たちの近づき得ない、知り得ない場所である。

いずれ、短い繁殖期が終われば放棄されてしまうように、この居心地のよい《巣》は失われざるを得ない。しかし、この物語は放棄された鳥の巣からよみがえってきた。話者は、鳥たちの巣の比喩をこの作品の始まりでも用いている。それは第一部【家族】の前置き（1）で、ノートが発見されて、そこに、本作品が書かれていたと述べる箇所である。

教室に、真っ黒になった小さな机がある。二つある抽出の一方に、今日までその傑作 は入ったままであった。勤務日程表や下調べ用のカードの間に、親鳥にも兄弟鳥たちにも見捨てられた巣の中の、ズグロムシクイの五個目の卵のように。

Dans sa classe, il y a un modeste bureau tout noir. Dans l'un des deux tiroirs, le chef-d'œuvre avorté gît aujourd'hui, oublié, entre un cahier de roulement et des fiches de préparation comme le cinquième œuf de la fauvette que l'oiseau et ses petits laissent dédaigneusement dans le nid inutile. (FP, p.10-11)

鳥たちの巣は、本来、生成と出発の場所である。いかにささやかな空間であろうとも、小鳥たちの巣こそが、声とことばによって豊かなイメージネーションが生まれ育つ場所であ

*31 糸状の地衣類。樹皮について長く垂れ下がる。木のように枝分かれしている。

*32 巣はほとんど完全な球形であり、ハンモックのように細い枝先にぶら下がっている。

る。そこは、女と子どもだけの世界として描かれ、男とおとなたちはいない。男やおとなにはしなくてはならないことがある。もっとも、この比喻を読み直すと改めて面白いことに気がつく。この卵は、教師が使う、カードやノートの中に横たわっていたのだ。優しい羽毛や、サルオガセや枯れ葉などではなく。このノートを養ったのは、主人公/作家の、カピリアの子どもたちを前にしての教師としての勤めだったのだ。ナナとハルティを失い、フランスの教育の場に行ってもなお、この鋭敏かつたくましい知性と感情の持ち主は、新たなことばを集め編み、自己のうちの物語への感覚を養い続けたのである。

女たちの営みは、家内から、幼い子どもであるフルルの感覚感情のうちへと、より親密で内密な世界へと働きかける方向性をもっている。女たちの手仕事の領分は衣食住であり、ほぼ家内に限られるが、ここで記されるのは、語りの行為そのものと、語りの結果でもある、語られる(た)内容=お話・物語両方のメタファーである「織り」と、いくつもの工程/行程を時間をかけて進んで行かねばならず、いくつものスキルを必要とし、しかも自然条件に翻弄されやすい「陶芸」である。二人の叔母たちは、あたかも相互に手仕事と物語を分担して補完しあうかのように、そして二人で一人であるかのように描かれている。実際、主人公の母で三姉妹の長女であったファトマがメンラッド一家に嫁いでからは、残された妹たちは亡父が残したみすばらしい家に二人きりで暮らし、助け合って生きてきたのである。

ナナが亡くなってティジの墓地に葬られた後、フルルは残された母、長姉ファトマとハルティについて次のように書いている。

私の母は兄が姉妹が母が、そして父が死んでいくのを見た。そして、悲痛と沈黙に馴染んだ。道の端に生え出た樫の木にも似て、悪天候にも、新芽をやたらと食い荒らす山羊にも、情け容赦もなく傷をつける羊飼いのフォークにも耐えて、頑強に土にしがみつ き、かろうじて生育していた。母は、口をきつと結んで事に当たる習慣を身につけた。苦もなく禁欲的であったが、あるいは感情が磨減していたのかもしれない。今度のつらい出来事にもこれまで以上に耐え、忘れようと努めながらまた生きていこうとするにちがいない。

だが、ハルティにとって事は違っていた。彼女にとってナナは妹以上のものだった。自分自身の一部、最良の部分だったのだ。

Ma mère a vu mourir un frère, des sœurs, sa mère, puis son père. Elle est familiarisée avec la douleur et le silence. Elle ressemble aux chênes rabougris qui, poussant aux bords des chemins, s'obstinent à végéter malgré les intempéries, les chèvres qui les broutent librement et la hachette des bergers qui les mutile sans pitié. Ma mère a pris l'habitude de réagir en serrant ses lèvres minces. Elle est stoïque sans effort ou insensible par usure. Elle supportera ce coup comme les précédents et se remettra à vivre en tâchant d'oublier.

Mais pour Khalti, ce fut autre chose. Nana n'était pas seulement sa sœur. C'était une partie d'elle-même. La meilleure partie. (FP, p.90)

ハルティとナナはこのような姉妹であったが、人となりや姿形となると好対照であった。三姉妹の末娘であるナナは、小柄で美しい人だった。幼いフルルにはいつも「食べ物をく

れる」人であり、誰に対してもやさしくふるまい、その声は「人の気持ちを鎮めるようなところがあった」。いっぽう、次女のハルティは美しくて豊かな長い髪をもった背の高い女性で、気まぐれな山羊の横顔をもち、直感にかしずかれた永遠の子どもとも言うべき、エキセントリックな性格の持ち主だった。愛であれ憎しみであれ、あまりに過剰でそれを隠さなかったために、周囲と常に悶着を起こしていたが、とりわけナナのやさしい振る舞いととりなしが、ハルティの存在をどうにか世間と折り合わせていた。

両親を失った二人の姉妹の後ろ盾は、長姉ファトマの夫ラムダンであり、ラムダンの兄ルニスであったが、カピリアではもっぱら女たちが担う手仕事である、陶器作りと織りが、女二人だけの所帯が生き延びる日々の業なりわいであった。フルルが語る叔母たちは、常に手仕事するカピリアの女である。手仕事はもちろん二人とも行うが、若いナナのほうが巧みである。手仕事をするナナの

小さな白い《手》の巧みであることについて、フルルは詳しく語るが、ナナにとってその巧みは、日々の暮らしにおける身のこなしのように自然に身に備わったものとして示されている。楽しげに軽やかに、その手は手びねりの焼き物をやすやすと成形し、カピリアの縦型の機をリズムよく操って、衣服の布や、敷物を織る。

陶芸は、春に陶土を取ってくることから始めて焼きに適した夏まで、長い時間をかけて行われる仕事である。ハルティとナナは互いの能力に応じた分業を行い、たくさんの調理用具や保存容器、水差し等を手際よく作っていく。ハルティが容器の底、しっかりとした丸い土台を作ると、ナナはその土台の上に細い紐状にした粘土をぐるぐると積み上げて容器を形にしていく。ナナの手からは、そのための粘土の紐がいつも容易に繰り出されるし、その紐を土台の上にぐるぐると円筒形に積み上げて容器を形づくるときも、ナナは「すべすべした板きれをつかって生地を引き延ばし」たり、「削る道具をつかって、ならしたり引き延ばしたり削ったり薄くのばしたりばりを取ってきれいにしたりする。壁がだんだん高くなり、鍋や壺の形となっていく。右手に持った道具で内側を仕上げ、左手はずっと外側をなでさするようにして、形が整うように気をくばる」のである。形を整えられた容器は、白い土を塗って磨き上げられる。そのつるつるした白い肌に、こんどは絵付けをする。絵付けにおいても、ハルティとナナの分業が成り立っている。ハルティは羊毛刷毛でたっぷりとした赤絵を描き、その上からナナがラバの毛の刷毛で線を引く。ナナの手は、柔らかくてすぐよじれるために顔料を飛ばして染みを作ってしまうこの刷毛もまた、やすやすと使いこなし、「幾何学者のような正確さで〔カピリア伝統の幾何学紋様の〕曲がり角を仕上げる」のだった。

機織りにおいても同様である。まず羊毛を洗って梳き、紡いで糸をつくることから、ナナの手は正確無比に動き働く。ナナが張った縦糸はしっかりとしているが、髪の毛のように細い。そしてまた、陶器の肌に描いたように、伝統の紋様をきれいに布に織り出すこともできたのである。カピリアで使われる縦型の機では、縦糸を切ってしまったときの手当が大変である。ナナの手は縦糸をしっかりと張り、リズムよく横糸を櫛で打ち込んでいくので糸を切らない。縦糸を切っては結び直す、ハルティの機織りの音は途切れがちであわただしい。ハルティは布や敷物を織るのはナナにまかせて、夜なべ仕事の傍らで物語をすることが多かった。ここに見られるのは、物語の語りと、手仕事の進捗がぴったり重なり合った時間である。

告白せねばならないが、〔ハルティのしてくれる〕昔話こそが私を叔母たちの家に惹きつけていたのだった。父も母も子どもたちにお話などしてくれたことはなかった。夜、両親といっしょにいても、楽しいことなど何もない。私にはさっぱりわからず、誰にとってもいいことのない、計算だの計画だの話し合いがあるだけだった。ときに口にされる非難や悪口のせいで、私は隣人や親戚を憎んだりもした。ハルティといっしょならそんなことはなかった。お話の間、ハルティと私は別の存在になる。ハルティは想像の王国をどこからどこまでも作り出すことができ、そこではわれわれが支配者なのだ。

Je dois dire que ces histoires m'attiraient beaucoup chez mes tantes. Mon père et ma mère ne nous racontaient jamais. Veiller avec eux n'avait rien d'agréable. Ce n'était que calculs, projets, discussions auxquels je ne comprenais rien et qui ne réconfortaient personne. Parfois c'était des critiques ou des médisances qui me faisaient haïr un voisin ou un parent. Avec Khalti c'était différent. Pendant les récits, nous étions elle et moi des êtres à part. Elle savait créer de toutes pièces un domaine imaginaire sur lequel nous régions. (FP, p.55) ^{*33}

想像 *imaginaire* とは無縁の、計算、計画、話し合い *calculs, projets, discussions* とお話・物語はまったく別のものである。子どもたちを養い育て家庭を維持していくために両親がする苦心の計算等々よりも、大家族の端のほうで、孤児 *orpheline* になった女たちがひっそりとする創造/想像活動 *créer* のほうが、子どもにとってははるかに恵みの多いものである。物語となると、それはハルティの独壇場であった。ナナが縦に吊った糸に、横糸を通してそれを櫛で打ち込む規則正しい音を聞きながら、ハルティの物語もまた聞かれる。ハルティの頭のなかには迷信がいっぱい詰まっていた、「物語はハルティの口から流れ出し、フルルはこれをむさぼり呑んだ *L'histoire coule de la bouche de Khalti et je la bois avidement.*」(FP,p.55)のである。喜怒哀楽のあらゆる感情とイマジネーション、そして、人間のあらゆるありよう・振る舞い(正と邪、知と愚)と、その教訓をハルティの物語から学んだことを、話者は記している。こうして、人間や、それをこえた存在から、生きるための様々な知恵を学んだのである。ここでは、「(飲食が)活力を与える/励ます・力づける *réconforter* (計算だの計画だの話し合いでは活力はつかない)」、「飲む *boire*」という動詞が使われ、物語、イマジネーションなものの切実さは食物そのものである。それは、食物と同じように、いやそれ以上に人を養うものであった。ナナはフルルにとって、ほんとうにやさしくて「いつも食べ物を与える」人である。ナナとハルティはその意味でも補完し合っている。

作品の最初の部分、第一部【家族】の前置き(1)で、主人公自らが早々に、小説創作の始まりは模倣であると述べている。モンテニユールソー、ドーデ、そしてディケンズ(翻訳で)を読んだという。各部の最初などには、チャーホフやミシュレからの引用もある。読んで、偉大な先人を真似したいと思ったのだという。これらは、学ばされた言語に

*33 ここでは、*créer* という動詞が使われている。物語も陶芸も、織りも *créer* されるものである。

よって書かれた小説である。ところがいっぽう、主人公は、母語カピリア語で語られるハルティの物語にどれほど耽溺したかとともに、みずからの創作への欲望の源泉はここにあったとも告白しているのである。語るハルティ自身はその物語を信じ込んでいて泣いたり笑ったりし、少年も一緒に笑ったり泣いたりした。お話のなかに起こる出来事は、現実の出来事よりもずっと彼の心を揺さぶった。語る者と聞く者の境界がさだかではなくなり、語られることは現実以上に生きられるのである。

ナナが作るたくさんの陶器は、穀物と交換されたが、巧みな手が生み出す美しい物はより求められるので、次の年まで十分に食べていける大麦を蓄えることができるのだった。手仕事は口を養い、物語は知恵と感情を養う。ナナとハルティ、二人で一人の手仕事と語りはともに、人が生きることの根本を支える術であったと言えよう。

セルトーは、このようにも言う。

「お伽話」は、自分たちの聞き手にむかって（いいかい、よくお聞きよ、と）、未来にそなえて使えそうな戦術をさしだしてやるのである。

……科学的理性は、操作的ディスクールからこうしたものを排除して「^{フローブル}正確な」意味なるものをつくりあげたのだ。^{*34}

ces histores « merveilleuses » offrent à leur public (à bon entendeur, salut) un possible de tactiques disponibles à l'avenir. ...

...que la raison scientifique a éliminés des discours opératoires pour constituer des sens « propres ». ^{*35}

お話・物語には、通常の世界生活における「操作的ディスクール」とは異なるロジックが働いているとされる。セルトーはお伽話に対して「正史」を置き、その（でっち上げられた）歴史＝既成秩序のなかでは弱者である者の反抗の武器が、物語の空間に保存されているという。フルルにとって、ハルティの物語は、父母のする計算、計画、話し合いとは別の世界にある。カピリアでは、女たちにになわれるお話の世界は、男たちが取り仕切る公的な空間で交わされることとは違うものである。

物語が教える知恵とは何か、セルトーの論述からその言い換えをできるだけ拾ってみよう。お話が繰り広げられるのは「日常からきりはなされた例外的な空間」で、「驚異、過去、起源」の空間である。そこには「神々や英雄たちの姿をまといながら、日々つかえそうなるまい業、下手な業の模範が並べられている」。「民話のなかに民衆的戦略のディスクールを読み取ることができる」。「民話は擬装/ごまかしを得意とする」。「……これらの話には、日常実践の型式が示されているのであって、しばしば力関係が逆転し、奇跡物語とおなじく、不幸に生まれた者には、ユートピア的な魔法の空間での勝利が約束されて

*34 セルトー, 前掲書, p.81

*35 Certeau, *op.cit.*, p.43

いる」。^{*36}フルルが回想するハルティの物語はまさにこういった性格をもっている。ハルティの物語から学んだこと、語られる空間の非日常性について語るフルル・メンラッドの口調/書きぶりは、セルトーの記述をなぞるもののようにさえ思われる (FP, p.55-6)。

叔母たちのことが語られた断片 (【家族】6) のあとには、学校の話 (【家族】7) が続く。後に教師になる子どもにとっても、初めて学校にやられた日は、甘やかされた子ども時代の、突然の切断と受け取られている。家の内と外で、語ることばによる生きる術をカピリアの子どもは学んだ。しかし、今日からは、フランス人が作った学校に行き、文字のあることばを学ぶのである。ここでの教育は、広場での騒ぎや、荒唐無稽な想像力とは無縁の、もっと「確かな」^{フローブル}ものはずである。ハルティのお話のなかに、その「確かな」^{フローブル}ものをいくら探そうとしても見つけることはできないだろう。まず、語る端から声は消えてしまい、聞いたと思ったそのときには何の痕跡も残さない。語る者と聞く者が生きていられる限りそれは生き続けるが、彼らの死とともに全ては消滅してしまう。お話とはそういうものだ。また、お話にはバージョンがたくさんあって、どれも確かなものではない。ナナとオマールが逃げ込んできた夜も、フルルと姉のバヤはハルティの物語を聞いていた。二十回目の糞泥棒の話だった。この話のなかでは、天の川 La Voie lactée は神が夜空に示してみせた泥棒の逃亡経路である。これには、乳牛泥棒とかずるい粉屋という変化型がある。いずれも、白い物と結びついて夜間に行われる不正行為を天の川が示しているというものだ。^{*37}カピリアの口承説話のなかに働いているのは「物の想像力」である。暗い空を横切る白い帯状の流れは連想を呼ぶ。それは、黒い土の上に散らばった糞くずとかこぼれた牛乳、振りまかれた粉の道筋なのである。ここには、未だ、そして常に象徴やメタファーならぬ、連想の豊かさと自由がある。

先に述べたように、子どもを死産したナナはそれが原因で亡くなってしまう。ナナの死のときは、深い悲しみの感情とともに想起され、丁寧に描写されている。

ほかには何も覚えていない。家でしたことも、母がいないのに私たちがどうやって寝たのかも、夜間に起こったことも、何も覚えていない。私は、母と姉妹たちの叫び声で不意に目を覚まされた。私の優しいナナが、ついさっき息を引き取ったのだった。私はずっと、あの叫び声と、胸をしめつける、この上ない不安を忘れることはないだろう！
私はおののき、寝床から身を起こし、恐ろしさにうめいた。死を前にして女たちがあげる悲嘆の声を聞く度に、私はわれ知らずおののきふるえるが、それはいつも、叔母の死を知らされたあの悲痛な目覚めを思い出されるからだ。

*36 セルトー, 同書, p.79-80

*37 カテブ・ヤシン『ネジュマ』では、星＝ネジュマに負わされる憧憬的な象徴が遠く高く、物質性からはどんどん離れていく。同じ星(空)でもずいぶん違う。日本なら、「いろはに金平糖、金平糖は甘い、甘いは砂糖、砂糖は白い、白いは兎、兎は跳ねる、跳ねるは蛙、蛙は緑、緑はキュウリ、キュウリは長い、長い煙突、煙突は黒い、黒いは煙り、煙りはゆれる、ゆれるは地震、地震は怖い、怖い幽霊、幽霊は消える、消えるは電気、電気は光る、光るは親父のハゲ頭」(パリエーション多数)である。

叔母は、一昼夜苦しんで亡くなった。取り乱す姉たちの腕に抱かれたまま。彼女は、冷たくなった哀れなものを産み落としたが、それは、墓場へと彼女について行った。^いや、それが彼女を墓へと引きずって行ったのだ！^{なきがら} 宵のうち、小さな亡骸は、その母親にくっついたままだった。ナナは少しずつ衰弱していき、意識は刻々と薄れていった。まもなく、彼女はすっかり弱り切ってしまった。腹のなかで、何かが破裂したような音がして、瓶をひっくり返したときのように、どくどくと血が流れた。あと少しの努力でうまくいけば、そのできの悪い子は完全に切り離されたかもしれない。神は、私の叔母を哀れまなかった。命の舞台は死の幕切れを迎えたのだ。彼女は朝まで瀕死の状態だったが、最後の星とともに静かに消えていった。

婚礼の敷物のうえに横たえられ、白い布をかけられたナナの姿が目には浮かぶ。黄色い絹のスカーフが顎を支え、彼女の小さな顔をぐるりと取り巻いている。目は閉じられ、鼻がつまんであって、顔色はスカーフと同じくらい黄色い。眠っているのではないと、私にははっきりわかる。彼女は寝ているかのようにみえる、が、眠りにもいろいろある。疲労困憊のために重く沈む眠り、穏やかに休らう健康な眠り、病人のつらい眠り。死は違う。死について考え、多くの死を目にして後に、私はいま改めて思う。ナナの顔は無表情だった。微笑みも憤りの名残もなく、苦痛も安らぎの現れもない。無。それこそが死である。親しきものの死、もはやどこにも、その存在を私たちに結びつけるものはない。亡骸よりも、いつもの場所にかけてあるバーヌースのほうで、それを身につけていた者を思い出させる。やさしかったナナの顔は何を語っているのか？ みなに愛されみなに微笑みかけた、あの美しい顔は。死が何もかも持ち去った。死は、想像の及ばない無関心の仮面を残した。それは、動かしがたい壁のように立ちはだかり、私たちの痛みは惨めにも跳ね返されて反響すら残さない。

Je ne me rappelle rien d'autre. J'ignore ce que je fis à la maison, comment nous dormîmes en l'absence de ma mère et ce qui se passa pendant la nuit.

Je fus brutalement réveillé par les cris de ma mère et de mes sœurs : ma douce Nana venait d'expirer. Oh ! je me rappellerai toujours ces cris et la suprême angoisse qui ne me fit sursauter, m'enleva de ma couchette et me fit hurler d'épouvante. Chaque fois que j'entends les lamentations de nos femmes sur les morts, je frissonne malgré moi car elles me rappellent toujours le déchirant réveil qui m'apprit la mort de ma tante.

Elle mourut après une nuit de douleurs, entre les bras de ses sœurs affolées. Elle enfanta une pauvre chose froide qui l'accompagna au cimetière. Qui l'y entraîna plutôt ! Le petit cadavre resta attaché à sa mère dès le début de la nuit. Nana s'épuisait petit à petit, elle s'évanouissait à chaque instant. Bientôt elle ne fut plus qu'une loque. On entendait ses entrailles craquer et les flots de sang couler avec le glouglou d'une jarre qu'on renverse. Un petit effort, par chance, aurait détaché complètement le mauvais fruit. Dieu n'eut pas pitié de ma tante, l'acte de vie devait se terminer dans la mort. Elle agonisa jusqu'au matin et s'éteignit doucement avec le dernière étoile.

Je revois Nana allongée sur son tapis de noce et couverte d'un linge blanc ; un

foulard de soie jaune soutient le menton et entoure son petit visage. Les yeux sont fermés, les narines pincées, la figure est jaune comme le foulard. Je vois bien qu'elle ne dort pas. Elle semble dormir, mais il y a plusieurs façons de dormir. Il y a le sommeil lourd de la fatigue, le repos calme de la santé, le sommeil pénible de la maladie. La mort c'est autre chose. Maintenant que je le revois, en y pensant bien et après en avoir vu beaucoup d'autre, le visage de Nana est inexpressif, il n'y a ni trace de sourire ou de révolte ni idée de souffrance ou de repos. Rien. Voilà ce que c'est que la mort. Un être cher expire, ne cherchez plus rien qui l'attache à vous. Un burnous que l'on suspend à sa place habituelle évoque celui qui le portait mieux que ne le fait sa « dépouille mortelle ». Que dit le visage de la douce Nana, le beau visage aimé de tous et qui souriait à tous ? La mort a tout pris. Elle laisse un masque indifférent, imprévu, qu'elle dresse comme une barrière implacable contre laquelle notre douleur vient buter misérablement, sans écho. (FP, p.88-89)

亡くなった人は、近親の女たちが村の外へと送って行くのが習わしである。私の母、私の姉妹、そして従姉妹、ムッサー族の女たちがそろって、善女ヤミナの葬列に付き従った。彼女は、そのやさしさも微笑みも聡明さをもたずさえ、ミミズクたちや幽霊たちの住まう、樹齢何百年のオリーブの樹の下を通り、ティジの大墓地へと向かって行った。女たちはみな、その人柄をしのんで泣いていた。もし、ナナがこれほどまでに大勢の人が集まったのを見ることができたなら、いくらかは、死出の旅立ちの慰めになったことだったろう。

Il est d'usage, pour les parentes, d'accompagner le mort jusqu'en dehors du village. Ma mère, mes sœurs, mes cousines, toutes les Aït Moussa firent cortège à la bonne Yamina qui s'en allait dans le grand cimetière de Tizi emportant sous l'olivier séculaire peuplé de hiboux et fantômes sa douceur, ses sourires, son intelligence. Toutes les femmes pleuraient en rappelant ces qualités. Et si elle pouvait voir, Nana, toute cette affluence, cela la consolerait un peu de partir. (FP, p.91)

この葬列にハルティは加わらなかった。ナナが息を引き取った直後からハルティのまなざしは動かなくなり、誰の問いかけにも答えなかった。悲しみのうちにも身内の者たちが葬儀の準備をするただ中で、ハルティは凝固したまま何も見ず何も言わない。このとき、ハルティの語ることばはすでに失われていたのである。

夜中ごろ、ハルティは、気味の悪い笑い声をたてながら独り言を言い始めた。間もなく、ハルティは家財道具を放り投げたり拳で瓶を叩いたりして、ものすごい音を立て始めた。それから、俗謡の節で予言者を称えるかと思うと、死者を悼むメロペで乙女の美しさを褒めちぎるといった具合に、聖歌といわず猥歌といわず、割れんばかりの声で歌い始めた。……私たちは黙ったまま悲しい心持ちで、夜が明けるのを門前の道で待った。夜が明けかけた頃、叔母が大声で笑いながら門を開けた。

……この無秩序の真ん中に、ハルティはすっと立っていた。ばさばさの髪が肩に落

ちて背中にひろがっている。そんなハルティは美しかった。母も女たちもそう思ったが、また、彼女が発狂してしまったこともわかったのだ。みんな泣いた。母が心配した通りの新たな不幸だった。……

やってきた人たちは私たちに、この狂気はきっと一過性のものだと言った。これまでにも同じようなことはあったのだ。私たち家族はといえば、みなそろって互いにびったりと身を寄せ合い、中庭にいた。ハルティを見守り、その何も語らないまなざしに、ほんのわずかなりともと理性の影を探し、その支離滅裂で絶望的なことばに意味を見いだそうとした。

C'est vers le milieu de la nuit que Khalti commença à parler toute seule en ricanant. Bientôt, elle se mit à déranger bruyamment les ustensiles et à donner de grands coups sur l'akoufi. Après, on l'entendit chanter à tue-tête n'importe quoi, chants religieux ou obscènes, criant un air profane avec des louanges au Prophète, vantant la beauté d'une pucelle avec la mélopée des morts. ...Muets et tristes, nous attendîmes dans la rue, devant le portail, jusqu'à l'aube. Comme il faisait presque jour, ma tante ouvrit les portes en riant aux éclats.

...Khalti se tenait bien droite, la crinière flottant librement sur les épaules et sur le dos. Elle était belle ainsi. Ma mère et les autres femmes s'en aperçurent également mais elles comprirent qu'elle était perdue. Alors, elles pleurèrent. C'était bien ce nouveau malheur que redoutait ma mère !...

Ceretains visiteurs nous assuraient qu'il s'agissait d'une crise passagère. De pareilles choses s'étaient déjà produites. Cependant, nous étions tous là, serrés les uns contre les autres, dans la courette à regarder Khalti, à épier le moindre reflet d'intelligence dans son regard inexpressif, à donner un sens raisonnable à ses désespérantes divagations. (FP, p.92)

天がハルティに与えたことばの才、語りによって自在に作り出す *créer* ことのできた、あの世界もこの世界もすでに失われてしまったのだ。ハルティはもはや語らない。手仕事の作り手が失われ、最良の伴走者が亡くなったいま、語りも中断してしまう。語りが続けられる条件が失われてしまったのである。調整者がいなくなったハルティは *créer* できなくなる。ナナの「死」は「無」と表現され、それは生き残った者たちの痛みを全て跳ね返してしまうと書かれているが、ふりかかってきた突然の不幸をしのぐ術をハルティほどの語り手であっても生み出すことのできない瞬間だったのだ。狂気はハルティを次第に獣のような存在に変えていき、ある日彼女は出奔して、遂に帰ってくることはなかった。

ハルティが出奔した後、男たちは、若い女が自分たちの目の届かない所へ行行って不始末をしでかすかもしれないことで、家族の名誉が汚されることをいっばい一番に心配する。いっばいファトマは、唯一残された妹の身を何よりも案ずる。天気が急変してティジの村のあたりは大雨に見舞われるが、夜になっても戻らないハルティを探すために、男たちが捜索隊となって探しに行く。捜索は空しかった。ハルティの行方は杳として知れない。山々の麓にひろがるティジウズの平原には、大雨の後に氾濫した川の水が、ときおり水死者の遺体を運んでくる。おそらく、ハルティもそうやっていずことも知れぬ岸边に流れ着いたのであろう……。こうして、ハルティの最期は不明のままになる。

その後、物語は【長男】へと移り、フルル自身はもはや語らない。ハルティの語り

われるとともに、フルル・メンラッドの語りも消えてしまう。古くからカビリアにある語り、変化しながら女たちの中に受け継がれ息づいてきた語りはセバウ河に流され、どこに 行き着いたかわからない。【長男】では主人公の学校教育、エクリチュールの獲得が主要な話題となる。それを語るのに、物語は三人称を採用するのである。

女たちのことばと、それが生み出し/生み出されるイマジネーションの内密親密な世界にフルルは深い愛着をもった。それは、男たちが領有する公的空間の言語とは、はっきりと一線を画している。同じ地平にはない。しかし、当然ながら男たちの世界も一様ではない。父と伯父、二つの対照的な男のありようのうち、フルルがより称揚するのは、明らかに父ラムダンである。無礼なほど無口な男で、外見からは農民の仕事にのみ向いているように見えた。だが、ときおり「何食わぬ顔で面白いことを言い、そこに哲学と詩の両方が あった」(FP, p. 21-2)のだ。^{*38}フルル・メンラッドのカビリアへの深い思いがどこにあつたかは明らかであろう。カビリアの魂がより深く宿るのは、内にあることばなのである。

ことばと欲望 ティムシュレット Timchret^{*39}

カビリアでは、男性と女性の世界が重なりつつも区別され、そこではそれぞれ「別のことば」が使われていることが、『貧者の息子』のエピソードから知ることができる。

さらに、カミュの「カビリアの悲惨」に対する応答のように書かれ、『貧者の息子』と補完しあうかのように読めるエッセイ『カビリアの日々』から、「VIティムシュレット」Timchret を読んでみたい。これはカビリアの祭、習慣で、村中の老若男女が総出で行われる大変重要な《行事》である。というのは、ブルデューが『アルジェリアの社会学』で報告しているところによると、いわゆる村八分にされた者はティムシュレットには加われなかったからである。ただし、ティムシュレットについての本書でのブルデューの解説は極あつさりとしている。

かつてはまた、「ティマシュラット」^{*40} という、共同体での肉の分け合いであり、食卓をとともにする行為があつたが、それは共同体の境界を定めるものであり、同時に村^{*41}は

*38 「しかじかの時点に、しかじかの話し相手にむかって、あることわざを『うまくさしはさむ』無数のやりかた」(セルトー, 前掲書, p.75)をもよく心得ていたということである。無口なラムダンもまた、巧みなことばの使い手であった。

*39 この祭の内容は『ベルベル文化ガイド』*Le Guide de la culture berbère* に紹介されているアシュラ achoura の祭(カーニバルのような内容を持つ)の派生形かとも思われるのだが、アシュラの祭は日が決まっている。

*40 ブルデューはティムシュレットを、ティマシュラット timashrat と表記している。カビリア語を聞き取りによるラテン文字で表記しているのだから、こういった揺れが生じる。

*41 ここでは村という訳語を当てた clan であるが、実際には村 village は土地の広がり、領域を示す。ブルデューの調査記録では、clan という語は複数の家族の集合体(大家族)、また、さらにそういった大家族の集合体を指す場合もある。共同体=村は、一つの大家族で構成されている場合もあれば、複数の大家族から成り立っている場合もある。

その枠組みの内での一体感を再確認し、自己実現を行っていたのである。

Autrefois aussi, la *timashrat*, partage communal de la viande et acte de commensalité qui définit les limites de la communauté en même temps qu'il en réaffirme l'unité, s'accomplissait dans le cadre du clan.^{*42}

もっとも恐れられた懲罰は村八分にされることだ。その罰を受けた者は、ティマシュラット、集会、そして共同体の活動すべてから排除される。それは、象徴的な死にも等しい。

Le châtement le plus redouté est la mise à l'index. Ceux qui en sont frappés sont exclus de la *timashrat*, du conseil et toutes les activités communes de sorte qu'elle équivaut à une mise à mort symbolique.^{*43}

ブルデューの短い説明だけではティムシュラットはいったい何なのかよくわからない。『貧者の息子』にはティムシュラットに似通った話題はほんの少ししか出てこない。それは、カピリアの食はたいへん質素なものであり、肉は滅多には食べられない特別な食べ物であると記した箇所である。

山羊を屠る口実はいたって安易なもので、母が二つ三つ具合の悪いところがあった。母はよくそう言っていたが、ほかの者にはわからなかった。それから、それは偶然以外の何ものでもないが、デルヴィーシュ^{*44}が、間違いなくわれわれの色を持った子ヤギを殺すように言うのだ。母の具合が悪くないときには、ちょっと前から父が日射病になっていた。いずれにしろ、この病はジュヌーン^{*45}がつかわすもので、われわれの色を持った子山羊の血が流れないことには立ち去らないことをみなが知っている。不運な子山羊の死を引き起こすことのできたもうひとりの重要人物は一人息子だった。女の子たちはどうかといえば、彼女らのジュヌーンはせいぜいがところ、卵をほしがらくらいの大胆さは持ち合わせていた。

Un prétexte pour le sacrifier venait très facilement : ma mère avait deux ou trois maladies dont elle parlait souvent et qu'on ne voyait jamais. Et, tout à fait par hasard, un derviche lui conseillait de tuer un chevreau qui avait précisément la couleur du nôtre. Si ce n'était ma mère, c'était alors mon père qui venait d'attraper une insolation. Or tout le monde sait que cette maladie provient des djenouns qui ne quittent le malade qu'après avoir vu couler le sang d'un chevreau, d'un chevreau de la couleur du nôtre. Le troisième gros personnage qui pouvait provoquer la mort du malheureux cabri était le fils unique. Quant aux sœurs, leurs djenouns avaient tout au plus la hardiesse de demander des œufs. (FP, p.67)

*42 ブルデュー P. Bourdieu 『アルジェリアの社会学』 *Sociologie de L'Algerie*, p.19

*43 *ibid.*, p.23

*44 イスラムの托鉢僧、修行僧。教団に所属する。

*45 ジン djinn の複数形。魔神、精霊。

このエピソードはテュムシュレットが実際にどう行われていたか、その一端を見せている。『カビリアの日々』の「テュムシュレット」では、テュムシュレットの始まりから終わりまでが詳しく、また面白（おかし）く書かれている。当然ながら、ティムシュレットというものはメンラッドの家の話のように一家族内ではなく村全体で行われるものである。行事や祭というものは通常暦に従っているが、ティムシュレットにはそれがないので、私たちが考える行事や祭の範疇では捉えがたい。しかし、これはブルデューの調査報告にもあるように、カビリアの人々にとっては重要な活動である。

『カビリアの日々』の「ティムシュレット」は次のように始まる。

それはいつも同じように始まる。そうだと、終わりもいつも同じなのだから！ いちばん最初に夢がある。上の地区の者たちは、その夢は下の地区から来たと言い張る。そして、下の地区の者たちは、上の方の誰かがその夢をみたのだと言う。事の真相を調べないからなおのこと、もう、その時には、夢は村を去ったようで、人をばかにしたように隣の村に行ってそこに隠れている。

「ああ、ほんとだとも。うちの衆は夢はみなかった。それは向かいの連中だ。だけど、あっちじゃ、夢以上のことがあったらしい。雌山羊が話し出したんだ。急にな。その雌山羊が村の衆みんなに獣の喉をかききるようにと言った。そういうことだ……」

「いや、雌山羊じゃなくて、赤ん坊さ！ そいつが初めて話したことばがまあはっきりとわかることだった。母親が怖がって、すぐにターレブ^{*46}を呼んだ。いやちゃんとした遣り取りをしたんだ。人がいっぱい押しかけたとき。」

「信じられん！ 髭の年寄りが来て上の広場でその話をしたっていうのか」

「ああ。これから、爺さん余所へ行くんだろうよ、ほかの村にも。ここだけじゃない。」

「その髭面だが、おまえさん知ってるのか？ 見たんだろ？ 納得したのか？」

「いや。わたしは不信心者じゃない。今年がいい年じゃないのは確かだ。麻疹があったしな。まだ何かあるんじゃないか。なんにせよ、わしらはよくわかってる。タメン^{*47}がたが、恐ろしい悪の神を何とかしてくれるさ。」

こんなところで意見がまとまる。是も非もなく、お祓いのティムシュレットのための村の集會が開かれる。本当のことを言うと、これには女たちが大いに関係している。女たちの想像力はきりがいいからだし、神にせよ悪魔にせよ、そのお告げを運ぶのは女たちだということになっているからだ。だが、男たちにわかっているのは、何をすればいいかだけだ。よし、そういうことなら、買えばいい。牛だ。みんなそうしたがっているんだし、パニックをまき散らしてもしょうがない、ということだ。

Cela commence toujours de la même façon. Dame, puisque le résultat est toujours le même !

Il y a tout d'abord un songe. Ceux d'en haut prétendent que le songe vient d'en bas. Et ceux

*46 学識のある人、物知り。

*47 tamen: (村の地区や、大家族を代表する) お偉方、名士、一族の長、長老。村人たちが選ぶ (FP, CNH 版解説より)。

d'en bas l'attribuent à quelqu'un d'en haut. Surtout qu'on n'aille pas se livrer à une enquête car, à ce moment, le rêve peut quitter le village et aller se nicher narquoisement au village voisin.

— Oui, c'est bien vrai. Les gens de chez nous n'ont pas rêvé. Ce sont ceux d'en face. Mais, paraît-il, là-bas, il y a eu mieux qu'un rêve. Une chèvre s'est mise à parler. Subitement. Elle engage la tribu, la tribu entière, à égorger des bêtes. A bon entendeur...

— Ce n'est pas une chèvre, c'est un nouveau-né ! Ses premiers balbutiements étaient parfaitement intelligibles. Sa mère effrayée a tout de suite appelé un taleb. Une conversation édifiante. Que les gens se pressent !

— Incroyable ! Tu dis qu'un vieux barbu est venu le répéter à la djemaâ d'en haut ?

— Oui. Puis il ira ailleurs, dans d'autres villages. Nous ne sommes pas seuls.

— Et ce barbu, tu le connais ? Tu l'as vu, n'est ce pas ? Entendu ?

— Non. Je ne suis pas incrédule, moi. L'année est mauvais, il faut comprendre. Il y a déjà rougeole. Il y aura peut-être autre chose. En tout cas, nous sommes avertis. Nos tamens seront responsables devant Dieu du mal qui nous gette.

L'opinion se saisit de l'affaire. Bon gré, mal gré, il y a réunion du village pour une *timchret* purificatrice. A dire vrai, les femmes y sont pour beaucoup grâce à leur imagination fertile et aussi, dison-nous, parce qu'elles ont toujours été les messagères : de Dieu ou de Satan. Mais les hommes savent à quoi s'en tenir. C'est bon, on les achètera, ces bœufs, puisque tout le monde y tient. Inutile de semer la panique.*48

ティムシュレットは妙な出来事がどこかで起こり、それが伝播することから始まる。ところが、村人の会話からは、出来事の直接の経験者や目撃者はいないことがわかる。事はどこか余所で始まって、それがこちらにも飛び火するというわけだ。その出来事のように噂話が瞬間に伝わっていく。真偽を確かめる間もなく、妙なことはまた別の村へと行ってしまふ。その異常性がエスカレートして、「みな」が怖がり出すと、これは是非お祓いが必要だということになる。犠牲——動物を屠って供えること、が行われなくてはならない、ということだ。それで、牛*49を、肉になつたものではなく丸ごと買うことになる。このあと、「ティムシュレット」は、牛を何頭か買い、翌日丸一日かけて、解体し村中で分配し、夕餉にはどの家もその肉を食い尽くす様子が微に入り細をうがって描かれている。子どもたちが羊歯の葉を採りに行く。これは何かと読み進むと、羊歯の葉を带状に並べて肉を載せるのに使うことがわかる。子どもたちもはしゃいでいる。解体途中で手に入れた牛の膀胱を風船のように膨らませて遊んだりする。買った牛を見に行けと子どもたちに言うのは女たちである。普段は農作業をしていて、動物の解体などしたことのない農民は自ら刃物を握って血を流す殺戮と解体の作業に興奮気味である。汗みずくで血と脂にまみれ、目はぎらぎら口ぶりは荒々しい。にかにか笑って冗談を飛ばすかと思えば怒り出す。

*48 *Jours de Kabylie*, p. 47

*49 ベルベル系の人々は、羊、山羊、牛を食べ、南部の地方ではラクダも食べたようだ。好まれたのは羊だが、カピリア人は牛肉、子牛肉のほうをより好んだ。（『ベルベル文化ガイド』p.130より）

その様子はやや不気味である。カピリアでは通常、肉は高価で滅多に食べられない食べ物であり、その「地位」は特別である。メンラッド一家を取り仕切るフルルの祖母タサディットも肉を食べるときだけは分配役を長男のルニスにさせた（FP, p.26）。また、同じく『カピリアの日々』の、市場を描いたVI章「トレタの市場」Le marché du Tléta では、市場のなかで一番力を持っているのは肉を扱う商人であると書かれている（既述）。彼らは人をその気にさせて、散財させるのも巧みなのだ。^{*50} 解体された肉は分けられて山にされる。帯状になった羊歯の皿の上に肉の山がいくつもできていく。

それでも、解体まではそれほど込み入ったことではない。今度は分配せねばならないが、この分配、平等な分配が大変な作業なのである。不思議なことに、いつから決まっていたのだろう、「20」人分が譲れぬ数として出てくる。なぜ、20 でまとめなくてはならないのか、それはわからない。村の偉いさんであるタメンがそれぞれ、自分が責任をもつ何家族かにそれを配分していかなくてはならない。お偉いさんにとってそれは憂鬱な大仕事である。大きな家族で人が 20 人いれば、その代表にそのまま引き渡せばいい。ところが、そうでない場合は？ $7 + 5 + 4 + 3 + 1 = 20$ ならどうする？ その場合の分け方をめぐって、それぞれの家族の代表者がお偉いさんの前で延々と己のやり方が一番よいと主張する。① $20 \div 20 = 1$ 、② $5 \times 4 = 20$ ？ ③ $(4 + 5 + 1) + (7 + 3) = 20$ といった具合で、①に対しては「バカか？ 肉を細切れにするつもりか」と罵倒があり、②については「(家族 5 人の) お前のうちはいいだろうさ」と反論があり、③では、まず全体を半分に分けてからそれぞれを該当する家族で調整せよ、との案である。さらに、お偉いさんの配慮は当日村にいないが代理の受取人がない者や、ひとりきりで暮らしている老女にも及ぶ。うっかりそれを忘れようものなら、そのクレームの手当はお偉いさんの責任である。夕方になって、待ちくたびれた老女がやってきて半泣きで訴えたら、お偉いさんは空手で帰らせるようなことをしてはならない。クレームはこれだけで終わらない。肉を受け取った者でも、肉の質に不満があってお偉いさんの所にやってくる者もあって、これはさらに厄介である。お偉いさんは決して怒ってはならない。こういう問題をすべて収めるとお偉いさんにとってもティムシュレットの一日が終わるのである。その日の夕餉はどの家庭も祝宴で、炉の周りに集まった家族は、遠いフランスに出稼ぎに行っていない者や、嫁に行った娘を思い、亡くなった人たち、そして（ついでに）神にも思いをはせる。^{*51}そして、肉はすべてこの夕餉で食べ尽くされる。翌日になると、すべては消え失せている——宴の後。夢も犠牲も、悪の神も何もかも。

ティムシュレットとは、行事とも祭とも言えるであろうが、これは、肉など滅多に食べられない共同体の人々が盛大に肉を食べる機会をつくるものであり、是非、共同体全体で行われなくてはならない。それは理にかなったことでもある。一家族がいくら思い切っても、奮発しても、肉をたらふく食べることはできないだろう。共同体の「肉を食べたい」欲望

*50 「トレタの市場」Le Marché du Tléta, *Jours de Kabylie*, p.77

*51 『アルジェリアにおけるフランス語』*Le français en Algérie*によると、ティムシュレットは「家畜の頭の供犠」と解説されている。こうした祭の起こりには当然信仰があるはずだが、『カピリアの日々』における描写からは、きっかけが迷信的であるとしても、宗教的な祭の雰囲気はあまり感じられない。この辞書には timechret, timchradh の表記もある。

をひとつにして行動に移すところまで高めていかななくてはならない。発端と、それからの 課程がいつどう決まったものか、そういうことはわからないものである。しかし、妙なことを言い出す＝お告げをするのは女で、それをよくないことが起こる前兆だからお祓いが 必要だ、それは牛を買って犠牲にすることだ、と言うのは男たちである。解釈と対処法の 担当である。パロールの転換だ。話法の役割分担もしっかりしている。それにしても、見 事な生活の知恵の実践ではないだろうか。妙な噂は、多くの人間の「そろそろ肉をたらふ く食べたい」欲望がふくれあがったところに自ずと発生するのだろう。それがあれこれと派 生して村人たちに行き渡り、おしゃべりがひとしきりした頃に、男たちが今年をよくない ことがある、と言い出す。それを祓うには犠牲が必要だということまではすぐだ。人々 は牛を買ひ、解体して分配する課程すべてを存分に楽しむ。出来事の本質をめぐって男た ちが交わす会話や、肉の分配時に互いに面罵しながら、徹底的に平等分配の方法を提案す る弁証法的ともいえる遣り取りは、もはやある種のスタイルに達している。これもまた、 最後の大団円に向かって楽しみを引き延ばす会話の術ではないだろうか。気の毒なお偉い さんには、さらに泣き言やクレーム処理のお楽しみが残される。お偉いさんといわれる者 の話術と対処法の腕の見せ所というわけである。

しかし、肉を喰う祭のよろこびが殺戮の残酷さと表裏であり、欲望と平等のせめぎ合いの激しさもまた、このスケッチは伝えているのである。フェラウンは怠りなく、祭の生々しさを書き記す。作業に携わる男たちは血を好む原始の人間に戻ったようでトランス状態になる。肉の山を作るときはあっちが多い、こっちが少ないと口やかましい。いやしかし、ここでは込み入った数学が重要なのだ。欲望の激しさを制するのは絶対の平等でなくては ならない。解体の場所には死体置き場 *charnier* の臭いが漂うが、すぐそこでは、人々が切り取られた肉にさわっては、更なる食欲をそそられるのである。肉に対する食の欲望はぎらぎらしている。肉というものが特別な食物であるのは、暴力、権力、財力の象徴でもあるからだ。ティムシュレットはなかなか物入りな行事である。ここでは蕩尽し尽くすこともまた、求められるからだ。^{*52}かつては金持ちの篤志家の見栄坊な気持ちを刺激して競う ようにして費用を払わせたものだったが、いまや、村の偉いさんたちは、何とかして貧乏 人から費用を回収しようとする、と書かれている。この祭をブルデューが「共同体の境界 を定めるものであり、同時に村はその枠組みの内での一体感を再確認し、自己実現を行う のである」^{*53}と規定しているのは実に納得のいくことである。こんな困難な欲望充足を村 民総出で遂行しおおせば、村民の一体感は否応なしに高まる。多くの者が望み弾む心で迎 えたこの行事は、実行に移すと大変で、問題も起こる。しかし、むしろ行事のそういった 性格がよりいっそう祝祭の昂揚感を大きくする。そのたび、人々は調整のためにことばを 交わす。ときにはけんか腰である。こっちの肉の切れ端をあっちの山に付け足したりする。お偉いさんが仲介して肉がいくつもの家族へと引き渡されていく。直接的な熱い交換と循環。そのなかで、誰もが何かしらの形で役割を与えられている。晚餐には、肉が料理され

*52 普段の食生活では希少で貴重な肉は、塩を使うことで保存食にもされるが、ティムシュレットではその時に食べ尽くされる。『ベルベル文化ガイド』p.130 参照。

*53 Bourdieu, *op. cit.*, p.19

る炉を取り囲んで、子どもらは互いにつつき合い、父母は今日の出来事を話題にし、故人 や遠方の身内を思う、といった具合に、交換と循環は共同体の時と空間を引き延ばす。肉 を味わい喰い尽くす悦びは、パロール行為を可能な限り遠いところにまで及ばせて、その 楽しみも味わい尽くすのだ。「ティムシュレット」は細部にわたってそれを書き取っている。

しかし、ティムシュレットはすでに昔日の姿を失っているようだ。費用の支払いの件も そうだ。ブルデューの記録でもすでに、「ティマシュラット」は過去の習慣の扱いである。このやや狂騒的な食欲の祭を、「進歩主義者 progressiste」は軽蔑していたことがわかる。一晩で食べ尽くす金額があまりにも大きい。そんなことに金を遣うくらいなら、道路の舗装でもしたらよかろう、水源は広場は学校は水道は……という考えだ。そんな話を紹介した後、「ティムシュレット」の最後はこう結ばれている。

都市計画ということにとってはそういうことだが、それは農民にはあずかり知らぬことだ。この点について、わが進歩主義者諸氏はあまりよくわかっていないのである。

C'est vrai aussi que pour ce qui est de l'urbanisme, ce n'est pas au fellah à s'en occuper. Mais, sur ce point, nos progressistes ne sont pas très bien renseignés.*54

物語の話者、そして作家は、カビリアの、エクリチュールのないことばの複雑な使用法 をエクリチュールに書き留めようと試みた。その試みは、カビリアの人々がことばによる 実践にこらした「民衆の知恵」と同じく、外来の抑圧的な言語のエクリチュールを受け取らされた者が、抑圧者の意図を離れて、みずから他者のことば、声ならぬ ^{エクリチュール}「書」を使いこなす方法の創出として行われたのである。カビリアの男たちのことばは「広場のことば」

として、大家族の名誉、公、政治の世界を領土とし、共同体の秩序維持と存続を務めとする。いっぽう、女たちのことばの世界は 私的な空間を領土とする。それは領土というにはあまりにもささやかなものだ。しかし、叫び — ことばになろうとする声であり、物語（説話）である女たちのことばは、人の 内心世界の根底にある感情の表出であり、その奥底は外側へと反転して世界と宇宙の意味 を知らせるのである。そして、男のことばも女のことばも、共同体内でのみの循環に閉じ込められているのではなく、必要に応じて外部とつながっている。両者の領土は隣接しながら相互に補完し合って働き、共同体内の人々に分け持たれている。それゆえ、ティムシュレットのように込み入った集団的な欲望（食欲）充足の行事も行うことができるのである。

男・女それぞれのことばの世界が描かれるエピソードは、いずれも細部が丁寧に描き込まれ、ことばが使われる空間・時間の再現が丁寧に行われる。男たちの喧嘩の調停は物語

*54 *Jours de Kabylie*, p.56

内の小物語のうちに、範型をよく伝えるとともに、幼い主人公の冷静な観察眼が人物をよく写し取り、公の世界の欺瞞を具体的な事柄に描き出している。女たちの世界は、とりもなおさず話者の住まう世界でもある。観察であるよりも、話者の物語への愛情の源の探索であるかのようだ。

この語りには、捉えがたい声としてのカピリアのことばたちのありようをエクリチュールに書き取るために、セルトーの言う「もの/エクリチュールを使いこなす術と、もの/エクリチュールを組み合わせる術とがわかちがたく結びつきながら発揮されている」のではないだろうか。

*55

*55 セルトー, 前掲書, p.18-19

第V章 物語の外からへ

物語の外から

フルル・メンラッドが、彼の物語が生まれた場所として示したのは「叔母たちの小さな 住まい」、ハルティのお話であった。そこは「隠れ家」であり「大家族の端っこにある en marge de la grande [famille])小さな家族」「親密で手前勝手なサークル」「穏やかな雰囲気」であった。(FP, p.49-50)

フルル・メンラッドと複数の語り手/ムールード・フェラウンが紡ぎ出した『貧者の息子』は物語の本編の余白に en marge、それに先だて、あるいは物語の狭間に、いくつかの他のテキストを呼び寄せる。【家族】【長男】の前置きもそういったテキストであると考えることができる。その前置きを物語本編への「継ぎ手」として、それぞれの扉にはエピグラフが掲げられる。さらに、「フルル・メンラッド」では教員生活の始まりと、エピソードの頭に短い引用がある。叔母たちと過ごした時間空間、ハルティの物語から、フルル・メンラッドは語ることへの強い志向と愛着を汲んだ。その思いが生み出した物語の余白に、彼はそして誰ともわからぬ語り手は、何を書き込もうとしたのだろうか。

『貧者の息子』に掲げられたエピグラフはすべて、貧者の息子であり、孤児である者たちが書いたものから採られた。チャーホフ、ミシュレ、ルソー、ヘレディア、カミュ。『貧者の息子』は、それ自身の語りの余白に貧者の息子たちの語りの断片を置き、先に生きた、あるいは同時代に生きる「貧者の息子」たちへの親愛と共感を示すとともに、より遠くからの三人称の語りと、すでに行われた証言を呼び戻している。本論第 II 章に示したように、五つのエピグラフは、いずれも物語の主人公の成長段階、置かれた環境にふさわしい内容が選び抜かれて記されている。物語の外からやってきたこれらの断片、ことに前半、後半の扉に記された二つのエピグラフは物語にどんな働きをしているのだろうか。

i.チャーホフ「ワーニャ伯父さん」

まず、前半【家族】の扉に示されたものから考えてみたい。これは、チャーホフの戯曲『ワーニャ伯父さん』(1889年)から採られたものである。

(今のうちも、) やがて年をとってからも 片時も休まずに、人のために働きましようね。そして、 やがてその時が来たら、素直に死んで行きましようね。 あの世へ行ったらどんなに私たちが苦しかったか、 どんなに涙を流したか、 どんなにつらく長い年月を送って来たか、

それを残らず申し上げましょうね。すると神さまは、
まあ気の毒に、と思ったださる。

A・チェーホフ

*Nous travaillerons pour les autres
jusqu'à notre vieillesse et quand
notre heure viendra, nous mourrons
sans murmure et nous dirons dans
l'autre monde que nous avons souffert,
que nous avons pleuré, que nous
avons vécu de longues années
d'amertume, et Dieu aura pitié de
nous ...* *1

A. TCHEKHOV. (FP, p.7)

この台詞は、戯曲の表題となっている人物ワーニャ伯父さんに、姪のソーニャから宛てられたもので、劇もドラマのクライマックスを過ぎ、幕が下りる直前のことばである。つまり、この芝居の結末、総括なのである。

『ワーニャ伯父さん』はチェーホフの四大演劇の一つだが、それほど明確な筋立てがない。題目にあるワーニャが主人公であるかどうかもわからない。むしろ、主役のいない演劇である。『ワーニャ伯父さん』とは、ソーニャの台詞にあるように、呼びかけなのかもしれない。^{*2} 「田園生活の情景」というサブタイトルがついた四幕の戯曲である。「田園」という日本語訳がふさわしいかどうか、あるいはここに「田園」の語をあてることに込められた意味は検討を要するが、この劇の舞台は都市生活者が所有している田舎の地所である。

ここに大学教授を退官したセレブリャコフが、若い後妻を連れてやってくる。この土地はセレブリャコフの亡くなった先妻が結婚のときに父から買い与えられたもので、所有者は相続人である娘のソーニャである。セレブリャコフはこの土地から上がった利益で生活しているが、土地の所有者でもなければ、実際に土地に働きかけて何らかの生産を行っている人物でもない。しかし、ここに落ち着いたセレブリャコフ夫妻は領地の主人のようにふるまい、実際に地所の維持管理を行ってきた、先妻の兄ワーニャや、母ヴォイニーツカヤ夫人、先妻との娘ソーニャは使用人のように彼らに仕えている。ヴォイニーツカヤ夫人にとって、大学教授であった婿は誇りであり、ワーニャも、知識人である義理の弟を特別な存在としてまつりあげてきたのだった。しかし、セレブリャコフが大学を退官して「田園」にやってくると、都会の知識人/書く人と、田舎で土地を耕して生きる人々の違いが顕わになり、両者は対立する。そして、慣れない田舎生活に嫌気がさして、娘

*1 日本語訳は『ワーニャ伯父さん』神西清訳（青空文庫版）より。一部を変更した。

*2 ソーニャのこの台詞は以下のように始まっている。「でも、仕方がないわ、生きていかなければ！（間）ね、ワーニャ伯父さん、生きていきましょうよ。……」。

の持ち物である地所を売って有価証券に換え、残りの金で都会暮らしに戻ろうとするセレブリアコーフに対して、遂にワーニヤの怒りが爆発する。ワーニヤがセレブリアコーフを銃で撃ち殺そうとするにいたって、セレブリアコーフは妻とともに先妻の地所を去って行くのである。ワーニヤのセレブリアコーフに対する怒りは大きい、彼らが去っても、あいかかわらず地所から上がる利益を夫妻の生活費として送り続けることをワーニヤは約束する。父と義母が去った後、悲嘆にくれる伯父に対してワーニヤが語ることばを、フェラウンは『貧者の息子』の前半【家族】の扉に記したのである。

ワーニヤがセレブリアコーフを評することばを聞いてみよう。

ワーニヤ ああ、大先生か。やっこさんは、相変わらず朝から夜中まで書斎に閉じこもって、何やら書いてござる。

眉に皺よせ知恵をしぼって、朝から晩まで歌
を書く、歌を書く。されど、この身も、わが
歌も、褒められたこと絶えてなし。

ってなわけさ。がりがり書かれる紙こそ、いい面の皮だよ。いっそのこと、自叙伝でも書いたほうが、よっぽどましだろうにね。こいつはまったく、すばらしい題材だぜ。停年でやめた大学教授でさ、いいかい、カサカサの乾パンでさ、おまけに学のある棒鱈ときている。……しかも、通風病みで、リョーマチで、頭痛もちで、その上やっかみと焼きもちとで、肝臓肥大症ときている。……その棒鱈がさ、死んだ、前の細君の地所へ、しぶしぶながら転がり込んで来た。それというの、都会ぐらしが、ふとこに合わないからさ。やっこさん、自分ほど恵まれない不遇な男はいないと、年じゅうこぼしてばかりいるが、じつのところは、あれほど運のいい男は、まあ滅多にないね。(いらいらした調子で)ほんとだよ。なんて運のいい奴だ！ たかが寺男の倅がさ。官費で勉強させてもらって、まんまと博士号だの教授の椅子だのにありついてさ、やがて親任官に成り上がったあげくに、枢密院議員のむこさんに納まった、等々といった次第だからなあ。

……考えなくちゃならないのは、次の点だ。それはね、まる二十五年のあいだ、やれ芸術だの、やれ文学だのと、書いたり説教したりしてきた男が、そのじつ文学も芸術も、からっきしわかっちゃいないという事実だ。やっこさん二十五年のあいだ、やれリアリズムだ、やれナチュラリズムだ、やれくしゃくしゃイズムだと、人様の考えを受け売りして来ただけの話さ。二十五年のあいだ、あいつが喋ったり書いたりして来たことは、利口な人間にはとうの昔からわかりきったこと、ばかな人間にはクソ面白くもないことなんで、つまり二十五年という年月は、夢幻泡沫に等しかったわけなのさ。だのに、やつの自惚れようはどうだい。あの思いあがりようはどうだい。こんど停年でやめてみれば、あいつのことなんか、世間じゃ誰ひとり覚えちゃいない。名もなにもありゃしない。つまりさ、二十五年のあいだ、まんまと人さまの椅子に座っていたわけだ。ところが見たまえ、あいつはまるで、生神さまみたいに、そっくり返っていやがる。^{*3}

*3 チューホフ、前掲書、第一幕

ワーニャ [セレブリャコーフに向かって] この二十五年のあいだ、僕はこの土地の差配をして、汗水たらして、せっせと君に金を送ってやった。こんな真正直な番頭が、どこの世界にあるものか。だのにあんたは、その間じゅうありがたいの一言も、僕に言つたためしがないじゃないか。その間じゅう、若い頃も年とった今も、僕はあんたから、年額五百ルーブリ也の、乞食も同然の捨扶持を、ありがたく頂戴しているにすぎないんだ。——しかもあんたは、ただのルーブリだって、上げてやろうと言ったことがないんだ！^{*4}

いっぼう、セレブリャコーフは亡き妻の田舎の地所での暮らしをどう思っているのだろう。

セレブリャコーフ わたしは一生涯、学問に身をささげ、書齋になじみ、講堂に親しみ、れっきとした同僚たちと交際してきたものだ。——それが突然、いつのまにやら、こんな墓穴みたいのところへ追い込まれて、来る日も来る日も、愚劣なやつらを見たり、くだらん話を聞かなければならぬのだ。……わたしは生きたい、成功がしたい、有名になって、わいわい言われたい。ところが、ここときた日にゃ、まるで島流しみたいなのじゃないか。のべつ幕なしに、昔のことをなつかしがったり、他人の成功を気に病んだり、死神の足音にびくついたりする。……ああ、たまらん！ やりきれん！ だのにこの連中は、わたしの老後を、いたわってもくれないのだ！^{*5}

知識人/書く人セレブリャコーフは、こうして田舎の地所を去った。ソーニャの生きる決

意（とも言いがたい、生まれて生きているから死ぬまでは生きてい

く、といったありよう）は、現世における諦念のようなものであり、多くのカピリア人の生そのものと一致する。ワーニャとソーニャの生き方を示すこの台詞は、『貧者の息子』の、ことに自民族誌の色彩が強い前半部分の扉を飾るにふさわしいものである。また、演劇であるゆえに、複数の登場人物がそれぞれの立場を主張して相互にことばを交わす。それは、カピリアという、常にいくつもの声が行き交う空間の縮図のようでもある。この「田園生活」では、ずっとそこにとどまったまま土地を維持し、生産を行い生活をつないでいく人々と、その地所があればこそ生活が成り立つのだが、もともとは都会に暮らしていた書く人の間には埋めがたい溝がある。『貧者の息子』の【家族】においても、これと相似形の二つの人間集団があちらとこちらに置かれている。語り始めの最初の四つのパラグラフで控えめながら「これから始める物語はあなたがたに書くことはできないものである」と批判的な宣言が行われているが、その宛先は、すでに書かれたカピリアとそれを書いた人である。私たちはもう一度、カミュの「カピリアの悲惨」を思い出さなくてはならない。

*4 チェーホフ,前掲書,第三幕

*5 同書,第二幕

ワーニャは、セレブリャコフの書いたものなど、いまやなんの価値もないと断言する。控えめなフェラウン/フルルは、怒りにまかせてそんなことばを口にするのではない。そうではなく、黙って書き始める。それから十年をかけて、あなたがたが書くのではないカピリアを書き続ける。だが、チャーホフは、ワーニャは、ソーニャはカピリアの証言者だ。すでにここに、カピリアとカピリア人は語られている。作家はまずそれを呼び出すことで、物語を始めたのである。物語本編の開始前の扉に置かれたソーニャの台詞からの引用は、
『貧者の息子』【家族】の描こうとするものをメトニミー的に表しており、ひいては、この演劇が再現する小さな社会がカピリアを表していることを、このエピグラフは読む者に知らせるのである。

ii. ミシュレ「私の青年時代」

では、後半【長男】の扉には何が掲げられているのだろうか。

今日では、私の両親が矜持をもって
肅々と堪え忍んだこの貧困は、私の
誇りである。しかしあの時、私は恥
ずかしさを感じ、精一杯、その感情
を隠そうとしていたのだ。なんと恐
ろしい虚栄心だろう！

ミシュレ

*Aujourd'hui cette indigence, fiè-
rement, noblement supportée par les
miens fait ma gloire. Alors, elle me
semblait une honte et je la cachais
de mon mieux. Terrible respect
humain !*

MICHELET. (FP, p.103)

最初の版では、この部分はルソーからの引用である。^{*6} スイユ版にミシュレを採用したことにはどのような配慮があったのだろうか。当然ながら、スイユ版の形での完成度を熟考してのことと思われる。スイユ版では、主人公が師範学校の入試に向けて、父と別れて出発しようとするところで終わっている。

初版のままであれば、ミシュレと、このエピグラフが採られた作品について、『貧者の息子』との関連性を類推する機会は、多分ない。ところが、このミシュレからの引用は、

*6 ごく小さな義務をかかさず果たして行くには、英雄的な行為をするに劣らぬ力がある。……そして、ときたま世間をあっといわせるより、いつも人に敬愛されているほうがどのくらいまさっているかしのれない。// J-J・ルソー（桑原武夫訳『告白』上 p.131）

La continuité des petits devoirs toujours // bien remplis, ne demande pas moins de force // que les actions héroïques... et il vaut mieux // avoir toujours l'estime des hommes que quel- // quefois leur admiration. // J.-J. ROUSSEAU

『ワーニャ伯父さん』にもまして、『貧者の息子』の読解に重要な鍵を含んでいるように思われるのである。『貧者の息子』【家族】の前書きにはメンラッド・フルルが読んだ作家、模倣しようとした作家の名が並んでいる（モンテーニュ、ルソー、ドーデ、ディケンズ）。ここに挙げられた作家名は最初の版でも同様である。ここではあえて名を挙げていないミシュレをメンラッド・フルル/ムールード・フェラウンは熟読したらしい。しかし、スイユ版でミシュレから引用したエピグラフが採用されていなかったら、ミシュレのテキストと『貧者の息子』の関係はずっと隠されたままだったのではないだろうか。

この引用は原文から一部を省略して書き改められている。^{*7}この引用は、『私の青年時代』*Ma Jeunesse*^{*8}から採られた。本書は扉に、「一人前の男になろうとする者たちに *A ceux qui veulent devenir des hommes.*」と記されている。『私の青年時代』*Ma Jeunesse* とある通り、ミシュレが生まれてから青年時代にいたる伝記的な内容が一人称で書かれており、著者が J（ジュール）・ミシュレとあるので一見、自伝と思われるのだが、実際には、ミシュレの死後に出版されたこの書物は、夫人が残されたミシュレの日記や覚え書き等から再構成して発表したものである。しかし、小説としてではない。そのあたりの事情は、前書き *préface* として 30 ページ近くを割いて詳細に説明されている。ミシュレ自身は自伝を書こうと計画していたが、ついに果たせないまま亡くなったとある。^{*9}

長く自叙伝執筆の計画を抱えていたミシュレは、それを意識して膨大な記録——日記 *journal* と覚え書き *notes* を残してきたのだった。ミシュレ自身は、あえて言うならば自ら回顧録を書くことにそれほど執着していなかった様子もある。自分で書くことができない場合には、友人のポール・ポワンソに託す意思を夫人に示していた。しかし、ポワンソはミシュレよりずっと早く世を去ってしまうのである。

残された記録には、ごく個人的な身近での出来事だけでなく、歴史研究・教育に関するものも含まれていた。記録には、歴史家ミシュレの考え方が反映されている。折々に記した記録というものは、それを書いた人物のその時の生がそのままに表れているものである。誇張や過剰はなく、後年の成熟した人が過去を振り返って書く回想録にはない本当らしさが残されている。『私の青年時代』の扉に示された「一人前の男になろうとする者たちに」は、一見、本書を教養小説のような、歴史家ミシュレのある達成の自伝であるかのように思わせる。しかし、前書きの夫人の解説によれば、この自伝には、幼き日、若き日のミシュレその人や、彼を取り巻く人々・環境が極めて移ろいやすく不安定であったことがそのまま伝えるべく書かれ、その青年時代で止められたことが、若い読者（一人前の男になろうとする者たち）にとって意味のあることなのである。ここにいるミシュレは未だ偉大な

*7 原文と比較すると、引用には一部省略がある。原文では、*indigence* の後に「*née de la persécution*」がある。*Ma Jeunesse*, p.118。

*8 J. Michelet, *Ma Jeunesse*, Calmann Levy, 1884

*9 ミシュレの自伝は番号のついた断片を並べているが、前書きも含めて、それぞれの冒頭に表題と、断片の要約的内容が掲げられている。前書き最後にある署名は *Mme J. Michelet* である。

歴史家ではない。^{*10}本書の長い前書きはほとんどが、この自伝が成るにあたっていかに膨大な記録が残され、

それを整理して取捨選択するのがどれほど大変な仕事であったかについて書かれているのだが、夫人はミシュレが日記や覚え書きなどの記録を「打ち明けられたことを何一つ忘れない第二の魂 *Une seconde âme qui n'oublie rien de ce qu'on confie*」であり「紙でできた私の魂 *Mon âme de papier*」と呼んでいたことを明かしている。

『貧者の息子』は、日記について何を語っているのだろう。前半【家族】の前書きには以下のような記述がある。

勉学を終えて後、教壇に立つようになった初めの頃から、彼は日記に打ち明け話をするようになる。

Dès ses premiers mois dans l'enseignements, après ses études, il confie à son journal... (FP, p.9)

さらに、机の引き出しから見つかった一冊（ここに【家族】の部分も書かれていた）にはこんなことが書かれていた。

私は己のうちに強い知の力を感じており、古い本や古いノートを携えていれば、もっと先へ進めないことは断じてない。……

Puisque je me sens une intelligence si vive, avec les vieux livres et les vieux cahiers, rien ne dit que je n'irai pas loin...(FP, p.9)

日記は自分を打ち明ける *confier* 相手であるという主人公の態度はミシュレのそれとよく似ている。ミシュレにおいても、『貧者の息子』においても、日記は明白に擬人化されている。また、勉学の折に作ったノートを大切に保存し、それをさらなる研鑽のために使っていたことがわかる。記録を残すことにかけてフルル・メンラッドはミシュレと同じような行動をとっている。さらに、フルル・メンラッドの日記（のノート）と、そこに書かれた作品の前半は、教卓の引き出しに、「勤務日程表や、下調べ用のカードに混じって残されていた」ので、これもまた、私的な生活の記録と、研究、教育に関する覚え書きや下書きが混在していたミシュレの記録のありようをなぞるように読めるのである。

エピグラフとして引用された部分に述べられているのはミシュレが16歳のときのことで、印刷業を営んでいた父はナポレオン・ボナパルトによって仕事を失っただけでなく、借金を返済できずに投獄されたことがあり、ミシュレ一家の暮らしは大変困窮していた。少年ミシュレはいつも腹を空かせていたらしい。だが、少年はそれを学友に知られること

*10 エドワード・サイドが最晩年に出版した自伝 *OUT OF PLACE : A Memoir* (日本語訳表題『遠い場所の記憶』)もこの点で一致している。1935年の誕生から1962年の大学院修了までをたどったものである。序文の最後に「……、語り手であると同時に登場人物でもあることから、私は意識的に自分自身についても他の人々に対すると同様のアイロニーや気恥ずかしい詳細の記述を免れることのないよう心がけたつもりである。」とある。

を心から恐れていた。家を離れて町の学校で学ぶようになったカピリア人が、故郷の貧しい村の暮らしを振り返るときの心情にも、これに似たものがあったに違いない。町の暮らしは、奨学金だけで勉学生活する若い苦学生でも、村の暮らしに比べればはるかに贅沢なものだった。村のつましい暮らしがどのようなものだったかは様々なエピソードに織り込まれるようにして繰り返し語られているが、フルルを愛してやまない母ファトマでさえ、フルルが長期休暇で村に帰っているときには、ストックしてある食べ物の減りがいつもより早いことをこぼすのだ。町の学校には、フランス人生徒も、都市部のアラブ人生徒もいる。彼らの豊かさは、カピリア人と彼らをはっきりと画するのである。メンラッド・フルル・ムールード・フェラウンが、自伝的作品を書き上げて『貧者の息子』と題し、カピリアの貧しい人々を「私の誇り」であるとするのは、ずっと後のことである。『私の青年時代』そのもの、若き日のミシュレの成長と自己形成は、「貧者の息子」のそれである。苦学生が教師になった点でも、ミシュレはフルル・メンラッドと共通するものを持っていたのである。

『私の青年時代』は本編の前に長い前書きを置き、「巻 I 私の子ども時代」LIVRE I MON ENFANCE と「巻 II 私の青年時代」LIVRE II MA JEUNESSE の二部構成で、これは主人公の年齢によってわけられており、『貧者の息子』の構成は大きくこれを踏襲したともいえる。『貧者の息子』における二つの前書きと本文の関係は、『私の青年時代』における前書きと伝記本体との関係をフィクションとして反復変奏したように読める。確かに、いくつかの相違点はある。『私の青年時代』の前書きは作品全体の冒頭のみ¹¹に置かれ、本書がこのような形で世に出るようになった事情を詳細に説明している。それは作り事としてではない。また、伝記を再構成してその事情を前書きに書いた人物は、ミシュレの夫人であったアテナイス・ミアラレ Athénaïs Mialaret であることははっきりしている。本文は一貫して一人称が使われ、夫人が「代筆」したことを前提にした上で、自伝であることを貫いている。『貧者の息子』のように、物語の前半・後半で語り手を変更して人称を変える複雑な構成ではない。^{*11}

しかし、このような形で再構成された伝記は、一人称で書かれていたとしても、そこには揺れあるいは幅が生じる。「夫人の代筆」は、書き手はあらかじめ（少なくとも）二重化されているということなのであり、この一人称には、二人称も三人称も含まれるのであって、語り手が複数であるような効果が生じる。また、ミシュレ自身は、回想録として一貫した記述をほとんど残していないので、再構成は断片 fragment(s)の寄せ集めにならざるを得ない。事実には忠実であることを示しているものは断片なのである。しかし、断片は切れ端であってそれをいくら寄せ集めても間隙はなくなる。断片をつなぐのは、時間の経過への信頼という漠然とした弱々しいものである。結局、全体に一貫する本当らしさを担保するために採られた手段がそれを断片的にしか実現できないことになる。さらに、断片を構成する書き物の性格は様々である——日記や覚え書き、研究のためのメモ書き。その中を探ってみれば、それらはさらに多様な様相を持っているだろう。それらが、ミシ

*11 最初の CNH 版では、前書きは【家族】にのみつけられている。スイユ版での【長男】の前書きの扱いは、他の断片と同様で、I と番号がつけられている。CNH 版のほうがミシュレの『私の青年時代』の構成に近い。

ユレ夫人の意図とエクリチュールを媒介として構成される。こうしてできたテキストはとうていリニアな滑らかなものではありえない。

これが『貧者の息子』に受け継がれている。類い稀なる読み手となったフェラウンは、この自伝が書かれた条件が、ノンフィクションをフィクションたらしめるよう働くことを読み取ったに違いない。そして、むしろ積極的にその構造を反復するような形をつくることで、語ることの複数性を生じさせようとしたのではないだろうか。

当然ながら、『貧者の息子』では日記の存在もフィクションであるが、『私の青年時代』を踏襲して、後半【長男】の語りの内容の拠り所として、ある確かさを与える効果を生んでいる。おそらく、後半【長男】の語り手である、「彼〔フルル〕のことなら何一つ知らぬことはなく、好奇心旺盛でおしゃべりな兄弟であり、いささかも悪意はなく、誰もがほほえみに向け、責めることなどけっしてなく、フルルを裏切ることはない、ひとりの友人

qui ne le trahira pas mais qui n'ignore rien de son histoire, un frère curieux et bavard, sans un brin de méchanceté, à qui l'on pardonne en souriant」(FP, p. 105)こそが、フルルの日記をもとに、村を出てティジ・ウズの町のコレージュへ行った少年、さらにはアルジェの師範学校へと下りていった青年のことを語ったのだ。この友人を、ジャック・グレイズが、メンラッド・フルルのノートの発見者であり、二つの前書きの書き手であり、【長男】の語り手でもあるとして、それは作家ムールード・フェラウンその人である、としているのは、本稿第II章にすでに述べた。あるいは、ミシュレに倣って日記を擬人化するフェラウンの態度から考えて、日記そのものであるとも考えられるのではないだろうか。言い換えれば、誰かは不明な話者が後の記述になればなるほど、日記に書かれていることを参照したであろうということである。これがムールード・フェラウンであれば、作家はフルル・メンラッドの日記を創造しつつ、それを参照して【長男】をも語ったということになる。【家族】においては、物語の素材 *matière* は非常にあやふやな記憶（事が起こった時がはっきりと示されることがない）と、カピリア人であればこそその正確な民俗の知識であるが、【長男】以降は素材は「他のエクリチュール」へと変わっていく。物語の始めに示された日記もその一つである。【家族】前書きによれば日記が書き始められたのはフルル・メンラッドが教師になってからであり、後半はそれよりも前の時期（小学校高学年）から始まっているので、日記に書かれたことだけから構成されたと考えるのには多少の無理がある。しかし、日記には記した時々の出来事だけが書かれているのではなく、その時の想起も書かれていたであろう。いずれにしても、後半を書いた者が日記を参照したであろうことを、エルバズ、マティウ=ジョブも推測している。^{*12}

それとも、フルル・メンラッドは、ずっとカピリアにとどまった者と、村を出て行った者の双子、あるいは分身であったのかもしれない、アゴタ・クリストフの双子たちのように。『カピリアの日々』の「私の村」の冒頭のように、それは絶えず村を出入りする人物のまなざしの往復運動を示しているとも考えられる。三人称であるにしても、語りのありかたは、外からカピリアにやって来る者のところではないのである。^{*13}『貧者の息子』の前

*12 Rober Elbaz, Martine Mathieu-Job, *Mouloud Feraoun : ou l'émergence d'une littérature*, p.17~

*13 『貧者の息子』【家族】本編冒頭および『カピリアの日々』「私の村」冒頭に示されている。

半【家族】は、日記が書かれていたノートにあらかじめ小説として書かれていたのであって、フルル・メンラッドの記憶に頼った記述である。それゆえ、主人公/話者にとってとりわけ印象的な出来事が切れ切れに呼び戻されるが、その際には、出来事の断片が前に押し出されて繰り返されることが多いが、呼び戻された出来事がいつであったかははっきりしない。

【長男】に関する記述は実際、どんなものだったのか。ノートには【長男】が何らかの形で書かれていたということは考えられないのだろうか。それについても、結局はわからないままなのである。

作家の意図は、フルル・メンラッドについての語りや証言によって、フルル・メンラッドをむしろ一貫性のない、長所もあれば欠点もある未熟な者として示すことにあったのではないだろうか。とりもなおさず、それはカピリア人であり、ほかのどの人たちとも変わらぬ人間のひとりであり、人のあり方の現実とはむしろそのようなものである。^{*14}そして、このことは、【家族】の前書きでも、【長男】の前書きでも強調されている。

正確に記されるのは、カピリアの民俗の部分であるが、出来事と民俗の記述は入り交じっていて、区別することができない。これまで、多くの読者がこの作品を単純で民族誌的であると見なしていたのは、容易に了解可能で、すでに知っている民俗ばかりを読んでいたからではないだろうか。

このような天才たちに自らを比較するような考え方は遠く、彼は自画像をえがく、というばかりの考えだけを、彼らから借りようとしていた。筋が通っており、欠けるところがなく、読みうるものが書ければ満足だと思った。己の人生を、子どもたちと孫たちには知ってもらってもよいと考えていた。

Loin de sa pensée de se comparer à des génies ; il comptait seulement leur emprunter l'idée, « la sottise idée » de se peindre. Il considérait que s'il réussissait à faire quelque chose de cohérent, de complet, de lisible, il serait satisfait. Il croyait que sa vie valait la peine d'être connue, tout au moins de ses enfants et de ses petits-enfants. (FP, p.10)

【家族】の前書きには、以上のようにあり、さらに、【長男】の語り始めには、次のようなことばがある。

彼ら〔フルルの子どもたち、孫たち〕に与えるにふさわしいのはどんな教訓だろう。「教訓だって？ 教訓などはありはしない」。おまえはつぶやく。どこか諦めたような、おまえの穏やかな笑顔が目には浮かぶ。語り手が口をつぐむことを、おまえは望んでいるだろう。いや、その者のするがままにさせよ。彼は、大きすぎる幻想を抱いてはいないが、おまえをとっても愛しているのだから。そして、おまえの人生、他の多くの者たちと同じ

*14 青柳悦子「ムールード・フェラウー『貧者の息子』にみる間主体性」では、『貧者の息子』を、「主人公の成長をたどる伝記的小説でありながら、一方で完結した個人というものを否定する反＝伝記的 anti-biographique な小説、間主体的な人間像を提示する小説である」と見ている。

ような人生を語るだろう。それとともに、フルル、おまえが野心家であったことや、身を立てることができたゆえに、それができなかつた人たちを多少とも軽蔑したい気持ちをもって、そういうおまえだけの事情も語るだろう。

フルル、おまえは間違っているのだろう。というのは、おまえは、ひとりの人間にすぎないのであり、教訓を与えるのは人々なのだから。

Quelle leçon conviendrait-il de leur donner? « Une leçon ? Il n'y a pas de leçon », murmures-tu. Je vois ton sourire doux et résigné. Tu voudrais que le narrateur se taise. Non, laisse-le faire. Il n'a pas beaucoup d'illusions mais il t'aime bien. Il racontera ta vie qui ressemble à des milliers de d'autres vies avec, tout de même, ceci de particulier que tu es ambitieux, Fouroulou, que tu a pu t'élever et que tu serais tenté de mépriser un peu les autres, ceux qui ne l'ont pas pu.

Tu aurais tort, Fouroulou, car tu n'es qu'un cas particulier et la leçon, ce sont ces gens-là qui la donnent. (FP, P.105)

いっぽう、【家族】の前置きに出てくるいささか不思議な下りにも注意を払っておきたい。フルル・メンラッドが、あるいはムールード・フェラウンがどんなエクリチュールを目指していたかを探るのに目立たないが鍵のひとつであると思われるからだ。それは、日記に書かれていたことからの抜粋である。

「……私は己のうちに強い知の力を感じており、古い本や古いノートを携えていれば、もっと先へ進めそうだからだ。」「もう決定はなされた。きつとうまくいく。ロンサールやプレイヤーード派について初めに学んだことを反芻するにつれ、私の意志は強まり、これから立ち向かう試験はより乗り越えやすくなっていく。」

……

……驚のごとく滑空してやろうと思えば思うほど、鴨のように、濁った水のなかをもがき進むほかなくなるのだ。

…Puisque je me sens une intelligence si vive, avec les vieux livres et les vieux cahiers, rien ne dit que je n'irai pas loin... » «C'est fait, la décision est prise, la réussite est certaine. A mesure que je savoure une étude élémentaire sur Ronsard et la pléiade, ma décision s'affermi, l'examen à affronter devient plus accessible. »

... que s'il cherchait trop à planer comme un aigle, il ne ferait que patauger davantage comme un canard. (FP, p.9)

l'examen とは何だろう。試験なのか審査なのか、より曖昧な検討や調査なのか、この前置きから推し量ることはできない。しかし、この l'examen は、強い決意をもって努力したが、遂に果たされなかつたこととされる。その後、フルルは一介の教師として生きるこ

とを決意する。ここで、ロンサール Ronsard とプレイアード派 Pléiade^{*15} の名が出されていることは偶然ではないだろう。遠い空に輝く星団（カテブ・ヤシン『ネジュマ』が思い出される）になぞらえられた詩人たちとそのリーダー、古典ギリシア、ローマを範としながら、ラテン語にとって代わって高級文芸の言語たらんとするフランス語が言及されるのだが、明らかにフルル・メンラッドは、そのような作家像、そのようなフランス語のエクリチュールは自分の野心が及ぶものではないとして退けている。

チューホフ、ミシュレ両作品と『貧者の息子』の間には、強い関係性が見られるが、ミシュレ『私の青年時代』に関しては、具体的な描写や記述の点でもよく似た箇所が見られる。上に引用した「驚のごとく……」はミシュレ夫人が書いた前書きによく似た表現がある。これは、ミシュレが残した日記に書かれていたことばを抜き出したもので、人は歴史に容赦なく翻弄されるというものである。

それ〔歴史〕によって頂点に押し上げられたかと思えば、泥沼に沈められて、人は滑空する、ぬかるみに足を取られる、隘路で行き詰まる。だがそれでも、息つく間もなく進むのだ。

Élevé par elle sur les sommets ou plongé dans les marais fangeux, on plane, on patauge, on trébuche aux sentiers scabreux, mais on va toujours sans reprendre haleine.^{*16}

この記述の直前で、自ら自伝執筆を計画しながら果たせず、結局は諦めることになった結末について、人がどうなるかは歴史が決めることである、として、ミシュレはそれを悲しまなかった *sans tristesse* と夫人は記している。その心情と諦念は、【家族】の前書きで述べられる、物語を途中で放棄したフルル・メンラッドにおいて反復される（後悔や憤りの気持ちはなかった *sans esprit de retour, sans colère*）。物語 *histoire* は、誰かが書いて/語ってくれ、読まれる/聞かれる。それを決めるのはミシュレにおいては歴史であり、フルル

・メンラッドにとっては「神のご意思」である。そのことが、ズグロムシクイという鳥の巣に捨て置かれた最後の卵に例えられてややぞんざいに言われる。誰のものでもない（作者が確定できない）語りが生まれては消えていき、また引き継がれては語られるマグレブという空間のことばのありようをも思わせる。あるいはカピリア的とも言おうか。カピリアでは語りは声であり、生まれるとともに消えてしまう。

自伝という形式からして、とりわけ『私の青年時代』から『貧者の息子』が大きな影響を受けたのは当然である。しかし、それは、同化主義的にフランスの文化や価値を受け入れたことを示していることにはなるまい。

『ワーニャ伯父さん』その他の引用がミシュレとともに示すのは、「民衆の生き方」ではないか。—— 貧しい、持たざる、日々働かざるを得ない、泥だらけの道に行く、まず

*15 プレイアード派はイタリア・ルネサンスの影響を受け、古代ギリシア・古代ローマの文芸を規範とした創作を主張。公用語であるラテン語に対して俗語とされていたフランス語の文学のなかに、古典文芸の格調高さ、優美さを取り入れることを主張した。ロンサールは「詩人たちの君主」（*le prince des poètes*）と称えられた。

*16 Michelet, *op. cit.*, p. x

語らない書かない。『貧者の息子』もまたそういう人々について語るのである。書くことがそんなに大したことなのか？ ワーニャの問いがある。いっぽう、娘婿の書いたものなら何でもありがたがるヴォイニーツカヤ夫人はいつまでもセレブリャコフの書いたものを読み続ける。夫人はいったい何を讀んでいるのだろうか。彼女は、セルトーが『流刑地にて』に描かれた世界を言い表した「エクリチュールという操作のなかに閉じ込められてしまった監禁の神話」を生きているのだろうか。^{*17} ワーニャは無知ではない。セレブリャコフの書いたものを評価し、書き物/書く人とそうでない人々の間に否応なく生じる欺瞞的な権力の構造にはつきりと気づいている。その構造のなかで、忍耐と知恵をつくして生きようとするのだ。

物語の外へ

扉の扱いではないが、物語のエピローグの冒頭に示されたエピグラフはカミュの小説『ペスト』からの引用である。

人間の内には、賞賛すべきもののほうが
軽蔑すべきものよりも多くある。

A・カミュ

*Il y a dans les hommes plus de choses
à admirer que de choses à mépriser.*

A. Camus^{*18}

『ペスト』については、第 I 章でふれたように、フェラウンはその読後感をカミュ宛の手紙に書き送っている。^{*19}そこで、フェラウンはこの作品について「これまでのあなたのどの本よりもよく理解できたという感想を持ちました」と書いた。困難の直中にあってもがき苦しむ人々は必ずしもよき選択をするとは限らない。フェラウンは、それでも人は信頼するに足る存在であり、みずからの務めを果たして、みなともに生きるのだというヴィジョンをこの下りから受け取って、物語の最後の始めに置いた。

ところで、この物語は終わっていないと、マティウ=ジョブは述べている。^{*20}【家族】は発見されたノートに最後まで書かれていたが、【長男】および【フルル・メンラッド】は誰であるか特定できない語り手によって、同じノートに記されたフルル・メンラッドの日記を参照しつつ語り継がれ、最終的には、まさに語りが行われる時に追いつく。物語が日記へと変貌するとも言えるが、日記は常に未来に開かれていて終わらないテキストであ

*17 ミシェル・ド・セルトー『日常実践のポイエティック』p.301

*18 Fouroulou Menrad, *L'Anniversaire*, p.137

*19 第 I 章、註 24 参照。

*20 Mathieu-Job, *Le Fils du pauvre de Mouloud Feraoun*, p.28~ Composition et poétique romanesque

ることから、この物語は閉じられることがないのである。

カミュは、1960年に交通事故で突然、世を去った。そのとき未完のまま残された自伝的小説『最初の人間』*Le premier homme*が一冊の本として発行されたのは1994年になってからである。^{*21}この小説について、チュニジア出身の詩人・作家、比較文学研究者であるアブデルワッハブ・メッデーブ^{*22}は以下のように述べている。

……この作品は、カミュのそれまでの文学的選択とはほど遠い、マグレブのエクリチュールの奇妙な調子を含んでいる。彼が抱いていたアルジェリア性に、このアイデンティティへの彼の参加が不可能になるおそれがあったとき、片を付けなくてはならなかったかのように。

この本はまず「貧困の神秘」に触れる。それは神秘的な責め苦の形で現れ、そこから脱出は学校を出ることで可能になる。そして、その過程は、あらゆる違いにもかかわらず、ムールード・フェラウンの小説『貧者の息子』（1954年）が引いた道筋と交差する。この貧困の状態こそ、孤児の状態と系譜的断絶を不動の現実にする。こうしてあらゆる貧者は、文化の領域から排除され、痕跡も、遺産も、名も、系譜もなく、この立ち入り禁止の領地に入り込もうとする要求を持つならスタートラインに立つことになる。つまり、「最初の人間」なのである。それゆえ、話者が本当に孤児であること、作品の第一章の題名が「父の探求」であることは、それ自体孤児性しか生み出さない貧困を追い打ち的に規定しているにすぎず、貧困が生んだこの孤児性においてはすべては再獲得しなくてはならず、言語に到達しそれに習熟することさえこの再獲得の対象なのである。^{*23}

メッデーブによれば、カミュが自伝において、自己の起源を語り起こすためには、それまでとは違うエクリチュールを作り出す必要があった。アルジェリアの町オランを舞台とした『ペスト』でさえ、フェラウンもサイドも指摘したように、フランスのどこかにある町と同じように描き切ることができたが、マグレブ人としてのアルジェリア人としてのピエ・ノワールとしての、スペイン系とフランス系の植民者の末裔としての、アルジェの貧民街の出身者としての、父を知らない孤児としての自己の起源に遡り、そういった人々のなかの一人である自己を語ろうとするには、それまでのようなエクリチュールではかなわなかったということだろう。

『異邦人』のムルソーの強硬な態度表明は何物も寄せつけなかったが、カミュのアルジェリア性の政治的正統性は限りなく疑わしい。この小説を書き続けるまさにその時、疑いは誰の目にも明らかであり、孤立する作家を苦しめ続けていたにちがいない。

*21 *Le premier homme*, Éditions Gallimard, 1994. 日本語訳『最初の人間』大久保敏彦訳、新潮社、1996.

*22 Abdelwahab Meddeb (1946-2014年) チュニジア出身の作家、詩人、比較文学研究者。雑誌『ダイダロス』*Dédale*を主宰していた。

*23 「系譜的断絶」『みすず』1999年10月号 (*Esprit*, 95年1月号からの翻訳転載)

カミュの死によって、この自伝的小説は彼の文学活動の最後の作品となった。それとともに、作品は終わらないまま残された。そのため、後にカミュの妻フランシーヌ、最終的には娘のカトリーヌの手によって編集された作品/本には性質の異なるテキストが紛れ込んでいる。編集者（カトリーヌ）の註。カミュの手書きの原稿。その余白には検討事項や補足、ヴァリアントのメモがある。しばしば長大な加筆もある。本文からはみ出したこれらのノート notes は、改めて巻末近くにまとめられている。最後には「二通の手紙」がある。これについて編集者カトリーヌは註に、「『最初の人間』を一読していただければ、アルベール・カミュがノーベル賞を受賞した翌日、小学校時代の恩師ルイ・ジェルマンに宛てた手紙と、ルイ・ジェルマンが彼に書いた最後の手紙を、我々が補遺として、採録したことを理解していただけるだろう」^{*24}と記している。カミュの意思の外で、いや、我々には結局何もわからないのだが、『最初の人間』は、その構成と、不均質ないくつかのテキストの混合、話者/媒介の存在、終わらない物語という点で、『貧者の息子』を、さらに『貧者の息子』を通してミシュレのテキストへと遡り参照することになったかのようである。しかし、忘れてはならない。『最初の人間』には以下のようなくだりがある。

……二、三の特権的なイメージの方がずっと確かであった。それは彼を二人〔母と叔父〕に結びつけ、二人を通して彼を形作り、何年もの間彼が体現しようと努力してきたものを消滅させてしまい、最後に彼を無名の盲目的存在に貶めるのであった。しかし、その無名の存在こそ何年もの間家族を通して生き延びてきて、彼の真の気高さのもととなった。^{*25}

...Bien plus sûr [au contraire qu'il devait en rester à deux ou trois images privilégiées qui le réunissaient à eux,] qui supprimaient ce qu'il avait essayé d'être pendant tant d'années et le réduisaient enfin à l'être anonyme et aveugle qui s'était survécu pendant tant d'années à travers sa famille et qui faisait sa vraie noblesse. ^{*26}

これが書かれるのは、カミュが母や叔父（二人とも聴覚障害があった。母は文字を全く読めなかった）のことを回想する「6 家族」においてである。特権的なイメージとは、この物語の主人公ジャック・コルムリーが子ども時代に垣間見たアルジェの貧しい町での愚かしく暴力的な事件の断片で、それはチョウの言う「見世物的」な衝撃を伝える。そのイメージはいつまでも主人公につきまとって離れようとしなない。そこにこそカミュは、ミシュレと同じく、「賞賛すべきもの」を見だし、すでに物語に書き込んでいたのだ。

『貧者の息子』と同様、『最初の人間』は自-伝/-民族誌と呼ぶに相応しいものである。第一部【父の探索】RECHERCHE DE PÈRE と第二部【息子あるいは最初の人間】LE FILS OU LE PREMIER HOMME は構成上も内容も『貧者の息子』の【家族】【長男】を思わせ

*24 『最初の人間』 p.6

*25 同書, p.123

*26 *Le premier homme*, p.127

る。

「カピリアの悲惨」によって、カミュのエクリチュールは、フェラウンのまなざされる者としての決定的な覚醒と、自ら証言者たらんとする意志の標となった。まなざされることを起源にするゆえに、自己のエクリチュールの真摯な探求は困難な途になった。そのようにして生み出された一つのエクリチュール、これもまた、メッデーブが「マグレブのエクリチュールの奇妙な調子」と言う『貧者の息子』の物語が『最初の人間』（両者の表題はよく似ている）へと呼び戻されたことは当然の成り行きだったのではないだろうか。

『貧者の息子』が終わらない物語であるとする、それは、その後どこかに終わりを求めようとしていたのだろうか。フェラウンの筆業は、突然の悲劇的な死によってその命とともに絶たれてしまったが、残された書き物を見ると、作家が周到な計画によって、文学的実践を進めようとしていたのではないか、という思いにとらわれる。終わらせるのではなく延長すること、『貧者の息子』の新しい混合的なエクリチュールの試みをさらに進めようとしていたのではないだろうか。

まず、自伝的/自民族誌的小説がある。それを、イラストつきのエッセイのスタイルでなぞり返し、かつ補足するような『カピリアの日々』が書かれた。本書は、最初、1954年にアルジェで発行されていることから、『貧者の息子』に対する、形式的内容的な相互補完の意味合いが強い。この作品は『貧者の息子』とはかなり趣の違う文章で書かれている。イラストもかなり主張の強いものである。しかも、本として行き届いた、所有し読むことによるこびを感じるような仕上がりになっている。^{*27}ここで、私たちは専ら、カピリア人の日々の暮らしに出会うことになる。大きな事件や事故につきあわされることはない。いっぽう、作家は『日記 1955-1962』を残しているが、これは発表することを前提として書かれたものであり、『貧者の息子』で重要な役割を果たす日記を、作品のあとから補遺として「創作」したかのように思われる。この日記はフェラウンの死によって絶たれたため終わっていない。そうすると、『貧者の息子』続編は書かれ得たのであろうか。「『貧者の息子』の続編を仕上げたい。人生が長ければ……」^{*28}とフェラウンはロブレスに書き送った。これらのテキスト群は、カピリアの（自）民族誌、『貧者の息子』を起点とするカピリア叙事詩/誌を形成した可能性がある。

さらに、作家は三部作と言われる小説を残した。その最初の作品である『大地と血』は、早くも1951年に脱稿し、1953年にスイユ社から発行されている。『貧者の息子』にかけた長い年月で作家は自己のエクリチュールの方法を練り上げた。その、あまりに長い書き

*27 本書は1954年にバコニエ Baconnier 社から出版され、1968年にはスイユ社から再版された。バコニエ版はハードカバーだったようだ。この普及版とは別に、表紙に赤い羊皮紙を使い、背に金糸の飾りを入れた美装版も作られた。この版では、イラストも着色されている。現スイユ版はソフトカバーで簡素な装丁（シリーズで統一）だが、挿画（ペン画）の力強さが生きる紙が使われ、美しい本に仕上がっている。

*28 *Lettres à ses amis*, p.127.1956年7月17日付けの手紙である。

手としての自己研鑽の時間に、作家の内に密度濃く留まっていたフィクションへの情熱が解き放たれたかのようなのである。それに、『上り坂の道』（1957年）「記念日」が続く。^{*29}三部作はいずれも、カピリアと外の世界との関わりとそれによる軋轢が前面に押し出された物語である。この作品群でも、フェラウンは構成にいくつもの異なる試みを行っている。

『大地と血』は数字のみのついた章を並べ、『上り坂の道』は前半が回想的な物語、後半を物語の二人の主人公の一方の日記で構成している。

注目すべきは、作家が一貫してカピリアと、その外側の世界との関係を描きながら、単なる繰り返しに陥らないことである。エルバズ、マティウ=ジョブはいくつかのテキストに現れる繰り返しを指摘している。^{*30} 彼らの主張は、フェラウンのテキストは常にそこにある物、世界のありようを初めて見たときそのままに示しており、それが非時間性を生んでいるというものであり、『貧者の息子』『大地と血』『カピリアの日々』『日記』から、読む者が舞台となる村に導き入れられる部分の比較を行っている。いずれも、村あるいは町

（ティジという名であったり、『大地と血』の場合はイギル・ネズマン *Iguil-Nezman* である）はカピリアの凡庸な場所である。読む者を集落へと導く道として、『貧者の息子』ではいつも知れぬ太古から尾根に根付いたティジの主要道は大樹の幹である。樹木栽培者でもあるカピリア人にとって、大樹とは共同体の古い歴史と生命力を示すものであろう。ところが、『大地と血』では道は蛇として現れる。フランスからイギル・ネズマンに帰還した若者は、カピリアに因縁のあるフランス人女性を妻として伴っていた。蛇が象徴するものはベルベール一般の世界で必ずしも否定的なものではないが、^{*31} うねうねした道の形象には不穏な物語の開始が告げられている。また、すでに見たように『貧者の息子』は外部からのまなざしについての意識をまず書き、『カピリアの日々』は内部の者が外に出てそこを振り返ったまなざしが故郷の村をどう見るかを書いている。ここで見られる/書かれるカピリアはそれぞれ異なる。フェラウンは変化のなかにあるカピリア、多様なまなざしのあり方を書き取るエクリチュールの形を常に模索し続けていたのではないだろうか。

『貧者の息子』はエクリチュールの獲得についての物語であり、物語のエクリチュールを読み解くことは、その獲得がどんな成果を収めたかを確認することである。主人公と作家が我と我が郷を書くために創出したエクリチュールのありようは、独自のマグレブのエクリチュールが生まれたことを示している。フェラウンのエクリチュールの更なる探求がいかなるものであったのか、残されたいくつかの作品を読み解く作業にもまた、新たな発見があるはずだ。

*29 小説「記念日」*L'Anniversaire* は、いったんは完成していたが（59年）、出版のOKが出ず、作家に返却された。作家の死後出版された同表題の論集『記念日』所収の作品はそれとは別に作家が書き起こし、死の直前まで作業していたもので、未完である。返却された作品は61年（？）に手直しが終わって再度完成されていたが、出版されないままだった。本作は2007年になって出版されるが、表題は *Cité des Roses* 『薔薇学園』と変更されている。巻末、書誌参照。

*30 Elbaz, Mathieu-Job, *op.,cit.*, p.37-8

*31 *Le Guide de la culture berbère*, p.162

ムールード・フェラウンが最初に書いた自伝的小説『貧者の息子』の読解を、主人公/作家のエクリチュール獲得に焦点を当てて試みた。作品中にはそれに関わるエピソードが数多くあり、読解を試みたのはその一部にすぎない。最初にあったのは、エクリチュールに無縁の世界に生まれた人が『貧者の息子』を始めとする諸作品で行った達成への驚きである。そして、知りたかった。フェラウンはいかにして書く言語を獲得し、その獲得した言語で何を書き得たのかを。

しかし、それを知るのにどんな方法があるのだろうか。それ以前に、言い表すのはなかなか難しいのだが、文学研究の言語に対する違和感、疑問のようなものが常にあったし、あり続けている。先行する作品・作家研究から教えられることは多い。当然すぎることだが、フェラウン研究も文学研究の制度のなかにある。そして、その制度のなかで繰り返され、蓄積されてきた、膨大な言語は疑いもなく文学研究制度のディスクールとして存在しその正統性を身に帯びている。それら全てに対する「遠さ」——時として、というより頻繁に文学作品を解体し、作家を断じることばたちと、その価値を支える何かとの断絶感と、それにも関わらず圧迫感は強い。しかも、意識するとしないとにかかわらず、そこから多くのものを得て、私自身も書いているのである。しかし、「方法を欠いている」ことについてのもどかしさは、この後も研究としての読むことにつきまとうに違いない。

本論でできなかった読みの作業に以下のものがある。

2002年発行のENAG版および初版であるCNH版との比較検討ができなかったのは大きな欠如である。マティウ=ジョブによれば、本論において『貧者の息子』としたスイユ版においてはフランス語がより規範的な書き方に改められており、これらの版とスイユ版の違いは決して小さなものではないという。

また、この作品が書かれ発行された時代、1939年から1950年、1954年は、アルジェリア-フランス関係、ヨーロッパだけを見ても、ドイツとの戦争と敗戦、解放、アルジェリア独立戦争と、長い戦いが続く脱植民地期の過酷な時代だった。作品の読解において、そういう時代とその状況を参照する作業が足りなかったことを感じざるを得ない。

全く異なった意味合いで、できなかったのは、南アフリカ出身の作家J・M・クツェー¹の三作の自伝的小説との比較である。そのうちことに、1997年の『少年時代』*Boyhood*、2002年の『青年時代』*Youth*は、私が『貧者の息子』の読解を試みた最初の時期に、参照できる作品として現れたもので、その理由は『貧者の息子』とのいくつかある一致点である。

まず、自伝的作品に限らず、クツェーは南アフリカのアフリカーナーであるが、一貫

*1 1940年、ケープタウン生まれ。現在は、オーストラリアの市民権を取得してアデレードに在住。二度のブッカー賞受賞。『マイケル・K』*Life & Times Michael K* (1983) 『恥辱』*Disgrace* (1999)。2003年、ノーベル文学賞受賞。

して英語で著作している。他の言語で書くということは両者に共通しているのである。自伝二作は三人称で書かれ、時制は終始現在形であり、エピソード別に番号を付しただけの断片を重ねていくという構成をとっている。エピソードはおおむね時間経過に沿って並べられているようだが、それが、いつ起こったことなのかははっきりと示されていない。三人称で、動詞の時制が常に現在であるというのは、非常に奇妙な感じがあり、それがどんな効果を生んでいるかはわかりにくい。『貧者の息子』でも多用される現在時制と、三人称部分の読み解きに手がかりを与えてくれそうに思われた。このことは、クッツェーの二作がいずれも自伝/民族誌的である（と私が考えた）ことと関連している。^{*4}

さらに、クッツェーの主人公の少年ジョンには対としてエディ少年が、フルルにはアクリがいる。ジョンは「最初の記憶」を持ち出す。フルルもまた「最初の記憶」を語る。二人の若き主人公はそれぞれ、フランス語に対する、英語に対する距離の感覚に鋭敏である。そして、『貧者の息子』は終わっていないようだが、『少年時代』も『青年時代』も終わらないままになっている作品なのである。^{*5}

物語は常に物語を参照し、物語を読むのに物語は有力な手がかりとなる。改めて、両作品を読み比べ、読み解く途を考えてみたい。

以前、この作品の抄訳を試みたとき、友人の何人かに読んでもらった。共通の感想があった。日本の「昔」も、ここに描かれたカピリアのようなものではないかと。そうすると、フェラウンの意図は広く長く達成されたことになる。カピリア人を知ってほしい、カピリア人がほかの人たちと同じであることを知ってほしいと、作家は願って書いたのだから。

*4 『少年時代』 『青年時代』 もともに、始めは「辺境生活からのいくつかのシーン *Scenes From Provincial Life*」のサブタイトルがつけられていた。フルル・メンラッドの生がカピリアと引き離すことができないように、ジョンの少年時代は南アフリカ、ヴスターの、青年時代はケープタウンの、ロンドンの土地の上にある。

*5 しかし、クッツェーは三作目の『壮年期』 *Summertime* (2007年) で、主人公がすでに亡くなっているという設定で自伝的物語を強制終了させる。

書 誌

【ムールード・フェラウン主要著作】

Le Fils du pauvre, Paris, Éditions du Seuil, coll. « Méditerranée », 1954 ; rééd. Le Seuil, coll. « Points Roman », 1982

Le Fils du pauvre, Le Puy, Cahier du nouvel humanisme, 1950

La Terre et Le Sang, Paris, Le Seuil, coll. « Méditerranée », 1953 ; rééd. avec préface d'Emmanuel Roblès, 1962 ; rééd. « Points Roman », 1998

Jours de Kabylie, avec illustrations de Charles Brouty, Alger, éd. Baconnier, 1954 ; Paris, Le Seuil, coll. « Méditerranée », 1968 ; rééd. in *Algérie. Un rêve de fraternité*, Paris, Omnibus, 1997 *Les Chemins qui montent*, Paris, Le Seuil, coll. « Méditerranée », 1957

Les poèmes de Si-Mohand, essai, Paris, Éditions de Minuit, 1960

Journal 1955-1962, Paris, Le Seuil, coll. « Méditerranée », 1962

Lettres à ses amis, Paris, Le Seuil, coll. « Méditerranée », 1969

L'Anniversaire, Paris, Le Seuil, coll. « Méditerranée », 1972 ; rééd. « Points Roman », 1989

(なお、本書所収の同表題の小説「記念日」*L'Anniversaire* は、本書の編集者であるエマニュエル・ロブレスによると、1961年末からフェラウンの死の直前までに書かれたものであり、冒頭の四章のみが遺されたとされる。四章は始めのごく短い部分だけである。同表題の作品が最初に執筆されたのは1958～59年だが、スイユ社からは出版の許諾が得られず、原稿は著者に返却された。フェラウンはそれに手を入れて1961年始め頃までに(推定)再度完成させ、タイトルは「記念日」のままとしたが、やはり出版されずに置かれたようである。本作品はフェラウンの子ラシードによって2007年、『薔薇学園』*Cité des Roses* と表題を変えてアルジェリア、ヤムコム Yamcom 社から発行された。なお、本作品の複数のバージョンと出版事情については、青柳悦子「フェラウン『記念日』論——自己更新の文学として」に詳しい。)

【その他】

インタビュー interview par Maurice Monnoyer du 27 février 1953. 『アルジェリアの努力』*L'Effort algérien* 紙

『貧者の息子』英語訳

The Poor Man's Son : Menrad, Kabyle Schoolteacher, Translated by Lucy R. McNair, University of Virginia Press, 2005

【引用・参考文献】

A]

- Achour, Christiane, *Mouloud Feraoun : une voix en contrepoint*, Editions Silex, 1986
- Ahmad, Fawzia, *A Study of Land and Milieu in the Works of Algerian-Born Writers Albert Camus, Mouloud Feraoun, and Mohammed Dib*, coll. « North African Studies » The Edwin Mellen Press, 2005
- アージュロン,シャルル＝ロベール『アルジェリア近現代史』〈文庫クセジュ〉私市正年, 中島節子訳, 白水社, 2002 青柳悦子「ムールード・フェラウーン『貧者の息子』に見る間主体性 —— テクストの反 語性と新たな人間観の提示 ——」『文藝言語研究 文藝篇 61』(筑波大学人文社会科学研 究科文芸・言語専攻紀要)2012
- 「フェラウーン『記念日』論——〈自己更新〉の文学として」(2012年5月17日、アルジェリア、オランにおける口頭発表およびその論文集への投稿に加筆修正) アムルーシュ, ファドマ『カビリアの女たち』中島和子訳, 水声社, 2005
- (Aïth) Mansour Amerouche, Fadema, *Histoire de ma vie*, Librairie François Maspero, Paris, 1968, La Découverte, Paris, 1991, Editions La Découverte & Syros, 2000
- アッシュクロフト, B., グリフィス, G., ティフィン, H.『ポストコロニアルの文学』木村茂 雄訳, 青土社, 1998
- Ashcroft, B., Griffiths, G., Tiffin, H., *The Empire Writes Back : Theory and practice in post-colonial literatures*, Routledge, 1989

B]

- Begag, Azouz, *Le Gone du Chaâba*, Éditions du Seuil, 1986 ベル, リチャード『コーラン入門』医王秀行訳, ちくま学芸文庫, 筑摩書房, 2003 Ben Jelloun, Tahar, *La réclusion solitaire*, Éditions Denoël, 1976 ベン・ジェルーン, ターハル『砂の子ども』菊地有子訳, 紀伊國屋書店, 1996
- 『聖なる夜』菊地有子訳, 紀伊國屋書店, 1996
- 『あやまちの夜』菊地有子訳, 紀伊國屋書店, 2000 ベルク, ジャック『コーランの新しい読み方』内藤陽介, 内藤あいさ訳, 晶文社, 2005 Bonn, Charles, *Le Roman Algérien : de langue française*, Édition L'Harmattan, 1985 Bouraoui, Nina, *Le Jour du séisme*, Éditions Stock, 1999
- Bourdieu, Pierre, *Sociologie de L'Algérie*, coll. « que sais-je ? » Press Universitaire de France, 1956
- le déracinement : la crise de l'agriculture traditionnelle en algérie*, Les Éditions de Minuit, 1964
- ブルデュエ, ピエール『資本主義のハビトゥス』原山哲訳, 藤原書店, 1993
- 「家または転倒した世界」『実践感覚』2, 今村仁司他訳, みすず書房, 2001
- ボウルズ, ポール『シェルタリング・スカイ』大久保康雄訳, 1991
- 「遠い挿話」四方田犬彦訳, 『20世紀の世界文学』〈新潮臨時増刊号〉1991

c]

- カミュ, アルベール『異邦人』〈新潮文庫〉窪田啓作訳, 1963
——『転落/追放と王国』〈新潮文庫〉佐藤朔訳, 1968
——『ペスト』〈新潮文庫〉宮崎嶺雄訳, 1969
——『最初の人間』大久保敏彦訳, 新潮社, 1996
Camus, Albert, *L'Etranger*, in Albert Camus, Théâtre, récits, nouvelles, coll. « Bibliothèque de la Pléiade »Éditions Gallimard, 1962
———*L'Exile et le Royaume*, in Albert Camus, Théâtre, récits, nouvelles, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 1962
———*La Peste*, in Albert Camus, Théâtre, récits, nouvelles, coll. « Bibliothèque de la Pléiade » Gallimard, 1962
———*Le Premier Homme*, « Cahier Albert Camus 7 », Gallimard, 1994
———*Misère de la Kabylie*, in Albert Camus, *Essais*, coll. « Bibliothèque de la Pléiade » Gallimard, 1965
セルトー, ミシェル・ド『日常実践のポイエティック』山田登世子訳, 国文社, 1987
——『ルーダンの憑依』矢橋透訳, みすず書房, 2008
Certeau, Michel de, *L'invention du quotidien : 1. arts de faire*, coll. « Folio/Essais » Gallimard, 1990
クッツェー, J.・M.『マイケル K』くぼたのぞみ訳, 1989
——『ペテルブルグの文豪』本橋たまき訳, 平凡社, 1997
——『少年時代』くぼたのぞみ訳, みすず書房, 1999
——『恥辱』鴻巣友季子訳, 早川書房, 2000
——『動物の命』森祐希子, 尾関周二訳, 大月書店, 2003
——『サマータイム、青年時代、少年時代』くぼたのぞみ訳, インスクリプト, 2014
Coetzee, J.M., *Life & Times of Michael K*, Vintage, 2004(First published in Great Britain in 1983 by Secker & Warburg)
———*Boyhood*, Penguin Books, 1998(First published in the United States of America by Viking Penguin, 1997)
———*Youth*, Vintage, 2003 (First published in Great Britain by Secker & Warburg, 2002)
———*Summertime*, Vintage, 2010 (First published in Great Britain by Harvill Secker, 2009) チョウ, レイ『プリミティブへの情熱』本橋哲也, 吉原ゆかり訳, 青土社, 1999
——『ディアスポラの知識人』本橋哲也訳, 青土社, 1998
——『中国と女性のモダニティ』田村加代子訳, みすず書房, 2003
Chow, Rey, *Primitive Passions : Visuality, Sexuality, Ethnography, and Contemporary Chinese Cinema*, Columbia University Press, 1995
キュリー, エーヴ『キュリー夫人伝』川口篤他訳, 白水社, 1968

d]

- 太宰治「惜別」『太宰治全集 7』〈筑摩文庫〉1989 (青空文庫版, 2000, 2005)
ドーデー『風車小屋便り』〈岩波文庫〉桜田佐訳, 1932
——『陽気なタルタラン』〈岩波文庫〉小川泰一訳, 1933

ディアズ, ジュノ 『ハイウェイとゴミ溜め』〈新潮社クレストブックス〉江口研一訳, 1998
—— 『こうしてお前は彼女にフラれる』〈新潮社クレストブックス〉都甲幸治, 久保尚美訳, 2013

Diaz, Junot, *Drown*, Riverhead Books, 1996

ジェバール, アシア 『愛、ファンタジア』石川清子訳, みすず書房, 2011

E】

Elbaz, Rober, Mathieu-Job, Martine, *Mouloud Feraoun : ou l'émergence d'une littérature*, Éditions Karthala, 2001

F】

フロマンタン, ウジェーヌ 『サハラの夏』〈叢書ユニベルシタス〉川端康夫訳, 法政大学出版局, 1988

福田育弘 「マグレブの熱い視線 —— マグレブの新しい作家たち」月刊『ふらんす』白水社, 1993年4月号~1994年3月号

—— 「テキストの暴力 —— マグレブの文学を読む」月刊『ふらんす』白水社, 1995年4月号~1996年3月号

G】

Gleyze, Jack, *Mouloud Feraoun*, Éditions L'Harmattan, 1990

ゴイティソーロ, フアン 『嵐のなかのアルジェリア』山道佳子訳, みすず書房, 1999

H】

Hannoum, Abdelmajid, *Colonial Histories, Post-Colonial Memories : The legend of the Kahina, A North African Heroine*, Heinemann, 2001

平野千果子 『フランス植民地主義の歴史 —— 奴隷制廃止から植民地帝国の崩壊まで』人文書院, 2002

ヘーシオドース 『仕事と日』〈岩波文庫〉松原千秋訳, 1986 星埜守之 「フランス語圏文学/フランコフォン文学への招待」『国境なき文学』〈アウリオン叢書〉芸林書房, 2004

ホーン, アリステア 『サハラの砂, オーレスの石 —— アルジェリア独立革命史』北村美都穂訳, 第三書館, 1994

I】

茨木博史 「フルール・メンラドの彷徨 —— ムールード・フェラウン『貧者の息子』の語りが孕む問題」『Résonances』東京大学教養学部フランス語部会, 第3号, 2005 稲賀繁美 『絵画の東方 —— オリエンタリズムからジャポニズムへ』名古屋大学出版会, 1999 井上靖 『しろばんば』偕成社, 2002

石川美子 『自伝の時間』中央公論社, 1997

Ishikawa, Kiyoko, Traduction en Japonais de « L'Amour, la fantasia » : son importance et son retentissement, *Lire Assia Djébar !*, Le Cercle Amis d'Assia Djébar, La Cheminante plein champ, 2012

石浜裕子 「サイドのカミュ論におけるポストコロニアル批評の方法と実践」(修士論文) —— 「ムールード・フェラウン『貧者の息子』」『言語社会』一橋大学言語社会研究科紀要, 第4号, 2009

—— 「書くことのできる言語で何を書いたのだろうか」 『ことばと文化の饗宴 —— 西洋古典の源流と芸術・思想・社会の視座』 田中一嘉, 中村美智太郎編著, 風間書房, 2014】
ジョイス, ジェームズ 『若い芸術家の肖像』 〈岩波文庫〉 大澤正佳訳, 2007

κ】

カフカ, フランツ 『カフカ短篇集』 〈岩波文庫〉 池内紀編訳, 1987

—— 『カフカ寓話集』 〈岩波文庫〉 池内紀編訳, 1998

—— 『流刑地にて』 〈白水社 u ブックス〉 池内紀訳, 白水社, 2006

カテブ, ヤシン 『ネジュマ』 島田尚一訳, 現代企画室, 1994

Kateb, Yacine, *Nedjema*, Éditions du Seuil, 1956

—— *Polygone étoilé*, Le Seuil, 1966

Khadda, Naget, Autobiographie et Structuration du Sujet acculture : dans *Le Fils du pauvre* de Mouloud Feraoun, in *Autobiographies et Recits de vie en Afrique*, coll. « Itinéraire et Contacts de cultures » vol.3, Éditions L'Harmattan, 1991

カドラ, ヤスミナ 『カブールの燕たち』 香川由利子訳, 早川書房, 2007

—— 『テロル』 藤本優子訳, 早川書房, 2007

ハティビ, アブデルケビル 『異邦人のフィギュール』 渡邊諒訳, 水声社, 1995

—— 『マグレブ 複数文化のトポス — ハティビ評論集』 澤田直訳, 青土社, 2004

Khatibi, Abdelkebir, *le roman maghrebin*, François Maspero, 1968 金沢公子 「エピナール版画・Images d'Epinal 又は Imagerie d'Epinal の歴史」 『教養論集』 (14) 成蹊大学, 1998

川田順三 『無文字社会の歴史 — 西アフリカ・モシ族の事例を中心に』 〈岩波現代文庫〉 2001

—— 『マグレブ紀行』 〈中公新書〉 1971, 復刻新版 1999

私市正年, 佐藤健太郎編集 『モロッコを知るための 65 章』 明石書店, 2007

私市正年編集 『アルジェリアを知るための 62 章』 明石書店, 2009

きだみのる 『きちがい部落周遊紀行』 富山房, 1981 小林信介 『人々はなぜ満州へ渡ったのか —— 長野県の社会運動と移民 ——』 世界思想社, 2015

クリステヴァ, ジュリア 『中国の女たち』 丸山静他訳, せりか書房, 1981

Kristof, Agota, *Le Grand cahier*, Le Seuil, 1986

—— *La preuve*, Le Seuil, 1988

—— *Le troisieme mensonge*, Le Seuil, 1991

λ】

Lalami, Laila, *Hope and Other Dangerous Pursuits*, Algonquin Books of Chapel Hill, 2005

ルジュンヌ, フィリップ 『自伝契約』 花輪光監訳, 水声社, 1993

Lenzini, José, *MOULOU FERAOUN : Un écrivain engagé*, coll. « Solin », Actes Sud, 2013

Le Rouzic, Maurice, A propos de la dimension autobiographique *du Fils du pauvre* de Mouloud Feraoun, in *Autobiographies et Recits de vie en Afrique*, « Itinéraire et Contacts de cultures » vol.3, L'Harmattan, 1991

魯迅 『『呐喊』原序』 『魯迅全集』 井上紅梅訳, 改造社, 1932 (青空文庫版, 2008)

———— 「藤野先生」 竹内好訳, 1926 (日本ペンクラブ, 電子文藝館)

M】

Marx-Scouras, Danielle, « On tue des instituteurs » : Camus et les impératifs pédagogiques in *Albert Camus et les écritures du xxe siècle*, Artois Press Université, 2003

Mathieu-Job, Martine, *Le Fils du pauvre de Mouloud Feraoun : ou la fabrique d'un classique*, Éditions L'Harmattan, 2007

メッデーブ, アブデルワッハーブ 「系譜的断絶」 鶴飼哲・下境真由美訳 『みすず』 1999年10月号

———— 「極限としてのヨーロッパ」 鶴飼哲訳 『現代思想』 1999年10月号 メルシーニー, ファティマ 『ハーレムの少女ファティマ』 ラトクリフ川政祥子訳, 未来社, 1998

Michelet, Jule, *Ma Jeunesse*, Calmann Levy, 1884 森鷗外 「キタ・セクスアリス」 〈新潮文庫〉 1949, 1967 改版 (青空文庫版 2006) Mpalive-Hanson Msiska, Paul Hyland, *Writing and Africa*, Addison Wesley Longman, 1997 室生犀星 「幼年時代」 『幼年時代・風たちぬ』 〈少年少女文学館〉 講談社, 1986

N】

中井亜佐子 『他者の自伝 — ポストコロニアル文学を読む』 研究社, 2007 中村遙 「アルジェリアの国民言説とベルベル: アルジェリアの歴史教科書の記述から」 『上智ヨーロッパ研究』 (6) (上智大学紀要) 2014

P】

ペルヴィエ, ギー 『アルジェリア戦争 — フランスの植民地支配と民族の解放』 〈文庫クセジュ〉 渡邊祥子訳, 2012

R】

Rousseau, J.-J., *Les Confessions*, nouvelle édition, Charpentier, 1858

ルソー, ジャン=ジャック 『告白』 上中下, 桑原武夫訳 〈岩波文庫〉 1965, 1966

S】

サイード, エドワード 『オリエンタリズム』 板垣雄三他監修, 今沢紀子訳, 平凡社, 1986

———— 『文化と帝国主義』 1,2, 大橋洋一訳, みすず書, 1998, 2001

———— 『遠い場所の記憶』 中野真紀子訳, みすず書房, 2001

Said, Edward, *Orientalism*, Vintage Books Edition, 1979

———— *Culture and Imperialism*, Vintage Books, 1993 斎藤昌人 「一カフカ像: 『流刑地にて』をめぐって」 研究報告, 1990年, 4:135-165 澤田直 「マグレブのフランス語文学 — 裏切りと歓待」 『多言語主義とは何か』 三浦信孝 編, 藤原書店, 1997

澤田直 「モロッコから/へ — 交流と抵抗の場」 『国境なき文学』 〈アウリオン叢書〉 芸林書房, 2004

Slama, Alain-Gérard, *La Guerre d'Algérie : Histoire d'une déchirure*, Éditions Gallimard, 1996 鈴木克則 「罪状なき処刑 — フランツ・カフカの『流刑地にて』をめぐって —」 『麗澤大学紀要』 第65巻, 1997年12月

スピヴァク, ガヤトリ 『ある学問の死』 上村忠男, 鈴木聡訳, みすず書房, 2004

- 『ポストコロニアル理性批判』 上村忠男, 本橋哲也訳, 月曜社, 2003
- Spivak, Gayatri, Chakravorty, *Death of A Discipline*, Columbia University Press, 2003
- スレーリ, サーラ 『肉のない日 — あるパキスタンの物語』 大島かおり訳, みずす書房, 1992
- T】
- 田中治彦 『ボーイスカウト — 二〇世紀青少年運動の原型』 〈中公新書〉 1995 チェーホフ, アントン 『ワーニャ伯父さん』 神西清訳, 新潮文庫, 1967. 改訂版 2004 (青空 文庫版, 2010)
- ティヨン, ジェルメーヌ 『イトコたちの共和国』 宮治美江子訳, みずす書房, 2011 トゥアン, イーフー 『トポフィフィリア — 人間と環境』 〈ちくま学芸文庫〉 小野有五, 阿部一訳, 2008
- u】 鶴戸聡 「アラブ・フランコフォニーと越境の文学」 『反響する文学』 土屋勝彦編, 風媒社, 2011 榎木栄一 「Camus の《Misère de la Kabylie》をめぐって — 他紙のルポルタージュとの比較 —」 『フランス文学』 (15), 41-51, 1985-05-15
- w】
- 渡邊祥子 「1930年代から40年代のアルジェリア・ムスリム・スカウトに見るナショナルリズム運動組織の変化 — ウラマー協会と PPA-MTLD の抗争との関連から」 『イスラム世界』 74号, 2010
- ワット, ウィリアム・モンゴメリ 『地中海世界のイスラム — ヨーロッパとの出会い』 〈ちくま学芸文庫〉 三木亘訳, 2008
- Woodhull, Winifred, *Transfiguration of the Maghreb : Feminism, Decolonization, and Literatures*, University of Minnesota Press, 1993
- Y】
- ヤヒヤ, エムナ, ベルハージ 『見えない流れ』 青柳悦子訳, 彩流社, 2011
- ヤコノ, グザビエ 『フランス植民地帝国の歴史』 〈文庫クセジュ〉 平野千果子訳, 白水社, 1998
- ヤング, ロバート 『ポストコロニアリズム』 本橋哲也訳, 岩波書店, 2005
- Young, Robert J. C., *Colonial Desire : Hybridity in Theory, Culture and Race*, Routledge, 1995
- 【辞書, その他の文献】
- 『コーラン』 上中下 〈岩波文庫〉 井筒俊彦訳, 1957, 1958, 改版 1964
- Le français en Algérie : Lexique et Dynamique des Langues*, Éditions Duculot, 2002
- Mohand Akli Haddadou, *Le Guide de la culture berbère*, Éditions Paris-Méditerranée et Éditions Ina-Yas, 2000
- 大塚和夫他編集 『イスラーム辞典』 岩波書店, 2002
- 日本イスラム協会他監修 『イスラム辞典』 平凡社, 1982
- Dictionnaire des écrivains francophones classiques : Afrique subsaharienne, Caraïbe, Maghreb, Machrek, Océan Indien*, Christiane Chaulet Achour avec la collaboration de Corinne Blanchaud, Paris, Éditions Honoré Champion, 2010
- dictionnaire arg. pop. fam. (<http://www.languefrancaise.net/bob/detail.php?id=16975>)
- Encyclopédie berbère* (<http://encyclopedieberbere.revues.org/>)

「魯迅研究」日本中国友好協会宮城県連合会
(<http://park12.wakwak.com/~jcfa-miyagi/luxunf/ryugaku.html>)

【映画・映像関係】

Bensmail, Malek, *La Chine est encore loin*, 2007
(<https://www.youtube.com/watch?v=JhHpsw7PRSw>)

Cherfaoui, Harid, *Les Bergers du Djurdjura*, 2010
(<http://www.chouf-chouf.com/cinema-et-tv/les-bergers-du-djurdjura/>)

『アルジェのこだま』紙
(<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/cb327596899/date>)

『アルジェ・レピュブリカン』紙
(<http://www.alger-republicain.com/>)

【付録】 ムールード・フェラウン『貧者の息子』日本語訳

『貧者の息子』

Mouloud Feraoun, *Le Fils du pauvre*, Éditions du Seuil, 1954

+

『フルル・メンラッド』

Fouroulou Menrad, L'Anniversaire, Le Seuil, 1972

*論文作成にあたり、『貧者の息子』の日本語訳（全訳）を試みた。

**訳文については、論文本文に翻訳引用したものとは必ずしも一致しない。

家 族

年をとってからも、片時も休まずに、
人のために働きましょうね。そして、やがてその時が
来たら、素直に死んで行きましょうね。あの世へ行っ
たらどんなに私たちが苦しかったか、
どんなに涙を流したか、
どんなにつらく長い年月を送って来たか、それを残
らず申し上げましょうね。すると神さまは、まあ気
の毒に、と思ってください。

A・チャーホフ

メンラッドは、山地カピリア地方出身の慎ましい教師である。彼は、《盲目の者たち》にまじって生活している。しかし、自らを王のごとくに思いはしない。それは、まずは民主主義を信じるゆえであり、自分は天才ではないという確信ゆえでもある。

己についてのこのような厳しい考えに至るまでには、長い歳月が必要だった。だからといって、彼の能力は減じたというのではない。むしろその逆である。

勉学を終えて後、教壇に立った初めの頃から、彼は日記に打ち明け話をするようになる。ここにその一冊がある。「私自身に戻って、私の置かれている状況を私自身の価値に応じて考えてみると、私は厳しい結論を出さざるをえない。私は傷ついた。方法を欠くことが、何よりも危険な障害だ。しかし、私は結論をそこで終わらせるつもりはない！ 私は己のうちに強い知の力を感じる。古い本や昔のノートをたずさえていれば、もっと先へと進めそうだからだ。」「もう、決定はなされた。きつとうまくいく。ロンサールやプレイアード派について初めに学んだことを反芻するにつれ、私の意志は強まり、これから立ち向かう試験に取り組みやすくなる。」

メンラッドは野心に満ちていた。彼は己の野心を嘲笑した。彼には不幸というものがわかっていただ。驚のごとく滑空してやろうと思えば思うほど、鴨のように、泥水のなかをもがき進むほかなくなるということである。

そうして、彼は、己が生まれたのと同じような村で、教室が一つしかない学校で、兄弟のような農民たちに立ち混じり、彼らとともに生きる苦しみに耐え、決して動じぬ魂をもち、彼らと同じく断固たる運命論、すなわち揺るがぬ確信をもって、彼が言うところの、ムハンマドの天国へと迎え入れられる日を待ちながら、一介の教師に甘んじて生きることにしたのである。

この態度は、あらゆる点で賞賛に値するもので、懐疑論的な態度とは違う。哀れなメンラッドに哲学する力はない。この態度は、自分は弱い者だという、たいそうはっきりとした思いの結果だった。試験を断念してから、彼は書き始めた。自分には書く力があると信じたのだ。だがそれは詩でもなく、哲学的論考でもなく、もちろん冒険小説でもなかった。彼には想像力というものがなかったのだから。しかし、彼はモンテーニュとルソーを読んでいた。ドーデも、ディケンズも（翻訳で）読んだ。彼はこの偉大な作家たちのように、己自身の物語を語ることを、ただ単純に願った。私は、あなたがたに、彼は慎ましいと言った！ このような天才たちに自らを比較するような考え方とは遠いところにいた。彼は自画像をえがく、というばかげた考えだけを、彼らから借りようとしていたのだ。筋が通

っていて不足がなく、読みうるものが書ければそれで満足だと考えた。己の人生を、子どもたちと孫たちには知ってもらってもよいのではなかろうか。だめならば、印刷できなくとも仕方がない。原稿をそのままにしておくまでだ。

1939年の四月、復活祭の休み中に、メンラッドは作業に取りかかった。幸福な時間！

適切でない語や不確かな表現、意味のよくつかめない形容詞の前に立ちはだかる、数え切れない障害が、言い回し一つ一つにも段落ごとにもあった。彼は、分厚い学生ノートを埋め尽くす前に、おのが力を超えた企てをあきらめる。後悔や憤りの気持ちはなかった。教室に、真っ黒になった小さな机がある。二つある引き出しの一方に、今日までその傑作は入れられたままだった。勤務日程表や下調べ用のカードの間に、親鳥にも兄弟鳥たちにも見捨てられて忘れられた、ズグロムシクイの五個目の卵のように。

だが、神よ、何人も己の運命を支配することはできませんまい！もし、天上で、メンラッド・フルルの物語が人々に知られると定められているならば、あなたのお決めになったことに、誰が背けましょう？

左の引き出しから、学生ノートを取り出して開けてみよう。フルル・メンラッドよ、私たちは、おまえの話を聞こう。

カピリア地方の最奥地にまで足を踏み入れようとする観光客は、心からそう思っただけか、なかなかよい所ではないかと思った土地への返礼のようなものか、詩情あふれる風景を褒め、その住人の暮らしぶりに親愛の情を示して惜しまない。

そういうものだろう。同じような感心の情、同じような詩情はどこにでも見いだせるのだから、人はその度に親愛の気持ちを示す。だから、どこか別の土地に見たものを、カピリアにも見たとしても何も不思議ではない。

観光客のみなさんには大変申し訳ないが、あなたがたは、ただ通り過ぎていくだけの観光客だから、感心もすれば詩情も見つけられる。帰ってみればあなた方の夢も終わり、敷居のところには、当たり前^くの日常が待っている。

私たちカピリア人は、人々が私たちの郷を褒めるのはもつともだ、と思っている。不作法を見せまいと、私たちに美辞麗句をくれるのも好ましい。いっぽうで、私たちにはたやすく想像できる。私たちの貧しい村の眺めがたいそう好意的な訪問者にさえ残す、何やら物足りない印象というものを。

ティジは二千人の住人がいる集落である。一つの尾根の上に、家々が互いの尻にしがみつくようにして建ち、その様子は有史以前の怪物の巨大な脊椎のようだ。二百メートルにわたって大路が一本あるが、それは部族の道の幹の部分で、いくつかの村をつないでいる。大路は車の通れる道に通じており、その先は町へと通じる。

この大路は、片側だけに塀がある所では、当初の道幅を残している。少なくとも、優に六クデ長さの旧単位。肘から中指先端まで。約 50 センチメートル。はある。あちこちで両側に家を立てるので、そこでは道幅はちよつとずつ削られて、石の牢獄にとらわれたような惨めなありさまである。ところどころ、右に左に、気まぐれな腕でも捻げることがなければ、道だとして息が詰まるというものだ。両側を取り囲まれた小路は、野原へと逃げていく。当たり前のことながら、小路は大路の一部なので、違う扱いを受けることはない。大路が舗装されていないのに、小路を舗装する必要はあるはずもない。どの道も夏はほこりっぽいし、冬はぬかるむ。人通りが多いからだが、加えて、いつも汚い。唯一の違いといえば、小路は大路の娘で、だから親に似ていることだ。

どこかある場所を決めて、そこから逆方向に向かう二つの道を想像してみたらいい。同一の点から、一方は左にもう一方は右に行く。この特別な場所では、道幅は広がっている。これは不思議にたまたまそうなったのか、それとも現実の時間を超えてなされた決定によるものか、私たちの祖先は四つ角というものをつくらなかった。ここは、村の広場だ。

《音楽家たちの広場》といい、私たちが集まる唯一の場所で、高いほうの地区では、低いほうの地区の、この広場をうらやむ。

五十センチ四方くらいの片岩のタイルを、家の切り妻側の壁によりかからせるようにおまかに積み上げて集会場所の長椅子として使い、大人も子どももやってきては腰を下ろす。すかし格子の屋根がある長椅子は、とりわけみなのお気に入りだ。夏は涼しいし冬は雨風を避けられるから、みなそこに座りたがる。北の方から広場に出てくると、この長椅子は左側にある。その正面には袋小路があり、二十メートル先で行き止まりで、一件の家の門がある。この長椅子には一番よい石が使われている。大理石だ。黄褐色の本物の大理石で、長年にわたって使われて擦れて光っている。村は三つの地区から成り、それで広場も三つある。どの広場にも石の長椅子があり、石板は光っている。あちこちの石板には、碁盤が刻みつけてあって、小石を使って遊ぶ。だが、《音楽家たちの広場》に並ぶほどの広場があると思う者はいない。

モスクもふたつある。モスクは広場ほど大事な場所ではないことははっきりしている。外から見ると、モスクは隣りにある家と区別がつかない。なかの床はコンクリートで固められ、壁は石灰で白く塗られている。なにもなくて、悲しい感じがするほど簡素だ。ここに祈りを捧げにやって来る老人たちは、過ぎ去った時代の人間である。

モール・カフェは村の外にある。行きたい者は、その場所を探して村の外へと出かけていく。

最近になって、気取った風な外観の家が何件か建ったが、フランスに行って稼いだ金を使ったものだ。こういう家は、あたりをはばからず高々とそそり立つ正面玄関と赤すぎる瓦が、周りの古びたたたずまいのなかでひととき目を引く。この風景のなかでのこういった贅沢を、みな、場違いであると感じている。それに、われわれカピリア人は、こういうものをそれほど誇るべきものとも思わない。遠くからの眺めると新しい家は白い染みのように見え、辺り一帯の土の色となじまない。われわれは、こういう家が、なかは他の家と似たようなものだ知っている。当然のこと、こういう家は《メナイエルの厩》という蔑みの言辞を賜ることになる。外側はぴかぴかと光っているが、なかには家畜がいるから糞だらけだというのだ。

虚栄という悪癖は、ここでは、この上ない嘲りの種だ。それというのも、われわれはみな、とても近い親戚縁者だから。

私たちの祖先は、他にすべもなく、寄り添って暮らすようになったようだ。孤立することにはめっぽう弱くて、ともに生きることがどれほどよいことであるかを推し量ることさえできなかった。隣人がいて、役立ち、手伝い、貸し借りし、助け、思い合う、少なくとも運命を分かち合うという幸運を！ 私たちは孤立を死と同じように怖れる。それでも、喧嘩やいさかいはしょっちゅうで、ひとたび祝い事や不幸な出来事があれば、それにかこつけて解消させる。

《私たちがいっしょにいるのは、樂園を求めてであって、不和のためではない》。これは、私たちの馴染みの諺だ。私たちの樂園は地上の樂園にすぎないが、地獄ではない。

地区ごとにそれぞれの父祖をもつが、それは大して重要ではない。ずっと昔から、部族間で婚姻が行われてきたので、今では、一村の歴史は一個人の歴史のようになっている。特別な位階をもっていたり、貴族の称号を持つような家族はない。私たちにはいまも、英

雄を歌う詩がある。ユリシーズのように狡知に長け、タルタランのように誇り高く、ドン キホーテのように瘦せこけた英雄たちである。

例を挙げると、下の地区はメズーズ一族の者たちである。メズーズには五人の男の子があったので、それぞれの名を、一族の五つの家族の名とした。だから、その一族には、ラバー、スリマンヌ、ムッサ、ラルビ、カシという家がある。バシランは、先祖がジュルジュラからの逃げてきた者たちである。バシランの者たちは、この起源に誇りを持ってない。心の内では、それを思っていささか弱気になる。しかし、今では、その事を考える者にはやいないし、彼らも自らをメズーズの正当な末裔であると考えている。にもかかわらず、何かしら非常に深刻なことがあると、それを思い出さざるをえないこともある。大きな利害関心がかかっている場合だけなのではあるが。

私たちカピリア人は、こういった共通のあるいはそれぞれの起源を持ち、そして条件も同じだ。山地のカピリア人はみな一様に同じ暮らしをしている。貧しい者も金持ちもいない。

確かに、人々は二つのカテゴリーに分けられる。常に満ち足りた生活をする者、そして、運不運に任せて、どん底の貧しさと、神の祝福による慎ましくも余裕のある暮らしとを行ったり来たりする者。しかし、住人の間に階級ができて固定してしまったり、暮らしぶりに根本的な違いができるようなことはなかった。

お金の家は無花果園やオリーブ畑をいくつも持ち、一ヘクタールの耕作地を持ち、ときには自分の畑に泉を持っていたりもする。広場でこういう農民の持ち物を一か月分の労働で評価するとき、人々の目には賞賛と羨望が読み取れる。私たちの耕作地は急傾斜の斜面にあり、そこでの、羊よりはちょっと大きい牛二頭を遣っての一日分の労働量はやっ と二十アールほどである。カピリアの豪農は六ヘクタールの土地を持つ。広場では胸を張って話し、己の家では絶対の家長である。少なくとも、周りの者はそう思わせておく。

その者の富の、目に見える唯一の利点である権威と賞賛を維持するために、彼は持たざる者よりもずっときつい仕事をする。雇った働き手ともに働いて彼らに範を示し、彼らと同じものを食べて同じ衣服を着るのである。しかし、寓話に登場する金持ちも同じだが、持たざる者の憂いには無頓着である。

金持ちは家畜を所有している。雄牛二頭、雌牛一頭、羊が何頭か、雄ラバが一頭、ロバが一頭。

お金持ちの住まいには、向かい合って二つの部屋があり（間口が十二クデ、奥行きは十四クデある）、長男と、何日か滞在する客人のための小さな部屋も、一つ二つある。建物の外壁は全部、大きな石板で組み、粘土のモルタルでつなぎ合わされる。屋根は葦で作った下地の上に、窪みのある瓦を置く。しっかりと突き固められた床は石灰を塗って磨いてあるので、つやつやとしたクリーム色で、塗りがまだ新しいうちは、清潔で民芸調の美しさを感じさせる。家族の母はなかなかよいセンスをしていて、それぞれの部屋にあるメートルほど高くなっている壇の部分を同じように塗り、その角のところをムラのある緑色で縁取る。この色は、潰したイヌホウズキから取る。壁は、屋根の真下の高い所にいたるまで白い粘土で塗るが、これには大変な労力がかかる。家内を整えるのは主婦の役目だ。それは、主婦にとって気苦労の種でもあるし、誇りでもある。家の経済状態に応じて、塗り直しは、毎年あるいは、二、三年に一回行われる。

大きな部屋にはそれぞれ、敷石のある低い部分があり、牛や、他の家畜を住ませたり、薪置き場として使われる。そこと、高くなっている部分とは、どっしりとした柱で区切られ、柱は屋根裏部屋を支えている。屋根裏には食料品の入った瓶や、油壺、家財道具の入った箱が納められている。高い部分は居住場所である。昼の間は、垂木に吊された太い丸太いっばいに寝具を掛けておく。竈はどこでもよい壁際に、厩舎と向かい合わせの場所にある。炉の上には、壁と壁とを結んで二本の梁を平行に渡してある。梁にはいろいろなものを吊す。冬にはドングリの入った箆、煙でいぶされて保存がきく。生木も炎から二メートル上のところで少しずつ乾燥させられていく。イードの祭りに屠った羊肉の油は、ニシンのように香ばしくなる。

小さな部屋には、いま述べたようなものは何もない。正確な形ではないが、単純な矩形のもののような感じがする。石灰が塗られていて、あまり煙を立てることがないので、大きな部屋よりはきれいに光ったままだ。冬の夜以外は、そこで火を焚くことはない。

中庭は大抵狭い。入り口の門の上に鳩小屋のような部屋を作っている家もある。そこは中庭から簡素な階段か、頑丈なはしごを登って行くようになっていく。これは、予備の部屋である。その下、門のあちらとこちらの端には長椅子を二つ作る。女主人は、実入りの良い年には、この長椅子を石灰で塗る。

表に見える金持ちの標とは、ここに挙げたようなことだ。他には何もない。贅沢など決してない。というのは、誰もが知っているように、金持ちというものは吝嗇だからである。己の富を守り増やす欲深な者は、締まり屋でなくてはならない。吝嗇とは、金持ちになり、そしてそうあり続けるための一番重要な資質である。金持ちを悪く思う者はいない。ある意味で彼らは賞賛に値する。

村の貧しい家も、できるときには金持ちと同じような生活をしている。そうでないときは、そのときを待ちこがれる。貧しい者は土地を持たない。持ってもほんのわずかである。仕事がないときはどうなるのか。住まいは、たった一部屋にまで縮小される。狭苦しい中庭を同じように貧しい隣人と共有し、広場を他の者みなどと共有する。農民は、己のあばら家で、女子どもと一緒に休息の時間を過ごす習慣を持たない。広場は、常にただで使える確実な休息場所だ。モール・カフェに行きたがるのは、若者か怠け者である。

貧乏人でも、金持ちと同じく家畜を持つことはできる。自分で買ったのではなく、他の者から預かったものである。その場合でも、売れば、儲けからあらかじめいくらかを取れる。彼らは日給で働く。少しはよい暮らしをしたいと働く。金持ちの隣人に倣いたいと思えば、隣人の方はそちらに倣おうとする。そのうち、彼らは互いに互いのことがわからなくなる。というのは、金持ちの妻は、隣の貧乏人の暮らしぶりがうらやましくなり、子どもらも物を持たない幼なじみの境遇をうらやんだりするということがよくあるからだ。それ

も長くは続かない。雨の多い冬もある。病気や思いがけない出費、そして家長のフランス行き。そこでの不運もある。郷を忘れてしまうこともある。それぞれの立場は容易に変わりうる。金持ちは、相も変わらず吝嗇である。持たざる者は、持つ者の不幸を望むかと思えば、無関心であったりする。

とどのつまり、ティジではみな互によく知った者たちであり、互いに親しく、互いに嫉妬しあう。自分の船をできる範囲で操っているが、階級はない。そうやって、どれほどの貧乏人が金をためて金持ちになれるのだろうか。あるいは、何人の金持ちが、人々に尊

敬され怖れられ忌み嫌われている高利貸しのサイドに破滅させられるのを待たずに、あっという間に貧乏人になってしまうのだろうか。当然ながら、サイドにも順番は回ってくる。死ぬときは物乞いだ。掟に例外はない。これは神の掟なのだから。この世にあるわれらはみな、貧窮も富も知らねばならない。生まれたときの境遇のまま死ぬ者はいない、と年老いた者たちは請け合う。自らもそれを生きてきたのだから。

私の両親は、村の下の地区の、一番北の端に家を構えていた。わが家はメズズ一族の出で、ムッサという家族である。メンラッドというのは通称だ。

伯父と父は、それぞれルニスとラムダンという名だが、地元では、《シャバンヌの息子たち》と呼び慣わされていた。なぜだか、私はよくは知らない。まだ、とても幼いときに父親を亡くしてしまって、父は祖父のことをまったく覚えていない。だから、祖母の名であるタサディットの息子たちと呼ばれるのが本当のところだ。だがおそらく、彼らの伯父たちや従兄たちはシャバンヌの名をずっと残しておくほうを望んだのだろう。それは、父を亡くした子どもたちが誰の血を引いているのか、二人が事実としても法の上でも、その、もはやこの世にいない者の後を継ぐ者であるということ、人々に対してははっきりと示しておくためだった。始めはこういう考え方でよかった。しかし、子どもはそのうちに一人前の男になった。こうして二人一緒に考えることは、彼らを多少ともおとしめるようなことになった。みな、いつも、二人をひとりの人間のようにしか話さなかったから。にもかかわらず、二人は全然似ていなかった。

伯父のルニスは、細面にいたずらっぽい大きな目をして、色が白かった。身仕舞いには細心で、きちんとしていた。白いガンドウラを着て、ターバンを丁寧に巻き付けた伯父の姿は思い浮かぶが、金色の鋳を打った帯で胴を締めつつるはしを手にした姿は、ほとんど思い出せない。そういうことも時折はあった。だが、彼は農具の取り扱いがぎごちなく、仕事に気が進まないようで、おごなりにすませてしまう。確かに、伯父は広場にいるときのほうが気分がよいようだった。みな、彼が率直で活力にあふれた男だと知っていた。そのことばは生き生きとして、その遺恨の情は藁の火だった。村一番の粋な若者のひとりだったのである。それが理由で、彼は母親の心のうちで、特別な場所を占めていた。そもそも、長男だった。祖母が好んで口にしたことばに、伯父が小さなラムダンを育てる手助けをしてくれた、というのがあった。事實は、この気の毒な婦人が長男を当てにできたことなど一度もなかった。祖母はルニスに弱かった。祖母は彼に見目のよさを与えた。それは彼女の何よりの贈り物だった。長男は、彼女自身の分身のようだった。笑顔が同じ、卵形の顔の輪郭、声の響きもそっくりだった。

いっぽう、ラムダンはといえば、シャバンヌにそっくりだった。偶然には彼の手の届くところに、容易に父の姿を思い浮かべられる方法を与えようとしたのだろう。ラムダンは髪が黒く、兄よりもずんぐりがっしりしていた。節が太くてしっかりとした筋肉質のカビリア農民の典型だった。顔はシャバンヌそのものだと、繰り返し祖母が言っていたことだ。

角張った額、反り返った小さな鼻、唇は薄く、頬骨は張っていた。目も父親そっくりで、瞼のチックのせいで、こちらを見るときに左目がふさがったようになるところまで似ていた。祖母は、若い頃、このあまり感じのよくない癖と、外股でのっしのっしと行く熊のような歩き方を何とかして止めさせようとしたが無駄だった。この歩き方のせいで、一步踏み出すごとに、敵に立ち向かう人か、重い荷物を背負っている人のように見えた。祖母はラムダンを、さして敏感でもなく賢くもないとずっと思いこんでいたフシがある。兄のようにはおしゃべりでもなかったし、無礼なほどに内気で閉じこもりがちであり、態度物腰と同様、心持ちも繊細ではなかった。どこをとっても、農民の仕事に向いているようだった。彼は平然として、自分の役割を引き受けた。その太い指は、彼の笛の素敵な演奏の邪魔にはならなかった。しかし、それを知っていたのは、同じ年頃の者たちだけだった。彼は母と兄が大好きだったが、あたかもそれが弱みでもあるかのように、心の奥底にその愛情を隠していた。独特の流儀で人や物を比喻を使ってからかったが、意地の悪いところはまったくなかった。実際、彼は何食わぬ顔で面白い事を言った。そこには哲学と詩の両方があった。彼のことが、いまだに村で言われることも多い。多くの人が、兄と同じく弟を好いた。純朴で誠実だったからだ。

私が生まれたとき、伯父は五十歳に近く、父は四十代だった。ふたりとも妻も子もいた。伯父の連れ合いのヘリマは、上の地区の出だった。背が高く、愛想も飾り気もなく、二つの目はきらきらと輝いて、声は野太かった。手が早くて、挙措は猫を思わせた。彼女は結婚するとすぐに、老母タサディットにとって厄介な存在になり、彼女を怖がらせるようになった。伯父は何かと言えば彼女を殴ったが、それを怖がることはなかった。私の父は、彼女にとって永遠の敵だった。というのも、父は彼女の悪巧みをことごとく砕いてしまったから。私たち一家はみんな、ヘリマが祖母の憎しみを一身に受けることになってしまったので、私たちのほうでは、その辛さを引き受けているのだとわかっていた。それに、嫁を選んだのは祖母だった。ヘリマの父親は祖父の昔ながらの友人で、兵站警護の仕事でマダガスカル遠征に従事したことがあった。それで、金を稼いで帰ってきたのだ。祖母は、ヘリマの父親が大金を持っていて、わが子らにも援助があるものと考えた。祖母は、自分の誤りを決して認めなかった。老兵は、己の娘の行く末には恬淡としていて、緑色の絹のリボンがついた金色のメダルのほかは何も残さずに早死にしてしまった。そのメダルは、ずっと後になってから、私の手に渡ることになる。

私の母はムッサ一族の出で、だからメンラッドの従姉妹のひとりだった。母を嫁にしたのも祖母の計算からだった。私の母方の祖父のアフメドは、生前、三人の娘に小さな家と、畑を一枚遺していた。カディムスリム。裁判官で
あり公証人でもあるに作成させた書類があった。この書類はいまだにあって、多少黒ずんではいるが傷んではおらず、四つに折って反故で包み、コルクで栓をした陶器の壺の中に隠してある。これは、《決定的で確実な》贈与だった。母はそれをよく覚えている。しかし、証書が来たとき、村長はこれを相続人の娘たちに訳して読んで聞かせて、彼女らには用益権しかないと言った。おそらく、カディには、相続させる者の意図がよくわかっていなかった。カディは兄弟だけを記載したが、もはやさほど重大事ではなかった。というのは、私の母も、その妹たちも、伯父たちを不安にさせるような人たちではなく、彼らは、他の田畑はすでに分配済みであった。姉妹が三人とも亡くなれば、彼らは残った財産をさっさと分けてしまうだろう。

祖父のアフメドはやもめだった。彼は、自分の娘たちには後見も何もないことを知らなかったわけではない。それでも、己の持ち物が娘たちを貧乏から守ってやる唯一の方法だ というのに、生前にそれを分けてやろうともせず、財産は女の手へ渡るといとも容易に食い尽くされると、そればかり怖れていた。己が、ムッサー族とその子孫に、不名誉として記憶されることだけを嫌がった。彼は己の土地の上に、娘婿であろうと孫であろうと、他人が腰を落ち着けるのを嫌った。だからこそだ！ もし、同じムッサー族の従兄弟の息子が娘たちの一人と結婚していたら、彼は生きていううちに何もかも解決しておいたにちがいない。彼は我慢ならなかったのだ。おそらく、シャバンヌの息子たちを除いては。だが、結婚相手としては何とも貧弱だった！ アフメドは、彼らについてはそれが不足だと何度も思った。しかし、晩年には多少分別が起きて、娘たちに土地を遺し、大家族の絆から切り離されないようにした。

「わしはもうじき死ぬが、誰もわしが自分の財産を駄目にしたとは思えない。名誉か不名誉か、選ぶのは残った男たちだ」。

もちろん、名誉が選ばれた！ アイト・ムッサー^{ムッサーの出身、}(ムッサー族の)の者たちは、アフメドの娘らが財産を駄目にするのを望まなかった。まずは、老人の悪意は明白だった。というのは、彼は、家と畑を《決定的に》遺贈してしまおうとしたのだから。だが、カディは話の分かる人だった。運のいいことに！ 他のことについては、三十六もの道を行って目的を達する必要はなかった。彼らは、娘たちに言った。

「みっともないことにならないように、自分たちで何とかやっていけ。お前たちが少しでもろくでもないことをすれば、家の名が汚されることになる。すぐに厳しい報いがあるぞ。お前たちのことは、わしらの裁量で決める。道に曲がったことをするな。その他のことは自分たちでしろ」

近親の相続人の誰かひとりが、親を亡くした娘たちを引き取り、嫁がせ、監督するのが習わしだった。アイト・ムッサーの一族は人数が多すぎたし、互に嫉妬心が強くて、習わし通りにひとりを決めることができなかった。全員が遺産からいくらかをほしがり、遺された娘たちの世話にはみなで当たることにした。世話をしたというのは、つまり不運な娘たちを、近いところで監視するということであつた。

姉妹はこうして、監視されていると感じ、ときには押さえつけられているようにも思ったが、それでかえって叔父たちや従兄弟に感謝もしていた。それというのも、いっぽうでは保護されているとも感じたからだ。無関心や、軽蔑を伴うことが常である遺棄よりは、そのほうがよかった。しっかりとした考えを持った、生真面目な娘たちだったからだ。共同体から引き離されず家名を守るためならば、叔父たちに騙されようが、全財産を取り上げられようが、それを受け入れるだろう。

叔母たちのうち、私の祖母であるタサディットが遺児たちをいちばん気にかけて、よく優しいことばをかけた、相談にのったりしてやっていた。娘たちはそのうち、何でも彼女に相談するのが習いになった。

長姉のファトゥマは二十歳前だった。ラムダンはまだ結婚していなかった。祖母は、ふたりを結びつけようと考えた。ファトゥマは醜女ではなかった。小柄で青白く、痩せていた。やや細長すぎる顔で頬が高かったが、やわらかい憂愁をたたえた目は美しかった。粗野な感じや、その年齢の娘ならば誰もがもつ傲岸な様子は少しもなかった。彼女は、純粹

で素朴だった。料理はクスクスしかできなかった。祖母は、彼女にラムダンを受け入れさせるのにたいそう苦労したらしい。ファトゥマは、ラムダンが熊のようなごつい外見の下に、仕事への力と熱意、そして分別を秘めていることを確信できて初めて、しぶしぶながら結婚を承諾した。それに、ふたりの妹たちの後見人になってくれると思ってのことだった。結婚式は、この世で最も簡素なものだった。ルニスとラムダンのふたりの兄弟が、遺児らを保護下に置くことになって、従兄弟たちはみな、それを喜んだ。

祖母が母のことで不満を言ったことは一度もなかった、と私は思う。ファトゥマは、祖母の陰で生き、家族のうちでのヘリマの敵だった。老タサディットは、ちょっとねじれた状態にいた。ラムダンよりはルニスを愛していたが、ヘリマよりはファトゥマのほうを好んでいた。おそらくだからこそ、二つの所帯は長い間一緒に生活してこられたし、祖母は何とか公平に一家を営めたのだ。

よく知られていることだが、この人たちは、少なくとも家庭生活においてはきちんとしている。私たちはみな、浪費を嫌うことでは一致している。だから、どの家族も責任者に従う。責任者は、食料品を蓄え、その裁量で割り当てを決め、貯金の使い方や、売ったり買ったりも決定する。ときには家族の者に、ほかの者より余計に取るという非難をされることもあるが、それはいつでも嫉み心からだ。男でも女でも家の主人の徳は特別なものと考えられてきた。いくつもの諺が疑問の余地なくその力を認めている。

メンラッド家では、生計を取り仕切っているのは祖母だった。祖母だけが食糧の入っている瓶を開け閉めできた。その特別なやり方でもっておのおのの瓶を扱い、蓋を取ったり戻したりする方法は秘密だった。ごくわずかな気配や物音にも、彼女は敏感だった。嫁たちはよく心得ていた。屋根裏の納戸は祖母の領分で、行けるのは彼女だけだった。そこへ這い上っていったら、家族に分け与える無花果をとったり、篩に大麦を一杯にしたり、保存してある油やベーコンを持ってきたりした。祖母には自分の秤、個人的な算数があり、確かな記憶力をもっていた。その注意力は過たなかった。

食事の用意は嫁たちがした。しかし、クスクスが出来上がると、それぞれの皿に取り分けるのは祖母だった。肉だけは長男に分けさせた。男の仕事だった。わが家で肉を買うのは祭りのときだけだったから、私たち家族を養っていたのは、結局、祖母で、ひな鳥たちに一口ずつ餌を与える母鶏のようなものだった。

確かに、それはなかなかの資質が必要な仕事である。人も知るように、私たちカビリア人は豊かさにどっぷりと浸かっているわけではないのだから。しかしながら、その任には常に家族の最長老か、いちばん尊敬されている者が当たっているので、みな、自分以外の家族のことを心配しなくてすむ。その人がいつも、みなによいようにと気を配って自分のつとめを果たしているものと信頼しているのである。

私は、祝福の年、1912年に生まれた。ティブラリ（二月）からの、悪名高き貸しの日
の二日前だった。昔、ティブラリはジュルジュラ山脈の峰の上でひとりの老女を殺して石に
変えてしまった。それでいまでも、カビアの八十を超えた老女たちの恐怖的であり続
けている。

私は家族のうちで、無事に生まれた初めての男の子だったので、祖母は断固として、私
をフルル（カビア語で *effe* エフェ、隠すという意味）と名づけることに決めた。その心
は、私が自分の二本の足でわが家の敷居をまたぐことができるまでは、善意の目であれ悪
意の目であれ、誰ひとり私を見ることはできないというのである。

つけ加えておくと、この名はわれわれの間ではいまだかつてないものだったが、私は穏
やかで愛嬌のある子だったので、同年代の子どもたちの間でからかわれたことはなかった。
驚くべきことかもしれない。できる限り昔に記憶をさかのぼってみても、私のかたわらに
は常に温かく飾らない親愛の情がある。私の記憶ににわかになき起こった、いちばん古い
情景は、わが家の狭い中庭で、ひっくり返した瓶の上に座っている小さな男の子である。
従姉のシャブハが前に立っていて、その子に食べさせたい美味しいものを、その小さな手
指で数え上げている。私の様子が目に浮かぶ。フードのついた小さな白いガンドウラを着
て、歩くのはおぼつかないがおしゃべりは達者だ。おそらく三歳ぐらいの頃だろう。

父も叔父も、そのあたりでは貧しいほうだった。だが、ふたりとも女の子しかなかった
ので、私は家では、兄弟に囲まれている仲間たちよりはずっと大切にされた。

実際、叔父の連れ合いのヘリマ、いまでも私が伯母と呼ぶことのできないその人は、私
を嫌がっていた。いっぽう、私の母、姉妹たち、私の本当の叔母である、母方の叔母たち
は私を溺愛した。父は私の意向には常に折れたし、祖母は、村でも賢女だったが、ヘリマ
が気に入らないのを承知の上で、人からもらった美味しい物は何でも私にはたくさん食べ
させた。伯父は、広場における男の価値というものを知っていた。伯父にとって、私はメン
ラッド家の未来であり、自分の息子のように私を愛した。そんなわけで、子どもひとり
をしっかりと育て上げるにはありあまるほどの愛情が注がれた。

しかし、家族一丸の努力は期待した結末には行き着かないことを言っておかなくてはな
るまい。私は家の唯一の男の子で、家族の力と勇気の代表者たるべく運命づけられていた。
私のようにひ弱な男の端くれには何とも重たい運命！ だった。しかし、誰ひとりとし
て、私が別の資質をもつ可能性があることや、家族の願いに背くかもしれないとは思
いもしなかった。

姉妹や、ときには従姉妹たちをたたいても、私は叱られなかった。拳骨をくравせる術はしっかり教え込まねばならなかった！ 私が家族の大人たちに対して乱暴にふるまっても、返ってくるのは満足の笑いだけだった。盗ったり、嘘をついたり、横暴にふるまってもよかった。それが、私を大胆な少年にする唯一の方法だった。両親が厳しくすると決まると、女の子のように、恐がりな弱虫な、おとなしい軟弱児をつくることになる、誰もが知っていた。私の先祖であるシャバンヌの息子たちには、この原則は欠けてはならなかった。

五歳のときには、自分が大切にされていることを悟った私は、自分の権利を濫用した。だから、下のほうの、私より二歳上の姉には暴君のようにふるまった。この姉を私はティティと呼んでいた。その名は、ずっと姉の呼び名であり続けている。ティティは私より小さくて、私には自分に似た妹のように思っていた。スカーフと長いお下げ髪のおかげで女の子だとわかるということだ。生まれつき気立てがよくて、そのせいで私の拳骨をくらったり、私がバカにしてからかっても、その年齢の子どもには考えられないほどの寛大さでそれを受け止めていた。それなのに、家族は常に、彼女が従順にふるまうことは務めであり、私の振る舞いは当然であると彼女に信じ込ませようとした。ティティが不満を言うと、その度に決まった応えが返ってきた。「お前の弟でしょ。弟がいるなんて、お前は何て運がいいんだろう！ 神様がお前をお守り下さいますように。ほら、泣かないで。行って弟にキスしなさい」。

こういうやり方のおかげで、ティティは「神様がお前のためにあの子をお守り下さいますように」という決まり文句と弟の名前が一体であると思いきや、彼女が泣きながら母に、そう言うのを聞くと、ほろりとさせられたものだ。

「私の弟が、神様が私のために弟をお守り下さいますように、私の分のお肉を食べちゃった。私の弟が、神様が私のために弟をお守り下さいますように、私のスカーフを破いた」今では家族の母となった小さな姉さん、あなたの願いは聞き入れられた。神はあなたのために悪い弟をお守りくださったよ。大きい姉のバヤに対しては、私の暴君ぶりは別なやり方で発揮された。バヤは母の助けとなっていた。バヤは母の側に立って、必要なときには母を守ることができた。バヤは賢くても勇気があり、粘り強かった。実力で己の存在を認めさせ、尊敬され、怖がられてもいた。とりわけ、私のお守りを引き受けて、私の遊ばせ役でもあった。私は、私はそう簡単に思い通りにはできなかった。私は、泣きさえすれば欲しいものを手に入れられると小さいうちから分かっていた。涙と悲鳴は、私の絶対の武器だった。

この戦法が家では素晴らしい成果を得られるのに、外では、私に、大きな失望と沢山の厄介事の原因となった。まず、従姉たちで分かった。私がいくら泣いても駄目だった。誰もが私を喜ばせようとするわけではないことを知った。彼女らの母は、私を瑕疵のように嫌っていて、娘たちに対して、私に関する振る舞い方にあからさまな一線を引いて見せていた。

「あんたたちの弟じゃない。あんたたちに弟はいないよ！」。そう言う彼女の声の調子は、間違いなく、私を敵だと考えていることを示していた。いまでも、ヘリマの声が耳に聞こえる。あの意地の悪い視線も忘れられない。小さいうちから、私はその敵意がわかっていた。

私と同じ歳と、少し大きい子の二人が近所において、二人とも私より活発な子だったが、その子らも子どもなりに私の目を覚まさせてくれた。

そうして、私は近所の男や女たちに対して、私ができる態度で接するようになった。私は穏やかに、にこやかに、辛抱強くなった。大胆といえお世辞を言う術も覚えたし、大して嫌とも思わず、人が求めるものを貸したりやったりした。そして、両親は、私を隣近所の獅子にし、いずれは村の獅子にしてやろうという夢が、少しずつ消えて行くのを悟った。

私はあまりに傷つきやすく、その上、家のあった路地の外では大変な恐がりだった。幼なじみのアクリは、いまでも通りの端に据えてあった真っ白い石英の塊を覚えている。ひとたびその石を過ぎるや、私は自動的に彼の命令に従ったものだ。アクリの友達是我的の友達だった。彼の敵を私は避けた。私は、哀れな第二のアクリだった。彼はできるときには私を守った。それだけでなく、忠実に親分の責任を引き受けて拳骨に身を晒し、自分がより強い奴の相手をしなくてはならないとき以外には、私を敵に立ち向かわせるままにするようなことはなかった。家に帰りしな、私が自分の階級章を取り戻すのは、運命の標石のころだった。そこで、アクリは私のあらゆる気まぐれに従わざるをえなくなる。神は、それが度を越えたものであると知っていた。

遊び道具を作るときには、彼は私の助言を受けなくてはならなかったし、作業を終えるには私の許可が必要だった。私が乱暴な動作で、せっかく彼が作ったものを壊すようなことも頻繁にあったが、そんなときには、アクリは作業のせいで皮のむけた指をしゃぶり、賞賛に値する広い心で、私の決定を受け入れるのだった。

想像力と審美眼では私のほうが彼の上をいっていて、アクリは混乱していた。いっぽう、私はといえば、外では彼が、私よりも尊敬されていると認めざるをえなかった。私たちは、完璧に補い合っていた。私たちは一緒に世間へと出て行った。まず、近所の広場、次によその広場、そして、学校へと。

何時、どんな状況が、私たちの友情を生んだのだろうか？ 私には説明できそうもない。私の記憶のなかでは、五歳か六歳の小さなフルルが、いつもアクリに付き添われている。私たちは同じ通りに住んでいた。おそらく、私たちはそこで知り合った。それにしても、私たち相互の愛着心を説明するものは何もない。子どもはほかにもいたが、私たちのような二人組はなかった。

アクリは女の子のようにきれいな顔をしていて、悪魔のように騒がしかった。私のように、静かで穏やかなところは一切持ち合わせていなかった。好んで笑い、からかい、叩いた。大人を怖れたりはずせ、大人たちは、彼のいたずらを、その美しい目と、色白の肌と、整った繊細な顔立ちに免じて許してやるのだった。私はといえば、彼の分まで含めて二倍臆病だった。アクリは、大胆さにおいて二倍だったと私は思っている。拳も足も大きくて、闘いそれから逃げるにはそうでなくてはならないと私に力説していた。私はアクリを賞賛し、アクリを愛した。私に欠けていたものを全部もっていたから。彼が私を好いてくれたのも、同じ理由からだったと思う。

私たち二人が、界隈を開拓して子どもたち全員と知り合うのに、どのくらい時間が必要だったか、私は思い出せない。どんな場合にも、私たちはこの最初の試練をうまく通り抜けた。誰もが手を出しやすい、苦勞を背負い込む子がいた。からかいやすい子もいた。あ

だ名で呼ぶだけで、群れから離れてどこかに行ってしまうような子だ。アクリと私には、こういう嫌なことは一度もなかった。それどころか、私たちの尊敬すべき点を認められる結果になった。彼はその大胆さを、私は審美眼と才気煥発ぶりを。

間もなく、私はひとりで出かけることを怖がらなくなった。広場にも行き、ことに、腕白どもがシケモクを探しに頻繁に行っていたカフェの近くまでも出張った。従姉のシャブハと一緒に遊ぼうと誘われても、家から遠いところにもっと面白いことあるとか、もっと男らしい遊びがあると言って、私はにべもなく断った。彼女は、首を垂れて気持ちを押し殺し、それ以上は言わなかった。

そうやってシャブハをないがしろにしていた日々にも、ふとした偶然に誰か私を脅す者があって、私を挑発したり、広場に行かせまいと邪魔したりすることがあると、私は思いがけず早く家に帰った。そんなときには、私は控えめにシャブハや、ほかの女の子たちと遊ぶことを受け入れた。私は、自分が突然帰ってきたわけを言わないように用心した。私は自分の臆病ぶりを忘れようとして、さっき受けたばかりの拳骨のことはもう考えないことにした。

相手が私と同じ年の子だったときには、親に向かって助けを求めることはなかった。対決するか、怖いと思ったら逃げ出した。私は、逃げ出したことや負けたことは、慎重に隠しておき、勝ったことしか話さなかった。母を除いては、父も伯父も、家族のほかの者もみな、私を助けに来ることに同意はしなかっただろう。みな、私が逃げ帰ってきたのを知ったら、驚いて嫌な顔をしたことだろうし、それから、相手に立ち向かうことを私に強要したことだろう。そういうことがすでに、特に伯父にはあった。ときならぬ喧嘩で私が勝利すると、家族みなに褒められた。負けたときには嘲りを受けた。

ああ何と！　こういうときには、甘やかされるどころではなかった。私は、優しく憂いを帯びた母の顔を除いては、みな顔に浮かぶ軽蔑の情を読み取ったものだった。母はあらゆるものにまして私を愛していただけで、ほかに何一つ求めるものはなかった。

私は、長い間、伯父の峻厳な論理に対して恐怖心を持っていた。彼は強硬だった。その理屈によれば、私の相手が私より小さいか、同い年か、大きいかによって、三つのケースが考えられるという。

より小さい相手との間にもめ事が起こった場合には、殴ったらすぐ、逃げるか隠れることを見込んで、私は相手にお仕置きをしてもよかった。文句が来たら、罰するためと言って私を捜すが、見つけないようにし、相手の子を慰め、親には私を叱っておくと約束した。

同い年の子が相手の場合は、私には、相手を怖れる理由はひとつもなかった。伯父は苛立ちとともに、私のほうに歩があることをはっきりさせようとした。私はいいものを食べている。だからより力があるというのだ。それか、「そいつの父親は戦ったことがない」——卑怯者の息子がメンラッドを後ずさりさせられるはずがなかった。そうでなければ、「やもめ女の息子」か。——意気地がなくて当たり前だ。または、ライバルの家族の子どもか。敵の前で引くのは一切認められなかった。

私は、この反駁を許さない強烈な理屈を胸に刻んでいて、勇気を奮い起こそうとつとめたものだ。

反対に、伯父は、私より年長の子どもが私を殴ったりからかったりするのを許さなかった。このことでは、私は伯父に対してささやかな復讐を許されているようなものだった。

この点について、私は自分の身に起こったことをこと細かに伯父に報告した。大きい子が 私のビー玉を盗んだだって？ 私は泣きじゃくりながら家に帰り、ルニスにそう言いつける。彼は立ち上がり、そいつを探しに行き、大声を上げてわめき散らす。ときには、ビンタをくれることもあった。私は伯父の後ろにくっついたまま、ずっと泣いている。勇気ある伯父！ 彼は私よりも子どもだった。私は、下らないことで、どれほど彼を走らせたことだろう！ 伯父が私のすることを見逃したのは、おそらく、夜の大きいなる休息のなかで だっただろう。

伯父が、私に男らしさを教育しようとしたのは間違いであったことははっきりしている。しかし、彼はそのことに、たいそうな情熱と強い思いこみがあった。彼がほどこす授業から得るものは何もなかった。伯父が身をもって示した事のひとつ、とりわけドラマティックなそれは、私の見方を肯定した。私は幼いうちに、穏やかであるとは大切なことであると知った。

無花果の季節の、ある朝だった。農民たちは一日の始まりに、牛に食べさせるトネリコの葉を籠いっぱいに取り終えたところで、音楽家たちの広場の幅の広い敷石の上で一服していた。私はそこにいる男たち全員を知っていた。まさにそこ、日よけのある長椅子で、ブサド・ムナメルが野生のオリーブの枝で籠を編んでいる最中だ。私は彼の隣に座る。側にいたい。私は、ブサドが子どもも好きなのを知っている。黒ずんだその顔は皺だらけで、目がぎょろぎょろ光っていたが、怖くはない。暑いので、彼は頭に何もかぶっていない。短く刈った髪の下に見えるぼこぼこした頭蓋は西瓜を思わせる。彼のガンドウラの胸元のあきから、胸毛が覗いて見える。シェシュア帽（^{円帽。周りに布を巻きつ}けてターバンにする。）をひっくり返して、中に角でできた嗅ぎたばこ入れが置いてある。黄褐色の大理石のタイルの上一面に、オリーブの若枝が広げられている。彼は籠の編み始めの所を、日焼けした脚の間にはさんでいるが、これが自在に調節がきく万力の役割をしている。大きさを計算しながら、同時に編んでいく。

私は、注意深く編んでいくブサドをじっと見ていた。だが、私は近寄りすぎた。枝が絡み、私の顔をかすめた。

「ラムダンのせがれの倅よ、下がってくれ！ 椅子は広いんだから」

「いやだ、僕もできるようにになりたい」

「友達と遊んでこい。顔や目に蠅が寄ってくるぞ」

「広場には僕の場所もあるぞ、みんな同じだ」

「よし！ だけど、枝がさわらないようにしてくれよ」 村の男の子たちはみな、朝早くから広場に来て、それぞれの場所に陣取っている。男の子なら、どんな小さい子でも等分の権利がある。われら子どもは、大人たちにそのことを忘れないよう主張することにためらいはない。遠慮会釈なしだ。だから、ブサドは私にそれ以上は言わず、黙って作業を続けた。

野生のオリーブの枝はほぼ順調に編み上げられていった。たまに折れてしまうことがあった。そのときには、ブサドは先のとがった大きなナイフで、折れた端の部分を切り落と

した。どうしてそうなったのか、私にはわからない。突然、臉に生暖かい感触があった。その直後、スズメバチに刺されたようなひどい痛みを感じた。ブサドが、ナイフの刃を私の額に当ててしまったのだった。私はあわてて傷に手をやった。離れた手は血だらけになっていた。私が泣き出したのはその時だ。そこにいた男たちがみな立ち上がり、私のほうへやってきた。老人は、何かに憑かれたように暴れる私を手で捕まえて、たばこ入れの底を探って掴んだものを傷に塗りつけていた。別の老人が素早くガンドウラを裂き、そのボロボロ布をターバンのように巻き付けてくれた。血は絶え間なく流れ続け、私は叫び続けた。ブサドは青ざめていた。彼のナイフは、ぐしゃぐしゃになった枝と、作りかけの籠の間に横たわっていた。彼は心配に胸を詰まらせながら、傷はひどいかと尋ねた。

「あんた、この子の目をえぐるころだったよ！」

「だから、言ったじゃないか。あんまり近くに来るから。神が望まれたんだ。どうにもならん」

「気をつけねばならんかったんじゃ。なんと運の悪い。しばらくここに残っておれ。親が何と言うか。メンラッド、家に帰りなさい、さあ！母さんに言って、布きれを燃やした灰を傷にぬってもらうんじゃ」

私は、血を流しながら家に向かった。私は危うく殺されかけた、と思った。というのは、そこにいあわせた者たちも、不運なブサドが万の神に誓って、わざと私に怪我をさせたわけではないし、私を自分の子のように大切に思っている、と言っても、信じようとしなかったからだ。ブサドが強く言えば言うほど、そこに居合わせた男たちは私の災難を気の毒がって首を振った。なるほど、彼らが誠実な人士であったことを疑うことはできなかったし、また、事をそれなりに荒立てることになった、と非難することもできまい。

家の門のところで私が最初に遭遇した人物は、こういうときに、神がいちばん遠ざけておこうとする、まさにその人だった。それは、私の泣き声に気がついた伯父だった。すぐ後ろに母がいた。

伯父は血だらけになった私の顔を、血が滲んで黒ずんだターバンを見た。

「誰がやった？」伯父がきく。母が思いっきり悲嘆の金切り声を上げる。「誰かが私の息子を殺そうとした！」私は何とか答えようとした。伯父は逆上していた。

「早く答えろ！誰だ、どういうわけだ？」

「ブサド・ヌナメールだよ」

「わざとか？」

「そうだよ、僕を殺そうとしたんだ」それで十分だった。伯父は竜巻のように走り出す。

一瞬で、彼はある場面を想像したの

だ。あのブサドの奴が、敵の親分が、ナイフを持って、無防備な甥っ子に襲いかかる。あいつは、この子を殺そうとしている。メンラッドの末裔を……。伯父は走る、棍棒で武装して広場へとすっ飛んでいく。憎しみの感情が、発作のように、胸から頭へと上って行く。名誉を回復しに行くのだ。みなに、家の誇りを見せつけてやるのだ。

母も、急いで家族の者たちを引き連れ、その後が続く。もつれるように走っていく。広場に着く間もなく、こちらに怒号が届いてくる。私はもはや怪我のことを忘れていた。私は木の葉のようにふるえる。広場は人でひしめいている。まるで、人が踏みつけたアリの

菓の入り口のような。私は、乱闘のなかに、ひとり取り残されている。母さんはどこ？ 伯父さんはどこ？ 広場の出口のひとつに、男たちの群れがもみ合っているのがわかる。ブサドの従兄弟が投げた石が、鈍い音を立てて落ちるのがはっきりと見える。それから、あたりのどよめきを圧する大きな叫び声が聞こえる。わが家の従兄弟のひとりが、棍棒を持ったままその群れに飛び込み、誰かを助け起こす。伯父だ。

十メートルほど離れたところでは、袋小路で、女たちの騒々しくグロテスクな口喧嘩が 繰り広げられている。それもまた、やかましく多色の群れで、なかでも、結った髪の黒と、腰布フタ。腰に巻く布、腰巻きの赤が際立っている。

広場は、野次馬と喧嘩する者とで、どんどん混み合っていく。野次馬もそれぞれみな、無関係な者たちではない。昔の敵対心がまた目を覚まし、古い話がきっかけ一つで蒸し返される。だが、そら、村長が来た。彼は、石版の上に上がる。隣にマラブーイスラム聖者・修行者がいて、黄色い絹の布を、よく見えるようにひらひらと広げる。

「これ以上、一言でも発する者、少しでも身動きする者には呪いがあるぞ！」マラブーが、大きなよく響く声で言う。

男たちは互いに身を離す。女たちは、最後まで陰険な小突き合いを続ける。私の胸は破れんばかりに激しく打ち、喉も唇も乾いたままだ。私は泣くことも逃げることもできない。母がいる。風に髪をなびかせてスカーフを探している。母の側に寄る。母は私に気がつく と、もう探すのをやめ、私の小さな手を強く握りしめてその場を後にする。母は耳を怪我 している。祖母は、抜けた髪をひとつかみ手にして振りかざす。バヤは、トロフィー代わりに、ブサドの妻のアイニの腰布を取り上げた。興奮のおさまらない二人は、まだ闘いた そうだ。女たちは、もう敵から遠ざかっているのに罵詈雑言のありったけを吐き出して、私の頭をがんがんさせる。おそらくあちらも同じに罵っていることだろう。

私たちが家に着くか着かないうちに、近所の人たちが、変わり果てた姿の伯父を運んで くる。伯父は、頭に大きな石の一撃を受け、脇腹をナイフで刺された。従兄弟のカシも、何度も棒で殴られた。敵方とはいえば、あちらもそれ相応の犠牲をはらった。ブサドは、伯父に頭を殴られて気を失い、家に担ぎ込まれた。彼の兄弟は、歯を半分失った。ほかの 者たちも相当な痛手を負った。殴られた目は腫れ上がり、顔を傷つけられたり、痣をつく ったりした。

一族のひとりがこの貸借対照表を作っている間に、伯父は敷物の上に横たえられる。彼は全身に、闘いの痕跡を負っている。長いひっかけ傷からは血の雫しずくが伝い落ちている。ガンドウラは破れ、ターバンは肩に落ちている。母は素焼き壺に水をいっぱい容れてきて、怪我した者たちをぬぐってやる。誰かが言う。

「何もするな！ そのままにして、どんな案配かフランス人が見られるようにしておかなくては」

「そのまましておいてくれ」伯父がうなる。

カシが言う。「あんたをロバに乗せるよ、すぐにカイド北アフリカで警察、司法、徴税などをつかさどったムスリムの地方官に会いに行こう」

「そうだ。向こうもそうするにちがいない。先手が肝心だ」別の者が言う。各々が考えを述べるが、物言いには迷いとためらいが滲んでいる。みな、この事がもたらすであろう結果を懸念している。提案された方法は、どれも満足のいくものではない。

アイト・ムッサをアイト・アメールから守る方策を立てるために、夕方また全員が集まる ことを約束する。そうして、全員が引き取ったが、従弟のラバーだけが残る。がっしりと した若者で、伯父の合図で屋根裏の納戸の近くに座る。

家族のうちでは、この不幸の最初の原因が私であることは忘れられているようだった。 そのとき、伯母のヘリマと、その娘が、容赦なく私にそのことを思い出させた。ヘリマは むっとしていた。彼女は喧嘩の場面では、誰よりもやる気がなかった。執拗に夫の目を避 けては、ときおり怒りに満ちた視線を私に向かって投げた。従姉のジュヘルは私の近くを 通りかかったときに、私を思いきりつねった。

「伯父さんを見てご覧！ いい格好だこと。みんなあんたのせいだ」 とても痛かった が、私は何も言わなかった。私は、喉元で、泣き声を押し殺した。絶望 にかられ、私は母を見つめる。母は全てを見ていた。母は力無く目を伏せる。私を見捨てる。突然、伯父が起きあがって座る。彼も、全てを見ていた。

「あばずれどもを連れて引っ込め」彼は、妻に言う。

ヘリマはぶつくさ言いながら出て行く。

「おいで、フルル。痛かったろう？」 伯父は私の手を取り、側に引き寄せる。もう我慢できない。私の目に涙があふれ、私の

小さな胸は揺さぶられ、私は泣く、泣いて泣いて止まらない。 母が私を背負って、私たちも出て行く。伯父と一緒に後に残ったのは、祖母とラバーだ

けだ。祖母が自分で作った黒い練り粉を伯父の傷に貼り付ける間に、伯父はラバーにいく つか秘密の命令をする。私の父は留守をしている。朝早く出て、ロバに葡萄を運ばせてテ イジ・ウズに向かったのだ。夜にならないと帰ってこない。喧嘩騒ぎのことは何も知らな い。アイト・アメールの者たちはその事を知っている。だから、父を待ち伏せする可能性 がある。というのは、その朝は、こちらのほうが優勢だったのだから。わが一族全員が優 勢であったと自負していた。その事では全員一致だった。ただ、敵方だけは考えが違うか もしれない。あちらでは、己が勝利者だとそろって主張するかもしれなかった。それに気 づいていないのはわれわれだけかもしれない。だから、伯父はラバーを引き留めた。さて それから、彼に、武器を携行して行 って父と合流すること、近親でしっかりした者何人か に注意を促して、村の外の、敵が待ち伏 せをしそうな場所に待機させるようにすることを 託す。

私の父が何事もなく帰宅したので、家族は、考えたことが杞憂に終わったことを知った が、その喜びにはいささかいまましい思いも混じっていた。いや、よかった！ アイト・アメールの者たちは、心のうちでこっそり、わが方がメンラッドを負かしたと考えて、 家に引きこもっていたのだろう。

血に染まったターバンや、かさぶたを目にして、父は怒り狂った。朝の騒ぎの場にいた ならば、ああもこうもしてやったのと言いだめた。広場の方角に向けて、棍棒を振りか ざし、拳を突き出し、古いピストルを振り回した。いまにも外に飛び出さんばかりだった が、祖母や、ヘリマとその娘たちが、ガンドゥラを握りしめ、肩や腕をつかんで放さな かった。母は、必死に足にしがみついた。伯父は動じた風もなくそれを眺めていた。私は、 父の野太い声が心強かった。これほど大きな憤りの陰に守られているのだ。隣近所の人た ちがやってきて、どうにか父をなだめた。そのうちのひとりが村長からの使いで、村長が

訪問すると言う。村のお偉方と、マラブー二人も一緒だ。祖母の命令一下、女たちはすぐさま大量のクスクスを作り始めた。祖母は傲慢にも思わ

れる様子で、町に葡萄を運んだカゴから、大きな数珠のように繋いだ肉を取り出した。父が買ってきたものだった。「あのけちくさい卑怯者どもが、うちみたいにこんないい肉をお偉方にごちそうできるかどうか、見物さ」。敵方のことを言っているのだった。

「せいぜい、ひよこ豆でしょうよ」と、母が言った。

「そうに決まってる！ うちには貧乏だ。でも、神様のおかげで、私の目の黒いうちは、大事な客を迎えるとき、あんたがたの亭主に恥ずかしい思いなんかさせやしない。だから、ちゃんとした家だと認めてもらえるのさ」

そのとおり。だが、たまたま父が肉を買ってこなかったら、そんなリクツは言えなかった。こちらひよこ豆かそら豆を出さざるを得ないが、祖母もそれを恥とは思えない。

夜遅く、従兄弟のカシが、咳払いの後古い門扉をきしませる。ちょっと間をおいてお偉方を案内してくる。彼が招集しようとした家族会議はもはや必要ない。解決の糸口が見えてきた。彼は安堵する。その地区の老人たちのうち弁舌の巧みな者何人かを呼ぶことにし、父がそれに同意して、カシは外に出る。母、叔母とその娘たちは、男たちが集まることになっている大きな建物の向かいにある、小さな部屋に閉じこもることになった。祖母だけが炉のそばに残り、自分も一言言わせてもらおうという様子であった。

間もなく、マラブー二人と、十数人のお偉方を従えて、村長がやって来る。ゆったりとした足取り、堂々とした厳肅な様子でみなバーヌース袖なしフードつ（きの長い上着。）に身を包み、一列になって狭い中庭を横切ってくる。父は歓迎の意を伝え、とがったフードの上からシェイフらの頭に接吻する。伯父は、枕に背をもたせて隅のほうに座っている。男たちは戸口近くに履き物を脱ぐと、我が家の大きな赤い敷物の上に車座になる。父は屋根裏をささえる柱に寄りかかるようにして立っている。手持ちぶさたな様子だ。

話が始まる前の儀礼的な挨拶が交わされて、村長が話し始める。しかし、その話を父がさげすむ。

「ようこそ、わが家においでくださいました。夜は長い、まずは食事としましょう」お偉方は礼を言って形式的に辞退する。が、話の先にか後にか、ともかく食べなくてはならないことはわかっている。この後、相手方にも行くのだから、もう一度食べなくてはならないことも。ともかく、ラムダンがクスクスから始めようとしたのは道理だと、彼らはおそらく考える。こうして、お偉方は、第二のを食べるまえに、わが家のものを食べることになる。父は父で、こんなことを考えていたのだ。誰にしても、一飯の恩を受けた者は裏切りはしない。さらに、我々の側に祝福を引きつけておくために、父はマラブー二人に25フランずつを差し出した。不幸な出来事によってもたらされた災いは、すべて追い払われる。もう何ともない、みなくつろぐ。うまいクスクス、うまい肉、シェイフらは喜んでそれを味わったし、話の後では美味しいコーヒーも供されよう。言いたいことは何でも舌に語らせられよう。そう難しい問題でもあるまい、もうすっかり落ち着きを取り戻した人々を説きつけるだけだ。

実際、アイト・アメールの者たちも、私の両親も、事を込み入らせようとは思っていなかった。どちらの家も、己の名誉のために、筋の通った人たちだと思われたかった。そんな案配で、お偉方もシェイフも、関係者が納得できる、威厳に満ちた遠慮ある態度を示し

ていたのだ。

「考えてもみよ！ メンラッドの者たちは、騒乱を遠ざけるため、誇りをもって長老たちに知らせ、その家に迎えた。双方がうまくいくよう考えなくてはならない」

本当のところは、誰もそんなことは信じていない。人々はこの手の調停には精通していて、当事者双方からの気前のよい饗応と、長老らの地位に見合う心づけによって解決されるのだということは、よくわかっている。

それゆえ、気持ちよく食べ吞んだあとは、みなファティハコーランの第1章。重要な行事で唱えられる。を捧げることになる。生者に、死者に、神に、収穫に、家族の名誉に。この最後のものは、祖母が特に望んだもので、それを言うときは、感極まって喉をつまらせていた。

形式に則り、村長は叔父に話をさせる。

「フルルが半死の状態で家に帰ってきました。私は、ブサドに事情を聞きに行ったが、まともな返事が返ってこなかった。殴り合いになりました。アイト・アメールの者たちは広場の近くに住んでいるので、みな出てきた。私は、ナイフで切られました。私の家の者たちもやってきて、くんずほぐれつになりました。それから、みなさんが来られたのです」。説明は明快で正確だ。そもそも、細かいことはおのおのが承知している。最初に口火を切る者は、明らかにわれわれに理があると言う。そうしておいて、後では相手方が正しいと言うのだ。続いて話す者たちも、大方同じ事を繰り返す。ちょっとした余談を出したり、何かになぞらえたり、そういった争いごと一般への非難があったりという程度で、ほとんど違いはない。ことばは老師にあり！

二人のマラブーのうちの一方が、ハンカチに包んだ、すすけて真っ黒になったアラビア語の本を取り出す。なにやら訳の分からないことを読み、われわれの上に幸運があらんことを祈り、お前たちが争いをやめなければ、すぐさま天罰が下ると言う。すぐに、祖母はふるえながらためらいがちに、その聖なる本に唇をふる。伯父も、古い羊皮紙の上に手を置いて、また争い事をむしかえさぬよう誓わされる。相手方でも、同じ宣誓が要求される。フランス人の裁判所に行っても無駄で、話がややこしくなるだけだ。もっとも、血が流されたことは事実なので、カディは事の子細だけは知ろうとする。アマンは自分の懐から百フランをカディに渡して事を納め、その金は結局、わが一族と、アイト・アメールの者たちが負担することになる。こういったことがすべて、私たちに話される。伯父はおしだまったまま、考え込んでい

る。父が了承する。われわれと相手方の今後の関係について、心配する者はいない。肝心なのは、もはや争わぬことだ。

お偉方は、我々を《なだめ》に来たのと同様、アイト・アメールの者たちを《なだめ》るために出て行く。そして、互いに公に認められた敵となって、翌朝、目を覚ます。どちらも、高い代償を払ったものだ。

その後、両家の者は話をしなくなり、助け合うこともなく、カピリアのカゴ編みから根拠のない教訓を得たブサドは、当分の間、面と向かってわざわざ私に会うようなことはなくなるというのだ。

私の母方の叔母二人は、私の両親と同じ通りに住んでいた。祖父のアフメドは、ふたりに、屋根裏の納戸もない平屋の小さな家を残していた。家の隅っこには、胴のふくらんだ壺がでんと置かれていたが、叔母たちはこれをいっばいにできたためしかなかった。屋根は低くて門は片開き、狭苦しい中庭の幅は男の身長を超えないほどで、奥行きも正面入り口と同じくらい。キクイタダキのまるくて薄暗い巢の中のように狭ぜまとしている。しかしそこにいると、慎ましく穏やかな愛情の、やさしいぬくもりが感じられた。動くたびにさわる壁は抱擁してくれ、薄暗がりに置かれた物たちはほほえみかけてくるようで、そう、陰気くさいことなどなかった。私の子ども時代の親しみ深い牢獄、あまりに早く過ぎたあの時代。

私は、叔母たちをよく知っていたが、名前は後になるまで知らなかった。両親と同じで、名になど何の意味もない。従姉の口から、その父の名はルニス、私の父はラムダン、母はファトゥマ、彼女の母はヘリマというのを聞いたときの、嬉しい驚きを思い出す。しかし、一方では、この人たちをそう名指すのは他人であって、私たちには家族のみが持つ、もっとやさしいことばがあると、私はすぐに理解した。私にとって、叔母たちは、ハルティ母方のおとナナ年長の女性を意味する。（ねえさん、ねえちゃん。）だった。

ハルティが姉だった。ハルティはとても背が高くみえた。私の母にちょっと似ていたが、背は母よりも高かった。顔は細長く骨張っていて、突き出た頬は赤く、気まぐれな山羊の横顔を持っていた。大きな黒い目が美しく、スカーフのなかにどうしても収まりきらず、三つ編みにしてもはみ出して肩に落ちるほどの豊かな髪が印象的だった。母は慎ましやかでひかえめな容貌だったが、ハルティは野性的だった。

もう一人の叔母に、私はナナというやさしい名前をつけた。私が六歳のとき、ナナは二十歳だった。私の従姉のジュエルと同じ年で背丈も同じくらいだった。だが、ジュエルの姉妹たちでも、ナナのほうがずっと美しいことを認めていた。ともかく、ナナはほんとうにやさしい人だった。境界の女たちみなに愛され、《私たちのヤミナ》と呼ばれていた。父親からは甘やかされていて、姉二人が母がわり。ナナは人を従わせることが習い性になっていた。姉二人は、彼女なしでは何も決めることができないほどにまでなつた。家族の母であるファトゥマもナナの言うことは受け入れたし、ハルティも彼女に異を唱えることはなかった。いまになってそのことを考えてみるに、母もハルティも、ナナに従うことで心穏やかになったのではなからうか。祖母の、ついで祖父の死以来、不安と心配で気の休

まるいとまのなかった母は、かわいそうに、ひとりでは何も決められないような煮え切らない小心者になってしまった。母は良識と人生経験にてらして、一度はひかえめに反対するようなことはあっても、親しい人にはまず従い困らせることなどなかった。しかし、ハルティのほうは、良識をはみ出たところがあった。伯父のルニスと同じで激情的、だがルニスのほうがまだしも道理を心得ていた。ハルティはよく常識にはずれたことをする、自製のきかない人だった。こういう人が相手だと、近所づきあいをよくしようとしても、なかなかうまくいかない。ハルティのおかげで、一度ならず、アフメドの娘たちへの従兄弟らの気持ちは失われるところだった。私の母は涙を浮かべてみせ、父は気の滅入るほど押し黙り、伯父は父親のように助けて、実際、ハルティはいつもそれに守られていたのだが、それでも事は収まらないようだった。まあ幸い、《私たちのヤミナ》がいた。彼女のやさしさに免じて、カシはハルティが女房を殴ったことを許してやった。別の従兄弟のアラブはののしられるままになり、また別の親戚のアマルの連れ合いは、ちょっかいを出されても知らん顔していた。なんと心やさしかったことか、ナナは。彼女の声には、人の心を鎮めるものがあった。

「ねえ、ハルティの言うことなんか聞かないで！ うちのおバカさんなの、みんなのおバカさんなのよ。我慢しなくちゃ。責めるなら私を責めて！ それにファトゥマも。でも、ハルティが訳の分からないことを言ってもほっといてあげて。すぐに自分が悪かったってわかかるから！」

そうだった。いつだってハルティは自分の激しやすさを悔いた。そうして、苦しみ、泣き、償おうとした。それに、ハルティのやり方は人には真似のできない独特なもので、いつもうまくいくのだった。ことばをつくして仲直りを請い、熱を込めて己を非難し、その親愛の情と、前日その情を捨て去ったときのあのあつかましさを一緒にたにして、相手を当惑させる。人は、本当に頭のおかしい女を相手にしていたのかといぶかしく思う。だいたいにおいて、みなだまされてしまう。そして、何度となく許し続けることになると重々承知のうえで、許してしまうのだった。こうして、絶えずハルティは人との関係をまずくしたり修復したりしていた。こんな振る舞いをしているために、結局、ハルティはずいぶん損をした。私たちは、こういう人をやさしい言い方で言う。無邪気なバカには何かがある、と。皮肉な意味はいささかもない。こう言われるにふさわしい者は、思ったままを口にせずにはいられず、あまりに感じやすく、己には厳しく、他人を悲しませることをおそれ、己の得は考えず、傷つけることをおそれるあまり自ら傷つく。もののわかった人は、だいたい、そういう人のことを「子どもなんだよ」と言う。ハルティは子どもだった。死ぬまでそうだった。だから、ハルティの言う事成す事、理解できるわけがなかった。ハルティはいつもナナの言うことをきいていたが、気分の変わりやすいガキのように不機嫌だった。彼女は偉大なる直感にかしずかれていた。ハルティには第六感がそなわっていて、彼女自身や彼女が愛する人たちに対する周囲の人の気持ちがはっきりとわかってしまうのではないかと、みな、ときおりそんな風にも思った。目つき、そぶり、ほんの一言、わからないほどの態度の変化でも、彼女にはわかってしまうのだった。しかし、本人には、この才能を磨こうという考えもなく、それによって人より勝っているとも思わなかった。それどころか、彼女は感じたものを自分のうちにだけ秘めておいた。説明することもできなかったのだから、それを分け持とうとするのは無理なことだった。それに、あふれる感情

を抑えることもできなかった。喜びも恨みも、愛と憎しみもあふれでるまま、そして、すべてはもとにおさまるのだった。

ハルティの性格は、小さなフルとぴったり合っていた。私たちは、見事なまでに理解し合っていた。私は、ナナにはやさしい愛情を抱いていて、ナナのほうは私を抱きしめてくれた。ナナは私を甘やかす絶えず口づけし食べ物を与え、私の言う事をきいてくれた。ハルティにとって、私との関係はそうではなかった。彼女にとって、私は他の人たちと同じで、私たちはある意味で対等の間柄だった。私と議論するようなふりをし、道理を理解させようとし、必要だと思えば怒り、私の考えが優れていると思えば同意した。私たちは議論し、訳のわからないことを大まじめに言い合った。私たちは、本当の友達だった。

最初に叔母たちのところに私を連れて行ったのは、姉のバヤだった。私が二つか三つの頃、母が家事に忙しいときに、私を遊ばせるため姉は私を背負って連れて行った。それから、出歩けるようになるまで、私の歩みは本能的に叔母たちの小さな住まいに向かった。そこは私にとって、自分の家以外の唯一の、確かな隠れ家だった。バヤのほうも早いうちから、叔母たちといっしょに過ごすのが習慣になっていた。私たちは、大家族の端っこで、親密で手前勝手なサークルのような小さな家族をつくることになった。私たちだけの秘密、私たちの子どもっぽい夢があった。そこでは口論も穏やかな空気のなかへとすぐに解けて消えてしまうのだった。

叔母たちは、粘土をこね、毛糸を織った。小さな中庭は、いつも焼き物でいっぱいだった。庭の隅っこ、門の側かたわらには、焼くときに使う薪がたくさん積み上げてあった。焼き物は、春になると始められる。バヤとハルティは、村から何キロか離れた場所へ行って、籠かごに粘土を取ってくる。土塊は中庭で天日乾燥させ、それから砕いて細かい粉末にする。叔母たちは、この粉末に水をしみこませて生地をつくり、瓶びんいっぱいに入れておく。まるまる二日たつと、生地は固くなり粘りけが出てくる。そろそろ、力を込めてこねなくてはならない。それに、砕いた古い食器や鍋のかけらを加える。こうして、細かく砕いた焼き物の粒と、まだ湿っている粘土を合わせると、割れにくい生地ができあがる。いよいよ成形する時だ。

ガンドゥラの裾を膝の上までたくし上げ、腕をむき出しにして、スカーフをターバンのように巻いて髪をまとめたハルティは、粘土の大きな塊を板の上に置く。そして、水差しや鍋、大皿の土台を手早く成形する。それはいつでも、きれいなまるい形になる。集中して手際よく作る、そういうときは話しかけてはいけない。ナナは、笑みを絶やさずとてものびのびとした様子で、小さな真っ白い手でもって粘土をつかみこねて、手探りするようになでさするようにする。その指の間から、生地は棒のようになって出てくる。どろどろのびて、蛇のようによろよろととぐろを巻く。十分な長さになったと見ると、そこで止め、蛇を短く切って、ハルティが作った土台の周りに慎重に巻いていく。そうして、すべすべした板切れをつかって生地を引き延ばし、薄くして上へと延ばして行って、壁の原型をつくっていく。底の方も同じようにならし、次のに移る。決して、姉の作業に遅れはとらない。

叔母たちは、一度に三、四個しか作らない。中庭はとても狭かったから。最後のをだいたいの形に整えると、ナナは、もう少し乾いてきた——私たちはこれを、飲み込んだと言っていた——最初に作ったものに戻る。紐状にした粘土を新たにそこに足していく。削る

道具をつかって、ならしたり、引き延ばしたり、削ったり、薄く延ばしたり、ばりを取ってきれいにしたりする。壁がだんだん高くなり、鍋や壺の形となっていく。右手に持った道具で内側を仕上げ、左手はずっと外側をなでさするようにして、形が整うように気をくばる。ハルティは、ただ鍋底だけを作るのではない。ナナと同じような作業もした。だが、みなが言うには、ナナの手から生まれる壺には、独特の持ち味がある。どれも、とてもよい形をしていて、なんともバランスのよいその輪郭や、ほっそりした首、軽やかで繊細な装飾は、村の目利きの女たちに好かれた。自らのなすことは、自らの鏡とは言い得て妙である。

陶器は、それぞれ特徴がある。どれでもいいから、ともかく陶芸にはほとんど通じていない者が見ても、それが誰の手から出てきたのかすぐにわかる。ナナのは、慎ましさと柔らかな形でもって、明らかにライバルたちに抜きん出ている。とても評判がよいのでナナのお客は多いが、ハルティは嫉妬したりはしない。ハルティこそ、妹に対する位の一番の礼賛者だから。彼女は妹に細かい作業を託して、自分は甕や、クスクス用の大きな平たい皿、鍋にとりかかる。

棚から大きな瓶の上まで占領する壺だの鍋だので、小さな中庭も家の中もすぐにいっぱいになる。そうすると、動作は控えめに、注意して動かなくてはならない。それでも、バヤも私も叔母たちから目をはなさず、ずっとそこにいてじっと見ている。ハルティはよく不機嫌になるが、ナナは動じることはない。どの道具にも、ささやかな歴史と個性がある。作り始めるとその間中、私たちはいいだの悪いだの言い続ける。ときおり、私たちがバカにして笑ったりすると、ハルティはいらいらして、悔しさのあまり脅かささんばかりに、形の悪い作りかけをつぶしてしまう。かわいそうに、それは板の上でぺしゃんこになって何だかわからない塊になる。私たちは、笑いながら大きな瓶のうしろに隠れるが、それは倒れるといけないという格好の口実以外の何物でもなくて、だからハルティはたちどころに落ち着きを取り戻す。

この成形の作業が一段落すると、叔母たちはやっと一息つく。休憩は楽しかった。成形した鍋釜が乾いたら、絵付けに取りかかる。そのために使う粘土は黄色か赤だった。水差し、壺、瓶、そのほか火にかけないものはみな、白い土が塗られている。それを小石でこすって磨く。磨くのはそれほど面倒な作業ではない。バヤや、ティティでも、壺であったり、自分で使う水差しだったりをまかされている。だから、一生懸命やらなくてはならない。真っ白でぴかぴかになった地に、ナナとハルティは絵を描いていく。幅広い帯や菱形、四角やまるが太い羊毛刷毛で赤く描かれていく。なかなかいうことをきかない馬毛の筆で黒い線を引くことにかけては、ナナの右に出る者はいない。この気まぐれな筆は、ラバの毛を束ねてある。ラバの毛はやわらかくてすぐよじれるので、ちょっとしたことで、まっさらの表面に真っ黒な染みを作ってしまうことになる。ナナは幾何学者のような正確さで曲がり角を仕上げる。きれいな格子ができあがる。羊毛刷毛を持つハルティが描いたたぷりした感じの赤絵が端正な縁取りの中にはめ込まれる。春の間中、私の叔母たちはこうした作業にかかりつきになる。夏は、焼きに一番いい季節だ。もうずいぶん前から薪は集めてあるので、すぐにとりかけられる。焼きの日は祭りの日のようなもので、前もって、慎重に検討して決めておく。木曜日と金曜日はいけない。予言者のことばに逆らうことになるからだ。理由はよくわからないが、月曜日も避けることになっている。焼き物につい

てのならわしによれば、最良の焼きの日は、火曜日か水曜日である。もちろん晴天は見込んで
いる。空は晴れ渡っていなくてはならず、乾燥しているのがいい。ちょっとでも風があるとう
まくいかない。焼きは村の外の、まったくの野天で行われるからだ。前もって細心の注意は払
っても、陶工は誰でも、かならず危険があることを知っている。説明も予見もしがたい、運の
ようなもの。点火のときには胸が締め付けられる思いを味わう。薪がはぜて、焼いたものが爆
竹のように破裂してしまうこともある。その年のできばえは炎でゆがんだ残骸か、ひびの入っ
た使えないものと化して終わる。そんなときは、泣くしかない。焼きがうまくいったときは、
私の父母も叔母たちとともに喜んだ。大きな瓶に大麦がいっぱいになることを、私たちは知っ
ている。実際、細々した道具類は、瓶をいっぱいにして

きる量の大麦と交換される。水差しは大麦 10 リットル、大きな壺は 20 リットルという具
合に。叔母たちは一時に一冬を越せるだけの食糧を蓄える。二人のことに、父は安堵する。
それについては、自分の子どもたちにも得になるのだということには気づいていないふり
をしているが、目立たないやり方で義理の妹たちの仕事を助けて、うまくいくよう気をくばって
いた。薪をたっぷり用意するのは父だったし、母やバヤに陶土運びをさせたり、家内の細々した
仕事をしなくてもいいようにしてやったりした。焼きの日には、前もって決めた場所に前夜か
ら運んでおいた薪をそれとなく見張る。明け方に叔母たちがやってくると、父はもうそこに
いて、点火にも立ち会うのだった。焼き上がりには、古いも若きも女たちがどっと押しかけて
きて、出来上がった物を運ぶのを手伝いたがるが、中には盗もうとする者もいる。あまりに人
が多いので、叔母たちはすっかり舞い上がってしまうが、父は、ちょっと離れたところ
にいて、絶対に見逃さない。

物々交換はあっという間に終わる。二、三日もすれば家の中はからっぽになり、大麦はしま
い込まれ、私たちはまた、叔母の家でゆったりとすごすことができる。

なるほど、毛糸仕事は勤勉な者の仕事だが、場所は大してとらない。織りの仕事は、壁
際に二本の竿を渡して、その間に縦に吊して行われる。いくらでも好きなだけそこで過
すことができる。叔母たちはそこで、失われた時を過ごす、とでも言おうか。壁に背をも
たれさせ、縦糸に横糸を通して鉄の櫛で押さえていく。この仕事はおしゃべりしながらで
きる。機をまだ立てないうちは洗った羊毛を梳いたり、棒や錘を使って縦糸を紡いだりと、
叔母たちは忙しい。ナナはとても器用だ。彼女が張る縦糸はともしっかりとしているが、髪
の毛のように

細い。ナナは織物に、水差しに描いたような模様を描き出す術を知っている。ハルティは、毛
糸を手にするときには、陶土をこねるとき以上に神経質になる。私の耳にはいまも、ハ
ルティが櫛を使う、鈍くあわただしい音が聞こえるようだ。調子の悪い機械がぎくしゃく
した音をたてるように、突然止まったかと思うと、また急に始まる。ハルティの手が止ま
るのは、縦糸が切れた時だ。端と端を結ばねばならない。ナナにはそれが不満だが、その
気持ちを表に出しすぎると、ハルティは立ち上がって仕事を放り出してしまふ。それから
は、ナナの櫛が立てる規則正しい音だけが聞こえてくる。ちゃんと進んでいることは確かだ。
ナナは、煙たくて嫌なにおいのする灯油ランプの薄暗がり、よく夜なべした。こつこつ
という聞き慣れた櫛の音を子守歌にして、私は幾度、ハルティとバヤの間で寝入った
こと
だろう。

眠くならないときには、ナナが織っている間中、私たちは昔話をした。

告白せねばならないが、昔話こそが私を叔母たちの家に引きつけていたのだった。父も母も子どもたちにお話などしてくれたことはなかった。夜、両親といっしょにいても、楽しいことなど何もない。子供にはさっぱりわからず面白くもない、計算だの計画だの話し合い。ときに口にされる非難や悪口のせいで、私は隣人や親戚を憎んだりもした。ハルティといっしょなら、そんなことはなかった。お話の間、ハルティと私は別の存在になった。ハルティは想像の国を完璧に作り出すことができ、そこではわれわれが支配者なのだった。私は、王女との結婚を望む孤児を支え助け、人食い女を打ち負かした小さなムキデシユの勝利の場に立ち会い、残虐なスルタンの罠にかからぬよう賢明な受け答えをヘシャイシの耳にささやく者になった。終わりのない冬の夜、両親の険しい顔つきやため息は遠ざかっていく。物語はハルティの口から流れ出て、私はそれをむさぼり呑む。夢も教訓も、私はこのようにして知ったのだった。正義の人と邪悪な者、強者と弱者、狡知に長けた者と愚かな者を、私は知った。ハルティは私を笑わせ、そして泣かせた。きっと私は、家族の誰かに実際に不幸が起こっても、あれほど心を痛めはしなかつただろう。私のヒーローたちの運命は、両親の心配事にもまして、私の心を占めていた。それというのも、ハルティ自身がすっかり心を奪われているようだったから。お話をするハルティは、自分の言うことを信じ込んでいるように見えた。甥とまったく同じに笑いそして泣いた。結末があまりに悲しいときには、二人ともにつらさに胸が締めつけられたまま横になり、私はこわくてハルティにしがみついたものだ。ハルティの頭には、迷信がいつぱいつまっていた。私もたちまち、幽霊だの、死のサンダルや革袋、命日になると決まって聞こえる殺された者の叫び声や、疫病を告げる亡霊の行進に同じくらいに詳しくなった。山ウズラやヒワや猿やミミズクが変身することも知った。私の想像力はすべてを抵抗なく受け入れた。暗くなると、門にも扉にもしっかりと鍵をかけ、バヤとハルティに挟まれて布団にくるまれていれば、私はどんな話も聞くことができた。だが、たまたま外に出ることがあると、髪の毛は逆立つし鳥肌は立つしで、狂ったように走り出すか、恐怖のあまりその場に立ちすくんでしまうのだった。私は、幽霊が後についてくるのを見た。確かに声も聞いたし、足音が尾けてきたこともあった。ハルティが語る話を聞く喜び！だが、その代償ときたらどうだろう。私はいまでもこわくてたまらなくなることもあるのだ。どれほど、あれは作り事だと自分に言い聞かせてみても、死者の前で私が覚える忌避の感情をぬぐいさることはできない。これから先も、あのティジの広大な墓地を夜分に横切るといふ血も凍るまねをすることはできないだろう。ウルウルという夜鳥の鳴き声は、私にとっては常に変わらぬ陰鬱な響きであり、憂愁のしるしか、そうでなければ不吉な前兆に思われてならない。

それでも、私はハルティに感謝している。私は幼いうちから想像することを知り、思いのままにできる世界を作り出すのが好きになった。そこは、ひとり私だけが分け入ることのできる幻想の国だった。

学校に入学した日を、昨日の事のように覚えている。ある朝、父が広場から、どこか不思議な、感動したような面持ちで帰ってきた。私は、牛糞で塗られた壁に囲まれたわが家の中庭にいた。そばの炉には牛乳の入った鍋がかけてあった。母は外から帰ってきたばかりだった。塩をひとつまみとクスクス粉を一握り、母は私の朝食を用意しようとしていた。はっきりしておかねばならないが、そもそもこういう朝食は特別なときだけである。それには、いくつかの条件が重なる必要がある。まず、クスクスと牛乳がなくてはならない。それから、時を選ぶこと、とりわけ小さな姉のいないときでないとならない。そうでないと、自分だってごちそうが食べたい、と言ってきかないから。そうなると、母は量を増やすか、いたずらに食欲だけ刺激してお腹いっぱいになるほどは食べられないということになるしかない。そんなわけで、あの日の朝は、あらゆる条件が整い、私はまだ眠い目をこすりながら胃袋だけは十分に目覚めて、鍋の前にひとり陣取っていたのだった。

ああ、朝も早くから何か食欲をなくすようなことが起こると、私にはわかっていた。そんな気配があった。実際、父が話を始めると、私の食欲は、眠気といっしょに消し飛んでしまった。私の父は人を驚かすことにかけては、並ぶ者がいない。

「ぐずぐずするな」と父は母に言った。「こいつをよく洗ってやれ、手も顔も首も足もだぞ。こんな猿のような奴を学校の先生が迎えてくださると思ってるのか、え」

「だって、この子のガンドウラだっけ汚いわ、明日まであれば、バーヌースもいっしょに洗えるんだけどねえ」と母が言った。

この提案も私の耳に入るはずがなかった！

「明日になったら、席は埋まっちゃう。それに、学校が始まるのに欠席の者がいるのはよくない。フランス人は厳しいんだそうだ。ほかに人を選びようもないしな。親のせいでこの子が拳骨をくらうのはかわいそうだろう。それに、遅刻したって仕方がない。急げ急げ」私は急いで顔を洗われ、五分後には、子どもたちがひしめく、広い校庭へと出かけていった、朝食どころではなくて……。家族のなかでただひとり、小さな姉のティティだけが祝ってくれた。牛乳ク

スクスの鍋をちゃっかり手に入れたのだから。彼女は記念すべき大成功を納めた。一方の不運は他方の幸運、なるほど、そういうことだ。学校第一日目、一週目、そして第一年目のことさえ、私の記憶にはほとんど残っていない。

記憶をいくら探ってみても、はっきりしたことはほとんど思い出せない。先生は二人いた。二人ともカピリア人だった。ひとりのがっしりとして背が低く、頬はふっくらとしていた。笑いを含んだ目はいささかも怖いという感じを与えなかった。もうひとは、や

せて顔色が悪く、長い鼻と厚い唇のせいでむっつりとした印象を与えたが、最初の人と同じで感じがよかった。この人のほうが若くて、第二学年を受け持っていた。二人とも、フランス人の洋服を着ていたが、その上に薄地の輝くように真白なバーヌースを羽織っていた。この服装こそ、私にとって長い間、優雅で贅沢で最高に趣味のよいものだった。教師として、彼らは現在にいたるまで、私にとってあらがいがたく二重のイメージを成している。私自身がそのイメージのもとにある。私は常に変わらず原住民教師だ、責任者でもあり同時にその補佐役でもあるのだ。

私がいよい生徒だったかそうでなかったか、よく学んだかそうでなかったかを問われると困惑する。少なくとも、学校に行くことは嫌ではなかった。一年先に学校に入った友だちのアクリがずっと私の守り役だったのだ。彼は先輩としての自負心を持ち、私の母に対しては、自分が私に先んじていることを利用してくれと申し出た。毎朝、アクリが私を呼びに来て玄関前で待ち、二人連れだって学校へと駆け下りて行ったものだった。十一時には、彼は満面に自慢の気持ちを表しながら私を連れ帰ってくる。もともと、自慢に思うのは当然だった、役目を立派に果たしていたのだから。私と一緒に食事をすることもあった。よく、無花果をひとつかみもらっていたが、彼にしてみればそれは自ら獲得したもので、断ることはなかった。事実、アクリのおかげで、私は、彼を怖がる同年齢の悪ガキどものターゲットになった。年長の子どもたちは、私たちには構わなかった。第一学年には、私たちの兄弟もいたからだった。思い出してみると、私は生来臆病で穏やかな性格だったし、他人のあら探しなどもしなかった。私の地区からは十五人ほどの子どもが学校に通っていたが、その多くは年長者だった。それに、大人たちが部族の精神をもっていたように、私たち子どもにもその精神は強かった。それゆえ、私は庇護者を欠くこともなく、私のような一人息子であまやかされた子どもをたいてい学校で待ち受けているようなあらゆる不愉快な目に遭うことはなかった。

学校に行くことに、私に何の考えもあったわけではない。ただ、みな行くから行っただけだ。一日のうちの最良の時間は、異論の余地なく十一時だった。その時間になると、家で私たちを待っているクスクス目指して、息を切らして坂を上っていく。もちろん、学校で遊ぶこともあったが、学校に行かなくても遊ぶことはできた。学校でこそ、子どもを楽しませながら興味を引くようなことを教えられるし、関心と呼び起こすために、学ぶ者の努力を軽くするような方法があるのだと、私が知るようになるのは、後になってからのことである。大人たちがうまい事をたくさん言うというのもありうる。最終的には、七歳の小さなカピリア人にそういったものはいっさい必要ないと、私は思う。彼は、怖いのと自尊心とで緊張している。肝心なのは、先生の拳骨を免れること、読み書きを知っている隣の子からバカにされないようにすることだ。もちろん、後になれば、興味がわいてきて、怖さにとってかわる。そうすると、わかるようになる。私もそうだったことはよくわかっている。勉強がわからない子どもたちは、教師の拳骨に慣れてしまい、それを怖がらなくなり、そういう子どもの関心は教室の外へと移っていく。遊び上手や喧嘩上手になる。教室の外では、私たちは勉強が出来るからとうぬぼれたりはしなかった。私の地区での遊びの大将は、学校ではあまり人望のない喧嘩っ早い男の子だった。私たちの間で、彼は自分が劣っているとは思っていなかった。当然だった。親たちも先生も、私たちが学校でやっていることは大して重要だとは考えていないように思われた。そして私たちの最重要事項

は遊びだったのだから。私たちには、毎年のように繰り返されるサイクルがあった。十月に始まるビー玉、ドングリ、そしてボタン遊び——このときには、古いシャツだの上着、チョッキは、ボタンを全部むしられてしまう。それから、独楽遊び。鷹揚な様子でゆったりと回る町で買った独楽や、親たちが作ってくれるカビリア独楽、これは鋭い音を立てながらぶんぶんと高速で回転した。春になると、子どもらは川まで珍しい流木を探しにいった、それでピストルを作った。それから、輪っかや羊の骨を使った遊びに移り、笛を吹いたりもする。この最後の遊びは、私には忘れがたい思い出となった。

ある夕方、四時過ぎのことだったか、午後の時間を村の外で仲間たちと過ごした私は、手にした笛で習い覚えたばかりの節を夢中になって練習しながら家に帰ってきた。父が戸口のところで靴のひもを解いていた。畑仕事からもどったばかりだったのだ。母が、父への言づけを私にたくそうと探したが見つからず、私が出かけてしまったことで文句を言っていたにちがいがなかった。

「ほら、心配したことはない。帰ってきたじゃないか。笛まで持って。ありがたいことだよ、学校で何も勉強しなくて、みんなと一緒にいて時間を無駄にしなかったってことだ」。父はこんなことを言った。「やれやれ、お前の先生がお前のことで不満を言っても、もう驚きもしないさ。よくわかった、お前は落ち着きがないんだ。先生が、お前を進級させなかったのはお前が怠けているからだって、そう言っていたぞ」

それは、確か私が学校に通い出してから二年目のことで、私は相変わらず同じクラスにいた。思いがけずこんなことを言われて、私はとても驚いた。私の先生が父に私のことを話したのは明らかだった。五十人もの級友にまじってことさら目立ちもせず過ごしていた私、その私の勉強ぶりを先生はちゃんとわかっていて、私の父のことも知っているとは！つまり、先生は生徒みなをちゃんと知っているということだった。きっと、先生は出来のよい子を好いていて、出来ない子は嫌っていたことだろう。それでも、そんなことはおくびにも出さず、私たちみなに分け隔てなく接していた。さんざん考えたが、わからなかった。残念ながら証拠がある。先生は父に、私は悪い生徒だと言ったのだ。……父は私に少しはつらい思いをさせようとして、厳しい調子で言ったのだろう。内心、私はほとんど幸せと言ってもいいほどの気持ちを味わった。父が私のしていることを気にかけている、私が落伍者のなかにまじっていることのがっかりしている、その気持ちを先生と父が同じように感じている。こうして遠回しに叱られたことで、私は自分のすべき事を真剣に考えるようになった。それほど事だったか、私は大げさに考えていたのだろう。実際には、父が怒っていたのは、私がふらふらとほっつき歩いてばかりいたからで、学校で成績が悪かったからではなかった。私は確信しているが、あれは全くの偶然で、ごくありきたりの会話の流れでのなかで、ことばのつながりか何かで先生が父に私のことを話したのだろう。ともかく、この場面が学徒としての私の未来を決定したのだ。

この日以来、私はほとんど

努力せずしてよき学徒になったのだった。それに、これこそが私にふさわしい唯一の役割だった。学校での専門教育だとか、職業

への方向づけという話になるといつも、私はいつも思わず笑ってしまう、そして仲間たちや私がどんなやり方で専門を身につけたのか考えざるをえない。それは簡単きわまりないものだった。喧嘩好きがいた。彼らは学校の王様だった。遊びに熱中するタイプ、頭は悪いが、活動的で目端が利く。騒がしくてあっけらかんとして人気者だ。気性の穏やかな者

と臆病な者は一緒くたにされてしまうが、彼らには勉学という尊い喜び、最良の場所が残されていた。彼らにとっては、それが尊いだけにいっそう、追い求めうる唯一の喜びだった。穏和に生まれついた私は、第一の範疇にも第二にも自ら候補とはなりえなかった。仲間たちもみな承知していたことだが、だから、私はよい生徒になった。多くの人々が、私の区分けで言うと最初のところに私を入れようと、本人以上にムキになる。それには、リーダーの名声がかかっているからだ。

小学校課程以来、私は、私の進歩に対するこれ以上はない両親の無関心にもめげず、まじめに勉強に励んだ。私の進歩をよく分かっていた先生は、あれから父にそのことを話す機会があったろうか、私は知らない。家族の父親というものは、小さな者たちの腹を満たしてやるために日々追われている。その子たちの頭の中身までかまっていられるものだろうか？……。

実のところ、私の父は家族を食べさせていけるかと心配することが多かった。事実を誇張して言うつもりはないが、私の勉学が唯一役立ったことといえば、私が長い間家を空けたので、私が食べる分の無花果やクスクスが減ったことだろう。これについては、よく覚えているが、長い休みには母は愚痴をこぼしていたし、まだ当分先のことになる休みの終わりが待ちきれないようだった。なんとかやりくりしていくために、母は知恵をしぼらねばならなかったし、父は汗をたくさん流さなくてはならなかった。

シャバンヌの息子たちには大して遺産もなく、元手もなにもなかった。私たちがみな一緒に生活していたころ、父も伯父も年がら年中働きに働いていた。体面をたもつことには成功して、人には楽な暮らしをしていると思われていた。祖母がいたって堅実に家を守り、みなを従わせていたのだ。

祖母が突然亡くなったのは、私が学校に入ったのと同じ年だった。私には死というものがかろうじて理解できたにすぎない。祖母の死は、これで少しは自由になれると考えた二人の義理の娘たちにはおごなりに惜しまれた。子どもたちは、身の丈を上回る葬式をした。通夜には年寄りの泣き女が三十人以上も呼ばれ、朝までありとあらゆる祈りの歌を歌った。羊の喉を切って殺し、村中の貧しい者にクスクスがふるまわれた。マラブーが十二人ほども墓地へと従った。盛大この上なかった。老人たちはこれほどまでに盛大な葬式をうらやんで、わが子に自分もこうして盛大に送ってほしいものだと言ってはばからなかった。私の親たちはずいぶんと嬉しい思いをした。故人をたたえて、本当の大黒柱だったと言う者もいた。私はすぐにそれを実感することになる。葬式のあったその日に、母とヘリマは、祖母の遺したものを奪い合って喧嘩になった。私は驚いたが、父も伯父もこの争いを受け入れた。二人も加わってそれぞれ、自分の妻の肩を持った。

数日後、家内の舵取りを二人の女のどちらかに任せなくてはならなくなった。候補者は二人。陰謀がめぐらされた。近所の女たちがかわるがわるやってきては、母を伯母をつついた。双方の姉妹たちも応援したり助言したりした。最後には、年少の父が素直な弟として兄をたて、この役目を伯母が果たすことに同意した。このよき行いは伯父を喜ばせたが、その妻の心を動かすことはなかった。母は、自分が負けたとは思わなかった。母は分割を要求した。もとより、ヘリマもそれ以外は望んでいなかった。何とまあ、さっさと片が付いた。伯母はすかさず盗ろうとし、母は遅れずそれに気づいて、すぐに父に知らせた。父は急いで鞆のなかのその手を押さえた。ここで言う鞆とは大きな瓶のことで、そこにはイ
ードイスラー(ムの祭)のときの肉を干し肉にしてしまっていた。ヘリマはそこから大きな塊を取り、

それは家族みなどで囲む鍋とは別のところへ行くに決まっていた。騒動勃発。信頼というものがなくなってしまったこの家では、内心では、みな分け前を望み、ともに生きるには十分なものがあるということが証明された。祖母が亡くなると信頼も失われたのだから、祖母はたしかに共同体の大黒柱だったのだ。

分け前といっても何があろう。大したものはない。まず、住まいがあった。常に変わらぬ尊敬の念から、父は伯父に決定をゆだね、伯父は大きな壺やたくさんの瓶が納められている屋根裏のある大きな家を自分のものにした。屋根裏の納戸の下には牛二頭と、ロバ一頭、山羊一頭を住まわせることができた。私の母は悔し泣きした。私たちには、叔父たちの家と向かい合わせに小さな部屋がふたつ。それも、同じ広さの一方の部屋だけに全員が住まわざるをえなかった。中庭はロープで区切られた。いずれの側にも、奥行きはまあまあだがひどく細長い空間ができた。それから、無花果畑を分け、オリーブ畑を分けた。一週間の間、できるかぎり公平に、こちらを取ってあちらに加え、一方の取り分の中にあるオリーブの大木一本を、無花果の大木一本を、他方の取り分にすることに同意し、境界線を入り組ませ、引いたと思えばまた消した。最後に道具類も家畜も負債までも等分にした。この一週間ずっと、ふたりの嫁は忙しかった。いずれの表情にも喜びが読み取れ、二人には訪問する者が絶えなかった。近隣の女たちが、家の幸せを願いに次々と訪れた。

「ファトゥマ、よかったわね。この家はもうすっかりあんたのもの、どんなつらいことがあっても大丈夫、畑もあるし食べるには困らない。ねえ、あんたのお母さんは聖女だよ。だって、あんたに不幸を残していかなかったんだもの」

「神様があんたの大切な人たちをお守りくださいますように。あんたにもいいことが起こって、私も一緒に喜べますように」

母は応えて、挨拶は順調に進む。この間、兄弟二人だけは気持ちが沈んだままだ。別れ別れになった彼らには、もう、肩

の荷が二倍になったように感じられていた。未来は彼らによきものを何も用意していないこと、より貧しくなっただけであること、おのおのが持てる力の半分を失ってしまったことを、彼らは感じていた。分割後の何日かは、彼らは喜んで互いに互いを招きあった。伯父は食事の度に私を呼んでくれた。ヘリマはといえば、フルルを甘やかしたがる己に、ふと気づいたりするのだった。取り返しのつかない事になってしまったので、みな、いささか後悔しているところだった。しかしながら、後悔したのは、それがまさに取り返しがつかないから、その限りにおいてだった。「おまえがいずれ死ぬから、私はおまえを許すよ」とジェロントもスカパンに言ったではないか。互いを招待するのも次第に間遠になっていき、昔からあった不満の種がまた頭をもたげてきた。加えて、嫉妬心は別としても、隣同士であることから新たな不満も生じた。

父親二人は、それぞれの家族を養うためにしなくてはならないことがたくさんある。互いの不如意を望まぬとしても、それでも助け合うことはできなかった。母親同士は違った。互いになじまず、認め合うこともなかった。ふたりはすぐさま敵同士になった。両者とも猛烈に働き、夫を助け、子どもらを育てた。分割したからといって何一つ失ったわけではなくかえって幸せになった、とりわけ隣人より幸せになった、ということを示すという至高の目的を目指して、あらゆる努力を傾注し、意志を強固にした。

私の父は一介の粗野な農民だった。休みなく草を取り耕し、そして植えた。何年かたつ

と、わが家の畑は目に見えて変わった。それだけでなく、牛二頭、ロバ一頭、雌山羊一頭、羊二頭を養うまでになった。牛は家のものではなかった。金持ちの家が、春にわが家に預ける。うちで肥育して立派に大きくする。十月になるとそれを売り、代金の三分の一がもらえた。ロバと羊、雌山羊はうちのものだった。ロバは何かと役にたった。薪や、牧草の入った袋を畑から背にのせて運び、畑へは堆肥を運んだ。町へは葡萄や無花果を持って行き、帰りには家族の者たちが食べる大麦を背負ってきた。野菜のとれる季節にはピーマン、ズッキーニ、ジャガイモを持ってきて、母はそれを近所の女たちと一皿単位で穀類と交換した。

羊はまだとても小さいうちに買うが、大きくなると脂がのってくる。イードが近づくとそのうち一頭を売るが、それがたいい、新に二頭買えるくらいのお金になる。そうして、父は毎年、金をかけずに、予言者に羊をささげることができたのだった。

雌山羊からは乳もとれたし、毎年決まって、一頭か二頭、子山羊も生まれた。父は喜んで子山羊を売った。ときには、そのうちの一頭をうちで食べることもあった。山羊を屠る口実はいたって簡単なもので、母が二つ三つ具合の悪いところがある。母がそう言うだけで、他の者にはわからない。それから、それは偶然以外のなにもものでもないが、デルヴィ

イスラムの托鉢僧、修行
一シュ(僧。教団に所属する。)が、間違いなくわれわれの色を持った子ヤギを殺すように言うのだ。母の具合が悪くないときには、ちょっと前から父が日射病になっていた。いずれにしろ、この病はジュヌーンがつかわずもので、子山羊の血が流れないことには立ち去らないことをみなが知っていた。不運な子山羊の死を引き起こすもうひとりの重要人物は一人息子だった。女の子たちはどうかといえば、彼女らのジュヌーンはせいぜいがところ、卵をほしがるくらいの大膽さは持ち合わせていた。父に肉を買ってもらうには、まるまる一週間にわたってさんざんねだったうえ、二か月か三か月に一回がやっとだった。だが、山羊の喉を切る準備なら父はいつでもあった。

もつとも、農民の多くはそんなものだった。われわれの家では肉はめったに食卓に上らない食べ物だ。それか、全然たべられないか！クスクスはわが家の唯一の人間の栄養源である。おたま一杯のひよこまめかソラマメを、ほんの少しの食物油と三リットルの水と一緒に鍋に入れてスープをつくる。一食につき、油は匙一杯と決まっていて、ときどきは、干し無花果をちびちびとかじりながら食べることもある、というのが正確なところだろう。ほかに、畑で見つけた食べられる野草なら何でも食べて歯茎を緑色に染めるか、山を流れる小川の、きれいな水ならば好きなだけ飲んで腹一杯にもできるし、収穫の始まりが待ちきれずに、まだ青くて固いプラムだの林檎だの梨にどうにか歯を立てることもできる。われわれは山の民だ、粗野な山の民だと人はよく言う。それは、おそらく体質の問題だろう。虚弱な体質に生まれついたら、食事療法には耐えられそうもない。さっさと除去されてしまうだろう。強健に生まれれば、耐えて生きのびられる。また後に、虚弱に生まれることがあるかもしれない。適応する。それこそが肝心なことだ。

メンラッドの家の者の話に戻ると、父ラムダンは用心怠りなく、家族のものみなに毎日食べるわずかなクスクスを確保できるようにしていた。畑仕事がない時期、それは草刈りと収穫の間や、収穫と脱穀の間だが、父は作業員となった。金持ちの家で造作仕事をするふたりの左官の手伝いをしていたのだ。村に、縦坑とポンプからなる水力の搾油施設を建設したときは、父は二十二日間もそこで働いた。この工事は、私にとって忘れがたい思い

出となった。作業は、確か六月に始まっていたと思う。子どもたちはまだ学期中だった。工事現場は

ちょうど学校の前、ほんの百メートルほど離れたところにあった。工事現場では、私の父だけでなく、同級生のサイドの父親で父の従兄弟のカシや、やはり同級生のアシュールの父親アラブも働いていた。工事の最初の日、十一時にサイドが、父親たちが働いているところをみんなで見に行かないかと言った。アシュールと私は賛成した。みなまで言わずとも、サイドが言いたいことはわかっていた。十一時といえば、工事主はいったん作業を止めさせて昼食にする時間ではないか。その男は教育があり、決まった時間に食事をするといった、フランス人の習慣のあれこれをまねて、それを鼻にかけている。雇い人にも同じようにするだろう。私たちは、たまたま父親たちに会いに行ったのだが、たいそう立派なことに、それが食事の時間ときっかり合っていたというわけだ。尊敬すべき父親たちは、そろって不快な表情を隠さない。しかし、工事主は寛大だ。私たちに座るようにと言ひ、私たちはうなだれたまま食べる。それでも、食べる。まず、ジャガイモのスープ、これが旨い。それに、ふっくらとしたパン、それから、白いセモリナ粉のクスクス、肉が添えてある。こんな贅沢を前にすると、うれしさのほうが最初の恥ずかしさに勝ることになる。私たちの空っぽの胃袋は、獣の悦びを味わう。それがいっぱいになった途端、おでこに汗をかべた私たちは、誰にも礼も言わず、手には残ったパンと肉を持って逃げ出す。われわれは、ちょっと離れたところで気を取り直し、自分たちの幸運を見積もり比べあう。いい事を思いついたね、とサイドを褒めてから、ばらばらになって家に帰る。本当のところは、大して気持ちの入らない褒めようで、サイドも本気では聞いていない。食いしん坊の目の前には、それぞれの父親の厳しい、そして幾分か悲しそうな顔が浮かんでいる。今晚、何といわれるだろう。

予想していたとおり、父は私の行動をよく思っていない。私を苦しめまいと強くは言わず、これからは毎日、その悪名高き昼餐で、自分に配られたものをたくさん残して持ってきてやると約束してくれた。私は、もう二度と工事現場の父のところには行かないと決め、己に誓った。父は約束を守った、しかし私は自分の約束は守らなかった。

翌日、学校では、三人の陰謀家のうち誰一人として前夜何があったかにはふれようとしなかった。サイドやアシュールは、父親が帰ってきたときどんな顔をして迎えたのだろうか。聞くに聞けなかった。それにしても、彼らは普段から甘やかされてはいないはずだ…

…。十一時、私たちは互いに互いを避けるようにして、それぞれの大麦クスクスを食べるために家へと急いだ。毎日、そうしなければならなかったはずだ。あの聖なるジャガイモスープさえなかったら、きっと私たちはそうしただろう。ジャガイモスープの記憶は私たちにずっとつきまとった。その味は何度でも口のなかによみがえってきた。他のものは、夢を引き延ばすためにあるにすぎなかった。

二日後の休み時間のこと、こらえきれなくなったサイドがふいに私の側に寄ってきて、あのスープのことを話し出した。二人とも、あれが最高に旨かったと思っていた。私たちは、話を聞いている連中の口に、命の水を味わわせた。あれはもう過ぎた事なので、存分に話ることができた。サイドにしても私にしても、これからそれを企てる勇気はなかった。私たち二人のうちどちらかが、工事現場にもう一度行くような危険を冒すだろうか。私は食いしん坊だったが、サイドは私よりもずっと食いしん坊だったと思う。私のとこ

ろに来る前に、サイドはアシュールの様子を探りに行っていた。アシュールは、おそらく、私たちの最初の軽はずみな行動が招いた、厳しい叱責をどうしても忘れることができなかったのだろう、ほとんどその気がなかった。彼をあてにできなくなり、私だけが最後の望みの綱だった。サイドは休み時間の間中、私に向かって話し続けた。十一時になると、混み合う子供らの間をたくみにすり抜けて私の側にやってきて、ずっと側を離れなかった。

私たちが、曲がり角のところにさしかかる。私は立ち止まる。衝動にかられて、私は搾油機の方を見る。サイドはもう、そちらを見ていた。彼が首をめぐらす、私たちの視線が合う、うなずき合う、と彼は私の手を取り、私たちは気が狂ったように働いている人たちの方に向かって走っている。工事現場までほんの十メートルのところで、私たちはわれに返る。こんな大胆なことをしたのが怖くなって、積み藁の後ろに隠れようとする。もう遅い。見つかった。怒ったカシが私たちを呼び、帰れと叫ぶ。サイドは、家の方へと矢のように逃げていく。私の父は仕事を止め、ゆっくりと私のほうへやってきながら、じっとしているように言う。私は恥ずかしさに突っ立ったままだ。父は私の側に立つと、モルタルで汚れた手を私の頭に置いて言う。

「行かせてやれ。カシの隣に座って、私のかわりに食べたらいい。私は家に帰って少し休んでくる。今日は、腹が減っていない」

男たちの軽蔑のまなざしの下での、あの食事は、私にとって責め苦のようだった。カシとアラブは、子どもの育て方を知らない者たちをバカにした。露骨な当てこすりだった。私は赤くなり、そして青くなった。私は、自分の過ちを軽くするために、父はお腹がすいていないのだと、自分に言い聞かせた。しかし、帰宅してみると、黒と赤の三角形の模様が描かれた私用の小さな皿を手に入れている父を見て、過ちを認めざるをえなかった。父は私の黒いクスクスを食べ終えるところだった。だからこの日、父は半分空腹のまま仕事に戻ったのだが、その限りないやさしさは息子の心に刻まれて消えることはなかった。

いまになって、私には、母と伯母のヘリマのどちらもが同じように、家の女主人になる とうと急いでいた理由がわかる。ふたりとも、何もかもが計算ずくだった。

母にとって話は簡単だ。夫は弟だから、一緒にいても不利なことばかり。若くて壮健だから、働くのは夫だ。自分のためにだけに働くのなら、もっとやりがいもあるだろう。母はヘリマより節度があると自認している。一つ確かなのは、従姉妹たちより年下の自分の子どもたちは同じだけ食べられないということだ。独立すればすべて思い通りにいく。

ヘリマには、こんなみみっちい計算がわかっていて、バカにしていた。働いているのがラムダンだとしても、ルニスはずき合いがよくて、助けてくれる友人も多い。夫は、知恵のある男だ。夫が出席しなければ集まりもできない。そして、夫が弟ほどには農具を扱えないなんて、そんな様子はどこにもない。あたらふり夫を助け、必要とあらばその代わりにもなろう、と彼女は考える。それは娘たちのため、ほかの誰のためでもなかった。それに、娘たちはもう大きい。嫁に行くことになれば、婚資はルニスだけのものになるが、家に残れば、この先もずっと働いてくれる。

長女のジュヘルは、分割相続があったとき二十歳だった。ひよろりと細い体つきの気分屋で、いたずらっぽいきらきら光る目をしていて、ひっかいたり噛んだりする小猫をのようだった。彼女は一人で家事を切り盛りしている。私の母は、こそこそかきまわったり、告げ口をする、この娘が苦手だ。

ちょっと年下のメルキールは、太った頑固者だ。彼女の顔立ちは私の父に少し似ていて、性格はその母親によく似ている。ルニスは、この娘は絶対に嫁には行かないと確信している。彼女は、ありとあらゆるちょっかいを出して、家族のなかに日々もめ事を起こす。ヘリマはメルキールに陶芸と毛糸の織りを覚えさせようとした。ルニスはかららかい半分だったし、私の母は嫉妬の目で見えていたが、ヘリマはついにそれを成し遂げた。

スミナは、私の姉、長女のバヤと同年だ。だから、二人は永遠のライバルだったというわけだ。母親どうしの仲そのままに喧嘩をする。正確なバロメーターのように。私が思うに、姉のバヤは気弱なスミナに対して、同じく気弱な自分の母親の仕返しをしていたのだろう。スミナは、自分にも意志があることを示すためののみ物を言う、といったタイプの人間に属していた。大きな二つの瞳、とても大きくておしゃべりするためだけにあるかのような口、彼女は男のような野太い声で鼻にかかった話し方をする。バヤは口数が少なく内向きの性格で、スミナに悪態をつかせておくが、最後には、断固彼女を捕まえ、きつ

いお仕置きをくらわせる。そこでスミナの威嚇は終わりになる。泣いて鼻水を垂らし、スカーフは下に落ちて髪の毛は顔の前に垂れている。

従姉妹のうちで一番若いシャブハでも、私の姉のティティよりは年上だ。この哀れな、小さな娘の生気のない顔。いつ見ても、彼女の唇はしわがよっていて血の気がない。黄色い眼、大きな垂れ下がった頬。誰もが彼女を無視していた。彼女が生まれ、そして生きていこうとしていることを、嫌がってさえいたと思う。にもかかわらず、彼女は賢かった。誰もかまってもくれないのに、大きなメルキールより上手に土を捏ねる。私の母が嫌わな　い唯一の娘だが、それは、彼女が私に愛情をもっていたからだった。この小さなやさしい心の持ち主は、おのが母のフルルに対する憎しみのことばの数々が理解できず、それに耳を傾けることもなかった。私の愛しいシャブハは、もう、ずいぶん前に亡くなってしまったが、私のなかで、いまでもその思い出は生きている。シャブハは、私の最初の恋人だった。分割をやりおおせてしまうと、ヘリマ自身も娘たちもひどく愛想がわるくなった。ヘリマは豊かになりたくて、必死に貧乏と闘った。彼女は行動の女だった。ためらいなどには

無縁だった。兄弟二人は同じところから始めた。持ち物は、無花果畑一枚とオリーブ畑一枚、負債は、

ちょっとした借金と、育て上げなくてはならない子どもたちだった。己の優位を見せつけるため、その冬から、ヘリマはルニスに金持ちの従兄弟のオリーブ

畑二枚の《世話》をさせることにする。こういうことは、ここではよくあることで、持ち主が一定の土地だの果樹だのを人に預ける。預かった者は世話をして、オリーブの実を収穫し、潰して油を絞らせる。持ち主はオリーブ油を受け取る。一定の場所の収穫高はきちんと正確にわかっているのだから、オリーブの実の量もオイルの質も決まっている。間違いはまずない。契約には二つのやり方がある。まず、引き渡す油の量を前もって決めておくやり方。これだと、持ち主が悪いと、請け負ったほうはひどい目に遭う。運が悪いと、返済できるはずもない、約束の二倍の量に当たる油の代金を負債として負わされ、本人だけでなく子どもたちまでもが辛酸の極みをなめるようなことになる。もう一つは、収穫量の一部を持ち主が受け取るやりかたで、普通、三分の二を受け取る。この場合は、請け負った側が不正をする可能性がある。不正は必ず起きる。だから、用心のために、遠いところにあるか、大した収穫のないオリーブ畑を任せるしかない。それか、収穫の多寡にかかわらず何かしらの恩恵を得られる親類縁者を選ぶか。ほかには、収穫量の多い畑を、果実を叩き落として採り入れる直前の期間からに限り貸すというやりかたもある。オリーブは熟してしまえば、採り入れがたやすい。取り分を得ようと必死にならざるをえない。《アマレン》という、雇われて働く者たちは、自分の女房や娘たちまでもすすんで総動員して、自分の畑の他へもオリーブを集めに行く。祖母が生きている間は、ヘリマもこういうことをわざわざしたりはしなかった。祖母の名誉はそれを許さない！

ルニスにもためらいはあったかもしれないが、利益が堅いとなると、それも消え失せる。持ち主に渡さねばならないオイル三分の二と引き替えに、ルニスはオリーブ畑二枚の《世話をする》。相手は親戚の一人である。従兄弟たちはみな、私の父に対しては無関心になり、伯父だけを助けていこうと思っているようだ。母は嫉妬の気持ちを何度でも反芻し、父は以前よりもいっそう開墾に精を出す。言うなれば、ファトゥマとバヤ側は、わが家の何本かのオリーブの木をじっと見張っていて、いちばん小さい実が木から落ちるところを

捕まえる。そうやってねばり強く籠に一杯とか、半分を持ち帰る。いっぽう、ヘリマと娘たち側は、作業で手一杯だ。明け方に、彼女たちがばたばたと騒がしくするのが聞こえてくる。とくに、風の強い日はそうだ。母親が作戦隊長よろしく、てきぱきと仕事を配分する。ジュヘルと一緒に出かける。二人はどこにでも出かけて行き、オリーブ畑の境目で、藪のなかや溝のくぼみに隠れている実を探す。隠れた実にこそ、《アマレン》の利益は宿るのだ。金持ちには、そんなものにかかる時間はないので、どれほど価値があるかを知らない。

「ねえ、よく見るんだよ。うちにとっちゃ、お宝なんだから」ジュヘルは、二度までもそう言わせるようなまねはしない。溝はだいたい、境界線になっている。オリーブの実が隣の畑のだと、見分けられるはずがない。いつだって、先に拾った者が勝ち。ジュヘルとヘリマは、ここぞという場所には、いつも最初に行く。藪のなかも溝の底も、すべて拾い尽くすのだ。茨で手には擦り傷ができるが、心は弾む。悪いことをしているとせずに、隣から盗むことができるのだから。

メルキールとスミナは、一緒に働く。二人とも同じことを言いつけられて、同じオリーブ畑に向かう。ヘリマは、この二人をそれほどには信用していなかったもので、いつも、前日、念入りに実を拾っておいた場所にさしむける。四人とも、オリーブと一緒に、枯れ枝を集めて持ち帰る。たちまちヘリマは村中で一番たくさんの薪をたくわえ、私たちはみな、うらやましげに眺めたものだった。

毎朝、出かける前、昼間の食事——半分はクスクス、半分はソースの入った——赤土でできた大きな皿が温められる。ぱちぱちと音をたて湯気のがったものが一つの皿に盛りだくさん出され、家族全員がそれを囲んで座り、飢えた者のようにががつと、時間に追われるようにして掻き込むのだ。それから、そそくさと無花果が配られ、夜になったら帰ることを言い合わせて、あばら屋は閉められる。

わが従姉シャブハも、みなと一緒に起きる。彼女にもしなければならぬ仕事がある。村の近く、とても人通りの多い道の端に二本のオリーブの木がある。毎朝、道に実が落ちていて、シャブハは、誰よりも早くそこに行かねばならない。夕方、ヘリマが畑から戻って来たとき、小石の上に潰れたオリーブのインクの染みのような跡が残っているようなものなら、シャブハは必ずお仕置きされることになるのだから。

かわいそうなシャブハの姿が目につかぶ。垢じみたショールで髪を包んでいるが、艶のない毛の房が落ちてきて前が見えにくそうだ。冷えて赤くなった小さな手指に絶えず息を吹きかける。しきりに目の涙をぬぐったり鼻水をすすり上げる。たった一つしかない袖の短いガンドゥラを着て寒さに震えながらも、オリーブの実を拾いながら歌を歌っている。籠を一杯にすれば、彼女の幸せな時間が来る。苦役は終わり、今度は家の見張りをする。家には鍵がかけてあったが、中庭には山のような薪が置いてある。一日のうちの残りの時間を、シャブハは通りで過ごした。ご近所のあちこちに、フェレットのように鼻をつっこみ、女の子たちや学校から帰った子どもたちと遊び、パンの切れ端や、スプーン一杯のクスクスや、無花果を一つかみもらったりもした。椋鳥がやってきても、その二本のオリーブの木には止まれない。シャブハが走ってきて、そのか細い声で追い立て、いつも身から離さない小さなバケツを叩いてやかましい音を立てるからだった。家でも外でも、彼女は一生懸命見張りをし、それから遊んだ。

ヘリマのほうでは、その熱意をルニスにも伝えることに成功して、ルニス自身も己が勝った者だと見せた。ティジの人たちは、兄弟が若い頃のように二人そろって同じ仕事をしている姿を頻繁に見かける。かつてそれは、愛ある協調の美しい眺めだったものだ。が、もはや二つの心臓の鼓動はユニゾンを奏でることはない。いまや、父二人はそれぞれに、己の痩せた土地で己のためにのみ汗を流し、互いより優れていることを見せようとしている。あるのはそんな惨めな光景のみ。なぜに。生きるとは感情をあざけることだ。

後に知ったことだが、ラムダンは兄が働いている姿を見て、何度も胸が締めつけられる思いをしたという。華奢な手をして真っ白いガンドゥラを着ていたルニス、広場で語る術をよく心得ていたルニス。ラムダンは、ルニスから農具を取り上げて、集会の場に押しやりたい気持ちに駆られた。父は私にそう話した。こっそり伯父の果樹を剪定したり、そこここの畑を耕したりした。だが、そっくり肩代わりすることはできなかつたし、以前のように、伯父の仕事全部をすることはできなかつた。分割による現実的な問題があった。子どもたちを養っていくことを考えなくてはならなかつた。それは小さな問題ではなく、決して逃げることのできない事柄だった。《それぞれが己のため》、行き着くところはそうなっていた。ラムダンは、兄が自分の横でくたくたになっているのを見るに堪えないときには、場所を変えるなり仕事を変えるなりした。

そうこうするうちに、伯父は、ヘリマや娘たちのおかげで、父よりは自由がきくようになったようだ。それで、伯父は間もなく、広場に頻繁に姿をあらわすようになり、だんだんと村の名士として振る舞うようになっていった。何もかもヘリマが仕切り、ときには、従兄弟の誰かが友人が一日を割いて、果実をたたき落としたり、耕したりをしてくれるようになった。家畜といっても、伯父のうちには、雌山羊が一頭と、イードの祭用に羊が一頭いるだけだった。娘たちは陶器を焼いて、大麦と交換した。羊毛で織物も織って、伯父がそれを売った。

食べ物に関しては、伯父をのぞくと、ヘリマも娘たちもうるさいことは言わなかつた。合計すると、伯母の計算はまずまずだった。伯母があればほど不誠実でなかつたなら、私の母より幸せになれたにちがいない。ヘリマを知り尽くしていたルニスは、不治の病を抱える人のように、諦めの気持ちとともに妻を受け入れていた。ヘリマは、村の物も盗んだ。それは黙認された。夫の物もくすねるようになった。穀物やオリーブ油、無花果、羊毛のような手に入る物は何でも、決まって上前をはね、安い値で売った。機会があればいつで

も、夫の貯金から、硬貨一個、紙幣一枚とくすね、ジュヘルにはブローチやスカーフを、メルキールには腰布を買ってやり、口が固い商人にも盗みの片棒をかつがせた。ヘリマは、旦那のふところを探る古女房どもみんなに、何もかも教えたというわけだ。年頃の息子を持つ母親たちは、ヘリマのする事はなんでも倣ってするようになったが、その娘たちを嫁にはしなかつた。ガンドゥラの袖の下に縫い込んだり、葦の茎の筒に入れて望む家の前に吊しておけば御利益のあるお守りだのといって、マラブーたちはいったいどれほどの金額を、その魔術書に支払わせたことだろう。こんな所へと、伯父のわずかな蓄えは流れていった。そして、何もかも無駄になった。従姉妹たちは大きくなり、醜くなり、嫁には行かないままだった。

伯父はヘリマのこざかしい企みをことごとく見抜いていた、というのも、内輪ではそんな事はしょっちゅうだったのだから。率直で激しやすい伯父のこと、本当は現場を押さえ、

怒りにまかせてヘリマを締め上げたかったであろう。伯父はあごひげを丁寧に整え、信心を募らせ、怠け心を倍加させ、大食いの欲望を満たした。結局、ヘリマの好きなようにさせることになった。伯父は次第に、妻にも娘たちにも関心がなくなっていった。年老いたのだ。生まれたときから、金持ちになれるはずがないと承知していた。生きること、そして死ぬことに、そんなことが必要だろうか。

伯父のルニスと、ヘリマそして従姉妹について、つけ加えることは大してない。私たちは隣り合って普通の隣人どうしのように暮らした。時がたつにつれて、互いに対してますます無関心になる。同じような心配の種、関心事も同じ、財産も同じくらいに乏しいというのを、私たちはよく知っていた。互いにうらやむような物は何も持っていないし、隠し立てするようなこともない。最初にあった情熱が、ヘリマや私の母をかりたてることもはやない。残ったのは、ぼんやりとした嫉妬心にすぎず、それだとて、私たちの貧しい生が同じであることに満足を見いだすようなものだった。

子どもを育てる労苦を前にして、二人の父のライバル意識も薄れていった。兄弟の様子は、二頭の老いたラバといったところだろうか。重い荷物を背に、わがカピリアの細い山道を汗して行く。試しにちょっと走らせて競争させてみるがいい！ラバというものは、すぐ興奮する。それに、何を期待されているかはわかっている。一方を走らせるために、もう一方がいるにすぎないということ。だが、荷物は重く道は険しい。老いたラバには、何の希望もない。歩くことだけだ。ラムダンとルニスもそんなだった。

従姉妹たちも、私の姉妹と同じく、いずれ結婚する。そうするのが当然だから。人は、同じように生まれ、結婚し、そして死ぬ。ときとして、それについて真剣に考えたりすると、ひとり悩むことになる。しかし、ほとんどすべての時間、人はなりゆきに任せて生きている。そのほうがいいのだ。

つまるところ、メンラッド家のちび助、ラムダンの息子でありルニスの甥である、私の子ども時代は、カピリアの多くの子どもたちと同じく、何事もなく平凡に過ぎていった。私はこの年齢からずっと記憶にあるかぎり、いつ思い出しても、魅力も、特別な思い出も感じない、いつも同じで生彩のない姿を留めていた。私は、ちゃんと洗濯をしてない色のさめた古びたガンドゥラを着ている。縁のほつれた汚らしいシェシュア帽をかぶり、靴はなく、ズボンもはいていない。私の記憶では、常に季節は夏だ。埃で真っ黒な足、垢の詰まった爪、果汁の染みがついた手、顔には乾いた汗の筋が長々となっている。目は赤く、まぶたははれぼったい。身体を洗う日には、やっと、いまのフルルになる、もちろん髭だけはないが。秀でた額、いくぶん短い濃い睫毛にしっかり守られた栗色の瞳、まなざしは穏やかだが腹の内に何か潜めているようだ。母から受け継いだ突き出たほお骨と細い鼻、父親似の薄い唇が三角形の顎の上に乗っかっている。いま、自分を教え子たちのなかに置いてみると、私はやはりいちばんひ弱でおとなしい子たちのなかに含まれ、労苦を恐れ、遊びを嫌い、常に何かを学び覚えることに悦びを見いだす子たちの部類に属する

ようだ。子ども時代の私の最良の思い出を探すなら、メンラッドの家のなかにではない。二人の

叔母の小さな巢のなかに、積もって埃をかぶった思い出がある。最良の？——であっても、いちばん悲しく心みだれる思い出が。

ハルティとナナという二人の叔母がいたことは、私にとって何物にも代えがたい幸運だったと思う。子どもというものは一般に、両親のやさしさなどさして大切なことだとは思っていない。子どもにとっては、至極当然だから。甘やかされて好きなように振る舞っていても、それについて考えることさえない。別の愛情にあこがれ異性の気を引こうとし、恋人を求める思はずとなつて、そのささやかな恋心を捧げたがる。信頼に足る人を見つげられるはずだと思ひ、たやすく母を裏切り、父よりも別の男を好くようになる。この無邪気な愛情は、大人たちの冷淡な態度にぶつかる。失望に、初めての悲嘆の源泉に出会うほかない。大家族のなかでは、兄弟はみなライバル、両親はといえば、日々食べるクスクスと一年に一回買うガンドウラの確保に常に頭を悩ませ働くのみである。子だくさんであるうえ、子らに対する親らしい愛情は表に出ることがなく、心の内に秘められたままだ。私には、両親から甘やかされるだけでなく、家の外にも心から愛を注ぐ人がいるという稀なる特権があった。幼年時代を思い出すだけで、いまもなお、私が過ごした叔母たちの

家のやさしい空気を感じる、かすかな哀惜の気持ちをともないながら。ナナは結婚していた。ものがわかるようになってすぐ、私はそれを知った。夫はフラン

スにいた。名はオマールといった。叔母たちはときおり、オマールを話題にしたが、いつでも悪口だった。ハルティは彼を少しも好いてはいなかった。ナナもそれに異を唱えることはできなかった。私の記憶のなかでは、オマールの顔は、常に、その母親の顔と重なってみえる。私は、彼女がアフメドの娘たちとの関係を再び結び直すまでは、オマールを知らなかった。見たところ、陶器はよく売れているようだ。老女は狡猾だった。オマールは、結婚して何か月かすると、ナナを捨ててフランスへと去ってしまい、ずっと向こうにいた。非はすべて男の側にあったが、姑は、息子をパリから帰らせると請け合った。みな、ナナの夫に会うのを拒否することもできず、さしたる考えもなしに二回会った。それでなおさら、彼は離婚に同意しようとはしなかった。姑がハルティに歓迎されていなかったことは確かだ。だが、心優しいヤミナにどうする事ができよう。彼女は、老女の話聞いてやり、おそらくはその胸の内を多少とも理解していた。彼女は若く、美しく、情深かった。夫のことはよくわかっていた、そして忘れることができなかったのだ。

そんなわけで、ことの次第をさして理解もしていなかったが、私は叔母たちの家でそれまで知らなかった老婆に会うようになった。その人は満面の笑みをたたえており、こちらから話しかけるとときには、敬語を使わねばならなかった。あの女の目を、いまも覚えている。大きくて黒いその目が私をじっと見ると、私はいらだった。彼女は、まなざしで人の衣服をはぎ取ってしまうのだった。私は老婆を怖れ、忌み嫌うようになった。蠟でできたような顔には直線が刻まれていた。まっすぐな鼻、縦に走る皺、とても大きな口の唇は薄い。ときおり笑うと、いっそう横に引き延ばされた口は、私には残酷な感じがした。

老婆が帰るときはいつでも、ナナかハルティが小さな包みを渡し、彼女はずっと笑みを浮かべたまま、それをガンドウラのなかの、腹のあたりにしまい込むのだった。包みは、無花果だったり、小麦粉や大麦だったりした。

オマールはほんとうに突然帰ってきて、私のやさしいナナを連れて行った。彼は空手のまま、年老いた両親の家に帰らざるをえなかった。というのも、否応なしに親の面倒見を引き受けることになったからだ。彼には、兄弟も姉妹もいたが、その人たちは彼に対して無関心と軽蔑の感情しか持たなかった。ナナも一緒に軽蔑された。というのは、一人残ったハルティには、老婆に渡せるものなど大してなかったからだ。オマールの兄弟は面倒なことはみな、彼に押しつけた。それはそうだ。兄弟はオマールが留守にしている間が一文にもならなかったその間、十分働いたのだから。おそらくオマールは、自分のパリでの生活については、悔いるところが大きかったのだろう。その使用人のような役割を果たすことに唯々諾々と従ったが、最終的には逃げ出す計画を練っていたのだった。彼は叔母にそのことを察するようし向け、叔母は叔母で、自分も苦勞と屈辱の多くを引き受けていた。

それやこれやがどれほどの期間続いたか、正確にはわからないが、春か夏のある晩のことだった。月明かりが照らしていた。ハルティとバヤと私は、あの狭苦しい中庭にいた。ハルティは私に、二十回目の糞泥棒の話をしていて、善良なる神は、夜陰にまぎれた泥棒の地上の歩みを、夜空に乳の道で印をつけて示そうとなさる。お話はほかにもバリエーションがあった。乳牛泥棒とか、ずるい粉屋とか。だが、考え方は同じだった。ハルティにとって、天の川はいつでも、夜に行われる怪しい行為に対する非難だった。

門扉が乱暴に叩かれて、バヤがすぐに開けた。オマールとナナが息を切らして駆け込んできた。ナナは大きな布の包みを背負っていた。中にはナナの衣類が全部入っていた。オマールはカラフルな色遣いの分厚い敷物の下に隠れた。片方の手に抱えた枕を胸に押しつけ、もう一方の手では、鮮やかな色の小箱を肩に載せたままだった。叔母はその中に、小さな装飾品や化粧石けんやブレスレット、首飾りを大切にしまってあった。その箱のことを私はよく知っていた。叔母は私に、この箱にだけは自由にさわらせてくれなかった。夫と一緒に行くとき、叔母はこの箱を持って行った。この引っ越しは何を意味しているのだろう。あわい月明かりのもと、私はハルティの目が喜びで輝き頬が赤らむのを見た。私は、叔母が秘密で行動しているのだということがわかった。私たちは五人そろって中に入り、荷物に混じって並んで座った。あんなに耳を澄ましたことはなかった。私はオマールから目が離せないでいた。彼は、ナナが織った美しいバーヌースの裾で額の汗をぬぐっていた。褐色の肌色をした小さな顔は線が引かれたようで、あの母親を思い出させた。きらきら光る黒い瞳、歯の抜けた口。彼は、せかせかと話した。子音のいくつかを独特の仕方で発音するので、文全体の意味からその語が探し当てられるのだった。彼は小柄でがっしりとしていたが痩せていた。かろうじてナナより背が高いくらいだった。私は彼を怖がっていたわけではないが、母親を嫌うのと同じに彼を嫌っていた。しかしながらその夜、彼は私に、哀れみの情を起こさせることさえできたのだった。彼はバーヌースの裾をずっと額に当てたまま、私が見ると、不意に首をうなだれて顔を隠した。肩が震え、胸元からしゃくりあげている。私たちは顔を見合わせた。泣いている。私たちはそれを黙って聞いていた。ナナは口をとがらせて、オマールの目に手をやった。オマールが顔を上げた。その顔はゆがんでいて、とても見られたものではなかった。私は、一人前の男が泣くのを見たことがなかった。信じられなかった。男が泣くとは、どういうことだろう。オマールはもはや一人前の人間ではなく、何の力もないのだと感じられた。彼は私に近づいていて、ほとんど

遊び仲間か友だちのようになっていた。ナナの涙を見ると、バヤと私も泣き始めた。ハルティは泣かなかった。彼女の怒りが爆発した。いまこそ、彼女が老女を捕まえ、これまでのありとあらゆる侮辱や不当な行為、意地の悪い言動のつけを払わせるときだった。そんな時に、泣いてなんになるろう。

「二人ともここにいたらいい、場所はあるから。あんたの身内は、あんたにもう何も期待してないんでしょ？ そう、それでいいじゃない。あの人たちに、自分が男だってことを見せつけてやったら。私たち二人で、あんたには不自由させるようなことはしないから。」

そう、確かに、ハルティは人の心を慰めるには適任だった。悔しさも手伝い、老女のせいもあって、彼女は一大決心をすることになる。その息子のために自分が犠牲になるのである。実際、オマールは心慰められ、叔母たちの家に居着いてしまった。叔母たちは、あの手この手で彼を甘やかした。そうすると、私が失ったものも大きかった。老女の方は、アフメドの娘たちが自分の息子を取り上げたと村中に言ってまわった。私の母はもはや機嫌のよいときがなくなり、父はそれまでにないほどむっとした様子だった。叔母たちはオマールのことになると、人の言う事に耳を貸さなかった。

叔母たちがオマールを渡航させる金をどうやって工面したか、私ははっきりとは知らない。彼は、ある日の朝、またフランスへと発った。長い間かかえていたであろう、すべて忘れたという思いとともに。みな、彼の話をしなくなった。いまはもう、亡くなったのだろう。みな、そう言う。私は、是非はともかく、彼をよく思っていない。彼は私に最悪の不幸をもたらした。

子どもの頃の思い出というのは、正確さに欠ける、脈絡もない。とりわけ印象的なくつかの場面が記憶に残っていて、いつも、この場面とあの場面が繋がって思い出されるのだ。とても鮮明に思い出すことのできる場面がある。それはこうだ。私だけが家で、母と一緒にいる。寒い日、冬だ。炉の中では、オリーブの小枝がぱちぱちと音を立てて燃え、明るい炎を上げている。炉の内側に寄りかかるようにしてくべられた大きな薪が、その先端を炎の上に傾けている。炎はそれを包み込むようにめらめらと燃え、薪は少しずつ黒くなっていき、ついには炎に焼き尽くされようとしている。ナナが入ってくる、寒そうだ。

私たちの方へ、炉の側へと近づいてくる。ナナはピンクの小花模様のついた白いガンドゥラを着て、腰には木綿の腰布^{フタ}を、帯の代わりに太い赤い紐で巻き付けている。大抵の人が使っているフランネルの帯をナナは好まなかった。ナナが近づいてくる。物憂げな様子で何も言わず、心配事があるようだ。寒さで赤くなった濡れた足を持ち上げて、火の上にかざす。ガンドゥラの裾に火がつかないようにしている。

「つらそうね？」母が言う。

「腰のあたりが引き裂かれるみたい」

「七か月だったかしら？」

「違う！ アシューラ 33 秋から冬への月の 10 日に行われる感謝祭。 から数えて、もう八か月になったわ」ナナが言う。

「あんたのお腹は心配ないよ」

「そう思う？ ちょっと小さいような気がするんだけど。多少食べ過ぎたくらいだって、言われるの。わかっているの、それで、私、傷つくんだわ」

母は確信なさそうに笑う。私は、ナナを見ている。青ざめた顔、はれぼったい口元、目の周りには隈ができています。どれをとっても、体調のよい人には見えない。

「最初の子は、それほどお腹が大きくはならないよ。いまにわかる。産んだらまた以前のようにきれいになるよ。きっと男の子だ！」

「姉さんたら！ 姉さんの三人の娘の時と同じかわからない。私はただ、神様にこの試練を通り抜けさせてくださいとお願いするだけ。昨日から何度も痛みが襲ってきて、私すごく心配なの。それで姉さんに会いにきたの。」

「何も心配しなくていいよ。痛みのことばかり考えるのはおやめ。」母は言う。

「悪い夢ばかり見る。この間だったかしら、広場の方から双子の女の子を産んだ人の声が聞こえた。」

「かわいい子、あんたは、神様の手の中にいる。悪い事なんかしたことがない。今度は神様がご褒美を下さる番だよ。それに、私がいる。助けになるよ。大丈夫だから。」

二人は、ときおりこもるような声で語を発し、長いこと話していた。私にはよく理解できなかつた。それから、ナナはお腹を見せたはずだ。そこには、恥じらいやためらいはなかつた。私の血は、ふたりの血と同じだった。私と二人はひとつに混じり合っていた。

私の記憶の映画のなかでは、これはただちに次のような場面に繋がっている。冬の夕方、雨が降っている。道はぬかるんで、雨滴が音を立てる。泥水が細い川となって、道路を舗装した石板を縁取るように流れていく。小さな低い家々はよりいっそう低く見え、悲しげに肩を寄せ合い、暗くなる前から降りていた霧に沈み込むように紛れてかすんでいる。私は、叔母たちの家に入っていく。大勢の人がいる。小さな灯油ランプが炉の上でもくもく煙を立て、炉の中では薪が一本燃えつきようとしている。バヤが私の前にやってくる、心配そうな様子で、口の前に人差し指を立てる。私はそこにいることに固執する。イヤだ！ 出ていかない。母は口を結んでナナを腋の下から支え、立ち上がらせて歩かせようとしている。女たちが何人かいてさえぎられ、ナナの顔は見えない。ひとりが必死の母の手助けをする。ハルティは、古い皿を火に掛けて何か燃やし始める、強いにおいがする。年取った女が、短い強い調子で命令を下している。ハルティの美しい目が私にじっと注がれているが、私を見てはいない。私は逃げ出す。

「明日、ナナの子どもに会えるよ」。私が家に帰ると、ティティが私の耳元でささやく。

ほかには何も覚えていない。家でしたことも、母がいないのに私たちがどうやって寝たのかも、夜の間に起こったことも、何も覚えていない。私は、母と姉妹たちの叫び声で不意に目を覚まされた。私のやさしいナナが、ついさっ

き息を引き取ったのだった。私はずっと、あの叫び声と、胸を締めつける、この上ない不安を忘れることはないだろう！ 私はおののき、寝床から身を起こし、恐ろしさにうめいた。死を前にして女たちがあげる悲嘆の声を聞く度に、私はわれ知らずおののき震えるが、それはいつも、叔母の死を知らされたあの悲痛な目覚めを思い出されるからだ。

叔母は一昼夜苦しんで亡くなった。取り乱す姉たちの腕に抱かれたまま。叔母は、冷たくなった哀れなものを産み落としたが、それは、墓場へと彼女について行った。いや、それが彼女を墓へと引きずって行ったのだ！ 宵のうち、小さな亡骸なきはその母親に張りついていたままだった。ナナは少しずつ衰弱していき、意識は刻々と薄れていった。間もなく、彼女はすっかり弱り切ってしまった。腹の中で、何かが破裂したような音がして、瓶をひ

っくり返したときのように、どくどくと血が流れた。あと少しの努力でうまくいけば、そので
きの悪い子は完全に切り離されたかもしれない。神は私の叔母を哀れまなかった。命の舞台は
死の幕切れを迎えたのだ。彼女は朝まで瀕死の状態だったが、最後の星とともに静かに消えて
いった。

婚礼の敷物の上に横たえられ、白い布を掛けられたナナの姿が目には浮かぶ。黄色い絹の
スカーフが顎を支え、彼女の小さな顔をぐるりと取り巻いている。目は閉じられ、鼻がつ
まんであって、顔色はスカーフと同じくらい黄色い。眠っているのではないと、私にはは
っきりわかる。彼女は寝ているかのように見える、が、眠りにもいろいろある。疲労困憊
の重く沈む眠り、穏やかに休らう健康な眠り、病人の辛い眠り。死は違う。死について考
え、多くの死を目にして後に、私はいま改めて思う。ナナの顔は無表情だった。微笑みも
憤りの名残もなく、苦痛も安らぎの現れもない。無。それこそが死である。親しき者の死、も
はやどこにも、その存在を私たちに結びつけるものはない。亡骸よりも、いつもの場所
に掛けてあるバーヌースのほうが、それを身につけていた者を思い出させる。やさしかつた
ナナの顔は何を語っているのか？ みなに愛され、みなに微笑みかけたあの美しい顔は。死
が何もかも持ち去った。死は、想像の及ばない無関心の仮面を残した。それは、動かし
がたい壁のように立ちはだかり、私たちの痛みは惨めにも跳ね返されて反響すら残さない。

村の人々にとって、私たちに起こったことは、日々の出来事の域を出なかった。死が、花の盛りにある人を連れ去ることはよくある。人々は一週間、声がかれるまで嘆き悲しみ、それからわれに返って確かめ合う。われわれは逝ってしまった者の後に残された。とにもかくにも、不幸を癒す薬はない。運命の神の非情な大時計を変えることはできないのだから。だから、薬のない不幸には耐えることができるのだと。

私の母は兄が姉妹が母が父が死んでいくのを見た。彼女は悲痛と沈黙に馴染んだ。道の端に生え出た樫の木にも似て、悪天候も、新芽をやたらと食い荒らす山羊も、情け容赦もなく傷をつける羊飼いのフォークをも忍んで、頑強に土にしがみつき、かろうじて生育していた。母は、口をきつと結んで事に当たる習慣を身につけた。苦もなく禁欲的であったが、あるいは感情が磨滅していたのかもしれない。今度の辛い出来事も、これまでと同じように耐え、忘れようと努めながらまた生きていこうとするにちがいない。

だが、ハルティにとって、事は違っていた。彼女にとってナナは妹以上のものだった。彼女自身の一部、最良の部分だったのだ。ナナが亡くなったことがわかると、ハルティのまなざしはじっとしたまま動かなくなった。異様だった。じっと何かを見つめているが何も見えていないようで、自動人形のように、誰の問いかけにも答えず、何も聞こえていない様子だった。昼の間は、涙と悲嘆のただ中にいても、ハルティは泣かなかった。亡くなった者の足下に座り込み、弔問客の出入りにも埋葬の準備にも無関心で、彫像のように凝然としていた。何もかもを私の母がしていたが、ときおりハルティを振り返っては、恐ろしい物を見るような視線を向けていた。清めをする人にナナの身支度を依頼するために出かける時間が来た。どれほど懇願しても、ハルティは動こうとしなかった。ハルティに道理を納得させようとしても無理だった。彼女は、物にも人にも、夢遊病者の視線を当てていた。ときおり、ハルティの顔の筋肉がふるえるのが見えた。まぶたが激しく上下し、手がガンドウラの袖をあわただしく引っ張るのだが、また、全身が硬直してしまうのだった。遺体の運び手たちがやってきてナナの亡骸を持ち上げたとき、ハルティの目から涙があふれ出た。だが、それは冷たい涙とでも言おうか、表情も声も何もともなわなかった。

近親の女たちが亡くなった人に村の外までついて行くのが習わしだった。私の母、姉妹たち、従姉妹たち、アイト・ムッサの女たち全員が、善女ヤミナの葬列に付き従った。ナナはティジの大墓地へと向かう。ミミズクや幽霊の住まう樹齢何百年のオリーブの木の下を通過して、そのやさしさも微笑みも聡明さもともに持ち去っていった。女たちはみな、その人柄をしのんで泣いていた。もしナナが、これほどまでに大勢人が集まったのを見るこ

とができたなら、いくらかは死出の旅立ちの慰めになったことだろう。しかし、ハルティは葬列に加わらなかった。母と姉たちがハルティが本当にいないことに気がついたときには、もう遅かった。ハルティは何としても家から出ようとしなかった。門に鍵を掛け玄関の扉にも鍵を掛けてしまっていた。私たちが、どれほど門扉を叩き名を呼んで懇願しても無駄だった。ハルティは私たちの嘆きに何の関心もなく、この世にはもはや、彼女を生者に結びつけるものは何もないかのようにだった。懇願することに倦み飽き、新たな不幸の予感に、今度は母が憤る番だった。怒りが哀れみにとってかわった。それは、傷つき弱り切ったハルティの心ではなく、新たな犠牲をも否まない無慈悲な成り行きに対する、御しがたい反逆の感情だった。

「おいで、子どもたち」母は、私の手を引きながら言った。「神よ、私はあんたにあの子を預けるわ。好きなようにしたらいい。あの子の望んでいるのは、それがすべて。こんなひどいことになって、私に何ができて？ ああ！ あんたの勝利はたやすいわ。だけど益体もない」

私たちは、悲しみに暮れたまま家に帰った。伯父、父、近所の心配になった女たちが閉まった扉越しに話しかけて答えさせようとしたが無駄だった。夜が近づいてくると、母は、迷信家の妹がたった一人で死者の思い出とともに寝るのかと思うと、泣かずにはいられなかった。もう一度、母は出かけて行って頼んだ。耳を澄まして聞くと、叔母は歩き回っているようだ。母は厳しい調子で話した。あんたは、気力を欠き、神に背き、残された者たちにつれない仕打ちをしている、わがままだと。そして、何とか扉を開けさせて、今晚はわが家に来て過ごすか、そこで私たちも一緒に寝るか、どちらかにさせようとした。ハルティは動くのを止めた。もう何も聞こえなくなったので、私たちはそのままにして帰った。夜中ごろ、ハルティは、気味の悪い笑い声をたてながら独り言を言い始めた。間もなく、ハルティは家財道具を放り投げたり、拳で瓶を叩いたりしてもものすごい音を立て始めた。それから、俗謡の節で予言者を称えるかと思うと、死者を悼むメロペで乙女の美しさを褒めちぎるといった具合に、聖歌といわず猥歌といわず、割れんばかりの声で歌い始めた。近所の者たちはみな目が覚めてしまい、家にやってきて、ハルティはおかしくなってしまったのではないかと、言った。私たちは黙ったまま

悲しい心持ちで、夜が明けるのを門前の道で待った。夜が明けかけた頃、叔母が大声で笑いながら門を開けた。私たちは急いで中に入った。何という有り様！物がごちゃごちゃになって床に散乱し、棚は空っぽで、寝床はぐちゃぐちゃになっていた。朝の弱い光の中、至る所に、衣類や家財道具がとり散らかっている。大きな水瓶はひっくり返って、敷居が水浸しになっていた。

穀物や乾無花果をし
アクフィ(まっておく大きな壺)は横倒しになって、胴の太い部分が半分大麦の山に埋もれていた。この無秩序の真ん中に、ハルティはすくと立っていた。ばさばさの髪が肩に落ちて背中に拵がっている。そんなハルティは美しかった。母も女たちもそう思ったが、また、彼女が発狂してしまったこともわかったのだ。みな泣いた。母が心配した通りの新たな不幸だった。前日と同じように、人が大勢駆けつけ、小さな中庭はいっぱいになった。みんな、アフメドの娘たちの、うち続く不幸をそのまま終わらせたくなかった。

やってきた人たちは私たちに、この狂気はきっと一過性のものだと、言った。これまでも同じようなことはあったのだ。私たち家族はといえば、みなそろって互いにびったりと身を寄せ合い、中庭にいた。ハルティを見守り、その何も語らないまなざしに、ほんのわ

ずかなりともと理性の影を探し、その支離滅裂で絶望的なことばに意味を見いだそうとした。

おそらく夜の間にさんざん暴れて疲れたのだろう、ハルティは玄関の敷居に座り込んで、やってきた人々を横柄に眺めていた。ときおり、胸のあたりに三つ編みにした髪をもってきて、その美しい髪を結んでもてあそんだ。かと思うと、引きつった苦しそうな笑い声を立てて、強く引っ張り、握って放り投げるようにした。彼女のほっそりとした脚が大きく広げられてはしたない感じだったので、私の母が見苦しくないように閉じさせようとした。叔母は不満げにぶつぶつ言い、急にガンドウラの裾をまくり上げたのでお腹が丸見えになった。男たちは目をそらし、狂女の前に女たちだけを残して、首を振りながら出て行った。ハルティはうなだれた。何を思っているのかわからなかった。私たちは、どんな身振りも見逃すまいとして、注意深く彼女を見守った。彼女は、意識の、何やら神秘的な残存のおかげで、そのことがわかっているように見えた。いや、また別のひどい仕打ちを用意していて、そのみせかけの従順さは、意図してそのように見せていたのかもしれない。母の目に希望の光が見え、私の手をとって、一緒にハルティに近づき、落ち着きを取り戻させようとした。

「ほら、あんたのかわいい友だちが来てるよ。全然こわがってなんかいない」彼女は目を上げて、見たこともないようなまなざしで私を見た。その目は、私をそれと認めることを拒否していた。そして、奇妙な光を放つかと思えば見えない膜に覆われて光を失うといった具合に、くるくると変化していた。私にじっとそそがれたまなざしは私のなかに侵入し、そして私から離れてどこへともなくさまよっていった。狂気にとらわれた者の目の悲しさ！私はその目に、深く感じ入らずにはいられない。その目だけが魂の苦悩を映し、混乱しながらも、もはや無くしてしまった感情と理性を探している。だからこそ、その目は凶暴で、自ら怖れ、人に怖れと哀れみの感情を起こさせるのだ。なぜ、神は狂気にとりつかれた者を盲目にしまおうとなさらないのだろうか？ そうすれば、彼らの耐え難い苦しみも少しは軽くなるのではなかろうか。

私をこの上なく慈しみかわいがったひと、私にとって、やさしさと憧憬の源であったひとを前にして、私はおびえ震えた。勇敢さを讃えること哀れみの情をもって泣くことを教えてくれたそのひとの前で勇気を欠いていた。彼女にそれがわかったのだろうか、あるいは、臆病な私を罰する偶然が働いたのだろうか？叔母は、私をむんずと掴むと、私の両頬にしっかりと唇を押し当てて接吻した。そして振り返り、バカのように笑い始めた。

女たちは、この熱のこもった抱擁に心を打たれて、ことばを交わしあっていた。その瞬間を選んだかのように、狂女は二歩跳んで中庭をつつきり、道の曲がり角に姿を消してしまった。私たちは急いで彼女を追いかけて行った。彼女は一目山に行く。帯を締めてないガンドウラが踵のあたりでばたばた音を立て、髪が両肩に翻った。行く手をふさいでいた男の子たちは、彼女が進んで行くと二手に分かれた。ひとりの老女が止めようとして、乱暴にひっくり返された。彼女は私たちを従えて村の外まで行った。しかし、警報が出されたので、従兄弟たちが後を追ってつかまえ、蹴る毟るの大暴れをし、叫び罵る彼女を、どうにか連れ戻した。

ハルティは、あの小さな家ではなく、私の両親の家に連れ戻された。門に鍵を掛け、彼女と私たち家族だけになった。その目はらんと輝き、朝の風に打たれた頬は光って

いた。私たちに対しては横柄な態度で、あたかも、復讐の脅しを掛けている容赦ない敵の ような感じだった。私の父のしかめ面の前でだけは目を伏せおとなしくしていたので、私 たちは、父が家にいてくれるようにと望んだ。というのも、私たちはハルティをこわがる ようになって いたからだった。それでも、父には仕事があったから出かけないわけにはい かなかった。

ハルティが、嬉しそうにせせら笑った。あの時のことを、私はいまでも覚えている。ハ ルティは手回し車の横で壁に寄りかかっていた。私は、やや離れたところ、出入り口の真 向かいに いて、いつでもすりと逃げ出せる状態だった。ティティも、私のいる場所が有 利だと判断し たに違いない。家のなかを横切って、私の隣に来ようとした。叔母の前を行 きすぎようとした 瞬間、彼女は乱暴に髪の毛をつかまれた。

「おいで、私のかわいい子、おばちゃんを怖がらないで！」 ティティは、恐怖の叫び声を 上げながら、床に崩れ落ちた。私はバヤについて、家の外 へ走り出た。母が割ってはいると、今度は彼女がつかまれる番だった。私たちが叫び声を あげ たので、ヘリマやその娘たち、近所の女たちがやってきた。女たちは、どうにかハル ティを抑 えつけ、父が帰ってくるまで、そろって彼女を見張っていた。

何と悲しい日々を私たちは過ごしたことだろう！ ハルティに起こったことは、私たち に、かわいそうなナナを、墓をおおったばかりだというのに、ほとんど忘れさせてしまう ほどだった。私たちはもはや、途方もない当惑のなかに置かれていた。ハルティを、どう したらいいのだろうか？ 私たちには、家は一軒しかない。どの部屋にハルティを住まわせ たらいいのだろうか？ 住まわせるというより、閉じこめたら？ ハルティが暴れたり逃げ 出 したりしないようにするためには、閉じこめなくてはならなかった。父がとくに気に掛 けていたのは、逃亡だった。父が伯父たちとその事を話すのを、私は聞いた。彼らは、叔 母が逃亡した場合の最悪の事態を怖れていたのだった。何が起こるかかわからないではな いか。彼女はまだ若い。どこかよその知らない所に行ってしまって家族の名誉を汚さないと もか ぎらない。知らない人たちが、狂女に寛大に接してくれようとするだろうか？ それ は、 家族にとっての責任だった。それにまだある。子どもたちにとって、ハルティは危険 な存 在になっていた。彼女はすぐに怒り狂った。大人が彼女と一緒にいつも家にいられる はず もなかった。唯一の解決法は、彼女が治るまで、あるいはもう少し穏やかになるまで、 足を結 わえておくことだった。

翌日から、私の両親は、畑に行くときには、ティティと私にハルティを託した。彼女の 足は山羊の毛で縋った綱で結わえられ、その先は腰に回されて、それから屋根裏を支える 柱に縛り付けられた。彼女はそれで身動きがとれなくなったが、私たち子どもの目にもか わいそうに映った。私は覚えている。姉は泣くのも忘れて叔母をじっと見つめ、私たちは、 母 とバヤが帰ってくるまでは、一瞬たりとも彼女を見捨てて遊びに出かけることを拒否し た。

夜は、私は姉妹たちと一緒に屋根裏部屋で寝た。父はハルティの縄をほどいて、食事を する よう命令した。その話し方は威圧的だった。二人とも恐ろしげな様子をして、まなざ しで互い を探り合っていた。ハルティが叫び始め、父はそのまま好きにさせておいた。不 意に、彼女は クスクスの皿をつかみ、手でがつつ食べた。スプーンが足下に落ちた。一 瞬の気配があり、 皿が空になり、父が駆けつける前に、ハルティは皿を扉に向かって投げ

つけた。皿は粉々に飛び散った。母は深く悲しんだが、全てはまだ始まりでしかなかった。私たちは気のふれた人を引き取って世話をし、その気まぐれにつきあえるような状態にはなかった。私の両親にとって、事はあまりに酷いものだった。まず、彼らは代わる代わるに寝ずの番をしなくてはならなかった。一晩中起きていて、ハルティが悪さをしないか、家に火を付けたり、油の入った壺をひっくり返したり、羊や、もっといえば自分の甥っ子の首をしめたりしないか、近くで見張っていなくてはならなかった。それに、ハルティは手は自由に使えたので、自分のガンドウラを小さく裂いて遊び、切れ端を身体に巻きつけた。そうして、自分の姉を窮地に追いつめた。かわいそうなナナの形見のガンドウラを破いてしまったら、もう着る物は何もなくなってしまい、私の父は、ハルティに新しい衣類を買ってやることのできるような状態ではなかった。そうしているうちに、繊細だったハルティは、嫌悪を抱かせるような存在になっていった。水を火と同じように恐れ、誰かが髪をとかそうとしても断固拒否し、その場で用便した。このおぞましい日々の間、私たちの家はかつてないほどに汚くなった。妙なことだが、ハルティは与えられた物を全部むさぼり食い、以前よりもずっと元気になっていた。彼女は太り始め、血色もよくなり、その声はよく響いた。まるで動物そのもので、理性は戻ってはこなかった。反対に、私の母は消耗しきって、縮んでいった。近所の女たちは母に同情したが、同情は大して私たちの助けにはならなかった。私たちはハルティを哀れに思うのをとうに止めてしまっていた。それは、自分たちは、ハルティよりもっと哀れだと思っていたからだ。私たちは、何でもよい、解放を願っていた。

私は、あるとき突然に叔母が穏やかになったのを覚えている。意気消沈したとでも言おうか。みな彼女にかまわなくなった。彼女は朝から扉の側の石でできた小さな長椅子に陣取り、そこで一日を過ごすようになった。そうして、終わりのない夢幻に浸っていた。その襦袢着の上には太ったシラミがいっぱい付いていて、冬のやわらかい日差しで身を暖めていた。叔母には話しかけてもさわってもいけなかった。母が言うには、それは満月のせいだった。満月までの一週間と新月の時期には、狂気の激しい発作がまたやってくるのではないかと、母は恐れていた。隣近所では女たちが、精霊がハルティを魔女の秘密へと導いているところなのだと言いつつ合っていた。間もなく、彼女は未来を予言し始め、それであちこちから家族を養うお金をもらえるようになるというのだ。

打ち明けて言うと、父はこの迷信を聞いて大いに気をよくしていた。それほどに、わが家は生活が苦しかったのだ。母の方は、こんな不幸から利益を引き出そうという考えに反発した。母はアフメドの娘が魔女になることを望まなかった。それよりは、貧乏のほうがまし、もっと言うなら狂女の死のほうがましだった！母がしたかったのは、妹をどこかの教団の、評判のいいマラブーの元へ連れて行って、お祓いをしてもらうことだった。しかし、母は老師の力をそれほど信じていたわけではなかったし、父が行くとして、気の狂った若い娘を連れて旅をする苦労は並大抵ではなかった。お金と家畜と同行者が必要で、畑と家族を後に残して、仕事は中断せねばならなかった。不測の事態がおこる危険も覚悟して、しかも、治癒にはそれほどの期待は持てなかったのである。

ハルティの態度が攻撃的でなくなったことに安堵して、メンラッドの者たちは次第にそれまでの生活に戻っていった。仕事や日々の煩いはいっぱいあったので、私の親たちは狂女のことを忘れることもあったし、家で顔を合わせない限りは彼女のことを考えないよう

になっていった。間もなくそれは、養わなければならない、一つ余計な口にすぎなくなり、家族みな、回復の希望をだんだんと失って行き、彼女を見張る習慣も止めてしまった。ハルティはひとりで外に出て、近所の家をあちこち訪ね歩くようになった。いつも、彼女は行き当たりばったりどこかの家の門を開け、敷居の所に立ちつくし、何も言わないでいた。女たちは、彼女に何か喋らせようとしたが、無駄だった。何か差し出されると、ハルティはいつでもよいような態度で手を出したが、視線はいつもどこか遠くに行っていた。ある日の夕方のこと、ファトゥマとバヤ、そしてラムダンが家に帰ってみると、ハルティはいなかった。ティティは、小さなザズウをおんぶして日がな一日中庭にいたが、両親が出かけてからしばらくして、叔母が出て行くのを見たと言い、私は私で、十時頃、学校の前を通り過ぎようとするハルティを止めようとしたのだった。

「妹に会いに行かせて」と、ハルティは私に言ったのだった。私の話を聞いた母の目に、涙が浮かんだ。ハルティが亡くなった人のことを言ったのは初めてだった。これは回復の兆しだろうか？ 墓地までは、学校からも相当の距離がある。ナナの墓で叔母を見つけられるのではないかという希望を抱いて、父は私とティティも伴って、墓地へと急いだ。母はそうに違いないと信じていた。なのに、墓には誰もいなかった。その界隈を聞いて回ることにしたが、やはり何もわからなかった。一時間ほども探したのだろうか、ひとりの羊飼いか、アマルウの方に向かうハルティを見た、父が聞いてきた。

アマルウはアフメドが三人の娘に残した、オリーブと無花果の畑だ。深い谷の窪地にある、いかにも小さい区画だった。谷底には急流が曲がりくねって流れ、狭い川床は石が多くぼこぼこしている。村からアマルウへは、両側に茨や乳香樹の低木が生えたごく細い道がジグザグに通っていた。そこを下っていくには三十分かかり、戻りは登りになるので一時間以上かかる。その時は三月だった。外はほとんど暮れていた。父は一日働いて疲れていたもので、アマルウまで降りて行って狂女を連れてくる気力がなかった。それに、いまは彼女もずいぶん穏やかになっている。その地所の端には、アフメドの娘たちが、売る前の稜の束を蓄えておくための小さな藁葺きの掘っ立て小屋があったが、ハルティはそこで一晩過ごすのではないかと考えられた。ハルティは、その区画のちっぽけな端っこを知っていたので、母が、妹はきっと本能的に藁葺き小屋に行き、そこで寝るにちがいないと主張した。それに、きれいな星を見て、高く茂った草原で一晩過ごせば、狂女の妄想も鎮まるのではないかと言うのだ。また、厄介事が起きるのだろうか？ 家のなかには、いささかの不機嫌と倦怠の空気があった。結局、誰もそれほど心配してはいなかった。

夜の間、天気が突然変わった。三月には決まってそういうことがあった。雨が降り始めた。雨滴がばらばらと屋根を叩き、風が陰鬱な音をたてながら小路を吹き抜け、戸のすきまから吹き込んだ。母はハルティのことを気にし始めた。父が気を鎮めさせようとしたが、母はよくない虫の知らせを感じていたようだった。それに聞き飽き、困惑して、父は起きあがり、着替えて外に出て行った。父が伯父を呼び、話をしているのが聞こえた。二人は、ほかに従兄弟たちも呼び、そろってわが家に来て話をした。五、六人はいたのだろうか。みんな皮のサンダルを履き、古いバーヌースで身を包み、フードで頭を覆っていた。布の端を首の後ろで結んである。暗い中を行くので、棍棒を携えていた。その間にも雨は激しさを募らせ、出かける時には、大きな雨粒が、まるで雹の一斉連射のようにとぎれなく落ち

ていた。男たちは夜の闇の中に分け入っていき、私たちは不安な気持ちのまま取り残された。出かける者たちも悲しげで黙りがちで、ぬかるんだ小さな沼の間を、亡霊の行進のように一列になって難儀そうに進んでいった。われわれの村がその頂にしがみついている丘の麓から、彼らはアマルウの急流がうなり、怒りの声を上げるのを聞いた。

朝、私が目覚めてみると、扉の側の壁に打ち付けられた釘に、父のバーヌースが掛けてあった。濡れて汚れ、敷居の上に雫が落ちていた。父は布団に入っているいつもの場所で寝ている。母の目は赤かった。ハルティは見つからなかった。二度と再びハルティには会えず、彼女の失踪は、家族にとって謎のまま終わることになる。私自身は、ハルティは、藁葺き小屋から遠くない所を流れている激流にさらわれて命を落としたのだらうと考えている。ティジ・ウズの平原では、セバウ河やその支流が、ときに、その茫々たる広い川岸に、ふくれあがった死体を流れ着かせることがある。その腹はボールのようにふくれ、身体の至る所に青あざがある。まぶたは黒ずみ、唇もふくらんで、やはり腫れた舌が口から半分ぞいでいる。ハルティも、あんな風に、河によって放り出されたのだらうか？ 私たちはついに知ることがなかった。死体が発見されると、村から村へと報せがもたらされ、身元が確認できれば家に連れ帰り、しきたりにのっとって葬儀が行われる。そうでなければ、死者がどう葬られたのかは神のみぞ知ることで、家族はいなくなった者を待つことを止める。

それこそが、私たちに起こったことだった。一週間にわたって捜索したが、ハルティの痕跡は何もなかった。彼女が果樹園の方へ降りていったのは確かだらうか、疑わしい、ということにさえなった。女たちがもう一つの話をサポートするようになると、件の羊飼いはもう何も話さなくなった。ハルティが学校の前を通ったとき口にしたことについて、私は何も嘘を言ってはいなかった。女たちは性急に結論づけたのだ。狂気にとりつかれたハルティは、聖書時代の聖女のようなもので、あたかも住まいを移すような、世俗のやり方である世へと行ってしまい、こよなく愛した妹と一緒にになったのだと。良識ある者たちは、そんなことをいささかも信じなかったし、私の母は、妹をさらっていった恐ろしい死を悼み悲しんだ。

私たちがハルティの死をひどく悲しんだといえば、それは誇張にすぎるだらう。ナナの死以来、私たちが堪え忍ばなくてはならなかった憂いを別としても、家のなかには常に喪に服していたようなものだった。心配と哀れみの情はあったが、それとは別に、私たちはそんな状態に、どちらかと言えば疲れきり、いくらかの喜び、いくらかの幸福を切に望んでいたのである。この新たな喪失にひどく感じ入ったのは母だけだった。母は、家族の木の最後の分枝が落ちていくのが見えると言っていた。かわいそうな、枯れ木の小枝、これからは、母がその唯一の枝だった。彼女には夫の屋根の下以外に隠れる場所もないし、子どもたちのほかには愛する者もない。ときに、母は、妹を粗末に扱った自分を責めもした。私たち子どももまた、大きなものを失ったことを理解していた。叔母たちの小さな家は、父が隣家に売り、その人たちは境界になっていた塀をすぐ取り壊してしまった。私たちは、悲劇のあった果樹園に関心を持たなくなった。ムッサ一族の従兄弟たちがそこを売り、金はみんな分けた。もはや私たちのよき隠れ家、愛すべき巣はなくなった。両親のほかに私たちが愛してくれる者、私たちに関心を持つ者もなくなった。私たちは、父母のもとに

おずおずと身を寄せ合うしかなくなったのだった。

長 男

今日では、私の両親が矜持をもって
粛々と堪え忍んだこの貧困は、私の
誇りである。しかしあの時、私は恥
ずかしさを感じ、精一杯、その感情
を隠そうとしていたのだ。なんと恐
ろしい虚栄心だろう！

ミシュレ

みなさん、お読みいただけただろうか。以上が、メンラッド・フルルの罫線のある分厚いノートにあった断片である。この書き物の存在を知って読者にそれを知らせた語り手は、その後、この話を最後まで仕上げようと考えた。慎重さからか遠慮からかフルルが沈黙したこと、ひとりの友人にペンを渡したことを繰り返す必要があるだろうか。この友は、フルルのことなら何一つ知らないことはない、好奇心旺盛でおしゃべりな兄弟で、悪意などは毛ほどもない。誰もがほほえみを向けるし、誰に責められることもなく、フルルを裏切ることもない。

フルルよ、おまえについて全てが語られるとき、おまえはもう生きることを止めていよう。人生とは、何とも短いものなのだから。おまえの子どもたち、そのまた子どもたちは、おまえの苦しみを知るだろうか？ 彼らがそれを知るのはよいことに違いあるまい。しかしまた、彼らにも苦しみがあり、愛する者があり、抗するものがあるだろう。彼らに与えるにふさわしいのはどんな教訓だろう。「教訓だって？ 教訓などありはしない」。おまえはつぶやく。どこか諦めたような、おまえの穏やかな笑顔が目に見えぬ。語り手が口をつぐむことを、おまえは望むだろう。しかし、その者のするがままにまかせよう。彼は幻想をたくさん抱いているのではなく、おまえをととても愛しているのだから。そして、おまえの人生を、ほかの多くの者たちと同じような人生を語るだろう。それとともに、フルルよ、おまえが野心家であることや、身を立てることができたゆえに、それができなかった人たちを多少とも軽蔑しているのではないかということ、そういうお前だけの事情も語るだろう。フルル、おまえは間違っているのではないか。というのは、おまえは、特殊なひとつの例にすぎず、教訓はそうでない人々こそが与えるものなのだから。

フルルが叔母たちを失った年、家族の者みなが少しでも幸せがあるようにと願ったその年のこと、弟が生まれて、ダダールと名づけられた。そのことが刺激となってヘリマは怒りの気持ちをもったが、だからといってどうなるものでもなかった。

フルルは一人息子の地位を失ったが、将来、小さな弟が大きくなったときには責任を負う、長男という立場になったのだと言い聞かされた。さしあたっては、得をすることがたくさんあった。まず、母が産後の肥立ちをよくするために食べる栄養のあるものすべて

(卵、肉、パン)の分け前に与った。その後、何を分けるにも弟の分というものがあったが、実際には弟に与えるように見えて、その手はフルルの方へと向けられるのだった。フルルはほかの者たちの倍を受け取るようになった。姉妹たちは何も言わなかった。弟は自分のところに来る物を、長男に譲ることができる。姉妹にとっては残念だが、女の子だから仕方がない。

これで、メンラッド家の者が勢揃いになった。七人家族である。働き稼ぐのは、たったひとりだった。父親だ。彼は悪魔のように猛烈に奮闘し、一日たりとも無為に過ごさず、自らにも家族の他の者にも贅沢を一切許さなかった。やたらに物入りの《イード》が近づくと、彼はひどく心配になった。食糧がどんどん減っていく冬が近づいてくると、また不安でたまらなくなる。フルルと弟、姉妹たちはぐんぐん大きくなっていく。しかし、このころは、ともかくも平安な時期だったようで、フルルにはあまりはっきりとした記憶がない。はっきりと覚えているのは子ども時代でも、よくない時のことである。

十一歳頃のことだった。父親がひどい疲労から重い病気になった。それは、無花果収穫期の終わり頃のことだった。ラムダンはそれまで、畑で寝ずの番をして無花果の乾燥場を見張っていた。ある朝、彼は坂を上って家へ帰ってきたが、目は落ちくぼみ、身体は熱く、唇は血の気がなかった。彼はうめき声をあげて、自分がやっとのことで背負って運んできた、トネリコの葉がつまった袋の上に崩れ落ちてしまう。急いで敷物が敷かれ上掛けが掛けられ、ぺちゃんこになったまるい枕があてがわれる。彼は横になって、何も食べたがらない。ずっと、うめき続けている。妻は、そのうちよくなるだろうと思う。娘たちは、泣かなくてはならない事になっているのか考える。フルルは、当面、自分の事ではないので、知らぬ顔をしている。それに、彼の父親は強健だ。病気で参ってしまうようなことはないだろう。

「牛たちが今夜食べるものが何もないの、わかってるわね？」と母が聞いた。「ねえ、あんた、本当に今日は袋を一杯にはできないのね？」

「だめだ、具合が悪い。子どもたちと一緒に畑に行ってくれ。真ん中のトネリコに上れ。枝振りがいちばんゆるくて上りやすい。いちばん最後の餌のつもりでとっておいたんだが。こんな様だから、あれに上れ。フルルを上らせないように。あいつは牛たちに水を飲ませに行かにならん。少し眠らせてくれ。子どもらを外で遊ばせてくれないか。」

母親は、夕方帰ってくる。そして、夫を煩わせる。

「よくなるんやない？ 杖をつけば、家の無花果の番をしに行けるんじゃないの。あんたが歩いているところを見せるだけでいいんだから。あんたの姿があれば、盗人は近づかない。」

「兄さんと呼んでくれ。今夜は代わりにやってくれるだろう。なあ、兄さんに来るように言ってくれ。ちびを使いに出せばいい。水をくれないか。」

「痛いところがあるなら、手で揉もうか？」

「いや、体中が痛いんだ」

「葡萄はどう？ それより、うんと酸っぱい牛乳といっしょにクスクスを食べる？ しゅきっとするでしょう！」

ラムダンはもはや何も言わない。目を閉じて、兄が来るまでそのままだ。ルニスもまた、大したことはあるまいと請け合う。彼が畑に行き寝ずの番をするが、明日の早朝には遠方に発ち、一週間は帰らない。

夜になって、病人は様子がおかしくなる。言うことが支離滅裂で、亡くなった母親に話しかける。息が苦しそうだ。誰だかわからない、見えない人に向かって罵りの言葉を浴びせる。その者たちが自分を脅しているというのだ。妻は寝ないでいる、子どもたちも起きている。みな無言で震えている。

「魔神たちの仕業だよ」と母が言う。「父さんは、一時間も魔神と闘っている」フルルは身をすくめる、魔神がそこにいる自分に気がつかないように。魔神たちは父を打ちのめした。恐ろしく強いのだ！翌朝、彼は、いつもなら好きだけ寝ているのに、日の出とともにそう難儀もせず起

き、バヤについて畑に行く。小屋から無花果の入った箆を出して乾し、木の下に落ちていたのを拾い集めねばならないし、羊たちに草を食べさせ、伯父が月明かりの下で集めておいたトネリコの葉の詰まった袋を持って来なくてはならないのである。帰りには、水飲み場で牛たちに水を飲ませなくてはならないこと、午後には、また畑に戻って無花果を小屋に戻し、家畜用に袋をいっぱいにし、家の炉で燃やす枯れ木を藪で探さなくてはならないことはわかっていた。彼は、父が自分の働きに満足するだろうと思った。

家に帰ってみると、年取ったマラブーがひとりいて、護符を書いているところだった。父はまどろんでいた。マラブーは病人を起こして質問した。ラムダンの答えは意味が通っていた。この求道者がことばのなかに隠された秘密を読み取る邪魔をしてはならなかった。彼によると、魔神たちは、夜のうちに泉の傍らの乾燥場所の近くで調子がおかしくなって、父の身体に入ってしまったのだということが明らかになった。それは、《悪魔よ退け》のようないつもの決まり文句を言って彼らを祓う十分な注意を怠ったからだというのである。したがって、非はすべて病人の側にあった。それで、魔神を祓わねばならないが、それには雄山羊を屠って、表裏に呪文を書いた薔薇月桂樹の葉で病人の下腹に散香せねばならない。この後の方の事は三回繰り返す。取り違えがないように、三枚の月桂樹の葉には、求道者がそれぞれ、横線を一本、二本、三本と付けておく。

フルルは多少とも魔神の邪魔をしてやりたかったが、神聖な存在なので怖れをいだいていた。しかし、それについて彼は、先生が話してくれたちょっとした話を思い出さずにはいられなかった。先生は、護符をもらってきてくれと頼む自分の年老いた母親を満足させるために、ある日、きちんと折りたたんだ小さな紙切れを持って行った。それには《蟬と蟻》の話が書いてあったというのだ。それで、姉妹に対して、自分がターバンを巻いた年寄りなんぞに騙される間抜けではないし、そんじょそこらの並の人間ではないことを示すために、その先生の事を話す。それに、蟬と蟻が、本物の護符よりも老母の病気回復に効果があったことも。しかし、この大胆な批判をおおっぴらにするのは、シェイフが立ち去り、父がうとうとし始めてからでなくてはならない。何が起こるか皆目わからないのだから。父は目を開けると、自分は悪魔にとりつかれてなどいないと言う。おまえたちを見張っていてさっと居所を換えたり、おまえたちのところにやってきてとりついたりはしない。そう言われると、フルルは、あれほど先生の話聞いたのに、離れてじっとしていた。

だが、彼の怖れは無駄に終わる。魔神たちは犠牲者を離れる気がないようだった。二番目のマラブーも、三番目のマラブーも、最初のマラブー同様うまくいかなかった。意識がはっきりしているときには、父は、自分のなかには何もいない、とはっきり言うが、またうわごとを言い始め、そうすると、彼の言うことが信じられなくなるのだった。

ようやく、兄のルニスが旅から戻ったが、弟がまだ治らずかえって悪化しているのを知って驚いた。病状は重かった。不幸はひとりではやって来ないもので、見張りをする者がどうしても見つからなかった、たった一晚のうちに、何者かが小屋の扉を壊し、策をあさって無花果をあらかた盗んでしまった。ルニスが家事をとりしきるようになった。彼は、もう世話のできなくなった牛を売ることを持ち主と同意した。入った金の一部は病人の養生につかわれた。それも長くはもたなかった。セモリナ粉と肉が週に一回必要だった。二頭目の雄山羊も殺したし、時折、鶏を絞めた。イードが近づいていた。子どもたちにガンドウラを買ってやらねばならなかった。ロバー頭と羊を一頭売った。結局、気の毒に、ラムダンも回復期に入る前に破産した。ルニスは弟を助けるために、是も非もなくお金をつかったが、その甲斐はなかった。肉を持ってくれば、食べるのは子どもたち、コーヒーを淹れても、病人はやっと一杯飲めるだけだった。ようやく食べられるようになったとき、ラムダンは食料も金もなくしていた。それで、彼は自分に力をつけるためと、子どもらを養うために必要の半分ほどを借りた。冬のことだった。彼は、春までそうして借り続けなくてはならなかった。

美しい季節とともに体力が戻ってきたとき、彼は病気によって陥った己の苦境がどれほどのものか、おそろおそろはかってみた。悲惨が彼の背に張りついていた。彼は悲痛な心持ちで公証人のところに行き、借用書の下の部分に二つの拇印を押した。財産分割以来、初めてのことだった。畑と家を抵当に入れた。フルルの記憶が確かだとすると、この日は市の立つ日だったが、父は己の不安を乗り越えようとするかのように、牛の内臓を数珠のようにつないだのを買ってきた。それは、家族みなにとって苦い味のするものだった。

それから間もなくのこと、ある朝、ラムダンは村を離れ、フランスで働くために発って行った。それは最後の手段だった。最後の希望、唯一の解決法だったのだ。国にとどまっていたのは、借金は雪だるま式に増え、一家のささやかな財産は、雪崩に押し流されるようになってしまふことを、彼はよく承知していた。

出発の前夜、子どもたちはだれも気づいていなかった。しかし、偶然は、フルルが夜中に目を覚ますことを望んだのだった。父は寝ていなかった。暗がりですべてを祈っていたのだ。大きな声で、彼は神に哀れみと助けを請うた。進み行く道の障害を脇に除け、われを見捨てなかれと願っていた。そして、絶望の思いの極みで、子どもたちを見守りたまえと懇願した。夜の沈黙しじまのなかに、声は大きく重々しかった。ひとつ願うごとに、必ず心を打つ告白があった。ラムダンは、己の困惑と悲しみをかき乱そうとしていたのだ。フルルには、自然を超えた存在が子どもたちを見下ろし、すべてを聞いているかのように思われた。彼は困惑した。フルルはいつも父の隣で寝ていたのだから、手を伸ばして父に触れればよかったのだが、静かに息をして動かないでいた。何が起こるのだろうか、と彼は自問した。父の苦しみを思うと胸が締めつけられ、涙が音もなく彼の頬を伝った。

祈りが続く間、彼は目を閉じることができなかった。彼は、家族に新たな心配事があるか考えようとした。だが、何も見つけられなかった。彼は、家族に憂い多き時——まさに、メンラッド家がその時であることを、彼はよくわかっていたが——おそらく父は誰でも、そうやって密かに祈るのだろうとひとりごちた。そして、自分の心からの祈りを父の祈りとともにした。それから、彼は知らぬ間に寝入ってしまった。

翌朝、いつものように最後に起きてみると、母と姉妹たちが涙にくれていた。父は明け方に発ち、悲しい気持ちが増すことのないよう、誰にも知られず挨拶もせずに行ってしまうことを選んだのだった。その前に、彼は、自分のガンドウラとバーヌースを友人にやった。出発時には、フランス人の上着とズボンを身につけていった。それは、従兄弟からもらい、前の週に布を当てて補修したものだった。

彼は、夜中に父の祈りを聞いたと話した。母は、悲しい笑みを浮かべて、私も聞いたと言った。息子が眠っていなかったことを知って、明らかに嬉しそうだった。姉妹たちは、気づかなかったことを恥じた。目が覚めなかったというのは、父を愛していなかったからだろうか？

「そんなことはない！」と、フルルは考えた。「それは、ただ、母さんが女の子たちを頼りにすることができないということ、父さんがいない間、頼りにするのは僕だけだということだ」。

そう考えると、フルルは姉妹たちのように泣くことはできなかった。姉妹をなぐさめると、彼は学校へ行った。ときどき、彼の腹の中で、そして胸の内で、何かが収縮し、それは喉元にまでこみ上げてきた。ただ、それだけだった。

二十二日後に、最初の手紙が来た。それは、村長によって届けられた。四時前には、誰もそれを開けようとはしなかった。フルルは学校に行っていないからだ。彼はバヤの手から手紙を受け取ると、封筒に唇をつけた。みなが彼を取り囲んだ。幼い弟のダダールは、彼のガンドゥラを引っ張り、「早く早く、父さんの手紙を見せて」ときかない。彼はためらった。中級のクラスにはいたが、手紙というのは難しい、説明しなくてはならない。正確を期すために、彼は免状をもらって学校を卒業した人を呼ぶことにした。物知りは二つ返事でやってきて、ためらいなく手紙を開いて訳し始めた。その人が読み訳すにつれて、フルルは、自分もまた、同じくらいにはそれができることがわかった。彼の目は喜びに輝いた。わからない表現は一つしかなかった。「心配は無用だ *Il ne faut pas vous faire de mauvais sang.*」というものだった。

父は「元気で」、子どもたちも「同様」であることを「望んでいる」。彼は働いている、すぐに少額だが金を送る、という。子どもたちには、いい子にして母さんの言うことを聞くよう求めている。接ぎ木のしてあるオリーブの畑には、山羊を連れて行かないこと。無花果の畑には、適宜ドッカー鳥を引きつけ
る圓の果実?をならせるよう注意を怠らないこと。手紙には指示がいっぱい書いてあった。まるで、いまここにいるように正確な命令のしかただった。このトネリコは最初に葉を摘め、あの無花果には、暑くなったら最初に水をやれ。あの場所の稜は山羊のためにとっておくが、ほかのは売ってよい。それに続いて、家にたくわえてある食糧について、隣人について、伯父についてあらゆる質問があった。彼は、「家族全員に、おのおの名前をあげて、よろしく」と述べ、「書士にもよろしく」——ラムダンの口述を手紙にしてくれた人——と述べて、手紙を締めくくっていた。

みな満足した。家族全員が二人の学徒の周りに集まって、紙片を通して父に会っている。すぐに返事を書く。そのために必要なものはすべてそろっていた。卒業生は、フルルの注意深い視線に見守られながらうつむく。彼は、まっさらな紙を一枚、古い読本の上に置き、フルルが持つインク壺にペンを浸す。

彼は、最初の手紙をあえて書かなかった。手紙に使う定型があることは知っていたが、書き方そのものは知らなかった。彼は、手紙の形式を習って、自分が手紙を書くのに、たとえ誰にであろうと助けを求めるようなことは二度とすまいと思った。そうして、「くれぐれもよろしく」や「忠実なる息子」「とりいそぎお返事まで」で手紙を締めくくることが覚えた。その場では、嫉妬心を感じはしても、同輩に対して心から感謝することを怠らなかった。しかし、その人の綴りの二つの間違いは、率直に指摘した。翌日、彼は手紙を学校へ持って行った。手紙は学校で集配人に預けられることになっていた。先生は、それが自分の教え子の筆跡ではないことを知って驚き、フルルに、おまえはもう自分で父親に手紙を書く力をもっているはずだ、と言った。しかし、二週間後、フルルは二番目の手紙を先生に見せた。封筒の上には、まるで、彼のいちばん美しい筆跡の見本でもあるかのよう、父の宛名が麗々しく書かれていた。「メンラッド・ラムダン グット・ドール通り 23 番地 パリ 18 区」

先生は、ちらりと目をやって、フルルが何事かを待っているのを見て取った。

「大変よろしい」。フルルは立ち去った。フルルが父に宛てて書いた三番目の手紙は、次のように始まっている。「この上ない喜びとともに、私が修了証を授与されたことをお知らせいたします。……」。この定型文は、

学校で作文の時間に —— 「あなたが試験に合格して、それを友人に手紙で知らせる」という想定で —— 習ったものだったが、彼には素晴らしいものに見え、パリで読まれるに相応しく思われた。それは現実の翻訳だったから、新たに証書を授与された者のペンから生まれたということが、彼の目には、いっそう晴れがましく尊く映ったのだった。彼は、父の手紙の「書き手」に生じる効果に先んじて、誇らしさを感じていた。

同級生二人とともに、彼は証書を受け取ったばかりだった。試験は、村から二十キロばかり離れたフォール・ナショナルで行われた。そこは、本物の町で、フランス人が大勢いて、大きな建物があり、きれいな街路に美しい店が建ち並び、自動車が自在に走っていた。もはや、ティジではない。彼の目には、すべてが美しく清潔で広々として見えた。それでも、人は小さな村だと言うのだろうか！ 試験の前日に行ったので、彼には町を歩く時間があった。彼は驚き、自分がフランス語が分かることを確認して嬉しかった。小さな子どもたちが、彼と同じくらいによく話せ、彼よりずっときれいな発音をしていることを知って驚いた。

いまでも、受験者の名前を呼ぶ声が聞こえるようだ。視学官、そして試験官たち、本物の白人たちだ。作文を前にして、問題を前にして、彼は教室にいる。彼は気を落ち着けて最前を早くし、うまくいく。口頭試験を受ける。いつもの臆病ぶりはどこにいった？ 彼は答える、何もおそれない、もはやいつもの彼ではなく、先生にもそれが彼だとは思えない。

仲間二人と彼は、夜になってから村に帰ってきた。疲れ切っていた。翌朝は最初に起きて、事の次第を先生と生徒たちに報告した。彼らは褒められた。驚異的なことだった。フルルは喜びと誇りの気持ちに浸った。父親が、それを見過ごすはずがなかった。

彼は、待ちかねた返事を、二百フランとともに受け取った。手紙と金は、フランスから帰る、父と同じ場所に住む友人に託された。この友人が村に到着したときは、その自宅まで話を聞きに行った。友人は、「父に代わって」フルルを抱擁し、母には金を渡した。それから、その人はスーツケースから、靴屋の分厚いカタログと、《ゴーロワ・コレクション》の恋愛小説を取り出した。それらは、紐でくくってあった。

「さあてと！ おまえさんは、物知りだと見える。さあ、この本が父さんからおまえに贈る本だよ。とても喜んでいたさ」

フルルは、その荷物を受け取った。

翌十月のこと、フルルは学校を出るのではなく、奨学金獲得の試験勉強をするために、もう一度学校に通うことに決めた。家にいて羊飼いをするほうが役に立つことを、心の底ではよくわかっていた。しかし、ともに修了証を受けた仲間は誰も学校を止めなかったし、彼らに倣うしか、彼にはしようがなかった。それに、家の唯一の動物といえば、山羊と小さな弟だけだった。山羊は、特別な世話は必要なかった。村の群れと一緒にしてあったからだ。三十日から四十日に一回、半日だけ欠席して、群れにいる動物たちを共同で借りている草地に連れて行って放牧した。それを除けば、次の番が来るまで、煩わされることはなかった。家でも、山羊は育てるのにほとんど手がかからなかった。夏は、小さな袋一杯のトネリコの葉、春は腕で抱えるほどの草を何回か、冬は、オリーブかコルクガシの小枝を一束か、あれば稜を一束。それだけやって、フルルと小さな弟が牛乳入りクスクスを欲しただけ食べられなかったら、それは不当だと言えよう。

確かに、羊飼いは家畜の世話をする以外に別の仕事もあった。畑の見張りをし、薪を探し、収穫の季節にはオリーブや無花果の採り入れもする。だが、フルルには、もう大きい姉たちがいて、何もしないわけではない。彼は、誰をもわずらわせることなく学校に行くことができる。母と姉たちが、畑仕事を引き受けていた。父親は、ほぼ定期的に、大麦を買うのに必要な金を、百五十フランか二百フラン送ってきた。伯父のルニスは、市場から必要な物を買ってきてくれた。

オリーブ採り入れの季節だけは、彼も学校を出た者が少々うらやましかった。ツグミやムクドリが、何千羽もオリーブ畑を襲ってくる。大急ぎで、男たちが実をたたき落とし、女たちが集め、ロバが運ぶ間、羊飼いたちは狩りに熱中する。至る所、畏だらけになる。てんでに、二百、三百、さらに五百もの畏を仕掛けるのだ。男の子たちは、凍るような寒い朝に出かけ、餌——つやつやと光るみごとなオリーブの実——を付け替え、それから、畏を見張ることのできる、近くの丘の頂上の大きなオリーブの木の下で、グループになって集まる。火をおこして、足や手を暖めながら、自分たちのロンドを踊る瞬間を、今か今かと待つのである。

学校が休みの日は、フルルも、この期待に満ちた時間をわくわくしながら待つことを覚えた。悪童どもは、腹がすいたとも思わず、寒さや雨や苦労を物ともしない。ムクドリが、地面に挿しこんでおいた、やわらかくしなる棒にとまると、紐を引っ張る。彼らの苦労が報いられる瞬間だ。捕まえた鳥は喉を割き、羽をむしる。それがフードに一杯になる。夕方、最後に捕まえたものは、生きたまま持ち帰る。羊飼いたちが学校の前を通りかかった

とき、たまたま下校する子どもたちに会くと、その境遇をうらやまれることになる。フルルも、一度ならず、家の畑に罌を仕掛けたが、授業を受けている間に、盗まれてしまった。捕まったツグミと一緒に罌も盗まれてしまったことを知ったフルルの怒りは頂点に達した。悔しい気持ちを晴らすために、彼はこの《渡り》鳥——偉そうにその用語の意味をみんなに説明した——の出発を心から願った。そして、狩りと、オリーブの採り入れが終わる三月をじれったい思いで待った。

彼は、勉強のためにこの喜びを犠牲にしたのだから、もはや試験に通るしかなかった。試験は素晴らしい出来だった。作文のテーマは、彼にぴったりのものだった。「あなたのお父さんはフランスで働いていますが、文字の読み書きができません。彼は、あなたに、読むことも書くことも出来ない者が彼の地で遭遇する困難や、教育を受けなかった悔み、教育の有用性について話します。」彼の父親はまさにこのケースだったから、父が最小限の買い物をするときにも、仕事を探すときにも、また現場監督から指示を受けるときにも、大変困ることが、彼には想像できた。父は地下鉄でも街中でも、道に迷うこともあるだろう。それに、父は家族で内々にしておきたいことを人に知られないようにすることもできない。人に頼んで手紙を書いてもらわねばならないのだから。つまり、材料に事欠かないので、彼はよい作文を書くことができたのだ。数学については、みなフルルに全幅の信頼を寄せていた。数学は得意科目だった。口頭試験も素晴らしい出来で、彼は合格することを確信して帰宅した。

フルルは自分の成功を父に知らせる、美しい文章まですでに考えていた。しかし、そのときは、その文章を使う必要がなくなってしまった。その喜びは長くは続かなかったのである。アマールという、パリから帰ったばかりの村の若者が悪いニュースを持ってきたのだった。彼は、カフェの近くでフルルに会い、少年が、彼の手に口づけをして無事の帰郷を喜ぶと、悲しそうな表情で言った。

「お前の父さんに会ったかどうか、聞きに来たのか？ 会ったよ、心配ない。お母さんをお呼びに来てくれ。言づけがあるんだ」

「父さんから手紙を預かっているの？ 僕に渡して」

「ポケットの中にあるよ。ともかく、お母さんに来てもらいたいんだ。急いで」

母は、大急ぎでやってきた。

「ファトゥマ姉さん、あんたの子どもらは運に恵まれている。村のモスクに寄進されたらよかろう。ご主人は死ぬところだった。もう、助かったから、何も怖がることはない」

かわいそうな妻と息子は青くなった。

「あの人に何があったの？ あんたが言っていることは本当なの。あの人死んでしまったか、危ないんだったら、隠さなくてもいい、私は大丈夫だから。もう二か月も便りがないの」

「そんな、違います！ ご主人は治ったと言ってるじゃありませんか。彼は、工場で、ダンプカーの荷台にはさまれて怪我をした。病院に入院していたのです。間もなく、また仕事を始められるでしょう。これを納めてください。あなたがたへと預かってきた二百フランだ」

「あの方はまだ病院に？」

「先週、退院したばかりだ」

「それで、お金は？ あの人が持ってる！」

「いや！ 彼に言われて、私はあなたがたに二百フランをお渡しするんです。これです。よかったら、もう少し余計に差し上げます。手紙はこれだよ、フルル。彼は、近所の人とうまくやっていってほしいと言ってます。そうです、何も心配はいりません。彼は怪我をしたが、じき治ります。神は、あんたの子どもたちから父親を取り上げようと望んではおられませんよ」

母と子は、悲しい気持ちで家に帰る。姉妹たちが畑から帰って来て、家族全員が炉のまわりに集まる。どの顔にも不安が読み取れる。ファトゥマはときおり、腰布の端で目をぬぐった。みな、声を殺して泣いている。この不幸は、近所の人たちには隠しておかねばならない。

伯父のルニスが、夕方帰って来る。彼は、事故についてより詳しく知っている。子どもたちを安心させようとするが、彼自身は少しも安心してはいない。アマールが話したよりももっと重傷ではないだろうか？ おそらく、彼は何か隠している。母はルニスに、知っていることを話してくれとせがんだ。ルニスは、弟の状態は心配いらないと言い、男の子二人に夕飯を食べさせるために彼の家連れて行こうとするが、ファトゥマは断る。ルニスは、不満げに出ていく。おのおのが悲しみ、いらだっている。絶望が、みんなの胸をしめつける。手紙にはよい事は一つ書かれていない。簡潔な命令だけ。「二百フランを送る。できるだけ長くもたせること。これから何か月かは送金できない。金がなくなったら 山羊を売り、まだ必要なら木を……」

翌日学校で、お話の時間のとき、先生が大かた以下のような話をした。「子ども時代というのは、幸福な時だ！ 君たち学校へ通う者は、勉強するか遊ぶ以外にはしなければならぬことはない。安心して眠り、何も考えなくていい。君たちの父さんはあらゆる心配事に悩まされて、ときには一晩眠らずに過ごすこともあるだろう。父親は子どもたちの事を考えたり、借金取りに悩まされたり、空になったイクファン保存用の壺(ファイの複数形)が気にかかったりする。君たちは何も心配せず、お父さんの悩みなど知らないでいる」。違う！ そんなことはない！ 先生が話をしている間、フルルはそう思っていた。彼は先生に言いたかった。違う！ 子どもたちはそんなに鈍感じゃない。子どもだって、両親と苦しみをともにしているのだ。

間もなく、ラムダンの事故について、とんでもない噂が流れて、不幸な家族を悲嘆に暮れさせた。手術で脚を片方切断した、いや両方らしい。失明したという者もいれば、結局死んでしまったのだ、と言う者もいた。ルニスがティジ・ウズに行き、弟が滞在しているホテルの主人宛に、着払いの返信をつけて電報を打った。電報に返事があり、その後、念の入ったことに手紙が届いた。フランス人が嘘を言うはずがない。ようやく、家族は安堵したのであった。

ラムダンがフランスに行ってから一年半が過ぎていた。

まきば

九月のある日の夕方、フルルが弟を連れ、放牧の終わった山羊の群れを連れて牧場から戻ってきた時のことだった。村の近くまで来て、子どもたち二人は祖父の従兄弟のアーサーに会った。彼は、ロバに水を飲ませるために水飲み場に行く途中だった。アーサーはダダールの上に身をかがめて、彼のほっぺをつまみ、話しかけた。

「急いで家に帰りなさい。兄さんに遅れるな。父さんが帰ってるぞ」兄弟二人が、驚きにぼかんとって道の真ん中に突っ立ったまま、動くことも口をきくこともできないでいると、アーサーはにこにこしながらすうっと行ってしまった。フルルは、起き上がった途端前に突進する人のようにはっとした。山羊の群れを放り出した。兄についていくには一苦勞のダダールのことも忘れてしまった。

父のラムダンが家にいた。近所の男たちや女たちに取り囲まれ、ファトゥマは嬉しくてたまらないようで、入り口のところで、客を迎えていた。子どもたちが人をかき分けて父の元に行くと、父は大きな声で笑いながら抱きしめてくれた。

「神のご加護で、フルルはもう大人だ」と、ひとりの老女が言った。

「神があんたに平安をくださるように。そうだな、大きくなった。私は老いぼれる番だ」

「おまえさんが？ 前より頑丈になったよ！」 実際、ラムダンは変わった。太って、顔や手は白くなっていた。顔色はよかった。怪我などしなかったと言われても、本当にしただろう。

「まあもつとも、ここでもよく食べていたんだけどね。神よ感謝します。みんな知っているように、家は満足に食べられない暮らしをしているわけじゃない」。ファトゥマがそう言うと、「フランスとこっちじゃ、比べ物にならないよ」と言われた。

フルルは、早く人がいなくなって両親と水入らずになりたいと思った。部屋の隅に、大きな鞆と、見慣れないスーツケースが置いてあった。彼の視線は、どうしてもそちらに行ってしまうのだった。ダダールはといえば、スーツケースの上に座って、鞆にかけてある紐をほどこうと、ほかになすすべもなく歯と爪で必死の攻撃をしていた。うらやましくてたまらないザズゥがダダールの邪魔をして喧嘩になり、それがちょっと大人たちの注意をひいた。

その間、ラムダンは身内がパリにいる人たちから質問攻めに合っていた。彼は聞かれることにはすべて親切に答え、言づけを預かっている人に対してはそれを渡した。最後に帰ったのは、子どもたちもそれには何の不満もなかったのだが、伯父のルニスだった。フ

フルルが、この兄弟二人の話に関心をもったのは嘘ではない。それは事故と、病院での辛い治療のことだったから。だが、彼にはいつだってその話を聞かせてもらうことができるとわかっていた。さしあたり、最大の関心事は荷物の中身だった。それに、彼は、学業での成功を、ごく内輪だけで話したくて気持ちが急いでいた。

鞆のなかには、パンが一ダースほどと、衣類が入っていた。スーツケースも同じ物でいっぱいだった。パンはいくつかに切り分けられ、近所の家に配られた。フルルと姉のティティが配達係で、こちらの家あちらの家と配り歩いた。伯父は、まるのままのパンを二個受け取った。それから、その夜のこと、ラムダンが寝る前に、子どもたちに衣服を分け与えた。子どもたちはすぐに着てみたが、まるでカーニバルの扮装のように妙な格好になってしまった。お互いにけなし合って笑い、抱き合ったり喧嘩したりというありさま。とうとう、ダダールははかせてもらったばかりの靴を脱がずに寝入ってしまった。燃えるような赤色のチョッキと、両耳がすっかり隠れるベレー帽もつけたままだった。ザズウは、母に買ってきたガンドウラにすっぽりとくるまって、頭だけが出ている。頭の上の黄色いシヨールの房が垂れ下がって目を隠していた。几帳面なフルルは、自分のものが入った包みを枕の上にきちんと置いて、誰にも触らせないようにしていた。バヤとティティは、もうお姉さんだったので、自分たちの分を膝の間にはさんで座り、親たちの話をしっかり聞いている様子だった。

ラムダンはそのとき、事故の模様を話していた、二度目だった。子どもたちの、ことにフルルの関心を引こうとしていることは明らかだった。彼は、財布から書類の束を取り出した。

「ほら。勉強したんだから、おまえは読めるだろう。父さんに何があったかちょっと見てくれないか……。重傷で大変だったんだ」

フルルは書類を見たが、何が書いてあるか皆目わからなかった。レターヘッドの《ラリボワジュール病院》というのははっきりわかった。それから紫色のスタンプも。それ以外は手書きで、書いた本人の医者と呼んでくるしかなさそうだった。それは、診断書だった。フルルは、どのページも十分にあらためてから、理解したことをわからせるように大げさに首を振りながら、父にそれを返した。

「わかったか？」

「ああ」

「よし！ それで、これが傷だ」父はシャツのボタンをはずした。腹を切ったんだ。

子どもたちは目をみはった。父は子どもらを安心させた。

「いや！ もう何でもない。ちゃんと縫ったんだからな。大きな傷跡は残ったが、それだけだ」

子どもたちは父親の側に寄って、腹の上から下へと長々と走っている傷を見た。それは臍をも貫いていた。子どもたちは、傷がまた開くのを怖がって、おそろおそろさわった。大丈夫だった。しっかりと縫い合わされていた。

それから、ラムダンはスーツケースのなかから巻いた長い紙を取り出した。なかにはノートのように綴じたものも入っていた。筆跡は太くきれいだった。今度は、フルルも十分に読め、訳すことができた。父は、息子がしっかり勉強したことを本当に確認できたわけだ。それは、セーヌの民事法廷の判決だった。この判決によって、保険会社は、《メンラ

ッド・ラムダン氏》に、三か月ごとに七十四フランの終身年金を払うべし、とされたのだ。 「わかったか？ おまえの父親は、なすがままになっていたわけじゃない」ラムダンは息子に言った。

「保安裁判で私の言い分は却下された。だが、私は控訴して勝ったんだ」なぜ、保安裁判でそれから民事法廷なのだろう？

メンラッドはオーベルヴィルの精錬工場に働いていたからだった。彼はそこで休みなく働いていた。カピリアの畑でそうだったように。毎日、時間外勤務をして、日曜日にも働いていたのだ。そして、放下車が線路上に落ちて彼を壁との間に挟んでしまったのは、その日曜日のことだった。彼は、会社の診療所に入院させられ、一週間するとよくなったと思われた。明らかな外傷はなかったが、彼は身体の奥の方に痛みを感じていた。医者は退院を急かした。メンラッドは仕事をする以上にはしたいことはなかった。早く借金を返して子どもたちに会いたかった。それで、彼は退院して工場に戻った。最初の日曜日の終わりから、部屋に帰ると痛みが戻ってきた。前よりもひどい痛みだった。死にそうになった彼は、今度はラリボワジュール病院に入院させられ、手術を受けねばならなかった。三か月間、子どもたちとも故郷とも離れて、尽きない苦しみと不安の日々を過ごすことになった。

彼が、労災を受けた者に通常支払われる補償金を会社に求めたとき、会社はそれを拒否して、彼を告訴した。思いやりある人たちが助けてくれ、助言し、どこに行ったらいいか教えてくれた。忘れがたい偶然もたくさんあった。彼は当然受け取るべき《保険金》と、要求もせず、もらえると考えてもいなかった終身年金を獲得したのだ。もしフルルが奨学金の試験のときにこの物語を思い描くことができたなら、課題の作文に必ず一節をつけ加えて、父の苦労を事細かに語り、おそらく試験官たちを驚かせることになったにちがいない。ラムダンによって語られたことはすべて、もはや過去の領域にあったので、結局みな、ファトゥマと同じことを考えた。家族に三千フランを一時にもたらした事故を、ファトゥマが嬉しく思ったことははっきりしていた。それに、この三千フランはラムダンに一年間の休みを要求することになった。ラムダン

はそれに同意する。彼は、腹を縫い合わされて、フランスから帰ってきたが、借金を返済するには十分な金を持っていたし、以前の穏やかな暮らしを取り戻した。懐には一万フラン近くがあった！彼のささやかな年金は、彼に一生分の嗅ぎたばこを保証した。

医師らは彼に、一年は何もせず、身体によい食べ物をふんだんにとるようにと勧めた。しかし、医師はおそらく知らなかったのだ。カピリア人が丈夫な皮膚を持っていること、医者の指示に従うのは、それに逆らう体力がないときだけだということ。ラムダンは、己自身では、すこぶるよい状態だとわかっていた。自分の畑が待っていた。友も敵も、ともにそれを狙っていた。行って、みなに、彼が以前と変わりなく壮健だということを示すのだ。彼が休んだのはたった二日だった。

学校に行かなくなったフルルが毎日父について畑に行き、仕事を手伝うようになったのは十月のことだった。すでに、雄牛と羊と、ロバも一頭買ってあった。家のなかでは二人とも、することがたくさんあった。よき日々が戻ってきたかのようにだった。父ラムダンは、

息子がなかなかの助けになってくれることがわかって満足だった。それと同時に、息子に、もはや子どもではなく若者に対するように話すことをこころがけた。ある日の午後、父子は二人で、無花果用の簀の子を入れてある小屋の近くの畑にいた。父は、長い留守の間にネズミにかじられた、ロバの荷鞍を修理している最中だった。

「なあ、息子よ。いま家には、雄牛が二頭と、ロバも羊もいる。羊はまだ二頭買える。私たち二人なら、養えないことはあるまい。春になったら、雄牛は二頭とも売って、また仔牛を二頭買う。羊三頭を売れば、今度は雌牛が一頭買える。それから、オリーブ油も家で使う分より少し余計にとれるだろう。来年の夏には、私がロバに荷をつけて野菜を売りに行く間、おまえが、姉さんたちといっしょに動物の世話をし、畑仕事もできるだろう。じきに、ロバの代わりにラバを持てるだろう。そうすれば、私は売ることに専念できる。おまえは、ときどき、私と市場に行けば、だんだん事情がわかってくる。神のご加護で、家の者はもう辛い思いをしなくてすむようになる。

父が彼の目論見を次々と語るのを聞いて、フルルは驚いていた。目の前に、自分が思いもしなかった地平が開けてくるのを見た。自分が農民となっていくのが見え、そのおかげで、父と自分が幸福感で満たされるのがわかった。しかし、彼にはいささかの疑問の気持があった。彼にはもう一つ、別の夢があったのだ。彼はずっと、己を学徒であると思ってきた。貧しいが才ある学徒だと。彼は、この学徒のイメージに馴染み、それに執着するようになっていたのだ。ところがこうして、父はしっかりと筋道のある話で、数分間に、そのイメージを亡霊であるかのように追い払ってしまった。それでも、彼は、念のためと、ぼそぼそつぶやいた。

「でも、もし奨学金がもらえることになったら？ 父さんにお金の心配をさせずに勉強を続けられる。先生がそう言ったんだ」

「第一にだ、奨学金なんかももらえやしないさ。夏休みも終わりだというのに手紙も来ないじゃないか。第二に、もし金がもらえらして、私たちは学校に行くに相応しくできているかね？ 私たちは貧しい。勉強は金持ちのものだ。金持ちにしたって、何年も無駄に過ごして、結局は何もできず、村に帰っても怠け者をつくるだけだ。金貸しのサイドの息子がそうじゃないか？ アグニにも、ほかに二、三人そういうのがいる、と聞いた。難しいんだ。フランス人がちゃんとした仕事をくれるわけがない。だけど、ここにいれば、おまえは私と同じくらい稼げるし、何も不自由することはない。二、三年すれば、おまえももっと強くなって、フランスに働きに行くこともできるだろう。そうすればわかる、おまえは免状くじを持っている。故郷の誰よりもうまくやっていける。おまえは、私が味わったような辛酸を知らずにすむ。フランスは、美しい。おまえは何でも見られるし、何でもわかるだろう。帰ってきたら、おまえは結婚する。そんなふうにするのがいいと、私は思うね。それが、われわれに相応しい唯一の生き方だ。弟も大きくなる。おまえがいろいろ教えてやらないとな。姉妹たちは嫁に行く。万事、おまえが私に代わってするようになる。私は安心して死ぬる」

フルルは黙って聞いていた。すばらしいと思った。父が結婚のことを言ったとき、彼はうつむいて赤くなった、恥ずかしかったのだ。ラムダンは、荷鞍に目をやったまま修理を続けていた。もう、話すのは止めていた。フルルには何も反論することはなかった。父の口から出たのは道理というものだったから。彼らは二人ともしばらく黙って、それぞれそ

の大事な話について考えていた。それから、ラムダンは息子に仕事を命じた。フルルはおとなしく立ち上がり、その場を離れた。

夕方、村に帰ると、ティジ・ウズのコレージュの校長から手紙が届いており、それは、奨学金の授与が決まって新人奨学生に席が用意されている、その者はすぐに出頭するべしと、知らせるものだった。偶然というものは、こんなふうに人を試すことを好むものだ。少年は驚き、次には絶望し始めた。貧しき学徒のイメージが、あらゆる誘惑を伴って、彼の心にまた戻ってきた。それは、現実になろうとしているいまは、なおさら魅力的であった。父のほうは、それが現実であることを信じ始めていた。彼は、月ごとに息子に与えられるべく準備された百八十フランをお国に返してしまうような愚か者だろうか？

いや、そんなことはあるまい！ 彼もフルルも、先刻畑で話したことに立ち戻りたくはなかった。彼らは、互いに合意し

て、それを忘れることにした。もはや、奨学金のことも、学校のことも、学問のことも話さなかった。フルルは、その夜、英雄であった。姉妹たちは彼に尊敬の思いをもった。ファトゥマは、お祝いの夕餉を用意した。いっぽう、彼とその父は、少し離れて、大切な話をしていた。出発の用意をせねばならなかった。容易ならざる事ばかりだったが、金があった。「金があれば、困難に打ち勝つことができる」、格言風に、ラムダンは言うのだった。ラムダンの言う通りだった。翌日から、入念に事にとりかかった。学校に行って校長に会い、指示をあおいで登録手続きをする。人に頼んで、アルジェで必要なものを買そろえる。ずいぶ

んと金がかかった。そして、新入生は、必要なものをほぼ全部手に入れ、万聖節の休み開けに、コレージュへと入学した。父メンラッドは、もののわからない人ではなかった。自分の息子が何を得るのでもない

のは、よくわかっていた。だが、町でなら、フルルは自分の家にいるよりもよいものが食べられる、子ども時代の厳しい生活とはずいぶん違うところで成長することになる。お国が、しっかりと彼を養おうというのだから、ラムダンはそれに異を唱えなかった。肝心なのは、息子が早く一人前の男になって、彼と一緒に家族を養ってくれることだ。

フルルのほうは、いささかも、浮ついた気持ちはなかった。彼は真剣だった。コレージュでブルヴェを取り、それから師範学校に入って教師になろうと、大まじめにそう考えていた。

フルルは出発し、家族は悲しみのなかに取り残された。みな、彼のいないことを寂しがった。家そのものも、ひどく悲しげな様子だった。夕食時にみなが集まると、おのおのが、空っぽな感じを味わった。みな、家族が昨日よりも小さくなったように感じていた。若者ひとりが三人か四人分を占めていたかのようだった。姉妹は、未来の偉人に対して、自分たちがしたよくない事を思い出し、あれやこれやの折りに、彼を助けなかったことを後悔し、彼にやさしくすると誓った。母は、自分の口に運ぶクスクスの一口一口を、彼に届けてやりたいと思うのだった。その晩息子がどうやって寝る支度をするのかが気にかかっていたし、これから先も、彼がずっとひとりで、誰ひとり見守る者もなく寝ることになるのが心配でたまらなかった。息子が自分の気遣いややさしさから遠く離れてしまったことを悲しんだ。父が落ち着かせようとしたが無駄だった。ファトゥマは目に涙を浮かべていた。父は自分の気持ちを奮い立たせようとして三、四回咳をした。

いっぽう、フルルはすっかり落ち着いて静かに過ごしていた。母や姉妹が思い描くこともできないような物を食べたあと、生まれて初めて本物のベッドに横になった彼は、家族のことを考えるどころではなかった。この三日間というものの、重大事が次々に起こった。彼は寝入る前に、それをもう一度、夢のなかの出来事のように反芻していた。間違いはない、この幸運は現実なのだ、と自分に言い聞かせるために、出来事をほんとうに細かい部分まで思い出してみなくては気が済まなかった。

土曜日の夕方：彼は家にいる。質素な制服一式を受け取ったばかりだ。校長は、彼を寄宿生として受け入れようと考えていたが、父はそれを断った。それほど金は無い。それで、彼は通学生となったが、下宿が見つからない。食事は安食堂がある。父は迷いながら家に帰ってきた。当面、ホテルに滞在せざるをえないかもしれない。出費がかさむだろう。ラムダンに困り果てた。息子を町にひとりで放り出すのか？ 寄宿生にしてもらおうよう、もう一度方策を講じるべきか？ 校長は、それを何度も言っていたが。

日曜日の朝：神は不運な者たちを見捨てない。神は、フルルの前に、アジールという好ましい人物の姿を借りて現れた。アジールはアグニ出身でフルルと同年だった。コレージュの生徒だ。彼は、フルルのこと、奨学金をもらうことを聞いて、彼に会いにティジまでやってきた。その様子は、すぐに信頼の気持ちをいだかせるものだった。金髪に青い目、口元にはいつも笑みがたたえられていて、親しみの気持ちを起こさせる。彼は、最高に込み入った事を簡単にするという贈り物を持っている。

「ぼくも通学生です。それに、君と同じ奨学生だ。ふたりとも、同じ土地の出身です。

もう、ひとりでいたくないんです。一緒に生活して友だちになりませんか」フルルは、彼を抱きしめたかった。アジールは、困難に先んじた。彼を遮ったり、聞きただしたりする必要があるだろうか。

「ぼくの父は寄宿生の費用を払うほどお金がありません。ティジ・ウズにはプロテスタントの宣教師がいて、山地地方の出身者を下宿させてくれます。ぼくはそこに住んでいます。みんな三十人くらい。君のことは、もう話してあります。ぼくと二人で一部屋を使いましょう。電気があります。机が一つ、椅子もあります。ベッドも二つあります。朝は、コーヒーとパンが出ます。これは全部無料。コレッジはすぐ側です」

本当に信じがたいことだった。アジールの説明によると、宣教師は、カトリックのアフリカ宣教師団の人たちのように、貧しい人たちを助ける、有徳の士だった。困っている山地出身者に対して与えられるそういった援助に加えて、彼は毎夕、少年たちを大きな部屋に集めて信仰について話し、助言や教えを与えるのだという。それは素晴らしいことだ。フルルはとても嬉しかった。彼はすぐに承諾した。実際的な決まり事（持って行く荷物、お金、本）について教えてもらったが、上の空で聞いていた。翌日の朝、一緒に行くことになった。準備を整えるため、新しい友人と名残惜しく別れ、父に、そのよき報せを告げて安心させた。今度はラムダンが、息子から聞いたことが信じられなかった。奇跡だった！

神が、彼らを助けにやって来たのだ。月曜日の朝：八時前に到着するよう急いで出発。初めて車に乗る！

若者は夢を見ている

のだろうか、それとも現実か？ 宣教師のランベール師には会わず、まず学校に行く。フルルは、生徒の群れのなかで、迷子になったような気がしている。もう自分で自分がわからない。彼は、ほかの生徒たち同様、洋服を着ている。学校に入る前に、アジールが先輩として、彼のネクタイをきちんと結んでくれた。誰も彼に注意を払わない。彼はアジールの陰に隠れるようにして歩き、訳もなくいちいち赤くなる。口を開くのが怖い。少年たちが握手してくる。彼の友人にも、いま握手したのだから。無表情な先生たちの前を通るとき、彼も挨拶する。教室に入って、ほかの生徒たちと同じにノートを開く、鞆の中に手を入れると触れたものだ。そして、機械のように授業を聴く。あらゆる動作を真似る。幸い、誰も彼がそこにいることに気づいていない。彼は、気に掛けられていない。責め苦は一時間続く。彼は息が苦しくなる。自分に問いかける、いてはいけない所にいるのではないだろうか。やれやれ、ついこの間まで、羊の群れの番人だったのに！ この広い教室、大きなガラス窓と、真新しいびかびかの机、全てが、汚したらいけないと近づくのもためられる。これがみな彼のためにあるのだろうか？

話をしている女性の先生、説明し、礼儀正しく質問し、生徒みなに《vous》を使う美しい人は、彼のためにいるのだろうか？ それでは、彼は、ここにいる、制服をきちんと着こなし、育ちがよく頭もよさそうな少年たちの仲間として相応しい様子をしているだろうか？

驚くことばかりの新しい社会のなかで、彼は自分を招かざる客のように感じる。アジールが彼からそう遠くない所において、時折振り返っては、彼を励ますようにほほえみかける。彼の胸は感謝の気持ちでいっぱいになる。休み時間になると、少し落ち着いてくる。初日、同級生はおおかた感じがよい。別のクラスの生徒たちは彼の存在に気づきさえしながら、新しい同級生は——少なくとも彼らのうちの何人かは——彼の注意を引こうとしておどけて見せたりする。わざと才気をひけらかして笑わせようとする者、誰もが、もちろん彼も知っているような定理を熱心に説

明する者、カミーユ(場人物。実の兄に許婚を殺される。)の呪いのことばを面白おかしく言う者。メンラッドは、彼を必要とする者を誰でも褒め称えるつもりになっている。彼は、みんなは素晴らしいと思う。自分は、うすぼんやりして情けない、と気持ちが悪くじける。

十一時、彼は友人と一緒に食堂で、スープと、ジャガイモを添えた肉、サラダという食 事を取る。ごちそうだ！ が、砂を噛むようで味が無い。腹が減っていない。彼の胃は緊張しきっている。

四時、彼はランベール氏の所へ行く。ランベール氏は、素晴らしい人だった。背が高く、やや猫背で、役人のような、少々し

ゃつちよこばった歩き方をする。整った顔を縁取る長い髭が、畏怖の混じった尊敬の念を いかせる。強くよく響く抑制のきいた声をもっている。しかし、彼の側に寄って、気取りのないやさしく素朴なまなざしで見つめられると、その気持ちは絶対の信頼感に変わる。彼は、率直さでもって人をとらえ、人を導く権利と力を確実に手にしている。みな、喜んで彼に従う。学校に通う生徒は、おのおの己の責任の重さを実感している。自問自省してみれば、両親が自分のために犠牲となって勉学のための費用を負担しているのだと考えざるをえない。成功は、ひとえに子どもたち次第だ。子どもたちの義務は明らかだ。《ランベールのもとに来る者たち》はそうではない。宣教師は彼らに代わって、当たり前のように責任を果たしている。彼の客人に気がかりはひとつしかない。つまり、彼に満足を与えること。だが、彼が得る満足は、どんな親でもなかなか味わうことのできないものだ。彼は、故郷から引き離されて己の元集い住まう者たちみなにとって、厳しい師であるか と思うと、配慮ある父にもなり、遊び友だちでもある。そんなわけで、彼はフルルに何と

もよい印象を与えた。

「君が、メンラッドかな？」

「はい、ムッシュー」

「いや！ はい、シェフと言いなさい」

「はい、シェフ」

「アジールから、君のことは聞いている。君は、彼と同じ部屋に住む。準備はできている。すぐに、この家の習慣に馴染むよ。ここでは、ちゃんと振る舞わなくてはならない。君はたばこを吸わないね。そう願いたい」

「はい、シェフ」

「よろしい。ご家族のことを少し話してくれないか」メンラッドは自分の家のことと、それほど金持ちではないことを話し、宣教師はすぐに、

貧しい小僧っ子のためにすべきことを了解した。もう一つあった。

「君は奨学金をもらっているね、大事なことだ。それを継続するためによく勉強しなくてはな。君の仲間も、みなよく勉強している。見習いなさい。そうすれば、スカウト団員だ！」

「はい、シェフ」メンラッドは念のため返事をした。

「いろいろ教えてもらえるよ。すぐによくわかるようになる」この善良なる人の部屋を辞したとき、間違いなくランベールの大家族に加えられたこと

を感じて、メンラッドはこの上もなく満ち足りた気持ちだった。どれほど励ましになった ことか！ その日の夜、彼はその名だたる《メンバー》と会う機会を得た。彼らは、とり

わけ世話好きであるようにメンラッドには思われた。 こうして、最初の日が終わった。寝
入る前に、彼はこういったこと全てを反芻したのだ
った。彼は幸せを感じ、神を祝福した。彼は弟や姉妹たちや両親のことをそれほど思わな かつ
たのに、子どもの頃の友だちを思い出した。アクリ、彼は山にいる、羊の番をして。 だが、メ
ンラッドは……。

ランベールの修道院は、町の山の手の、コレッジと道ひとつを隔てたところにあった。それは、六十メートル四方の四角い土地を占めていた。敷地の一角に、家族の住まいがある。その隣には、礼拝のための部屋がある。椅子と黒ずんだ机、オルガンのある広くて簡素なホールだ。学徒たちの部屋は、敷地の片側全部を占めていた。一階に六部屋、二階に六部屋がある。外から見えない中庭があって、手入れが行き届いたその庭には、木陰に小さな池があり、トンネルがふたつ、大きな長椅子が二つあった。この援助修道会の住まいで、メンラッドとその友人アジールは四年の歳月を過ごした。彼らが、幾たびとなく、ともに純粋な喜び、堅忍の果実を味わったのは、ここだった。ともにたたえ合い、分かり合うこと以外何も求めず、時が壊すことのない友情が彼らの間に結ばれたのもここだった。メンラッドはじきに、彼を萎縮させていた劣等感を捨てた。仲間たちが《奇才》ではないことがわかり、勉強に励むようになり、上位の成績をとるようになった。彼は、友人もまったく同じだったが、すぐに通称《ガリ勉》となった。だが、彼も友人もその評価を悪口だとは少しも思わなかった。みながその通りだと思い、二人にかまわずにおいてくれた。毎日曜日、彼らはシェフに連れられて森へ行き、ボーイスカウトの楽しさを手ほどきされた。メンラッドは、修道士のような偉い人が、そんな子どもじみたことに時間を費やすのに驚いていた。故郷の村の羊飼いは、知らぬ間にボーイスカウトを実践しているとでもいうのだろうか？ 《ボーイスカウトの掟》の理論、倫理、あれやこれやの条項に問題があったのではない。山の民の出である二人の若者にしてみれば、そんなことに熱中する気持ちは失せていた。なんだかんだ言っても、ボーイスカウトというのは欺瞞でねたみで嘘ではないだろうか。しかし、シェフは、その語のいちばんよい意味において、ボーイスカウトであることに間違いなかった。アジールとメンラッドは、日曜日の外出を労役であるかのように忍耐していた。スカウトの階級を上げようとする気はなさそうだった。彼らは、学校での勉学にしか関心がなかった。シェフにはそれがよくわかっていた。彼らは行動面では不満をいだかせることがなかったので、彼はそれ以上何を求めることもできなかった。彼らは、毎夕礼拝の部屋に集まって行われるお話のときにも、同じ態度を取った。みなと一緒に欠かさず参加して聖書の唱句を唱え、心をこめて聖歌を歌い、シェフの話をややうやく聞いた。それから、あわあだしく自室に戻ると、もう誰にも邪魔されることなく勉強を再開した。彼らが、何であれ聖書の章句について質問しているのを見た者はなかったし、広間に行って信仰のあれこれについて説明を求めたり、牧師に自分のための祈りを請うのを見た者もなかった。宣教師は、こういうことを求める訪問を、真摯なものであれ

そうでもないものであれ、喜んで受け入れていた。しかし、この二人については、彼は、少年たちが自分を避けているのを感じていた。その二つの意志は、かたく結びついて、手なづけがたいひとつの意志になっていた。彼らを分け隔てる術はなかった。といて、彼らが信仰に揶揄の気持ちをもっていたわけではない。プロテスタントの信仰に、彼らは反感を持ってはいなかった。逆に、長い間には、プロテスタントの簡素で寛容な信仰の精神に対して愛着さえ持つようになったのである。彼らは、旧約聖書と新約聖書を深く知った。十字架にかけられた人を讃えて、ひとりであるときでも、習い覚えた聖歌を歌うことに悦びをおぼえた。ひそかに心の内で、人が祈るのを真似て祈りさえした。

しかし、彼らにとって重要なのは、学問だけだったのだ。宣教師のところにいるのは、勉強に打ち込むことができるからだった。成功への彼らの意志はあまりに固く、その態度はゆるがなかった。そうして、彼らは、心からの喜びをもって、四年の歳月を（十五歳から十九歳までを）、彼らの少年時代を、おのおのにとって、健康と未来の幸福の拠り所となる日々を過ごしたのだった。昼は授業、夜は、祈りの時間の後、十時までは電灯の下で勉強する。その後はろうそくを一本灯し、十二時か午前一時までは絶対に床に入らなかつ

た。ときには、ムアッジン^{礼拝の呼びかけをする者}の声が本を前にした彼らを驚かせることもあった。それは、一日の最初の祈りを促す、早朝のアザーン^{礼拝の呼びかけ}の調べだった。

ああ！ 長い冬の夜々！ 彼らはいつまでも忘れはしないだろう。館はずまりかえっている。外では風が吹き、雨が屋根をたたく。みな寝ている。ひとつ、彼らの部屋だけは、鎧戸の隙間から弱い光がもれている。ろうそくが燃えていた。彼らは、広げたノートを前にして、バーヌースで身を包み、互いに向かい合って座っている。ふたりとも口をきかない。勉強している。彼らは眠気と闘う。かわいそうな彼らの頭は疲れている。おとなしくもう寝てしまった仲間を、彼らはうらやむ。だが、彼らは強情だった。四年間というもの、彼らは、授業の内容を徹底的に把握せずにあやふやなまま、教室に行ったことはなかった。その後、進学した師範学校では、メンラッドはこれほどの無理はしない。自分が、あまりにもしばしば無益に身体を酷使したこと、健康を損ないかねなかったことを悟って、呆然とすることになる。

こういった努力に加えて、彼らにはできるかぎり切りつめた生活をしてきた。自然誌の書物が、カロリーや、最低栄養量、成長についていくら語ろうとも、彼らはそんなものは何も信じていなかった。彼らはコンロを買って、自分たちの部屋で食事をつくった。ジャガイモ、いつもいつもジャガイモだった！ 調理がしやすいし、おいしかったから。ことにメンラッドにとっては、ジャガイモは思い出の味だった。しかし、この食養生を二年も続けると、彼はジャガイモとはすっかり不仲になってしまった。アジュールはどうか、知り合いににでもなったら聞いてみるといい！ ときどきは、彼らは早めに、十一時頃に、いつもと違う冷たい食事をした。二人でパンを半分、七十センチのジャムを一瓶、それだけだった。毎月受け取る百八十フランのうち、彼らはそれぞれ八十フランだけ遣い、残りは両親に渡した。

また、ときどきはラムダンと、アジュールの父親のモハンドが会いに来て、息子たちのところへ一晩泊っていくことがあった。彼らは互いに、そんな儉約家の息子を持ったことを喜び、ずっと儉約を続けるようにとも言った。父のラムダンは、大変満足していた。村の者はみな、フルルのことをよく言ったし、実際、学問には全然金がかからなかった。だが

いっぽうで、息子の助けがなかったために、彼が多くを失ったことも確かだ。間もなく、彼は雄牛二頭を売って、無花果畑とオリーブ畑だけに専念することを余儀なくされた。夏休みには、学徒が家に帰ってきたが、彼を羊飼いと同じに扱うわけにはいかない、と父は思った。朝はコーヒー一杯、たまには肉、クスクス用にセモリナ粉を少し。家族は次第にこういう贅沢に慣れ、蓄えはなくなっていった。若者が修了資格試験に臨むときには、洋服を買ってやり、アルジェでの滞在費を払うために、借金をしなくてはならなかった。ラムダンが長いことためらって、ようやく金貸しのところへ赴いた。だが、いったんそうしてしまうとあとは簡単で、人を苦境から救うそういった借金を重ねるようになった。結局、彼は長期の借金に味をしめ、必要とあらば、その度に金を借りた。彼はそうとうに頑張ってはきた。しかし、時代はどんどん難しくなった。彼は、家族を養うという重荷を、債権者のうちでもとりわけうるさい者に押しつけ、今度はその者の細心の心がけによっていっそう重くなったその荷は、まだ年若いフルルの肩に負わされることになる。

勉強に忙しかったフルルは、家族の窮状を知らないままだった。十六歳のとき、彼が自分の将来を賭けるべく意識していたのは、幾何の定理や、代数の方程式だった。同年代の少年たちが、気にするのは身なりや女の子のことばかりだったというのに。

フルルは感じやすく恨みがましい質だった。自分の言う事をまじめにとろうとせず、メンラッドの世間知らずぶりをわらう村の人たちを恨んだ。コレッジの二年目の始め、素晴らしい一年生が終わった後のこと、彼は危うく全てを失うところだった。奨学金が更新されなかったのだ、理由は分からなかった。校長は、一か月、二か月と待った。十二月の終わりになっても何も言ってこないの、校長は奨学生たちにその旨を伝え、彼らは悲嘆に暮れたまま、それぞれの村へと帰らざるをえなかった。メンラッドの家は、まるでお通夜のような感じだった。彼に学校を続けさせるためにこれ以上金を工面するなど、問題外だった。そんな考えは、誰も頭をかすめさえしなかった。みな、わかっていた。フルルは家族のもとにいて、また羊の番をすることになる、いたずらに希望を持たされ、今度は失望させられたのだということ。年が明けて冬休みが終われば、それを知って村人たちが驚き、次にはお決まりの嘲りが待っているだろう。フルルはそれを考え、隠れて泣いた。自分は侮辱される、もう人前には出られまい、と考えた。それだって、成績や素行が悪せいで家に帰されるのではない。彼は帰郷した。もう金がなかったからだ。校長は、アルジェのアカデミーに手紙を書く約束してくれた。彼は、遺漏か失念か、誤りがあったのではないかと話していた。一校の奨学金受給を全部なくしてしまうなんてあり得ない！だが、あざ笑う人たちに、それをどうやって説明したものだろう？

クリスマス後、フルルはティジで恐ろしい一週間を過ごした。彼に会った人たちは、屈辱的な哀れみをあらわにして、彼は気分が悪くなった。彼が、誤って止められている彼の奨学金は間もなく取り戻せる、それを待つ間だけ村にいるのだと言っても、みな頭をふって、もうそのことは考えないほうがいと論ずのだった。彼は、怒りのあまり目に涙をうかべることもあった。そうすると、みな彼をわらい侮辱した。

「ラムダンの息子よ、おまえは放り出されたんだよ、え！おまえには山羊しか残っていない。わしらと同じだ！」

「違う！ぼくは学校に戻る！」

「金貸しから金を借りてかね、え、そうじゃないか？」

「それで、おまえはどうなる？」

「バカな奴だ。親父を助けるどころか、破産させる気だ」

いっぽう、彼の父親も気持ちが揺れていたようだ。貧乏人のくせに息子をそんな難しい道に進ませたことを後悔していたのだ。

その週の間、フルルはひどく辛い思いをした。人の格言風の物言いのばかばかしさに気分が悪くなり、他人の嫉妬心に憤慨した。運命は不当だ、人はみな不当だ。何もかもが彼に敵対していたが、そのうち、人々の敵意や、他人の不幸を喜ぶ気持ちや、憎しみが、彼のしていることを本気で受け止めていたからこそであると、わかってきた。みな、彼が功を成し、メンラッドの名を挙げると信じていた。それなのに、いまは……。

ついに手紙が届いてよい報せをもたらし、フルルは悦びに胸をふくらませ、成功するためには倒れるほど勉強するのだという熱い決意をもってティジに戻った。母は、クバ(廟)に奉納をするつもりだと言ったが、彼はそれが自分の運命に何の影響ももたないことをよく知っていた。この上なく厳しい闘いに、自分がたったひとりで立ち向かうのだと分かっていた。

仲間がみなエルヴィール(ラマルティース『詩的瞑想』に歌われる詩人の恋人の名前。『詩的瞑想』中の作品)に夢中になっていた年齢のとき、彼はよい成績をとるためだけに「みずうみ」(中の作品)を暗誦した。しかし、その詩には感じやすく繊細な精神のメランコリックな甘さを持たせるべきであったのに、つけんどんな調子でテキストを詠み、先生は彼を叱り、彼は恨みがましい気持ちでいっぱいになって席につくことになるのだった。

猛然たる勉強がどうやって、自分を、家族を、貧しさから引っ張り出してくれるのか、彼にはよくわからなかった。だが、これだけは確かだ。彼は努力というものの美德を疑わなかった。彼がフランス語資格修了試験に合格したとき、両親も村の人たちも、ようやく、彼が時間をまるまる無駄にしたわけではないことを理解した。しかし、修了資格はほとんど職にならない。さらに、入学試験に立ち向かわなくてはならなかった。フルルはずっと、師範学校への入学を夢見ていた。

毎年夏休みには、彼は家族のもとへ帰ってきた。そのときは、街を忘れ、街も彼を忘れた。少しずつ、彼は変わっていった。村中どこにでも行くようになった。幼なじみと会い、広場やカフェに出かけ、畑仕事も手伝った。そして、十月一日になると決まって、彼はまた山からもぎ取られるようにして、農民として、同級生のなかへと下りて行かなければならなかった。彼らは、夏の畑仕事ですっかり日焼けしてたくましくなった彼を、当人とみとめるのに、とまどったものだ。

フルルは、修了試験を目指してコレッジに戻った。学校に通う最後の一年だった。両親の経済状態はこれまでにないほど厳しかったが、修了証は彼にとって確実な保証だった。村では、もはや誰も彼を子ども扱いしなかった。父は何かにつけて彼に意見をきき、伯父も従兄弟も、彼を相談事に呼んだ。人がやってきては、彼に助言を求め、込み入った手紙を書いてくれるよう頼んだりした。人は彼を重く見ていたが、彼はそのことに何らのうぬぼれ心も持たなかった。きっと彼は、誰かが彼に助言し、彼を励まし、彼を支えてくれることを求めているのだろう。彼は、自分はひとりだと感じていた。人が彼を頼るとき、彼は誰かを頼ってその人の助言に全面的に従いたかった。ただ、自分の学問の計画のみに集

申したかったのだ。出発前に父が彼に言った。

「さあ行け、息子よ！ 神がおまえとともにある。おまえに道を示してくれるだろう」母は彼をやさしく抱いて、誇らしい気持ちを隠そうともせずほほえんだ。よくわかった。両親はいささかも疑っていない。二人は息子の成功を固く信じていた。彼らの倅は、もう一度うまくやるだろう、当然だ。そして、彼らは満足する。彼にはよくわかっていた。もし失敗したら、師範学校の門はその先二度と彼に開かれる

ことはない。彼は受験資格のある年齢の上限に来ていた。彼はまた、たったひとり悪条件の下で努力を続けなくてはならなかった。両親は、失敗した場合、彼がフランスへ行こうとしていることを知りうべくもなかった。彼は夏中ずっと、この考えに取りつかれていた。フランスでは、工場労働者として働き口を見つけられるだろう。アルジェリアでは、いずれかの選択しかなかった。先生になる、つまり家族全員の安定した生活ということになるか、羊飼いになるかだった。

日が経つにつれて、入試はとても突破できそうにないと思えて、フルルは恐ろしくなった。勉強を続けながらも、彼は気持ちがくじけていった。六月、無駄になった本と、役に立たない卒業証書をもって村に帰る自分を、彼は思い描いてみた。涙ぐみながらも、いつもと変わらず寛大な母と、期待を裏切られて惨めな気持ちになった父が迎えてくれるだろう。彼は、ほかの人はみな彼を軽蔑するだろうと思った。ときどきはまた、自分を信じる気にもなった。彼は家族の運命、彼らの最後の切り札を賭けていた。運命の日の一週間前、彼は、それまでに胸に去来した様々な気持ちにとらえられていた。それより前、父は、街へと下りてきた。アルジェでの滞在費を心配しなくてよいように、いくらかの金を持って来たのだった。ふたりは国道に出てそぞろ歩いた、そうして、ラムダンを乗せてくれるトラックが通りかかるのを待った。

「アルジェに行けば、あっちは、受験者がえらく多いことだろう。選ばれるのは、そのうちの何人かだけだ。合格はいつだって運だ。おまえは、仲間とアルジェに行く。われらは、上で、待っているさ。失敗したら、家に帰ってくればいい。みんなおまえを愛している。それを、よく心に言い聞かせるんだぞ。それに、おまえが身につけた教育は取り上げられやしない、そうだろう？ おまえのものだ。さあ、わしは村へと上がる。母さんには、おまえに話したことを伝えておく。おまえが落ち着いていた、と言っておくよ」

「ああ、ぼくは落ち着いてる。上に帰ったら、そう言ってよ」

フルル・メンラッド (原注省略)

ブザレア

アルジェ、ブザレア師範学校の入学試験は一週間にわたって行われた。土曜日の夕方、ギユマン通りにある校舎のバルコニーの高みから、メンラッドは、ほかの二十人ほどの受験生とともに合格したことを告げられた。このうえなく大きな喜びが感じられた。

笑いもせず、泣きもしなかった。ただ青ざめ、口を開けたまま、目は試験管に釘づけだった。心臓が激しく打つのが感じた。身体の内空洞が生じたような感覚があり、頭の中では、たくさんの事がひしめき押し合い、もつれ合っていた。本当に受かったのだろうか。慣れ親しんできた夢が現実になったのだろうか。地上の楽園に迎えられたのだろうか。かろうじて、信じる事ができた。これで、いずれは教師になれるだろうか？ 彼にとって少年時代から、手の届かない理想としてあったこの学舎を実際に知ることになるのだろうか？ 両親は、家族は？ これで、みなが楽になるのは確かだ。

「よかった！ よかった！」と何度も繰り返した。まさにそのとおり、彼は幸せだった。それなのに、身体には何の変化もないことに驚く始末だった。これほど嬉しかったら、空を飛ぶこともできるはずだ。もっとも、飛べるはずはないとわかっていた。喜びがいっぱいになり、息がつまり、外へとあふれ出た。それがわかった。身体はそれを邪魔する、窮屈な洋服のようだった。それを脱ぎ捨てたいとさえ思った。ちっぽけな人間存在にとっては、大きな悲しみと同様、極大の喜びを受け止めるだけの力がないのは確かだから。この世に、完全な幸福は存在しないと、よく言われた。そんな事が書かれているのを目にもした。おそらく、われわれの弱さのせいだ。

少なくとも、ほんの短い間だけは、メンラッドは幸せそのものだった。仲間を抱擁し、自分自身をも抱擁してやりたいような気持ちだった。恨み心や嫉妬心は忘れた。自分を好きになってくれなかった者たちの先へと行ったのだから。彼は、みなを喜ばせ、有頂天な気分を分け合いたかった。だが、それはできなかった。合格すると信じていたのに駄目だった者もいて、その落胆ぶりは大変なものだった。冷静さを装う者、嫉妬心をむき出しに

して、彼に皮肉な笑いや不愉快なことばを投げかけてくる者もいた。彼はひどく感じやすくなつて、苦い思いをかみしめた。泣きたくなつた。すぐに、己の合格は己にしか関心の ないことだと悟つた。最初大喜びしたことが恥ずかしくなり、自分の喜びように意地悪く 応じたり、弾む気持ちをさしたる事でもないように言う者たちを軽蔑した。そうではない！ ここ地上には完全なる幸福などないとする者たちにも理はある。われわれの友人が、それ を脅かす役目を負っている最初の者たちだつたのだ。

だが、父母はこの喜びを無条件で分かち合ってくれるだろうと考えて、メンラッドはみ ずからを慰めた。彼が思った通り、家族だけはみな、この試験の結果の重要性をはつきり と理解していた。家族の者たちは神を祝福した。しかし、この喜びを、近隣の親戚だの友 人だのとも分かち合おうとするようなことをしないだけの知恵があつた。

フルルは師範学校に入学し、そこで三年を過ごした。それ以上言う必要はあるまい。そ れが大切な三年間であつたことは、彼が認めている。彼の人生において、その年月は大変 重要であつただけに、彼がまさにその年月を生きたまま、あるいは記憶によって生きなお させるまを、ペンによって生き返らせることは十分にできないのに、その年月をむりや り語らせようとする行為は、不尊というものだろう。それに、事実はいたって簡単だ。ブ ザレアで彼がしたことは、いくつかの語に要約できる。入学したときには、ひとりの若者 であつた彼は、そこで一人前の男となり、また教師となつた。どこにあつても、生まれた 村ででも、一人前の男になれることを、彼はよくわかっている。しかし、それは全然ちが う男になることだ！

メンラッドはカピリア人だ。それは彼が決めたことではない。彼は、若いときからフラ ンス人を知っている。最初に知つたフランス人は憲兵だつた。彼らが広場に現れると、仲 間とともに逃げ出した。それから、村長の姿を認めると、安心して戻つてきて、十分に離 れたところから、ちよつとでも危ないことがあれば逃げ出せるよう警戒しながら、しばら くフランス人を眺めた。なんて肌の白い、きれいな、いい服を着た、強そうな人たちだろ う。彼らは、ほとんど理解不能のフランス語を話していた。この頃には、彼は行政の最高 長官を見かけたことは一度もなかつた。その人の名は、悪いことをした者を脅かすときに は、いつも村長アミンの口にのぼつた。しかし、フルルがその人を怖れていたのは、あ ら ゆる異教徒を怖れていたからだつた。

後に、師範学校準備校にいた頃には、この怖れは、完全に消えないまでも、ある種の尊 敬の念に席を譲つた。人が、よそから来た人たちに対して覚える感情、明らかにより豊か でより美しく、賢く、幸福そうであり、おそらくは美德についてもより優れた人たちに対 して、われ知らず覚える感情だつた。カピリア人の生徒たちは内輪で、ときおりそんな事 を言い合つた。洗練された感じの男性や、美しい女性を目にすると、賞賛の気持ちを抑え ることができず、こんな素晴らしい人たちが不誠実な振る舞いをするとは、とても思えな かつた。その賛嘆の気持ちに、尊敬や愛情がごくわずかしか混じっていないのは、小さな 町に暮らすフランス人はプライドが高く、雲の上の人たちだからだろう。彼らは原住民を 軽蔑している。彼らは、何としても遠く離れた一つの階級を形成しようとしており、ほか の人たちは眼中にない。フルルはまだ若かつたが、こういう事をみな承知していた。結局 のところ、フランス人を認めてはいたが、優れた者たちが劣つた者を嫌うのは自然の法則 だと考えた。彼が教わつた先生たちにしても、あからさまにフランス人の生徒たちと、寄

宿生数人を贖罪していた。フルルは、自分を劣等の嫌われ者として見て、そうと諦めた。師範学校の先生たちが彼にくれた最初の、そして最高の贈り物は、彼に自尊心を持たせてくれたことだった。あの先生方を、どうして忘れることができよう。あそこではもはや、障壁はなかった。フランス人も原住民もなく、あるのはただ、教える者と教えられる者のみ、そして教える者たちは、執拗なほどの丹念さで教える者を見守り育てようとしていた。フルルという人間にとってとりわけ重要なこの時期のことを、ねじまげたり小説風に仕立てようとする者は誰であろうと、彼はよくは思わない。彼は、先生たちを敬愛している。彼が望むのは真実のみ。そして、彼の熱い敬愛の念を証すには、真実だけで十分なのである。校長を始め、先生たちの最初の仕事とは、彼らの原住民学生の心から、不信と恐れと劣等の感情をことごとく取り除くことだった。彼らは全員一致のもと、原住民学生たちを一気に、ほかの学生と同じ平面に置いた。ただ単に学徒という地位に、彼らが関心を持つ学徒として。そしてこちらからは、全幅の信頼を得ることになった。若くて貪欲な精神から、教養にあふれ経験豊富な精神に向けられる信頼の情。いともたやすく情熱に駆られる精神から、誠実で善良な精神に向けられる信頼の思い。そうして、教師たちは学生たちみなに、善を愛し悪を憎むことを教えた。そう、三年間が必要だった。三年間、若者たちは日々、二十人ほどの教師に接して、淡々と完璧に課題をこなしていった。教員たちがみな、美德について語ったわけではなく、おのおの独自のやり方をしたが、彼らはすべて高潔な人物だった。そうであらざるをえなかった。彼らのすることは、ちょっとした仕草も行為も、二十歳かそこらの学生たちから量られ評価されていて、それを無視することはできなかった。

いくら記憶のページを繰ってみても、フルルは、教えを受けた教師の誰に対しても、何ひとつ非難を見つけることはできない。おそらく、そう思っているのは彼ひとりではあるまい。だが、彼ももう三十歳を越え、家族もいる身である。それに、ブザレアへの思いがずっと同じで変わらないと考えるのは、誤りだろう。故郷の山地地方に戻って、気苦労や陥穽や失望や貧困という、生きることの現実にとっぷり浸かるようになって以来、先生たちがその教えや、自らを範として示した、よき事どものすべてを信じる者など誰もなく、それはばかげた事ではないか、とよく思ったものだ。

やさしい思いを伴って何度でも思い出される場面がある。それは、二年生の時、数学の期末試験が終わった後のことだった。彼は課題をし損じて、結果は惨憺たるものだった。だが、数学の試験は、第二学年において、高等資格に向けての主要な試験だった。彼は校長に呼ばれた。褒められるためではなかった。

「さてと、メンラッド。君の数学の成績はひどいものだ。二年で数学が重要な科目であることは承知していると思うが、この成績についてどう弁明するのか？」

「先生、私は、数学を軽視しているのではありません。課題をし損ねてしまいました。分からないのは……」

「期末試験ですよ！ 授業でやった問題だ。復習をしなかったのかね？」

「いいえ、しました」

「いや、勉強してない。それにつきる。君がこんな成績を取るとは、思ってもみなかった。やめてもいいんだ。私は、大変不満だ」

「先生！」

「汚名をそそぐ気なら、遠慮はいらない。話を聞こう。何があったのかね？」メンラッドは、一気に言った。「先生、私は新学期の授業が始まる直前に、家からよくない報せを受け取ったのです。この手紙です」

「友よ、無理に私にその手紙を見せなくてもいい」。師の声は、途端にやさしくなった。「その悪い報せというのが何かだけ話してくれないか。親御さんのどちらかが病気で」

「いいえ、そうではありません、先生。でも……」

「でもどうした？」

「私に返事をくれたのは弟です。私は、父に少しだけお金を無心したんです。どうかこの手紙を、これが返事です」

校長は、ようやくにして、手紙を手にとった。兄からの金の無心に対して、弟のダダールが返事を書いてきた。家の方では、兄よりもいっそうお金が必要である。いまは真冬なので、家には家族全員が食べる大麦が二デカリットルしかないし、現金は二十五フランしかない。フランスにいるベライドからは、一フランも送ってこない。なじみの金貸しも、もうびた一文も貸そうとしない。それで、フルルには、少なくとも一、二か月は、何とかやりくりする手だてを見つけてくれと頼んでいた。それは、代数の解を求めるよりもずっと難しいことだった。

校長は手紙を返した。

「君は、次の学期にはよい成績をとるね、私は君を信じているよ。君のような立場にいる者は、しっかり勉強しなくてはならん。それについて、私がいろいろ言う必要はなかるう。だが、いいかね。君は親御さんのことを気かけすぎてはいけない。いくら何でも、家族が飢えて亡くなることはないのだからね」

メンラッドは、校長の気遣いに礼を言い、部屋を出て行こうとした。

「待ちなさい。君に事づけたいものがある。ご家族へのちょっとした援助だ。断ってはいいくないよ。これは、君にあげるのではないからね。ここに六百フランある。日曜日に、為替で送りなさい。誰にも口外しない！ 遠慮は無用！ 気持ちが収まらないとあれば、君が教師になった暁に、私に返してくれたらいい」

フルルがお金を返すことは一度もないまま、彼のよき師は一年後に事故で亡くなってしまった。だが、フルルの書類のなかを探してみるならば、雲母を散らした紙でできた封筒に、写真が一枚と、アルジェの日刊紙の切り抜きが入っているのが見つかるだろう。それは、その先生を紹介した記事で、彼はそれをずっと遺品として持ち続けるだろう。

彼はまた、同期の級友たちをも忘れることはない。よき思い出のすべてをもち続けた。彼らも、彼自身とまったく同じに、欠点というものもあっただろう。だがいまは、仲間のよいところしか覚えていない。それをまた、彼は残念にも思うのだ。あの頃のままの彼らみなに会いたいと彼は思う。仲間が変わらず同じままだとは、彼も思っていない。彼自身は、変わってはいないか？ 過ぎた時はもう戻らない。精神は変化し、気持ちの持ちようも変わる。過去はかすんでいく。ときとして、人はそれを笑う。仲間のなかには、小都市に住むフランス人のようになってしまった者がいるだろうか？ ほかの者、原住民学生のなかにはまた、よき評価とは相容れない不信に陥ってしまった者があるだろうか？ 彼は、そう考えることを自らに禁じた。

あの頃の事を思い出すとき、幾多の思い出の内でも、とくに大切な別れの宴の所で彼は立ち止まり、その先には決して進むことがない。教師も学生も分け隔てなく集まった、たった一度の宴、その終わりには演説もなければ、大仰なことばもなかった。教師から学生には、短く簡素なことばがあり、学生同士は、最上の助言、密かな涙、熱い握手を交わし合った……。そして、ついに散り散りになったのだ。

師範学校で過ごした年月は、フルルの人生にとって、ほかとはまったく違う、いわば尋常ならざる時期であった。愛情に満ちた時であったことのほかに、また、彼にとっては例外的に、知的にも倫理的に豊かな時期であった。青年の目にそれが価値ある時期と見えたのは、それが、彼がフランス人とともに生活した唯一の時期だったからでもあった。師範学校に入る前には、彼はフランス人をぜんぜん知らなかった。三年が過ぎ去り、彼はもはや、遠くからフランス人を眺めるにすぎない。彼は、最初に持って行った荷物と、尽きない思い出と、素晴らしい感動をもってした選択を携えて、故郷の山地地方に戻っているのだ。

今でも、彼は覚えている。高等資格取得者の義務のひとつを。「己を取り巻く者たちをよく見て、互いに知り、親愛の気持ちをもつこと……」。師範学校で彼は、己の周囲をよく見て、親愛の気持ちを持つことを学んだ。その事を、そこでしっかりと身につけた。彼は、《箱》を出るときに、最良の仲間という賞を受けた。それは誇っていいことだ。彼にとっても、仲間たちにとっても。彼が暮らした小さな社会は素晴らしかった。

いっぽうで、よく考えてみれば、この師範学校生たちのつくる社会は彼が主張しようとするほどに理想的なものではなかった。それなりの不完全さがあった。若者特有の無頓着ぶりが、それに拍車をかけていた。それに、学生たちには利害の対立というものがなく、理想主義者を気取っていられたのだから。

大体において、見習い教育者たちは礼を心得た、思いやりある者たちで、偏見や差別に対しては、敵であった。しかし、微妙な差異ならいくらでもあった。それを見て取るのに、大いなる観察者である必要はなかった。

最初、同郷出身者は、意図せずにグループを作った。これは人工的なもので、それほど長続きはしない。失策である。次に、フランス人たちが別個にグループをつくると、スペイン人、ユダヤ人、アラブ人、カピリア人がその真似をした。規律はなく、人種は、おのが民衆を集める鐘になっただけだった。残っているのは、社会的条件、身につける衣服、親の社会的地位だ。もちろん、それは厳密な規則ではないが、学生間にあるいちばん大きな障壁は、人種でも宗教でもなく、心身の違い、財産の有無、家族の教育レベルだったことは言うっておかねばならない。

地方出身の粗野なフルルが、両親が学校の校長であつたり、兄弟が教師をしているようなフランス人と親しくなれるはずがない。そういう同輩のやさしさや、人当たりのよい礼儀正しさをもってしても、どうにもならないことだった。ぎりぎり tu で呼び合っても、親しみはみじんもない。ほかの学生、トレムセンやオラン出身で、弁護士や通訳官の息子であり、よきムスリムでもある生粋の都会人も、フルルにとっては、フランス人と同じくらいなじみがなかった。スペイン出身、五人、六人と子だくさんで、父メンラッドでも羨みもしないようなカフェの給仕、その長男なら、確かにフルルにより近かった。メディアから来たユダヤ人学生や、ブウ・サアダ出身のアラブ人とも心動かされる思い出がある。フル

ルは彼らとなら、村のこと家族のことを自由に話すことができた。同じように貧しかったからだ。だが、師範学校における最良の友は、やはり何と言っても、二人のカピリア人だった。彼らの身の上は、どこからどこまでも、フルルと一緒にいた。もっとも、こういったことすべて、何かしら重大事を示しているのだろうか？ 師範学校生は、相互に違っていることを厭いはしないし、世間普通の人の間にあるような悪意や不実はないのに。フルルは妙案を考え出した。それについては、もう詮索しないことにした。彼はカピリア人であり続け、己の運命を受け入れた。

日曜日、師範学校生がおしゃべりしながらアルジェの街中に行くバスに乗り込むときは、おのおのの区別をぼやけさせる個性のない上っ張りを着ていないから、それぞれの違いがすぐわかる。髭をそって髪を整え、肌も磨き立てて、趣味のよい服を着た、見た目のよい青年たちがいた。フルルと、彼の友人たちもいた。

アルジェでフルルは、美しい若い女性を見ることができた。女性の魅力に目覚める年頃になっていた。それも当然だ。いっぽうで、彼は、これは自分には関係がないのだとわかっていた。彼には色恋沙汰もなければ、幻想もなかった。己の財も人となりも、才知も、何もたのむところはなかった。彼は、郷里で自分と同じような人といるときだけはくつろげると感じていた。彼は街にいた日々を、興味津々の観察者であっても誘惑はされない者として過ごし、免状を得てそれから村に帰った。後悔も憤りもなかった。自然は彼に、感性とやさしさを与えた。彼は古典作家の作品を読んで、感情の美しさや、精神の昂揚を味わった。本のなかの、あるいは多少は現実にもあるかもしれない、愛という概念は、彼にとっては一種の啓示だった。もっとも一方では、カピリアの現実は違っていると、彼ははっきりそう思う。己の未来の妻は、詩人たちが歌い讃えるようなヒロインたちと通じるような所は何もないと確信している。それを惜しむ気持ちは多少あるが、彼自身にしても、ヒーローからはほど遠いことはよく承知している。残念だが、彼は自分なりに何とかやっけていくだろうし、幸せになることを諦めているわけではない。

カピリアでは、ずいぶん様子が違う。カピリア人の子どもは、小さいうちから、自分の起源を知っている。自分がどこから来たのか、それを教える役目を負っているのは仲間たちだ。自分の目で、男の子と女の子の違い、男と女の違いを見て取る。父親がどうして母親と一緒に寝るのかも知っている。五歳六歳の頃には、従兄弟も従姉妹も一緒に遊ぶ。もう少しすると、男の子は従兄弟としか遊ばなくなる。十歳ぐらいで、女の子は、女という部族のところに戻ってしまうからだ。そうすると、女の子は男の子と自由に遊ぶことはできなくなる。厳しく監督され、とりわけ女たちから、いろいろな教育をたんまり受けることになる。性の問題については絶対に、何一つ知らないことはないようになる。疑り深くなり、恐がりになり、身持ちが堅くなる。夫たる者は、妻を無垢のまま迎えなくてはならない。それが位が一番の規則であると、女の子たちは言い聞かされる。十五歳から二十歳までは、青年と娘は、人間の二つのカテゴリーを形成する。それは、隣り合っているが、互いに知らないふりをしていなくてはならない。いかなる関係も持たない。会っても、互いにことばを交わすことはないし、互いに求め合いながらもふれ合うことはない。恋愛、舞踏会、宴会、連れだつての外出など、いずれもない。稀に、踊ったり歌ったりすることはあるが、祭の時だけだ。女たちは、注意深く、広場や家の片側を占め、若者たちはもう一方の側に集まる。このときは、老人たちの厳しい監視を受けながら、歌ったり踊ったり

できる。見て感嘆することはできる、心は熱くなる。そして、血が滲むほど唇を噛みしめる。姿を想像する。豊満な胸元、すらりとした胴、微笑む顔が、目に浮かんでなかなか眠れない。眠れない時にはまた……。いや、それは生活とは違う。それは、われわれの所では、名誉と慣習を守るやり方だと考えられている。結婚するまでに、男たちはあらゆる悪徳を知り尽くす。娘たちは、男の必要というものを心得ている。どんな男についてもそう、嫁にしてくれる男は誰でも歓迎される。だが、危険な関係がないかという、そんなことはありえない。どこでも同じだ。突然の予備折衝。男と女は、一直線に目的に向かう。チャンスは滅多にないし、危険はあまりにも大きい。欲望はぎらぎらしている。無益な愛撫なんぞに手間取ってはられない。身を投じる女は、うぶな若者を選ぶことは稀だ。軽はずみと不謹慎が招く危険は怖れられている。やれやれ、わが郷のかわいそうな若者たちには同情せざるをえない。慣習によって純潔を強制されているのに、妻となる女を知る前に、無垢であることを捨て、放蕩に目覚めざるをえない。野獣ではないのだ。それが証拠に、結婚した途端とてもやさしくなる。ただ、一時の間、ありとあらゆる愚行をするだけなのだ。両親も、同じ所を通過してきたのでよくわかっていて、子どもらを弁護する。すべてよかれと思ってのことだ。

フルルは、長期休みの間は、村の若者たちと遊ぶ。彼らが歌うのを聴いたり、縦笛を吹くのが好きで、情け深いシ・モハンドの感動的な詩を愛唱する。夜には、村を離れて出かける。ぼんやりとした月の光が低い丘の斜面を浸して、頂はかすかにそれと知れるのみ。平らな谷底でも、霧の影に覆われて景色は見えず、巨人の姿をした背の高い木々は、遠くの方で丘陵とつながって黒く物寂しい塊となる。空には星がまたたき、熱のないその光は、夢でも見ているかのように、どこかおぼろで青ざめている。憂いに満ちた薄闇、声のハーモニー、縦笛のやさしい音色、比喩に富む詩の形式が音楽のリズムにのる。こうしたものが心を動かして、精神は形象に、身体は軽い酔いに満たされる。

こういった夜々には、その魅力がある。フルルにとってそれは、踊りと熱狂に揺れる夜にも替えがたい。若者の心を満たすのにそこには、夢見られ歌われる者の存在だけだ。しかし、カピリア人はあまりに慎み深く現実的だ。誰も、若い娘たちが、閉ざされた扉の向こう側、父母の傍らで、同じように夢見ることをさまたげはしない。

女性についての思いこみは、長い間フルルを縛っていた。ある日、肉体のすべてでもって女性を求めるときがやってきた。フルルには、みんなが自分の表情にその欲望を読み取っているように感じられた。広場で綺麗な女の子が通りかかると、訳もなく顔を赤らめた。女の人の前では、自分が自分でなくなり、ぎごちなく震えて、目を伏せる。うっかりして、美しい人の姿、魅力たっぷりの瞬間に捉えられてしまうと、日がな一日そればかりを思い返すのだ。

サダのことは、村では知られていた。何があったのか、みな大方は承知している。夫はフランスに行っていた。始めはうまくいっていた。金は送られてきていた。従兄弟の一人がその仲立ちをしていた。サダの家には、誰もいなかった。様子をうかがう姑も、恐い義理の兄弟もいなかった。義理の従兄弟がいたが、兄弟ほど近くはない。サダが、まずこの従兄弟と関係するようになったことを、誰もが知っていた。夫は遠く離れた所にいる。それに、金は海を渡るのを止めてしまった。サダは気丈な女だ。糸を織って稼いで、何とか暮らしていこうとした。それに、直裁な欲望をも当たり前のように、自ら満たそうとす

る、秘密の守れる隣人との間で、また気の向くまま別の隣人とも。人がひそひそと噂話を するようになる。ある喧嘩がもとで、よく事情を知っている近所の女が事を暴露したのが 最初のきっかけだった。サダは大胆になる。近所の女たちみなを鼻であしらう。それに、 夫は相変わらず金を送ってこないし、毛糸の織りなど大した稼ぎにはならない。いちばん 最初の情夫は、情け容赦もなく敵方の陣営に行ってしまう。噂なんぞクソ喰らえだ。サダ は、すっかり重しがとれたようになって、若者たちだけでなく、年寄りの喜びの源泉にも なっていた。

歳は三十歳、目の色は黒くて深かった。大きな口の分厚い唇はいつも濡れて光っている。 まるで、男のように筋骨たくましい。タッサーシルクや、中国製のクレープ生地できた 美しいガンドウラや、チュールレースで縁取りしたガンドウラで装うようになり、肉付き のよい二の腕や、身体を二つ折りにできるほど柔らかくしなやかな腰のあたりを目立たせて、魅力的に見せるやりかたを心得ている。とびきりの美女というわけではないが、何とも欲情をそそらせる！ サダは大勢の男たちへと 頭^{こうべ}を巡らせる。何はさておき、彼女は非社交的な女ではない。男たちはおのおの、彼女を見て、自分の懐具合と相談しながら自 分の欲望を感じる。

ある夏の日、真昼のことだった。フルルは畑から戻ってくるときに、突然サダと鉢合わせになった。狭い小道でのことだった。サダは、空の籠を背に、村の方から下りてくるところだった。逢い引きに行くところだったのだろう。すれ違うには、互いの身体が触れあわざるをえなかった。フルルは仰天した。熱いものが顔に上ってきて、耳ががんがん鳴った。心臓は早鐘のように打った。フルルは、二つの黒い瞳が遠慮会釈なく自分を見つめているのを感じて、魅入られた小鳥のように震えたが、頑なに目を伏せたまま、意を決して前に進んだ。二人はすれ違った。フルルは、サダのよく締まった熱い尻が自分の膝のあたりをそっと押してくるのを感じ、サダは通り過ぎ様に深い溜息をついた。そして、道が曲がっているところで、ためらう風もなく静かに姿を消した。サダはフルルを知っていた。あえて危険を冒すような人物ではないとよくわかっていただろう。いたずらに刺激しても、それがサダにとって何の益があろう。目的の場所に行く前にちょっと欲望を刺激したというだけだ。もちろん、フルルはちょっと興奮した。斜面によりかかって、熱くなった手を機械的に額に持って行き、何度か汗をぬぐった。サダが、谷底の、鉱山のある窪んだ場所にいるのが見える。エニシダに囲まれた一本の木の下で、若者か老人かわからないが、ともかく最初にやってきた男と一緒に。目はきらきら輝き、不敵な笑いを浮かべ、挑むような横柄な様子をしている。いや！ おとなしく立ち去ってくれ。フルルはといえば、不意に落ち着きを取り戻した。ひどく張りつめていた神経がゆるみ、異常な不安感、コップのなかの角砂糖のように、身体がなかで解けていく。気持ちが明るくなり、落ち着きが戻り、幸福といえるほどの気分になる。フルルは、自分を屈服させることを妨げた、女の愚かさを喜ぶ。頭の中がいろいろな考えでいっぱいだ。フルルにとって必要なのは、確かにサダではない。気持ちが落ち着くと、次にやってきたのは嫌悪感だ。その女に対する嫌悪、最初はその境遇と周囲の人間たちがその女を追い立てたのだが、もはやすっかり開き直っている。女は、己の成す事を成すのに、無情の喜びを感じているのだから。無花果の木の下かどこかで、誰にでも身をすり寄せるその女を待ち受ける男への嫌悪感。サダが行くのは、本当はどこだろう？ 真っ昼間、そこへ、彼女に会いに来るのは誰か、蟬だけが知っ

ている？ 後をつけて行って確かめてやろうか、との思いが、フルルの頭を一瞬かすめる。「どうでもいいことだ」。フルルは思い、村へと上っていった。

「心は人の導く所へ行く」とは、カビリアの諺だ。だから良家の人たちは、その家の者の心を、名誉へと向かわせる。人は品行の要請に従って行動する。女たちは、不在の男たちを、十年でも待ってびくともしない。己を恃む男子は、人にあれこれ言われるようなことをしてはならない。結婚を待つべし！

若者の要求に応える、サダのような女たちはいて、村ではそれを大目に見ている。だが、そういう家はそういう家だとされている。みな、どう対処すべきか心得ているのだ。そのことを、親から子どもへと伝えていくのである。

フルルは、男と女の関係にあまり信頼をおかない故郷の人たちを非難することはできない。無秩序を避けるためには、無理矢理気持ちを納得させることも必要だから。フルルは、郷里で結婚し、妻によってカビリアのよき家族が作り上げてきた絆に連なるのだという考えを受け入れる。

定められた己の運命を受け入れ、
ガリユスは、かつて己が生まれたその場所で、生きることを止める。
そうとも、いまや、おまえは知った。ガリユスは
賢人なりと。

J.=M.・ヘレディヤ

メンラッドが老いたるガリユスに似ているとしても、違いもたくさんある。ガリユスはひとりだったし、負債もなかった。メンラッドのほうは、一文も稼がないうちから、恐ろしいほどの負債を負っていて、大人数の家族と、すっかり金持ちのつもりになっている両親がいた。長い夏休みが終わると、小さな学級を受け持つことになり、ささやかな《俸給》を受け取った。俸給は、翌月のを待たずに消滅した。それは、人も似たようなものだ。メンラッドはすぐに、これから先もずっとそんなことだろうと確信した。つまり、両親が金持ちのつもりになっているとしても、あながち間違いではない。必要なものはすべてあるし、昔のように不安を覚えることもなく先のことを心配しなくてもいいのだから。フルルが何くれと悩み、先のことを考えすぎているとしたら、それは権利であって、両親のように、《墓から二歩のところにいる》のではないからだ。それに、親たちは長い間、負担に耐えてきた。もはや、己の休息を邪魔されたくはあるまい。

おそらく、親たちは正しい。親を敬う、しっかりとした青年は、いつも月々の稼ぎを両親に渡していた。老父はそれを、あらゆる欲求充足のために遣った。教師には、金貸しに支払う金をまとめて都合してくれる友人がいた。負債は相当な額だ。だが、この友人は利子を少しも要求せず、そのおかげで、負債は増えることがなくなった。ラムダンはとても喜んだ。そうまでしてもらったのなら、よりいっそう儉約して、息子の友人になるべく早く金を返そうとするはずだ。

父はといえば、こう言えば十分だが、至って単純であるだけに、事を逆に考えた。もうすっかり安心していい、家計のためのお金も全部遣えるのだと。

実際には、負担は相当に重かった。家族は十二人。冬には伯父のルニスガが亡くなり、家には食糧の蓄えはなく、大人になっても誰ひとり嫁に行かない娘たちの絶望に駆られた泣き声だけがあった。フルルは、この人たちを見捨ててはいけなかった。最悪の日々には人の世話を受けることになり、それから、姪たちに何の愛情も持っていなかったファトマは、申し出のあった援助のおもだったもの全部に反対したが、けなげな娘たちは仕事を始め、叔母の親切な心遣いはなくなった。

ラムダンとファトマは息子を結婚させると決めたが、婚資作りのための貯金は始めなかった。フルルは嫌がった。だが、今度はおまえの番だという。姉たち二人は嫁いだ。妹に順番を譲りたかったが、そういうやり方は先例に比べてうまくないし、ザズウは甥や姪を兄に託すことになる。

「こんな状況だから、女の子しか生まれなくても、私も結婚したほうがよさそうだ」

とフルルは考えた。かてて加えて、フルルの気を休めるために、母は一度ならず言ったものだ。新しく生まれてくる子はみんな、この世に出てくる前に天で食い扶持をあてがわれるものだ。いまでは、フルルもそう信じている。

フルルは、郷里の人たちとまったく同じように結婚した。よりよくもなければ、より悪くもない。わざわざ語るほどのこともない。結婚式のことは、大勢の人が知っている。知らない者たちも、だからといって何か損をすることもあるまい。結婚式というものは、負債をより大きくした。もつとも、十か月後、フルルは家族の父親になった。しかし、妻のことも、蜜月や己の愛情についても何も語りはしない。繰り返しになるが、カピリア人はこういったことを、厳密に内輪のことと見なしている。どうも、これは過ぎた嫉妬心のようと思われる。というのは、カピリアの男たちは己の妻が尊敬されることを望むが、他人の妻を尊敬しないことしばしばであるゆえだ。この点に関して、その名誉の感覚は、何かと混同されている……。ともかく、それはまた別の話だ。

フルルは、女性一般と、とりわけ自分の妻については、ある考えを持っていた。その考え方は、家族の考え方とは相容れなかった。学校で学んだ、ちょっと妙な考え方だったかもしれない。たとえば、連れ合いを愛するのは義務であると思っていた。勿論、妻の方からも同じように応えた。二人は、そのことを包み隠したりはしなかった。それがはっきりわかると、家族の者たちに動揺が拡がった。苦勞してフルルを育て上げ、辛抱強く幸せになる日を待っていたのに、よそ者の小娘がそれを自分たちから奪って背を向けさせ、自分たちに代わって息子の心に居座ろうというのか？ とんでもない！ すぐさま、もめ事が起こった！ 最初の喧嘩は些細な事が原因で、結婚から一か月も経たないうちだった。

青年は、一生懸命妻を守ろうとした。母はヒステリックになり、姉妹は泣き、父はその後しばらく口をきこうとしなくなった。そんな反応が返ってきたので、フルルが折れてわびを入れた。父はさらなる償いを求める非情ぶりだった。償いとは何なのか？ 妻を離縁し、別の女を迎えることだ。何一つ欠くことなく、全てに同意した。選択はもうなされたのだ。あまたの無分別に接して、青年は真っ向から刃向かった。なるほど、己はあらゆる感謝の意を示さねばならないが、妻を替えるつもりはない、妻となる女を選び与えたのは両親ではないか。

まったく静けさが戻る。小さな世帯はできる限り節約する。家族の新しい主^{あるじ}はその役目をまじめに果たす。そして、だんだんと己の権威を家族の者たちに押しつけるようになる。かつて父がそうだったように、己にも家族の誰にも、贅沢は一切許さず、金を食い尽くす《イードの祭》が近づくとおののき、蓄えた食糧を食い尽くす冬が近づくと震える。借金は少しずつ減っていく。弟は大きくなり、間もなく一人前の男になる。まじめで賢いから、彼の助けは長男にとって大きいものになるだろう。未来はよきものと告げられている。メンラッド家はこの先ずっと、貧乏とは無縁になるだろう。

フルルは《丘の斜面に》ある、緑に囲まれた小さな学校にいる。自分が受け持つ小さなクラスと、小さな庭と小さな家族がある。彼はしばし、老いたるガリュスの運命を考えた。そう遠くないうちに、それは己の運命になるだろう。あれは、春のことだった。光り輝くカピリアの春。フルルは自由であり、愛され尊敬される幸福を感じていた。1939年、最後の平和な春だった。彼が暮らす山地地方にも、ドイツ人の怒りのざわめくこだまが、かすかにだが届き始めていたのだ！

戦争

1

戦争が勃発したとき、九月の、霧の出た朝のことだったが、カビリア人は誰ひとりとして驚かなかった。みな待ち受けていたのだ。戦争を望んでいたといえれば言い過ぎになるが、だが、ほぼそんなところだった。われわれには、何かが変わるに違いないという、一種の好奇心があった。平和が長く続きすぎた。カビリア人は、その平和に、ずいぶん苦しんできたのだった。《大いなる災厄には、大いなる処方箋が必要だ》。港の倉庫は穀物で一杯、店にも物があふれていた。食料品店も商品ではち切れんばかりだった。商店主たちは道行く人たちみなにウインクし、ごくごく小さな村まで、トラックやタクシーのすさまじい騒音でかき乱されていた。人が望むもの望まないもの、全てがあった。われわれは不幸だ、こんなことが長く続くはずはない。そして、処方箋としては、戦争しかなかった。

戦争は、《生存圏》から、《鋼鉄》のあるいは、枢軸でも何でもいいが、そういう協定から生じるのだと思うふりをする必要はない。そうではない。カビリア人はそれをよく承知している。老人たちはすでに 14 年の事によくわかっていたし、70 年にしても、戦争は避けがたいことだと説明できよう。それは神から生じる。人間が神に従おうとしなくなり、地に満ち溢れ、人間性のなかの何かを捨て去って、ほかの人たちを沖合で生活させようとする。彼らは、《生存圏》にたどり着くために、J・ド・メストルとともに歩む。それは、哲学者たちだ。若者たちは、どんなに経験の浅い者でも、よく心得ている。苦しんでいる人々が幸福になるためには戦争が必要だ。死ぬ者もあろう。だが、余所事だ。それに、戦争がなくても人は死ぬ。そう定められているのだから。しかし、その後には、きっと素晴らしい生がある！

それで、その朝は、おのおの心は軽く頭は計画でいっぱいになって、もぎたての無花果を食べに行き、隣人同士呼び合っては出来事について語り、ニュースを伝えたり受け取ったりした。もうニュースがあるのか？ どこから出たものやら、誰も知るものはなかった。いろいろなニュースがどっとやってきた。それは、確実に疑う余地がなく明白なのに、錯綜矛盾していた。

フルル自身は、断固として平和主義者だった。私は戦争を望んでいない、と心の中考えていた。だが、彼自身も世間の人々と同じ興奮と無縁でいることはできなかった。それでも、

これから起こる事は不幸であり、カピリア人もほかの人々同様、悲しみという代価を払わざるをえないだろうと、自分に言い聞かせた。さしあたりは、同胞と同じく、物事の常の 状態が転覆させられる怖れがあるとか、堅牢・豊かさ・快適・力・勇気が個人や社会に、 継続や抵抗の現実的な保証を与えなくなるような、価値観の突然の変化が起こる、という ような感覚は、フルルもまだ持っていなかった。つまり！ 人々は平和のうちに安住して おり、戦争は不慮の出来事であって、長く続くとは思われなかった。

実際、戦争が始まって何か月かは、カピリアの人々の単調な生活に何の変化もなかった。 例外は、旗の下に招集された若者たちだったが、それでも、全人口のうちのわずかな数にすぎなかった。ほかの者たちにとっては、人生の列車はずっと同じ、停滞していつとしない。意外な出来事もなく、希望もなく倦怠にみちている。出征した者たちからの手紙からも何も恐怖は感じられなかった。それぞれがみな自問していた。「こんなものが戦争なのか？ それほど、ひどい様子でもない。ヒトラーを怖れることはなかったし、早々と宣戦布告することもなかったんじゃないか。こんなことなら、わざわざ宣戦する価値はないだろう」。シニスム？ そうではない、幼稚でしかも忍耐がないのだ。われわれは、 そうなのだ。《変わることを求めて》、われわれはいとも気楽に、破滅へと走っていつてしま ーう。

それでも、メンラッドは、心穏やかではいられなかった。心中不安でいっぱい、この 奇妙な平穩の後に、恐ろしい嵐がやってくると、先走って見越していた。平穩は続くまい、 と怖れの気持ちを抱いた。日記にはこんな風に記してある。「1939年 12月 25日。…… 9月、宣戦布告。以来、世間を騒がせるような事はなにもない。悲惨？ 不安？ 厄介事？ 私にはわからない。私は招集されるだろうか？ それも、私にはわからない。それほど 心配はしていない。行くことになっても、気持ちは高ぶらない。心配事を沢山かかえて行かなくてはならない！ 十二人の使徒を舗道に残し、ひとり行く神！……」 ときおり、

フルルは、学校と家族から遠く離れ、どこかの最前線にでもいる自分を思い描いてみたが、はっきりとは想像できなかった。双子の星が、その生身の肉体から引き離されることを執拗に拒否した。どう考えても、私は戦争に必要とされていない。善良なる 男よ、落ち着け。おまえは、栄冠だの、苦しみと犠牲のために生まれてきたのではない。おまえには大したことは求められていない。教え子たちのことを考えていればいい。誠実に授業に努めることだ。ときどきはモール・カフェでの暇つぶしに、村で唯一、日刊紙を 取っているおまえは、戦争の話をしてくれと農民たちに頼まれましょう。おまえは熱心に 語り、説明し、説得するだろう。だが結局のところ、おまえの初等教育の見解では、いち ばん粗野な者たちだって説き伏せることはできまい。食い扶持をくれる政府をおまえが支 持していることは、みな先刻承知だからだ。

戦争の始めの何年かは、不幸なメンラッドほど無意味でわけのわからない存在はなかつ た。

学校の庭に立つた目の前に開ける眺めは、己の生活に驚くほどよく似ている。その眺めのように限定されたものである。カピリアのほかの村とは違って、メンラッドが勤める アイト・タブースの村は溪の奥まったところ、山脈の突出部がつくる台地の上にある。住 民は三百人、ほかには、ラバが二頭、つがいの牛が何頭か、野良犬三十匹ほどがいるだけ だ。学校は村の上、ほんの数メートル上で空に届く山腹にある。フルルにとって、この

学校の位置はいつも象徴的に思われてならなかった。が、それを説明したところで、農民には、象徴など全く理解できまい。学校の目の前には、手前の丘陵とその先に、もう一つの丘陵があらあらしく空を横切る。さらに、左からも右からも丘が突き出している。丘の頂が連なって線につながり、直径何キロかのすり鉢状の地形をつくる、その奥にまで、フルルを訪ねてくる者などひとりもありはしない。

だから、さしあたり少しの間は、メンラッドは動くことはできない。数年前には、徴兵審査委員会で抽選があり、兵役期間を免除された。抽選は一回と言われていたが、実際はそれが絶対ではなかった。だが、運はメンラッド一家を哀れんだのか、一家の支柱を奪い取ることはなかった。

戦争の最初の時期には、フルルは平時のままの、ささやかな生活列車を走らせていた。結局のところ、すべてうまくいっていた。ずっと遠い所、ライン河の前線では、まずマジノ線が、それから《小さな兵隊》が、堅固で乗り越え不能の古典的な障壁をつくっている。どの新聞もそろって、それを保証していた。

致命的な事件があってフランスが敗北に見舞われたとき、フルルは物思い、考えることしかできなかった。新聞紙面は、非難、表明、証拠でいっぱいだった。フルルは悲観的になっていて、誹謗記事すべてに、いかにもと納得するのだった。あるとき、敗北の唯一の責任は教師にあると、齒に衣着せぬ物言いをした記事に出くわした。しばし、「ペストにかかった動物たち」(『寓話』より。^{ラ・フォンテーヌ})のロバのことを考えたが、思い直した。誰にもわかるはずがない。

「おまえだって、アイト・タブースの人間だ。敗戦の責任の一端も何もないのか？ よく心の内を確かめてみることだ。自分の責任を認める必要があるかもしれない」

否！ おまえには何もわからない？ ちょっと待て。1940年の十月から、われわれの不幸、つまり、忘れ去られた義務、忠誠心の危機、システムD(代の後半から使われるようになった表現。)、不規程、怠惰、不誠実、腐敗等の起こるところについて、通達、教訓、短評、名言・格言が雨あられのように降り注いだ。われわれには「それ」がすべてあった。われわれは、「それ」をすべて失った。そして、教師であるおまえは、「それ」に対して何もしなかった。おまえは、教え子たちが、ビー玉遊びでずるをしたり、嘘を言ったり、人のものを写したりするのを見た。おまえ自身はどうだ、本当に誠実なのか？ 非難されるべきものは何もないのか？ あるとも、おまえは頭を垂れる。おまえにだって責任の一端はある。よし、おまえは許される。しかし、フランス全土が、そして帝国が立ち上がるためには、神聖の香気を呼吸する必要があることは知っておかなくてはなるまい。当然ながら、煉獄がある。だが、天国がわれわれを待っている」

フルルが改悛の行いとして、公式のプログラムである道徳の授業を己に課している間、その隣人の農民たちは、冷静に状況の分析を始めていた。

「フランス人は世俗での敵に敗れて自ら新しいリーダーを頂いた。この者は己の先人たちをずいぶん悪く言っているが、それももつともだ。競技の敗者にはいささかの理もないのだから。そうして同時に、敵については、よいことを言っている。かつての盟友が、フランスの艦船をメール・セル・ケビールで大破させた。われわれは指導者を交代させた。われわれはいま、ヒトラーのもとにある。そうなった。だが、それでどんな得があるとい

うのだろう？　そして、どんな不都合が？」　不都合もいろいろある。農民たちは、ただ単に生活の糧を失った。カフェではときおり、それが話題になる。ホシヌ翁は、ノルマンディー農民のうまい食事の思い出話をしては、腹を空かせた者たちの口に命の水の味を到来させる。この香具師ときたら、フランスのあちこちの町の市場で得た儲けを愛想よく広げて見せる。この出稼ぎ人は、パリやリヨンやサンテティエンヌで送った《よき暮らし》を、微に入り細を穿って話してみせる。いまでは、それも終わってしまった。フランスは強奪され解体されて、廢墟と化したことを農民たちは知っている。慰めにフルルが、きっと元に戻ると言ってみせたが、彼らは首を振るだけだった。

「いいや、先生、フランスがどれだけたくさんのもをなくしたか、あんたにはわからんよ。フランス人が駄目にした。神は、フランス人を罰したんだ。われわれも一緒にな。築くには時間がかかるが、壊すのは一瞬だ」

その通りだった。偉大な元帥閣下は、早くも農民たちに、多くの苦しみと困窮を約束していた。運命の前には、ひれ伏すしかなかった。それが定めというものだ！

カピリアは突然、いままでになかったほどに人がいっぱいになった。フランスで働いていた者たちがみな、一時に帰ってきた。それに、兵隊たちも加わった。獄中の者、死者はほとんどいない。どの村も、住人の数が最大に達した。役所の推算によると、カピリアは、その住人を一年のうち一か月間しか養えないとのことだった。それでも、カピリア人は、その痩せた山地と、破滅から救ったわずかの紙幣で生きのびるしかない。

商店はすぐに空になって物価が上がり、困窮状態になった。農民たちは、恐ろしい悪夢がすぐそこに迫っていることを疑わなかった。この悪夢は何年か続くに違いない。そして、一年一年が十年にも感じられるほど長いだろう。

フルルは、自分の任地を動かなかった。いまも、静かで安楽なままの手前勝手な、自分だけの小さな隅っこで、苦しみからは遠く離れていられる。俸給をもらい、家族と分け合う。ささやかな額に、大家族、いまや十五人も家族がいる。ダダールだけがない、アルジェの学校に通っている。ベライドが老いたラムダンを助けて、何の利益も上げない土地を耕している。家族みながフルルを助けるといえば、その稼ぎを遣ってくれることだ。家族全員何とか持ちこたえていた。この状態が続けばいいが、とフルルは落ち着き払って考える。不幸にして、それは続かなかった。時世はどんどん悪くなり、そうとう難しくなった。メンラッド一家だけでなく、同胞みなが同じだった。

市場に大麦があるうちは——通常の価格でということだが、カピリア人は不満を言うほどではなかった。穀物類が特別奉仕部門の一つに依ることになり、特別倉庫から大きく制限された形で供給されるようになると、貧しい農民たちはひどい空腹に苦しんだが、いっぽうで、そういう空腹には、生まれたときから馴染んでもいた。クスクスこそが、つまり大麦が、われわれの所では唯一の栄養源だとフルルは言わなかっただろうか？ カピリア人から大麦を取り上げるのは、飢えという刑に処するようなものだ。取り上げたのではなく、反対で、倉庫で供給したのだ。倉庫はまあ、あちらこちらにあった。メンラッドのいた部族村の、ベニ・ラッシにさえあった。フルルは日記に書き残している。

「ベニ・ラッシの倉庫の話は、悲しい歴史として、住民全員の記憶に残ることだろう。子どもたちは、またその子どもたちにも語り継ぐにちがいない。」

この倉庫はある峡谷の奥にあり、十キロ四方にある、とがった峰のてっぺんに止まっているかのような近隣の村に穀物を供給している。もっとも、倉庫にいたる道はどれも大変険しい坂道だ。そこはタンクートと呼ばれる所だ。タンクートは呪われた場所となろう。安泰な時期が戻ってきても、人がその名を口にする度に、悲惨なありさまが思い起こされ

るからだ。知りたければ、毎月のように、タンクートに下りていってみることだ。大麦が配給される時、十二月にでも。神がどこかにいるのなら、ヒトラーはもっと大きな他の罪同様、ここで犯した罪についても代償を払わされることになる。神がいないとすれば、ドイツ女の私生児であるおまえは超人になる。おまえのドイツ人たちも超人になる。そして、そのほかはみな家畜になる。

タンクートで見ることができるのは、悲しい家畜たちだ！ 襤褸着を纏った者たちが扉の前で待ち受けている。みな老いぼれている、若者たちまでも。深い皺の刻まれた顔は青ざめ、五ミリほどに伸びた髭は肌に触れるのを怖がるかのように逆立ち、眼窩の奥に落ちくぼんだ目は大きく見開かれたままだ。片手には羊の皮でできた小さな袋を下げ、もう一方の手にはしわくちゃの身分証と、ぞんざいに折りたたんだ札を持っている。バーヌースを着ている者は、まあまあともな格好をしているように見えるが、最後尾にいる若者ときたら、後ろに来る者みなに汚い尻を見せているという慎みのなさ、こちらでは、いま出てきた者は窮屈なズボンの破れ目から黒ずんだが陰囊がはみ出しているのに隠そうともしない。それでも、誰ひとり不快に思う者もない。背中に荷物を背負っているからだ。何歩か進む間だけ。己同様にみすばらしいロバに荷物を背負わせてから、バーヌースを羽織って身体をすっぽり包む。礼儀にかなった身なりになる。十歳くらいの小僧っ子どもが、自分たちの順番を待っている。子どもらも同様、深刻で心配される状態だ。寒さと恐怖に震えている。みな無口でおとなしく、控えめだ。子どもらに与えられるのは施し物である。身なりはほかの者と同様ひどい格好の男がひとり、少し離れたところに立っている。まだ若いにちがいない。だが、鬢の毛はもう白くなっていて。皮膚を通して髑髏の形がはっきりとわかるほど痩せている。何か考えたりするのを怖れるような様子で、びっくりしたような惚けたような目つきで人を見ている。フルルが近づいてみると、それは学校時代の

仲間だった。三十歳くらいだろうか。

「なあおい、タリシュだろ？」

「すっかり不運にみまわれちゃった。見ての通りだ。昨日、女房が子どもを産んだんだが、家は空っぽさ。何か貰えるのかもわからない。明日にならないと、うちの村の順番は来ない」

「お願いうしかないさ、タリシュ。天にも哀れみの心はあるさ、おそろく」

「哀れみの心なんてないさ。どうやって家に帰ろう？ 今晚のスープの実さえ何もない」
倉庫の裏には、老女や、若い女たちまでもが屯している。まるで羊の群れのようだ。しゃがみ込んで頭を垂れ、足の間に籠をはさんでいる。代わりに来る者がないので来ている。ほかにも理由はあろう。みな襤褸を纏い、程度の違いはあるが汚らしく顔を背けたくなるような様子をしている。女としても人としてもひどい落ちぶれようだ。ヒトラーの言う通りかもしれない。女たちの様子をみれば、これは文字通り十四番目の種だと考えたくなるし、およそ哀れみを覚えるような様子ではない。ちょっとだけシニカルで十分だ。女たちは、その知性と同じく、うつろで何も表さぬまなざしをあれやこれに投げかけながら、黙ったまま、辛抱強く、力無く待っている。倉庫の中には、聖体のパンをこの弱り切っている人たち全員に配布する役目を負った重

要人物がいる。今日はこの人たちだけだ。明日はまた、別の人たち、明後日はまた違う人たちが来る。顔ぶれが変わる。その光景はずっと同じだ。数週間前以来、人の姿をした悲

惨が行列をつくっている。行列を作らなくなったら、ことはより深刻だ。それは、倉庫が空になり、また補給があるまで食べられなくなる人々がいるということになるからだ。

こういった厄介な仕事を請け負う人間は、人柄がいかようにも変わってしまう。その者の道徳心や行いについては、いかなる幻想を抱くこともできない。その男の名はアクリと いい、アルジェのいかがわしいホテルで働いていたが、ホテルをやめ、二千人かそこらの 人たちへの配給係を任されることになった。客室係のボーイとしてのその善人ぶりは、蛮 行へと変わった。チップを前にしての卑屈な振る舞いは、傲慢な態度へと変化した。金持ちを前にしての自分の卑しい振る舞い一切の腹いせを、惨めな悪魔どもに対してはらそう とする。それはうまくいく。彼は全能だ。いまやアクリ・ヌドゥックと名を改め、時の人、 人はその名をその仕事に結びつけた。アクリ・ヌドゥックはチーズのなかのネズミのようにぬくぬくと幸せに、何の心配もなく暮らしている。チーズは絶えず新しくなる。そして 惨めな人々をあざ笑う。遠くからでも、震える農民に浴びせる怒鳴り声が聞こえる。一つの諾、一つの否のために、配給を止めるぞ、と脅す。真っ赤になって怒り、遠慮会釈なく ののしり、短軀をそびやかし、脂肪に埋もれた体をいらいらとふんぞり返らせ、大きな腹 を突き出す。そして、激昂しそうになっては気を取り直し、座り直すのだ。事務職員たちは不機嫌面で、自分たちの好きなように、中身のつまった袋の重さを量る。農民が受け取るのは、そんな役人が農民にやる気になったものだけだ。農民はもう支払いを済ませている。端数分のフランは放棄した。硬貨はない！ それで、盗人でもあるかのように出て 行く、誰の顔も見ようともせず、急いで姿を消す。怒り心頭に発した、風袋-計算上手閣下 に思い切って話しかけてみてはどうだろうか。いや、誰にもそんな勇気はない。彼は怒り に応じて袋を一キロにしたり二キロにしたりする。そして、彼はいくつもの袋に怒りが詰 まっているのを見るのだ。

恥ずべき人間！ ぼろぼろの女たちの群れの中に、みすぼらしいながらもまだいくらか美しさの残った運の悪い女を見つけると、そいつはその女の歡心を買おうとする。ときには、女が応じることもある。夕方か朝、人がまだ集まってこないうちに、その女はもう一度やってくる。そして、大麦を何キロか余計に受け取る。

家に帰るには、村の場所によるが、六キロから八キロ、あるいは十キロほど歩き通さなくてはならない。それもよじ登るようにして。上り坂なのだ。ロバは耳もと近くにまで荷物を背負わされる。ロバも知人もいない者は、自分自身で食糧を背負って運ぶ。寒かろうと暑かろうと、苦勞して歩いていく。だが不平など言わない。満足だ。大麦を手に入れる のに、どんな苦勞があろうか、《ナマ・エル・ラビ Nama er rabi》善良なる神の大麦を。あ あ！ 大麦が十分手に入るなら、どんな険しい坂道であろうと遠い距離であろうと、彼らは不平を言うまい、決して！

1942年の七月から 1943年の六月までに、フルルは五人分の食糧として三百二十キロを受け取った。十二か月間で、一人当たり六十四キロである。一か月一人当たり五キロ！ 五キロの大麦で三十日間生きよと、誰でもいいカピリア人に言ってみたらいい。まったく、バカげている。それでは、雌鶏一羽がやっただろう。そんなところだ。農民たちが食べていくのに倉庫を当てにしていたら、悲劇だったろう。だがそうではなく、農民が当てにしていたのは、何よりも己の善良なる神、つまり己自身だった。けちけちと切りつめても、十日生きられるほどしかもらえなかった。残りの二十日間は、おのおのが自己流のやり方

で《何とかやりくりしていた》。いちばんよい方法は、毎月必要な食糧を、別の場所でこっそりと補給することで、つま

り闇市である。大麦は二十リットルで二百フランだが、すぐに三百フランになり、それから五百、千と上がっていく……。小麦は二倍に高騰した。五人家族だったら、最低五千フランは必要だ。生きることを肯^{うべな}うには、金持ちでなくてはならない。金持ちか、フルルのように俸給を受け取る身か。確かに、養うべき家族が十五人もいるが、フルルは、結局 何とかした。金のない者は、持ち物を売る。売る物がなくなったら、金を借りる、返すことは考えない。計算もせず、恥も捨て、借りた金は絶対に返さないという強い決意をもって借りる。いつでも、友人を裏切るし、兄弟を騙す。クスクス鍋をいっぱいにするためだったら、自分のことばは裏切り、約束は守らない。誰も、自分が不誠実であることに怖れをいだかない。おのおのが、自分と子どもたちの命を守ることに必死だ。

土地を持っている者はどんな小さな区画でも耕して大麦を蒔く。大麦だけを。《大地に帰れ！》それで、どんな土地だというのか！ 種が収穫量の二倍、収穫がもっと少ないこともある。とくに収穫期の直前、ある日の早朝に、夜の間刈り取られてしまった畑を発見する。やったのは、正直者だった隣人だ！

頭が働き、意気も盛んな者は商売をする。家畜を持っているのだ。こういう人たちは、山を越え、野を越えて行って、オリーブ油を売り、穀物を買ってくる。一週間で何キロもの道のりを踏破し、昼となく夜となく働く。何物にも意気阻喪させられたりはせず、倦み 疲れたりしない。生きなくてはならない、人生は厳しいものだ。できるときには、着ることもしなくてはならない。カピリアの女たちのみすばらしいガンドウラでさえ、パリの最高級の洋装店の夜会服と同じくらいの値段がする。昔の値段で、という意味だが。

金も土地も信用もない者たちは、己のみが頼りと思い定めて諦めるしかない。恥も外聞も捨て、どんな小さな機会でも目の前にあれば、人を押しつけてでもそれを捕まえて生きのびようとする。そんな機会もないときは、へこんだ胃袋をかかえて待つ。ほかによい方法はない。

カピリア人は檻褻でも纏える。汚ないものがまんでできる。砂糖やコーヒーなしでも大丈夫だ。だが、大麦なしですませることはできない。空腹は暴君と同じだ。そんな状態では我慢できない。人はみなそういうものだ。

ヴィシーの新聞は、読み書きのできないカピリア人が読むことは絶対がないが、闇市は道徳に反すると言う。何という皮肉たっぷりの冗談だろう。ミティジャ平原を擁する国で人々が飢えて死にそうなのに、もっと早くに死ななかったから、その人たちは罪を犯していると言うとは！

ともかく、それは本当かもしれない。天が人々に道理を教えるかのようだ。《恐怖を広める病》が、カピリアに拡がっていく。いままでになかった、何だか分からない病が、一、二週間かそこらで、カピリアの農民たちを連れ去っていく。アイト・タブースの小さな村では、二十六日間に二十七人を失う。地方官が報告し、医師が助手を派遣する。もはや疑いはない、チフスだ。措置が講じられるだろう。ゆっくりとだが、確実に。ワクチンが届くはずだ。人々は待つ。チフスは、この村からあの村へと飛ぶように蔓延していく。カピリア人は怖れない。慌ててワクチンを打ってもらおうとしない。そんな事をして何になる？ 天のご意志だから、病で死ぬと定められている者は死ぬ。フランス人が神意に立ち向か

おうとするのは、何もわかっていないからだ。予防注射が届く。村々はこぞって受け取る。疫病禍は終わる。誰も驚かない。予言者に対して神々は行いをなした。フランス人は私たちが救ったと主張できると思い込んでいるだけだ。

アメリカ人とイギリス人がアルジェリアにやってきたとき、自由の身の男たちはともに喜びを分かち合った。この二年間の、息がつまるような重苦しい圧迫感から解放されたと感じた。メンラッドも、この勇気ある人々と熱狂を分かち合い、それを同郷の人々に伝えようとした。ところが、故郷の人たちには関心がないことがわかった。自由も、甘い約束も必要としていなかったのだ。欲しかったのはクスクスとガンドウラ、とりわけクスクスだった。

「教えてもらえるかい、先生。わしらは、あんたの言うことを信じるから。アメリカには、小麦も衣類もいっぱいある。カナダの大麦は、こっちのより大粒だ。だけど、まずとにかく、受け取らにゃならん。わしらは、待ってるんだよ」

そうだ、今度もまた、正しいのは彼らだ。おしゃべりでおめでたい、われらが先生よりも。少なくとも部分的にはそうだった。アメリカ人は、教師のバカげた希望を裏切り、農民たちを失望させた。多くの労働力が求められた。カピリア人は、労働者の作業班や、より大きい部隊を結成した。それでお金を稼ぎ、衣服を持ち帰った。貧困から抜け出した家族も多かった。しかし、稼げば稼ぐほど、物価も激しく高騰していき、生活は常に変わらず厳しかった。

それでも、カピリア人はもう不満を言わない。病気が蔓延すると、被害が頂点に達したとわかる時がある。まさにその瞬間生きていれば、もうそれは終わっている。もはや災厄は縮小するしかない、そしていつか回復する。治療法については何も知らない。だが、何かしら超越的な力によって災厄が打ち払われたことが、己の内に感じられる。農民とはそういうものだ。苦しみが限界に達した、あとは減っていくしかない。一年、二年、四年と苦しみに耐え抜いた。もうこれ以上は無理だ。彼らに対して、われわれは《終わりの始まりに》いる、と言う必要はない。彼ら自身がそれを感じ取っている。

そして、近い過去の、あるいはまだ現実のものである悲惨を、あたかも終わってしまったもののように語る。己の状況を、フランス人の、占領されたり爆撃されたりした国や地方と比較してみる。住む土地を追われたり、刑務所や強制収容所に入れられた人々、狙撃された人たち、拷問に遭った人たちに同情する。自分たちも同じ目にあったかもしれないと思うのだ。妻とも、子どもたちとも引き離されずにすんだ、と心の内で言い聞かせてみる。体も無事で、掘っ立て小屋だが家も無傷だ。腹が減ってたまらないのは知っているが、もっとひどい事は知らずにすんだ。彼らはわかっている。この世ならぬ摂理によって己が救われ、そうして、この身震いするような地獄から抜け出せたということ。

いま、農民が考えるのはもはや、一つのこと、一つの日のことでしかない。その日にこそ平和が戻り、彼ら自身のノルマンディーであり、アルザスであり、サンテティエンヌ、リヨン、パリだ。痛手からほぼ回復したそれらの都市を見出すための旅の切符を手にするのだ。その日が来れば、農民たちは過去をすべて忘れるだろう。そして、打ち砕かれた幸福をもう一度築くために、張り切って働き始めるだろう。

ときには、フランスのことを疑うという小さな罪を犯したとしても、もはやそんなことを思い出しもしまい。己を責めるようなことが意識に上ることも一切あるまい。単純な心というものは、その口舌がある風潮に従っているときでさえ、決して変わらないものなのである。

1944年十月

エピローグ

人間の内には、
軽蔑すべきものよりも賞賛すべきもののほうが多くある。

A・カミュ

何か月も前に、停戦が調印された。戦争は終わった。フランス人も、カピリア人も、アラブ人も、どの民族も苦しんだ。修復し、再建し、破滅から立ち上がらなくてはならない。そして最後は忘れ去ることだ。物事はそんな風に過ぎ去っていくのが、当然のあり方だ。だが、何もなされていない。暗闇を消し去るはずの夜明けはまだ、あらわれていないようだ。混乱と無秩序があらゆる観念をもつれさせている。何百万ものまじめな人々が、もはやわけがわからなくなっている。苦しみや喪や、廃墟があり、もう憎しみの余地は残っていない。しかし、いっぽうでは、大いなる哀れみの情にとらわれ、隣人に対する愛と共感を感じながら、同時に互いを不和にし対立させ、こちらに対してあちらを立てようとする、そんなことに夢中になる運命のいたずらを見せられている。運命はあたかも、人間は怪物であり、複雑で理解できないという考え方を永続させようとしているかのようだ。

確かに、人間というものは複雑だ。人間は己自身で責任をもって、己の悪を暴き、それに対処するしかない。フルルだとて、己自身を吐露して自己を再認識することを拒否しはしない。福音書が語る白い墳墓（偽善者）を思わせる偽りのファサード、あるいは、外側

は魅力的に見せる、虚栄と偽善の特徴を表すのにカピリア人が言うところの、メナイルの
うまや
厩。

ただ、厩というのはどう言い表したらいいだろうか。おのおのが自分なりにそれを探ってみるが、やはり難しいと思うのではないだろうか。厩には、純血種の美しい馬もいるが、老いた駄馬もいよう。敷き藁や糞や家畜たちがいっしょくたになって、冬にはねぐらから温もりがふんわりと立ち上るが、空気は黴くさいにおいがするし、糞のせいで咳が出る。分解されたものが液肥になって、刺激臭が鼻を刺す。それに、厩のなかはよく見えない。薄暗いから。蠅の死骸や埃が糸に付着した、蜘蛛の巣を全部あらため、堆肥の中にいっばいいる虫を探り、藁に穴をつくっているネズミや、そのネズミを狙って垂木の裏から這い下りてくる蛇にも注意を払わなくてはならない。厩のなかには、ある世界がそっくりそのままある。己の内をはっきりと見極めようとしたフルルの困惑が分かるだろう。後ずさりして端っこからものを見る必要がありそうだ。何にせよ、この混乱と不確定の時代には、端緒がある。これは、医師が病気の診断をするときの方法だ。祈祷師のやり方でもある。フルルは、自らを分析し、自ら治療し、己自身の治療者になろうとする。その思いは立派だが、結果についてはそうはいかない。フルルが祈祷師と呼ばれても当然かも知れないが、それはただ一つの意味においてである。何でもどうとでも、いくらでも論じられるが、

完全な医師になることは絶対にありえない。

おそらく、人間というのは、結局のところ、自分が思うよりも単純なのだろう。フルルの郷くにの人々にとって、大切なことというのはゆらがない、はっきりしている。できるだけよく 生きることだ。いつだって、死は突然に襲ってきて、人々を撃つ。誰もが生きることだけを考えているのだから。人々は日々の用向きや、駆け引きだのはかりごと だのに熱中している。いろいろな考えを持ち、宗教を論じ、政治を論じ、社会の仕組みを論じる。ときには、それもいい。モール・カフェでのいい暇つぶしだし、思慮分別のある、遊びを嫌う人たちにはもってこいで、しばしば熱心な聞き手のひとりが、一座の人々にお茶をふるまったりする。フルルは、理想とされるひとつの考えのためなら、何であれ己の利害を顧みないという者にはそう多くは出会わなかった。常に、下心があるか、これこれの理想に賛同するにはそれなりの希望的観測があり、確固たる信条によるものはまれであった。フルルは、己が知る者すべてのなかに、これと同じ亀裂があることを知っている。一方に思想がある、一方には行動がある。思想が多様なのは、それが尊重すべきものであることを妨げない。思考するにはいくつもの方法があり、人は常に誠実に思考する。原則として、人は善と悪とを区別したがらる。間違ったとしたら、どうするか。ときには、人は己の間違いを認める。これは、知性と弁証法と経験の問題だ。ソロモンの知恵には敬意を表し、褒め称え習って、それからまね 学び、自らを賢人として通用するようにする。まあよい。これは、思想にすぎない。

こうした、公正なるものの使徒たちが野蛮人のようにふるまい、弱い者を裏切り、信じやすい者を騙し、正義を嘲るのを、フルルは幾たび見てきたことだろう！ こんなことに驚くとは、彼自身もナイーブにすぎる。というのは、こういった事どもは、何千年も前から発生してきたことなのだから。しかし、人々が生きることがよしとしなくてはならない。もちろん、人間には道理がある。人間を導き、知性に向かって成長させるための倫理を打ち立てる道理も持ち合わせている。各時代ごとに挫折に遭遇した。それこそが不幸だ！ 動物は己を生かす以外には何も考えない。人間も結局は同じ、その意図は常にその逆、すなわち「われわれの尊厳は全て思惟することにある」としても、である。勿論だ。人がそれほどの尊厳を見出すのは行動のなかにではない。いっぽう、フルルは何をそんなに気を揉んでいたのだろう。かつて、ソクラテスもいたし、ほかにも哲学者たちはいたというのに。もし、あるとき、人々がよく生きるだけのために、ごくわずかな数の思想において一致することがあるとしたら。動物たちと全く同じに。ばかげたことだ、そうではなからうか？ そう、たとえばミツバチたちのようにだ！ そうならば美しい。さしあたり、人間たちはせいぜいスズメバチといったところだ。毒をいっぱいを含み、ぶんぶんと不愉快な音を立て、うつろな巣を築く。フルルも一匹のスズメバチだ、ほかの者と変わらない。それは、彼にとって慰めにならない。

実際、こうして三年の間、とぎれることなく人は騒ぎ立て、不幸な者たちに平和をもたらそうとしてきた。にもかかわらず、結局のところ、成し遂げられたのは、地球上にはびこっていた、生憎戦争でも死を免れた、好ましからざる人間を殺戮させることだった。自ら裁判官を任じようとして、殺戮者の役割を演じているのだ。人々は、実際に生きてしまったばかりの悪夢を早々に忘れてしまうのだろうか？ 人々はみな、それぞれがかけがえのない個人であると同時に、山師なのだろうか？ ならば、われわれが手にする平和は山

師の平和であって、われわれはほかのものには値しないということだろうか。それとも

また、絶望することを拒否しなくてはならないのだろうか？ 人間は物質を支配した。もはや、己とその運命をも支配するしかあるまい。痛み苦しみの果てに、詩人が 謳うような光り輝く、素晴らしい太陽が見えようものを。「人間！ 意志と愛と希望の表象であるこの語の意味するところのもの」

そしておまえは、フルル、大きな損失もなく、この苦しみと喪の年月を生きてきていま、残されたおまえにすべきことを考え、おまえ自身のうちをはっきりと見つめ、現実起こったことからおまえに役立つ教訓を引き出そうとしている。謙遜、忍耐、そして愛についての忘れがたい教訓以外に何がある？

老いた者たちの残りの日々を見守り、己の子らを育て、その未来に備える。だが、決して、メンラッドの家の者に可能な事を越えるような夢を見ない。できれば、おまえの身の回りにささやかな善を成せ。そして、それだけが人が絶対に非難しないことだ。

死を待ちながら、おまえの庭を耕せば、おまえの子どもたちの庭をいっそうよく耕すことになる。そして、ほかの子どもたちもみな、おまえの子どもだ。訳もなく教師をしているのではない。

そうして、これからもおまえは生き、気苦労は絶えないだろう。だが、死に際して思い残すことはなく、つつがなくあの世へと迎え入れられることだろう。

1948年